昭和62年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

# 寺東（てらひがし）・八反田（はったんだ）・東耕地（ひがしこうち）
# 入川（いりかわ）・深町（ふかまち）遺跡

1988

埼玉県熊谷市教育委員会

昭和62年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

# 寺東（てらひがし）・八反田（はったんだ）・東耕地（ひがしこうち）
# 入川（いりかわ）・深町（ふかまち）遺跡

1988

埼玉県熊谷市教育委員会

# 序　文

熊谷市北西部の別府地区は、原始・古代から多くの人々が生活の地としてきたところです。縄文時代から遺跡が見られ、弥生時代は再葬墓が注目される横間栗遺跡、古墳時代は別府古墳群、律令期にはいると別府条里跡・西別府祭祀跡・西別府廃寺、中世には別府城跡、西別府館跡などが知られ、歴史的に重要な場所として栄えてきたところです。

同地区において、電源開発株式会社の只見幹線の増強工事が実施されることとなり、本市教育委員会は、電源開発株式会社から委託を受けて発掘調査を実施しました。

遺跡は、貴重な文化遺産として、後世に残すことが第一に計られるべきですが、工事の性格上やむを得ず、記録保存の方策をとることとなったのです。

本書は、昭和57・59年度に発掘調査を実施して得られた成果を昭和60～62年度にかけてまとめて報告するものです。

本書が郷土の歴史を語るうえで、また、学術研究のうえで活用されるものであれば、幸いに思います。

最後になりましたが、電源開発株式会社只見幹線増強建設所ならびに地元別府地区の方々を初め多くの方々からご指導・ご協力をいただきましたことに対しまして、深く感謝の意を表します。

昭和63年3月31日

熊谷市教育委員会
教育長　**関　根　幸　夫**

# 例　言

1　本調査は、電源開発株式会社の只見幹線増強工事に伴う事前記録保存のための発掘調査である。

2　発掘調査は、昭和57年度は寺東遺跡・八反田遺跡・東耕地遺跡、昭和59年度は入川遺跡・深町遺跡の調査を実施した。各遺跡の文化庁指示通知、発掘調査期間、発掘調査所在地、発掘調査面積は次のとおりである。

| | 文化庁指示通知 | 発掘調査期間 | 発掘調査所在地 | 発掘調査面積 |
|---|---|---|---|---|
| 寺東遺跡 | 昭和58年2月3日付<br>58委保記第2－71号 | 昭和58年1月17日<br>～3月9日 | 熊谷市大字東別府<br>1008－2他 | 496㎡ |
| 八反田遺跡 | 昭和58年2月3日付<br>58委保記第2－29号 | 昭和57年12月20日<br>～昭和58年1月14日 | 熊谷市大字東別府<br>1166－10他 | 222㎡ |
| 東耕地遺跡 | 昭和58年3月1日付<br>58委保記第2－417号 | 昭和58年2月7日<br>～2月28日 | 熊谷市大字東別府<br>873－1他 | 176㎡ |
| 入川遺跡 | 昭和60年5月24日付<br>60委保記第2－798号 | 昭和60年3月1日<br>～3月31日 | 熊谷市大字下増田<br>1260－7他 | 500㎡ |
| 深町遺跡 | 昭和60年5月24日付<br>60委保記第2－799号 | 昭和60年2月26日<br>～3月31日 | 熊谷市大字西別府<br>182－11他 | 400㎡ |

3　整理調査期間は昭和60年度から昭和62年度に実施した。

4　発掘調査の担当は寺社下博・金子正之が行い、本書の執筆・編集は金子正之が行ったが、入川遺跡の縄文時代の遺構及び古墳時代の部分は駒澤大学考古学研究室が実施した。

5　発掘調査の組織は、次のとおりである。

調査主体者　熊谷市教育委員会

（1）発掘調査（昭和57・59年度）

教育長　　関根幸夫
課長　　岡田詮
課長補佐　　里見昌夫（昭和57年度）
　　茂木　優（昭和59年度）
係長　　岡田伸洋（昭和57年度）
　　北　俊明（昭和59年度）
主査　　山川　建（昭和57年度は主事）
主事　　寺社下博
　　金子正之
　　島野嘉寿子

（2）整理調査（昭和60～62年度）

教育長　　関根幸夫
課長　　岡田　詮（昭和60年度）
　　茂木　優（昭和61・62年度）
課長補佐　　茂木　優（昭和60年度）

| | |
|---|---|
| | 高田普通（昭和62年度） |
| 係長 | 北　俊明 |
| 主査 | 山川　建（昭和60・61年度） |
| 主任 | 森田博明（昭和62年度） |
| | 平井加余子（昭和62年度） |
| | 金子正之（昭和60・61年度は主事） |
| | 米澤ひろみ（　　同上　　） |
| 主事 | 寺社下博（昭和60・61年度） |

7　入川遺跡の発掘調査は、大石謙・太田喜美子・黒沢晴彦・越田雅司・荒井勝彦・稲葉昭智・國見徹・小西直樹・斉藤新・酒入信子・筋野勲・土田智恵子・森原明廣・八木規子・柳井章宏・山口香があたって実施した。

8　入川遺跡の整理調査は、大石・太田・黒沢・越田・荒井一彦・稲葉・泉直子・國見・小西・斉藤・酒入・土田・鍋島直久・三代俊之・三宅俊彦・森川雅仁・森原・八木・柳井・山口・吉見昭があたった。

9　入川遺跡の遺物の実測は、荒井（一）・稲葉・小西・酒入・土田・鍋島・森原が行った。遺物のトレースは土田、遺構のトレースは森原が担当した。

10　入川遺跡本文の執筆は、各項に明記してある。それ以外のものは、金子が執筆した。

11　入川遺跡の発掘調査中、遺構の写真撮影は國見・柳井が分担した。整理調査中、遺物の写真撮影は森原が担当した。

12　入川遺跡土壌の植物珪酸体分析は、帯広畜産大学環境土壌学研究室近藤錬三に委託して調査した報告である。

13　別府沖積地試料自然化学分析報告は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して調査した報告である。

14　寺東遺跡・八反田遺跡・深町遺跡の遺構図の中で、住居跡はH、竪穴状遺構はT、集石遺構はS、埋甕はK、溝跡はM、土坑はD、ピットはPと記号化した。

15　寺東・八反田・東耕地・深町遺跡の遺物実測図の中心線は、遺物を回転させず実測したものは実線、180°回転させたものは一点鎖線を用いた。

16　寺東・八反田・東耕地・深町遺跡の遺構図と写真図版の遺物番号は、挿図番号を示す。例えば、1－1は、挿図の第1図の1の遺物を示す。

17　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会で保管する。

# 入川遺跡遺構凡例

1　縄文時代の遺構の名称は、北東隅交点を用い、古墳時代・時期不明の遺構の名前は、1・2～と順に番号を付して示した。

2　竪穴式住居跡について、竈・柱穴等の移動が見られた場合には、建替えによる重複と考え、古い順にⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期として区別した。

3　遺構の版組みは、すべて北を基準に行った。

4　竪穴住居跡・竪穴状遺構は、原図1/20を使用し、縮尺1/3を基本とした。

5　土坑は、原図1/10を使用し、縮尺1/3を基本とした。

6　溝は、原図1/50を使用し、縮尺1/3を基本とした。溝の図版は、各溝ごとではなく、溝全体平面図として示した。

7　遺構の重複は、古い遺構を点線で、新しい遺構を実線で示した。

8　竪穴住居跡平面図中の（貯）は貯蔵穴、（K）は竈、（P）は柱穴及び不明ピット、（D）は間仕切りを示す略号である。なお、柱穴については、最も新しい竈を基準として右側より時計まわりに $P_1$・$P_2$・$P_3$と番号を付した。

9　竪穴住居跡平面図中の出土遺物に付した番号は、遺物図版及び写真図版の番号に一致する。
　また接合関係にある遺物は、各々を実線で結んだ。断面図についても同様である。

10 竪穴住居跡平面図中のスクリーントーンは、炭化物の出土範囲を示している。

11 竪穴住居跡の主軸方位は、磁北と竈を通る住居跡の中軸線とのなす角度を示した。

12 竪穴状遺構・土坑・溝の主軸方位は、磁北と長軸のなす角度で示した。

13 遺構断面図及び基本土層図の標高は、すべてm単位で示した。

14 竪穴住居跡のうち、建替えにより竈が2基以上ある場合は、新しい竈を$K_1$、古い竈を$K_2$と番号を付した。貯蔵穴についても、新しい貯蔵穴を$貯_1$、古い貯蔵穴を$貯_2$と番号を付した。

15 竈の版組みは、すべて北を基準に行った。

16 竈遺構断面図は、大きく四分割を基本に、袖部の断面図も作成した。なお、図版には構築状況の明瞭な資料についてのみ、袖部の断面図も使用した。

17 遺跡の全体図は、縄文時代の遺構及び旧地形コンター図・古墳時代の遺構・時期不明の遺構として、計3種類作成した。

# 入川遺跡遺物凡例

1　遺物の図版は、すべて縮尺1/3に統一した。

2 報文中の遺物番号は、挿図番号及び写真図版番号と同一である。

3 須恵器は図版中番号の横にＳと記し、断面をスクリーントーンで塗り潰した。

4 土器の実測方法は四分割法を用い、右側1/2に外面、左側1/2に内面と断面を記録した。また、残存状況により、土器の中心線を算出し、180°回転作図し、中心線を一点鎖線で示した。

5 図版中、土器の中心推定線は点線で示した。

6 拓本は中央に左断面をのせ、左側に外面（a）、右側に内面（b）を貼付した。

7 石製品・土製品の実測は、三角法を用いた。石製品のうち、使用痕のあるものはそのすべての面を記録するようにした。また、使用痕のない場合は、平面図と断面図のみを示した。

8 土器について、木葉痕・籾痕・窯印は拓本を貼付した。

9 土師器は、横撫でと粘土帯接合痕の凸凹を実線と点線で表現し、工具の動いた方向を矢印で示した。

10 須恵器は、轆轤成形を破線で、削りの始まりを実線で区別した。削りの範囲は一点鎖線で表現した。

11 住居跡内出土遺物は、遺物表中番号の横に各々の出土層位を記した。図版中に出土層位の記入がない場合は、覆土中より出土している。

12 法量の単位は、すべてcmであり、推定の場合は（　）を付けた。

13 出土遺物表中の器質欄は、胎：胎土、焼：焼成、色：色調を記載した。なお、胎土欄の単位はすべてmmである。色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1973年版を用いて判別した。

14　出土遺物表の番号欄1行目は、遺物の挿図番号及び挿図番号中番号を表わす。

例　　番　号

遺物の挿図番号　41－1　　挿図番号中番号

# 目　次

序文
例言
入川遺跡遺構凡例
入川遺跡遺物凡例
目次
挿図目次
図版目次
表目次
図目次
Ⅰ　発掘調査に至るまでの経過……1
Ⅱ　発掘調査・報告書作成の経過……2
Ⅲ　遺跡の立地と環境……3
Ⅳ　寺東遺跡……5
　1　遺跡の概観……6
　2　遺構と遺物……8
Ⅴ　八反田遺跡……29
　1　遺跡の概観……30
　2　遺構と遺物……31
Ⅵ　東耕地遺跡……34
　1　遺跡の概観……34
Ⅶ　入川遺跡……35
　1　入川遺跡の調査……35
　2　入川遺跡の概要……39
　3　入川遺跡の遺構と遺物……46
Ⅷ　深町遺跡……115
　1　遺跡の概観……116
　2　遺構と遺物……117
Ⅸ　入川遺跡土壌の植物珪酸体分析……135
　1　試料及び分析方法……135
　2　植物珪酸体の形態的特徴……136
　3　植物珪酸体の形態別組成……138
Ⅹ　別府沖積地試料自然科学分析報告……142
　1　鉱物分析及び屈折率測定……142
　2　花粉分析……143

# 挿　図　目　次


第１図　周辺遺跡分布図 …… 3
第２図　寺東遺跡・八反田遺跡・東耕地遺跡位置図 …… 5
第３図　寺東遺跡位置図 …… 6
第４図　寺東遺跡土層断面図 …… 7
第５図　寺東遺跡全測図 …… 8
第６図　集石遺構 …… 8
第７図　集石遺構出土遺物（１） …… 9
第８図　集石遺構出土遺物（２） …… 10
第９図　１号埋甕 …… 11
第10図　１号埋甕出土遺物 …… 11
第11図　２号埋甕 …… 11
第12図　２号埋甕出土遺物 …… 12
第13図　３号埋甕 …… 13
第14図　４号埋甕 …… 13
第15図　５号埋甕 …… 13
第16図　３～５号埋甕出土遺物 …… 14
第17図　１号土坑 …… 15
第18図　１号土坑出土遺物 …… 16
第19図　１号土坑遺物出土状態 …… 17
第20図　１号溝 …… 18
第21図　２号土坑、２・３号溝 …… 19
第22図　５号溝跡 …… 20
第23図　６号溝跡 …… 21
第24図　４・７・８号溝跡 …… 22
第25図　遺構外出土遺物（１） …… 23
第26図　遺構外出土遺物（２） …… 24
第27図　遺構外出土遺物（３） …… 25
第28図　遺構外出土遺物（４） …… 26
第29図　遺構外出土遺物（５） …… 27
第30図　遺構外出土遺物（６） …… 28
第31図　遺構外出土遺物（７） …… 29
第32図　八反田遺跡位置図 …… 29
第33図　八反田遺跡全側図 …… 30
第34図　１号溝跡 …… 31
第35図　２号溝跡 …… 31

第36図　３・４号溝跡 ……32
第37図　５・６号溝跡 ……33
第38図　東耕地遺跡位置図 ……34
第39図　入川遺跡・深町遺跡位置図 ……38
第40図　周辺の遺跡 ……41
第41図　基本土層図 ……42
第42図　遺跡土層図 ……43
第43図　縄文時代の遺構全体図及び地形コンター図 ……45
第44図　Ｅ－２土坑 ……46
第45図　Ｅ－２土坑出土遺物 ……47
第46図　Ｂ－１竪穴状遺構 ……47
第47図　遺構外出土遺物（１） ……48
第48図　遺構外出土遺物（２） ……49
第49図　遺構外出土遺物（３） ……50
第50図　遺構外出土遺物（４） ……51
第51図　遺構外出土遺物（５） ……51
第52図　古墳時代の遺構全体図 ……53
第53図　１号住居跡 ……54
第54図　１号住居跡竈 ……55
第55図　１号住居跡出土遺物（１） ……56
第56図　１号住居跡出土遺物（２） ……59
第57図　２号住居跡 ……61
第58図　２号住居跡西側竈 ……63
第59図　２号住居跡東・南側竈 ……64
第60図　２号住居跡出土遺物（１） ……67
第61図　２号住居跡出土遺物（２） ……71
第62図　２号住居跡出土遺物（３） ……73
第63図　３号住居跡 ……75
第64図　３号住居跡竈 ……76
第65図　３号住居跡出土遺物 ……77
第66図　４・６・７・９号住居跡 ……79
第67図　４号住居跡竈 ……80
第68図　４号住居跡出土遺物 ……81
第69図　５号住居跡・８号住居跡 ……82
第70図　５号住居跡出土遺物 ……84
第71図　６号住居跡出土遺物（１） ……87
第72図　６号住居跡出土遺物（２） ……90

第73図　７号住居跡出土遺物 ……93
第74図　８号住居跡出土遺物 ……94
第75図　土師器集中区 ……95
第76図　集中区出土土師器（１） ……99
第77図　集中区出土土師器（２） ……101
第78図　遺構外出土遺物 ……103
第79図　時期不明の遺構全体図 ……108
第80図　１～５号溝 ……109
第81図　３号土坑・３号溝出土遺物 ……110
第82図　１号土坑 ……111
第83図　２号土坑 ……113
第84図　３号土坑 ……113
第85図　４号土坑 ……114
第86図　５号土坑 ……114
第87図　深町遺跡位置図 ……115
第88図　深町遺跡全側図 ……116
第89図　２号住居跡 ……117
第90図　１号住居跡 ……118
第91図　２号住居跡竈 ……118
第92図　２号住居跡出土遺物 ……119
第93図　３号住居跡 ……120
第94図　３号住居跡出土遺物 ……121
第95図　１号竪穴状遺構 ……122
第96図　２号竪穴状遺構 ……123
第97図　１～19号ピット ……124
第98図　20～36号ピット ……125
第99図　37～52号ピット、１号土坑 ……126
第100図　53～66号ピット、２～５号土坑 ……127
第101図　67～84号ピット、６号土坑 ……128
第102図　７・８号土坑 ……129
第103図　１号溝跡 ……130
第104図　墳砂断面図 ……130
第105図　墳砂位置図 ……131
第106図　遺構外出土遺物（１） ……132
第107図　遺構外出土遺物（２） ……133
第108図　遺構外出土遺物（３） ……134

# 図　版　目　次

**寺東遺跡**

図版１－１　集石遺構
　　２　調査区南側遺物出土状況（１）
図版2－1　調査区南側遺物出土状況（２）
　　２　１号埋甕
図版３－１　２号埋甕
　　２　３号埋甕
図版４－１　４号埋甕
　　２　５号埋甕
図版５－１　１号土坑遺物（18-2）出土状況
　　２　１号土坑遺物（18-1･2）出土状況
図版６－１　２号土坑
　　２　１号溝跡
図版７－１　２号溝跡
　　２　３号溝跡
図版８－１　４号溝跡
　　２　６号溝跡
図版９－１　７･８号溝跡
　　２　遺構外遺物出土状況（１）
図版10－１　遺構外遺物（30-1）出土状況（２）
　　２　遺構外遺物（30-8）出土状況（３）

**八反田遺跡**

図版11－１　遺跡遠景（南から）
　　２　調査区近景（南から）
図版12－１　調査区近景（東から）
　　２　１号溝跡
図版13－１　２号溝跡
　　２　３～６号溝跡
図版14－１　３号溝跡
　　２　４号溝跡
図版15－１　５・６号溝跡

**東耕地遺跡**

図版15－２　遺跡遠景（北東から）
図版16－１　調査区近景（北から）
図版16－２　調査区近景（東から）

**入川遺跡**

図版17－１　遺跡遠景（南東より）
　　２　遺跡近景（南東より）
図版18－１　Ｅ－２土坑
　　２　Ｂ－１竪穴状遺構
図版19－１　縄文時代遺物出土状況全景（１）
　　２　縄文時代遺物出土状況全景（２）
図版20－１　縄文時代遺物出土状況（１）
　　２　縄文時代遺物出土状況（２）
図版21－１　縄文時代遺物出土状況（３）
　　２　縄文時代遺物出土状況（４）
図版22－１　１号住居跡
　　２　１号住居跡遺物出土状況全景
図版23－１　１号住居跡竈
　　２　２号住居跡
図版24－１　２号住居跡遺物出土状況全景
　　２　２号住居跡遺物出土状況（１）
図版25－１　２号住居跡遺物出土状況（２）
　　２　２号住居跡遺物出土状況（３）
図版26－１　３号住居跡
　　２　３号住居跡遺物出土状況
図版27－１　４号住居跡
　　２　４号住居跡竈
図版28－１　４号住居跡遺物出土状況
　　２　５号住居跡・８号住居跡
図版29－１　６号住居跡遺物出土状況全景
　　２　７号住居跡
図版30－１　７号住居跡遺物出土状況（１）
　　２　７号住居跡遺物出土状況（２）
図版31－１　溝全景（１）
　　２　溝全景（２）
図版32－１　１号土坑
　　２　２号土坑

図版32－3　3号土坑
図版33－1　土師器集中区遺物出土状況（1）
2　土師器集中区遺物出土状況（2）
3　土師器集中区遺物出土状況（3）
図版34－1　土師器集中区遺物出土状況（4）
2　土師器集中区遺物出土状況（5）
3　土師器集中区遺物出土状況（6）
**深町遺跡**
図版35－1　調査区全景
2　1号住居跡
図版36－1　2・3号住居跡
2　2号住居跡遺物出土状況
図版37－1　2号住居跡竈
2　3号住居跡遺物出土状況
図版38－1　1号竪穴状遺構
2　2号竪穴状遺構
**寺東遺跡**
図版39　集石遺構出土遺物
図版40　1～3・5号埋甕、1号土坑出土遺物
図版41　遺構外出土遺物（1）
図版42　遺構外出土遺物（2）
図版43　遺構外出土遺物（3）
図版44　遺構外出土遺物（4）
図版45　遺構外出土遺物（5）
図版46　遺構外出土遺物（6）
図版47　遺構外出土遺物（7）
**入川遺跡**
図版48　E－2土坑・遺構外出土遺物
図版49　1号住居跡出土遺物（1）
図版50　1号住居跡出土遺物（2）
図版51　1号住居跡出土遺物（3）
図版52　2号住居跡出土遺物（1）
図版53　2号住居跡出土遺物（2）
図版54　2号住居跡出土遺物（3）
図版55　2号住居跡出土遺物（4）
図版56　2号住居跡出土遺物（5）
図版57　2号住居跡出土遺物（6）、3号住居跡出土遺物（1）
図版58　3号住居跡出土遺物（2）、4号住居跡出土遺物
図版59　5号住居跡出土遺物、6号住居跡出土遺物（1）
図版60　6号住居跡出土遺物（2）
図版61　6号住居跡出土遺物（3）
図版62　6号住居跡出土遺物（4）、7号住居跡出土遺物（1）
図版63　7号住居跡出土遺物（2）、8号住居跡出土遺物，3号溝跡出土遺物、3号土坑出土遺物
図版64　集中区出土土師器（1）
図版65　集中区出土土師器（2）
図版66　集中区出土土師器（3）
図版67　集中区出土土師器（4）
図版68　遺構外出土遺物（1）
図版69　遺構外出土遺物（2）
図版70　遺構外出土遺物（3）
**深町遺跡**
図版70　遺構外出土遺物
**入川遺跡**
図版71　植物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真（1）
図版72　植物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真（2）
図版73　植物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真（3）
図版74　植物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真（4）
図版75　植物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真（5）
図版76　植物珪酸体および動物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真
図版77　鉱物分析および花粉分析試料1・4の写真
図版78　花粉化石および状況写真

# 表　目　次

**入川遺跡**

表１　１号住居跡出土遺物観察表 ……55
表２　２号住居跡出土遺物観察表 ……65
表３　３号住居跡出土遺物観察表 ……77
表４　４号住居跡出土遺物観察表 ……81
表５　５号住居跡出土遺物観察表 ……85
表６　６号住居跡出土遺物観察表 ……86
表７　７号住居跡出土遺物観察表 ……92
表８　８号住居跡出土遺物観察表 ……94
表９　土師器集中区出土遺物観察表 ……96
表10　遺構外出土遺物観察表 ……104
表11　時期不明の遺構（３号溝、３号土坑）出土遺物観察表 ……112
表12　入川遺跡土壌の植物珪酸体組成 ……140
表13　別府沖積地鉱物分析および花粉分析試料表 ……143
表14　別府沖積地試料花粉分析結果 ……144

# 図　目　次

図１　入川遺跡土壌のイネ科草本起源珪酸体組成 ……141

# Ⅰ　発掘調査に至るまでの経過

**寺東遺跡、八反田遺跡、東耕地遺跡**

電源開発株式会社只見幹線工事事務所は、昭和57年１月25日付け只幹事発第169号により只見幹線増強に伴う埋蔵文化財の所在及び取扱いについて埼玉県教育委員会に照会を行った。埼玉県教育委員会は、昭和57年７月26日付教文第1170号により熊谷地内においては、鉄塔№353・354・355は文化財の所在する地区、№348－1・349－2・350・351・352は文化財の所在する可能性の大きい地区ということで、前者は当該市町村教育委員会と協議のうえ発掘調査を実施すること、後者は所在確認のため試掘調査を実施し、文化財が発見された場合は前者と同様に扱うことと回答した。その写しは、県教育委員会から昭和57年7月26日付け教文第1170号により熊谷市教育委員会に通知された。

鉄塔№353は八反田遺跡、№354は寺東遺跡、№355は東耕地遺跡の中に所在し、現状保存の可能性をも含めた保存に関する協議を実施した。しかし、事業の性格等から記録保存の措置もやむを得ないとの結論に達し、発掘調査の実施が具体的に計画された。

発掘調査は、市教育委員会が昭和57年12月から昭和58年２月までに実施するということで双方が合意し、文化財保護法57条の２第１項に基づき昭和57年11月17日付け只幹事発第144号で電源開発株式会社只見幹線増強事務所長から発掘通知が、文化財保護法第98条の２第１項に基づき昭和57年11月18日付け57熊教社発第1006号（八反田遺跡）と、昭和57年12月16日付け57熊教社発第1046号（寺東遺跡）と、昭和58年１月６日付け57熊教社発第1138号（東耕地遺跡）で、熊谷市教育委員会教育長から発掘通知がそれぞれ文化庁長官あて提出された。

昭和57年12月15日、熊谷市と電源開発株式会社で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を締結し、発掘調査は昭和57年12月20日から開始された。文化庁からの通知は、昭和58年２月３日付け58委保記第2-29号（八反田遺跡）、昭和58年２月３日付け58委保記第2-71号（寺東遺跡）、昭和58年３月１日付け58委保記第2-417号（東耕地遺跡）であった。

**入川遺跡、深町遺跡**

電源開発株式会社只見幹線増強建設所は、昭和59年11月28日付け只幹建立発第９号により只見幹線増強工事に伴う埋蔵文化財の発掘に関する協議書を熊谷市教育委員会に提出し、市教育委員会は協議書を埼玉県教育委員会に提出した。

電源開発株式会社は、文化財保護法第57条の２第１項に基づき昭和60年１月８日付け只幹建立発第19号で発掘届を文化庁長官あてに提出した。

埼玉県教育委員会は、昭和60年１月24日付け教文第957号により、鉄塔№350・№351は埋蔵文化財が所在するので、熊谷市教育委員会と協議の上発掘調査を実施することと回答した。その写しは、県教育委員会から昭和60年１月24日付け教文第957号により熊谷市教育委員会に通知された。

鉄塔№350は入川遺跡、№351は深町遺跡の中に所在し、現状保存の可能性をも含めた保存に関する協議を実施した。しかし、事業の性格等から記録保存の措置もやむを得ないとの結論に達し、発掘調査の実施が具体的に計画された。

発掘調査は、市教育委員会が昭和60年２月から３月までに実施するということで双方が合意し、文

化財保護法第98条の２第１項に基づき昭和60年２月22日付け59熊教社発第1018号（入川遺跡）と、昭和60年２月22日付け59熊教社発第1019号（深町遺跡）で、熊谷市教育委員会教育長から発掘通知が文化庁長官あて提出された。

発掘調査は昭和60年２月26日から開始された。文化庁からの通知は、昭和60年５月24日付け60委保記第2-798号（入川遺跡）、昭和60年5月24日付け60委保記第2-799号（深町遺跡）であった。

# Ⅱ　発掘調査・報告書作成の経過

**寺東遺跡、八反田遺跡、東耕地遺跡**

発掘調査は、鉄塔建設地内の発掘を行った。調査区の表土剥ぎを重機で行い、人力により遺構精査を実施し、遺構を確認した。遺構が確認されたところは、手掘りによって掘り下げた。遺構を掘り下げながら、遺物の出土状況の実測を行い、出土状態の良好なものは写真撮影を実施してから、遺物の取り上げを行った。掘り終わった遺構は、実測・写真撮影を実施した。

昭和58年２月26日付け57熊教社発第1268号で、市教育委員会は当初予定していたものより遺構が深い位置で確認されたため調査が遅れたので、期間を昭和58年２月28日までの期間を３月９日まで延長するよう依頼を行い、昭和58年２月28日付け只幹事発第186号で変更について了承するとの回答を得て発掘調査は３月９日に終了した。

**入川遺跡・深町遺跡**

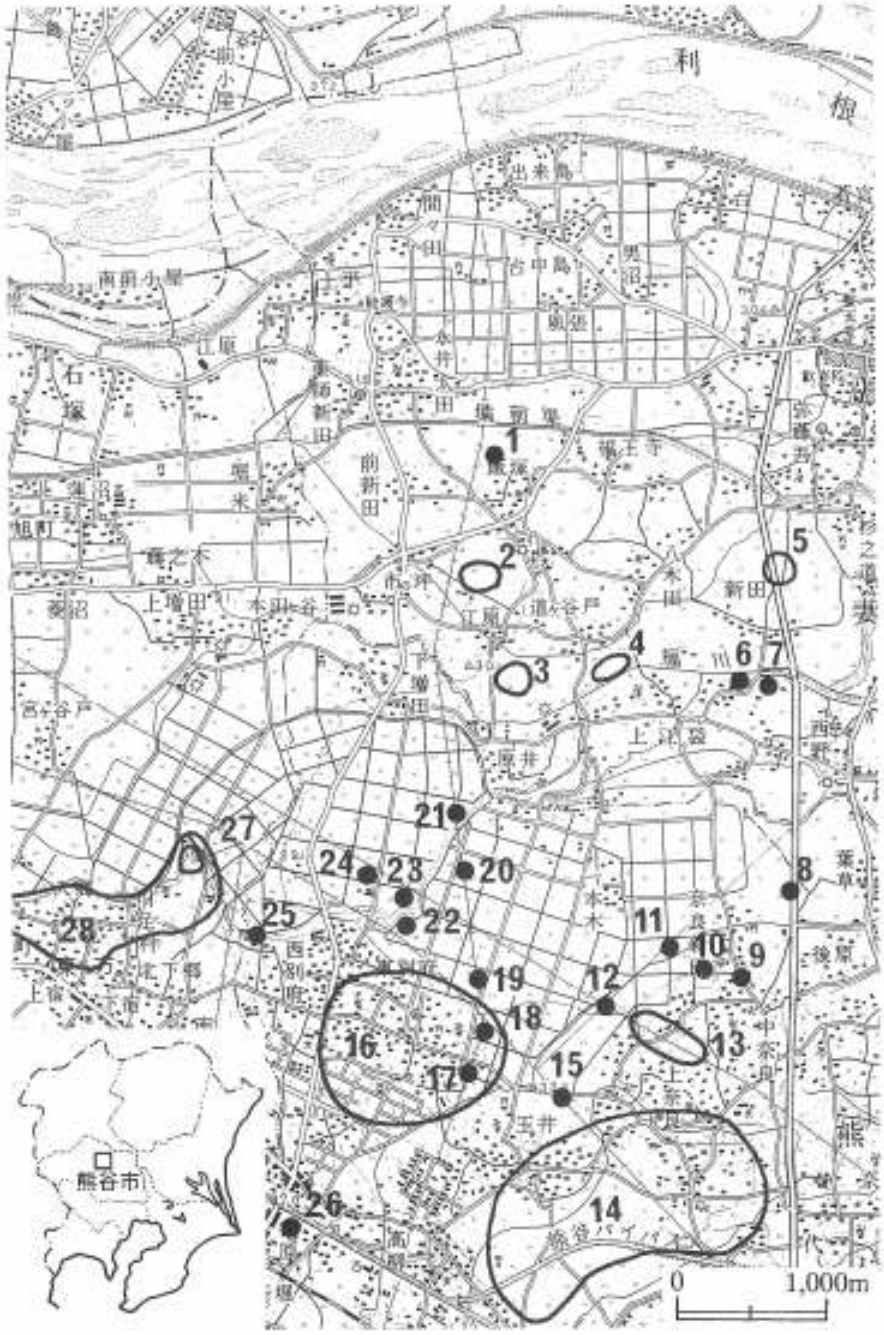
発掘調査は、鉄塔建設地内の発掘を行った。１辺５ｍのグリッド方式を用いて調査を行った。調査区の表土剥ぎを重機で行い、人力により遺構精査を実施し、遺構を確認した。遺構が確認されたところは、手掘りによって掘り下げた。遺構を掘り下げながら、遺物の出土状況の実測を行い、出土状態の良好なものは写真撮影を実施してから、遺物の取り上げを行った。掘り終わった遺構は、実測・写真撮影を実施し、３月31日に発掘調査は終了した。

**整理・報告書作成経過**

整理・報告書作成作業は、昭和60年３月30日に埋蔵文化財包蔵地発掘整理委託契約の覚書を締結し、昭和60年４月１日から昭和63年３月31日に実施した。遺物の洗浄・注記・復元・拓本取り・実測・写真撮影を行った。遺構の図面整理、遺構・遺物のトレース、遺構図・遺物図の版組みを行い、原稿執筆・割付をして、報告書を刊行した。入川遺跡の古墳時代の遺構・遺物の整理については、駒澤大学考古学研究室に委託をして実施した。

# Ⅲ　遺跡の立地と環境

寺東遺跡（18）は、熊谷市大字東別府字寺東地内、八反田遺跡（19）は、熊谷市大字東別府字八反田地内、東耕地遺跡（17）は、熊谷市大字東別府字東耕地地内、入川遺跡（21）は、熊谷市下増田字入川地内、深町遺跡（20）は、熊谷市大字西別府字深町地内にそれぞれ所在している。各遺跡は、熊谷市の北西にあたり、ＪＲ熊谷駅の北西約6.5～８km に位置し、利根川から南へ約４～5.5km の所にある。




1　飯塚遺跡
2　飯塚南遺跡
3　道ヶ谷戸条里遺跡
4　道ヶ谷戸遺跡
5　弥藤吾新田遺跡
6　江袋A遺跡
7　江袋B遺跡
8　横塚山古墳
9　東通遺跡
10　西通遺跡
11　中耕地遺跡
12　天神下遺跡
13　土用ヶ谷戸遺跡
14　玉井古墳群
15　新ヶ谷戸遺跡
16　別府古墳群
17　東耕地遺跡
18　寺東遺跡
19　八反田遺跡
20　深町遺跡
21　入川遺跡
22　石田遺跡
23　関下遺跡
24　横間栗遺跡
25　湯殿神社祭祀遺跡
26　籠原裏遺跡
27　深谷市遺跡No.29
28　木の本古墳群

第１図　周辺遺跡分布図

標高は、北に位置する入川遺跡が約29m、深町遺跡は約30m、八反田遺跡と寺東遺跡は約31m、南に位置する東耕地遺跡は約33mである。地目は、入川遺跡・深町遺跡・八反田遺跡・寺東遺跡が水田であり、東耕地遺跡は畑である。入川遺跡と深町遺跡・八反田遺跡は、荒川と利根川の乱流によって形成された沖積地の自然堤防上に立地している。寺東遺跡と東耕地遺跡は櫛挽台地東縁部に立地している。

周辺には、市指定史跡横塚山古墳（8）、別府古墳群（16）、木の本古墳群（28）、玉井古墳群（14）があり、多くの古墳が分布している。

本遺跡周辺の旧石器時代から古墳時代にかけての遺跡について概観する。

旧石器時代の遺物は、籠原裏遺跡（26）から平安時代の住居跡覆土中から出土した黒曜石製尖頭器が知られているだけである。

縄文時代前期は、三ヶ尻林遺跡で住居跡、寺東遺跡で土器片が出土しているだけである。縄文時代中期は、三ヶ尻天王遺跡・寺東遺跡・石田遺跡（22）、妻沼町の道ヶ谷戸条里遺跡（3）で包含層・集石遺構・埋甕などがみられる。縄文時代後期は寺東遺跡・入川遺跡・深町遺跡、妻沼町の道ヶ谷戸条里遺跡等で包含層が発見され、多くの土器が出土している。

深谷市内の遺跡№２９（27）からは縄文時代中期から晩期の土器片がみられる。

縄文時代晩期から弥生時代前期にかけては横間栗遺跡（24）から土器片が出土しているのみである。

弥生時代中期は再葬墓を出土している遺跡が中心に見られ妻沼町飯塚遺跡（1）・飯塚南遺跡（2）、横間栗遺跡、三ヶ尻上古遺跡、関下遺跡（23）、深谷市の明戸東遺跡などが点在している。後期の遺跡としては深谷市明戸東遺跡、妻沼町弥藤吾新田遺跡（5）等、妻沼低地で大規模な集落が営まれるようになる。

古墳時代前期は、深町遺跡・石田遺跡（22）・中耕地遺跡（11）・横間栗遺跡、妻沼町の弥藤吾新田遺跡・江袋Ａ遺跡（6）・江袋Ｂ遺跡（7）等で、住居跡等が検出されている。

中期は、三ヶ尻地区の上辻遺跡から住居跡１軒と石田遺跡の埋没河川から土器が出土しているのみである。

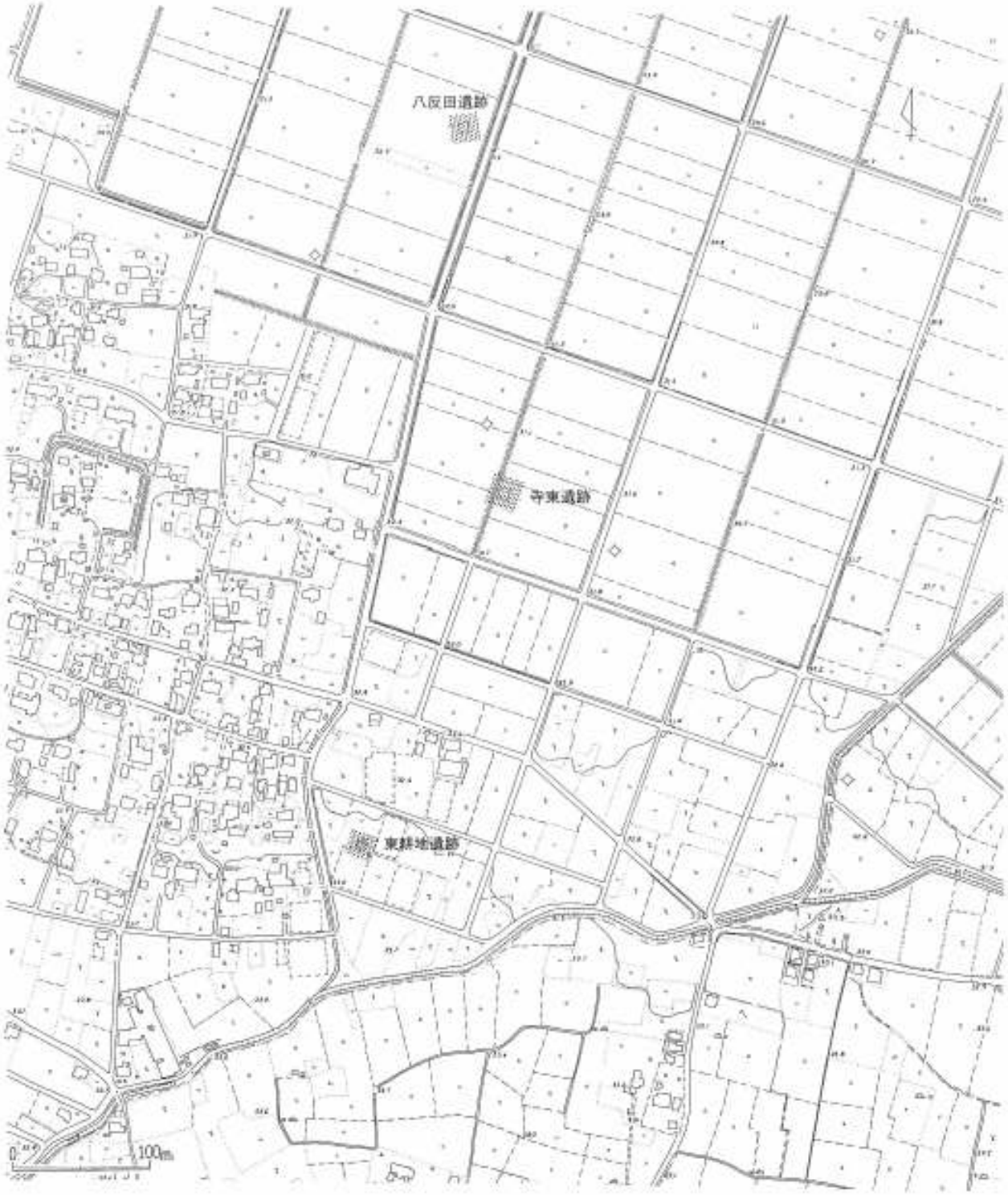
後期は、深町遺跡・入川遺跡・中耕地遺跡・天神下遺跡（12）・新ヶ谷戸遺跡（15）・三ヶ尻天王遺跡、妻沼町の飯塚南遺跡等で住居跡が検出されている。

古墳は、前述したように、東に前方後円墳の横塚山古墳があり、現在は確認されていないが、周囲には横塚山古墳を中心とする古墳群があると考えられる。

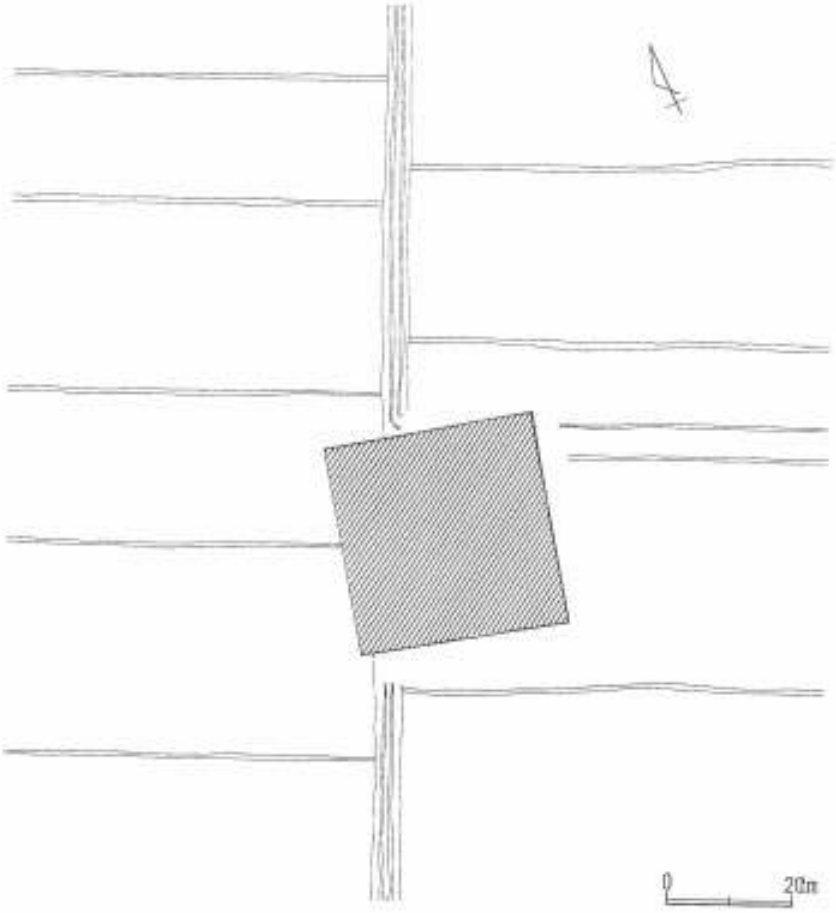
別府古墳群は、16基の円墳と１基の前方後円墳が確認されている。本遺跡の南東にある玉井古墳群は、17基の円墳と２基の方墳が確認されていて、新ヶ谷戸遺跡（21）からは、胴張りの横穴式石室を有する円墳が調査されている。三ヶ尻古墳群は58基の円墳と二子山古墳と運派塚古墳の２基の前方後円墳があり、川原石使用の胴張りの横穴式石室を有する円墳が調査されている。

深谷市の木の本古墳群では、前方後円墳と考えられる古墳１基と16基の円墳が確認されている。

# Ⅳ　寺東遺跡




第２図　寺東遺跡・八反田遺跡・東耕地遺跡位置図




第３図　遺跡位置図

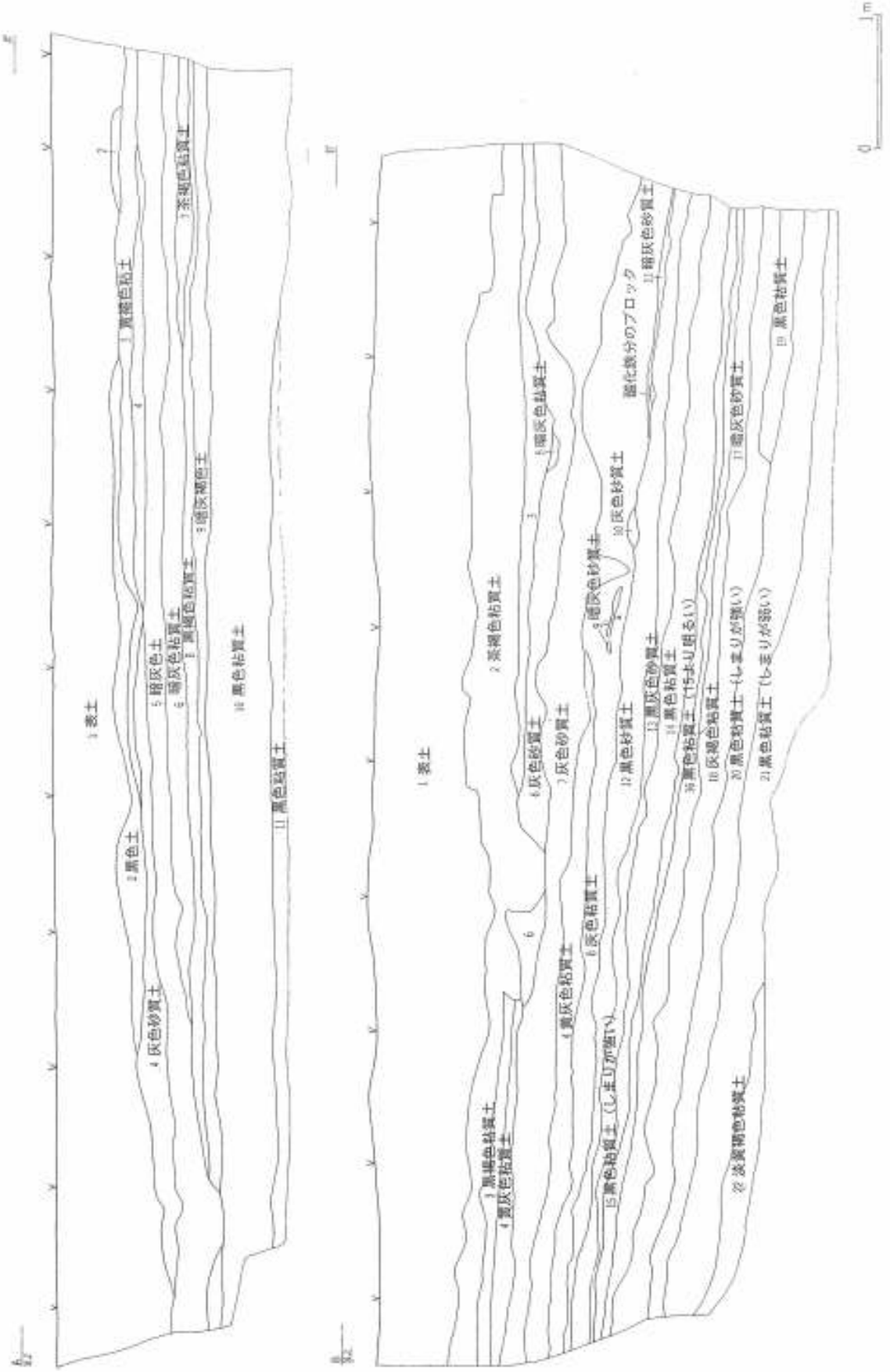
## 1　遺跡の概観

寺東遺跡は、57年度に調査した３箇所の遺跡のうち中央に位置している。

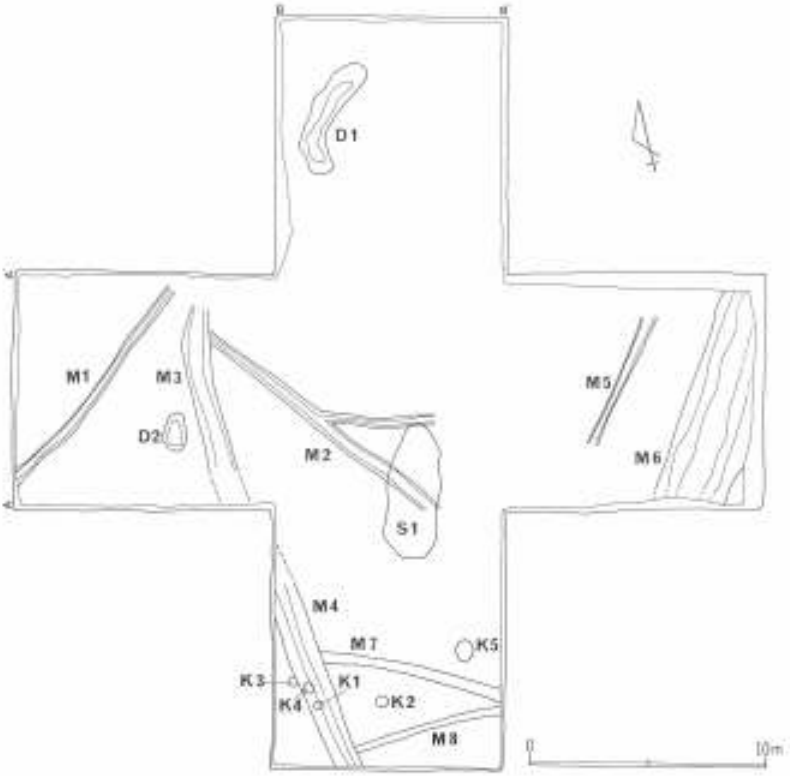
発見された遺構は、集石遺構３基、埋甕５基、土坑２基、溝跡８条が検出された。

集石遺構は、調査区の中央から検出され、河原石と土器が集中していた。埋甕は、調査区の南側に検出された。溝跡は、８条検出されたが、３号溝と４号溝は、同一と考えられ、実際は７条と考える。

遺物は、縄文時代前期（諸磯式期・十三菩提式期）の土器片、中期から晩期の土器、石器（石棒・打製石斧・磨製石斧・石鏃・凹石等が出土した。遺物の中心は、中期から後期の土器が多かった。中期は、勝坂式期・加曽利Ｅ式期、後期は、称名寺式期・堀ノ内式期・加曽利Ｂ式期・曽谷式期、晩期は安行ⅢＡ式期である。



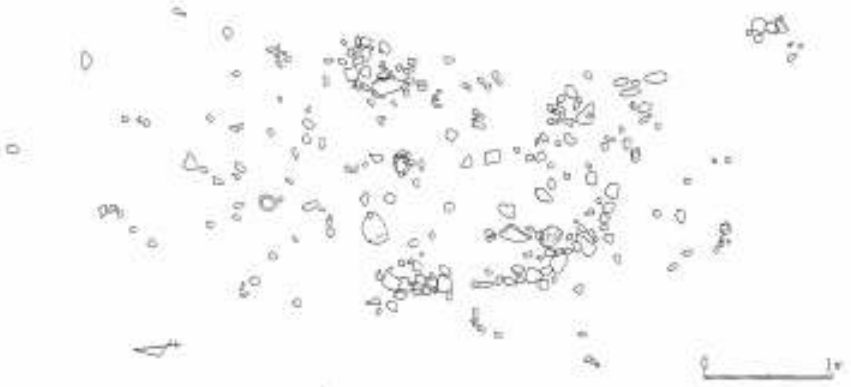

第４図　寺東遺跡土層断面図



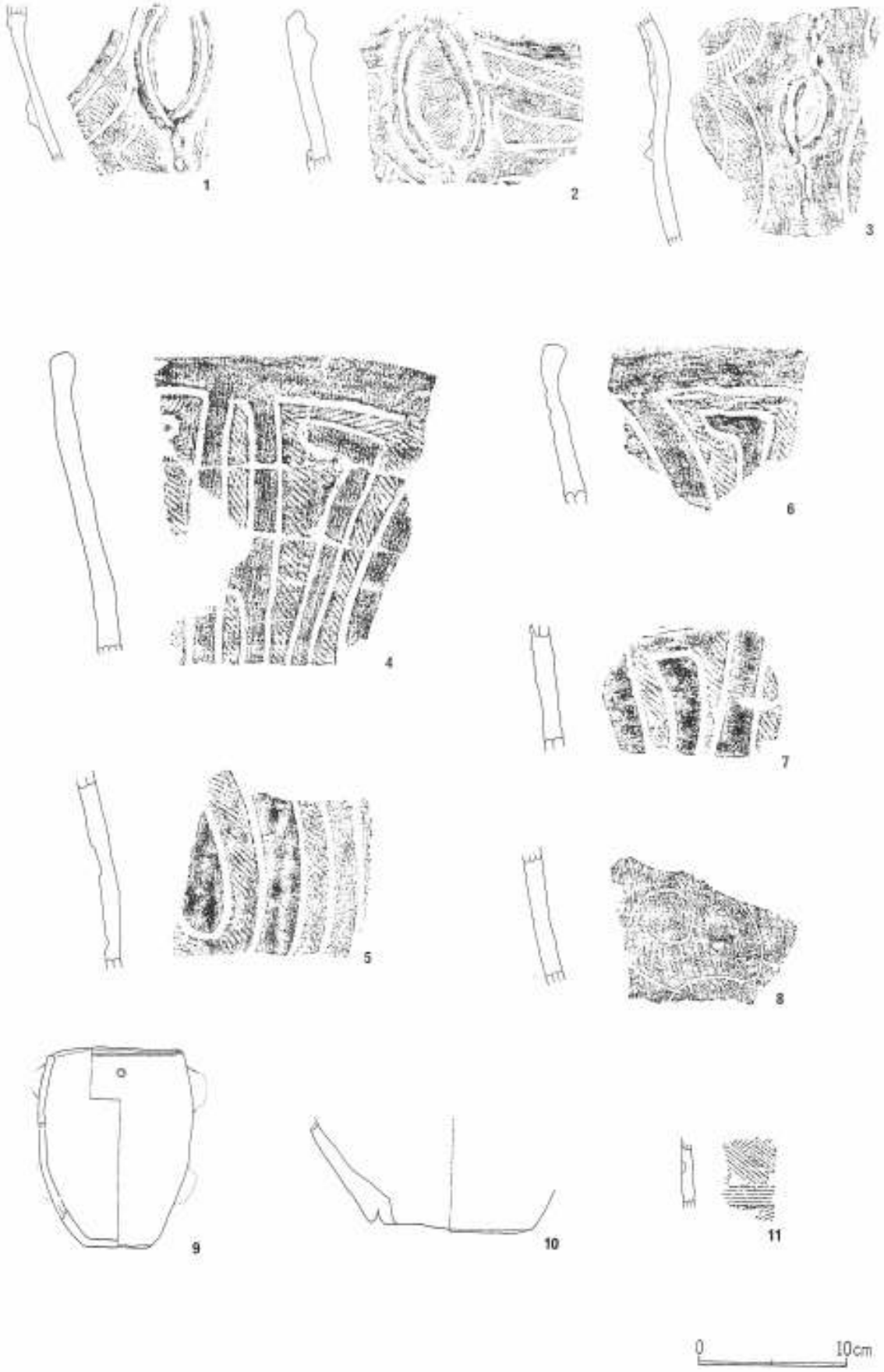

第５図　寺東遺跡全側図

## ２　遺構と遺物

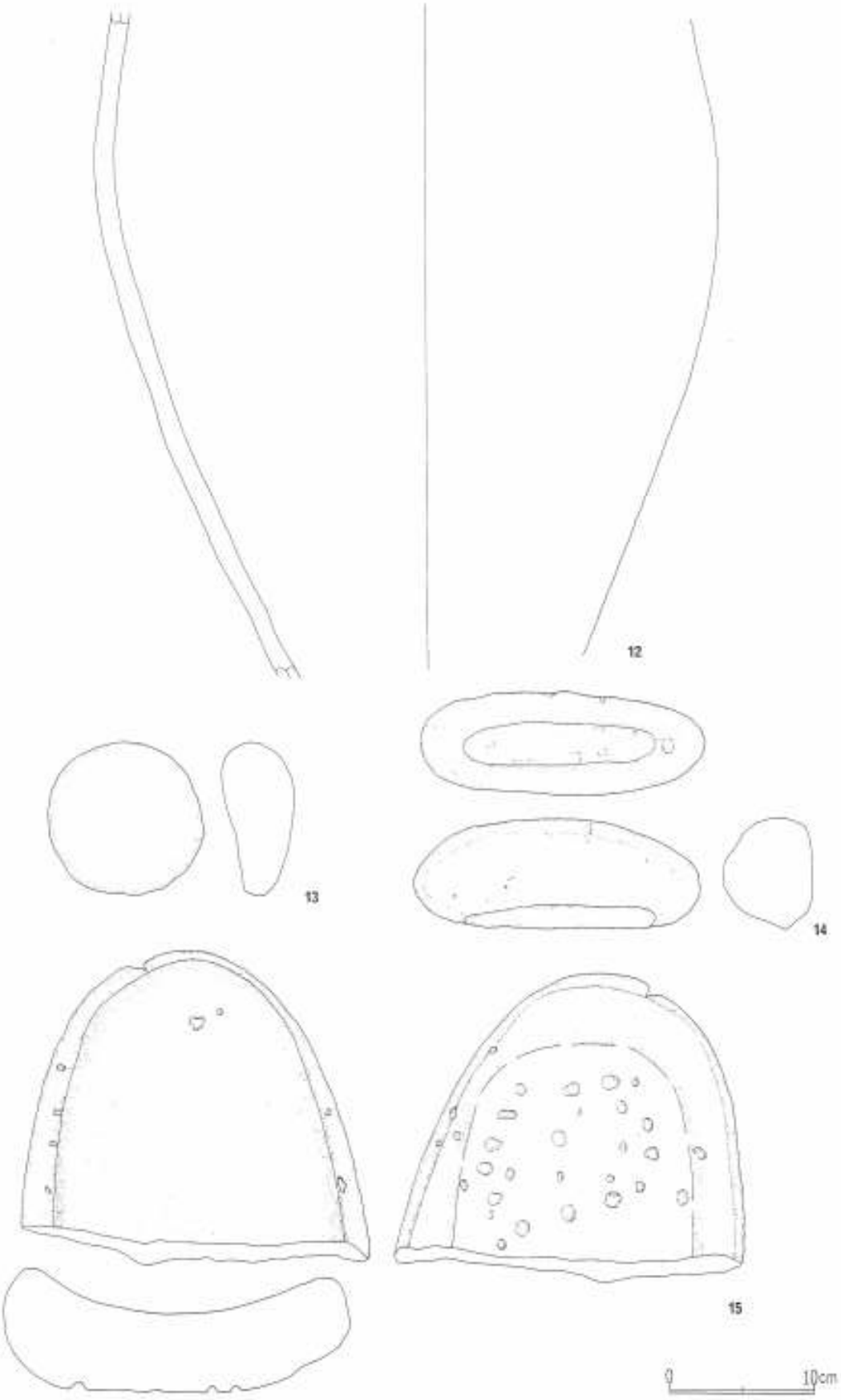
### （１）集石遺構（第６～８図）



第６図　集石遺構



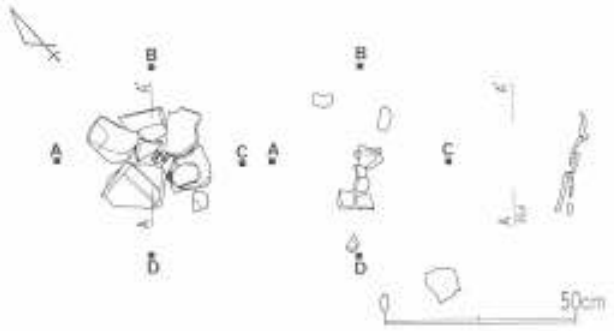

第７図　集石遺構出土遺物（１）



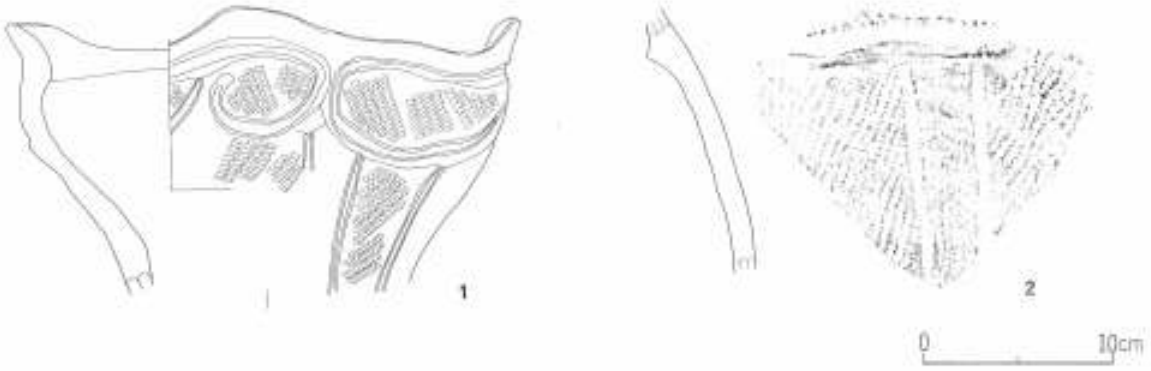

第８図　集石遺構出土遺物（２）

## (2)埋甕

1号埋甕（第9・10図）

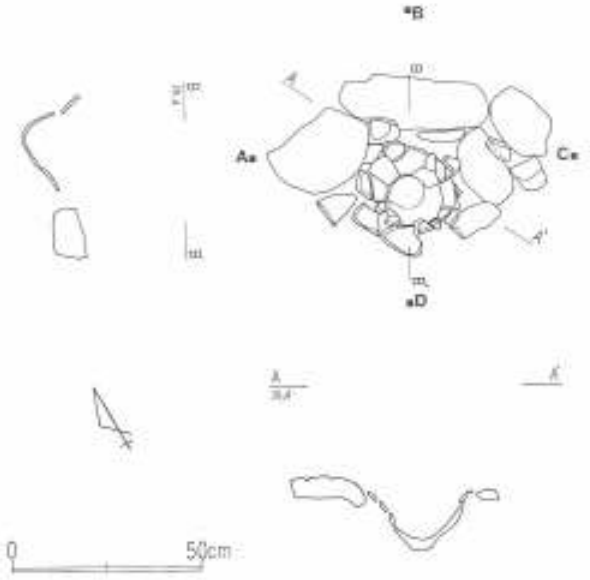



第9図　1号埋甕

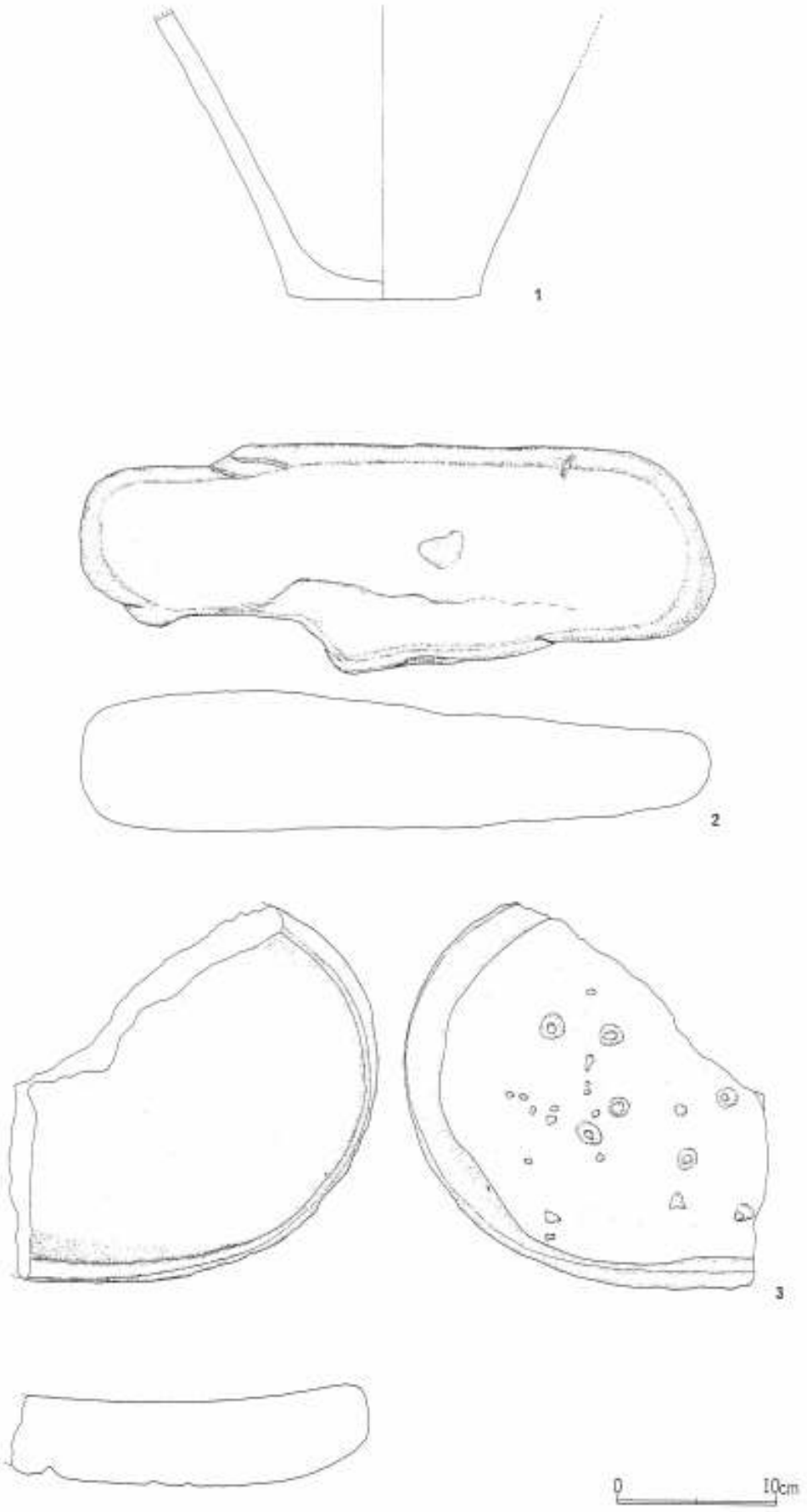



第10図　1号埋甕出土遺物

2号埋甕（第11・12図）

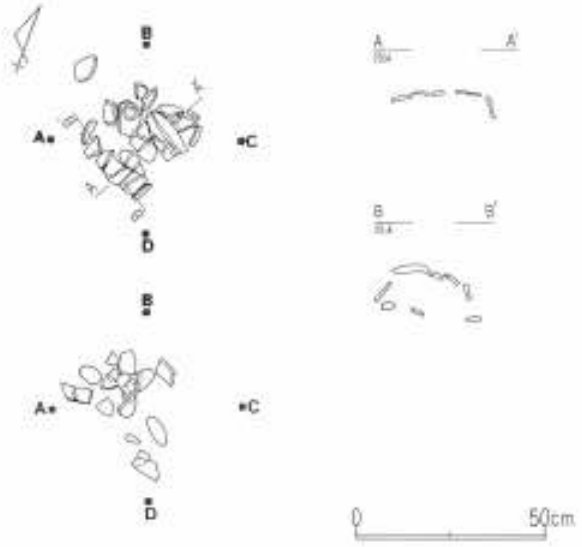



第11図　2号埋甕



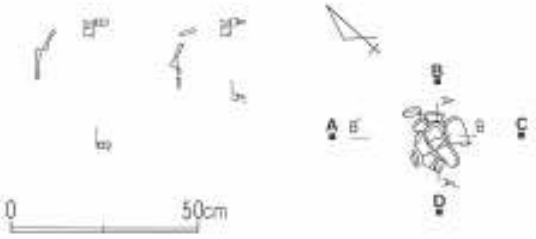

第12図　２号埋甕出土遺物

3号埋甕（第13・16図）



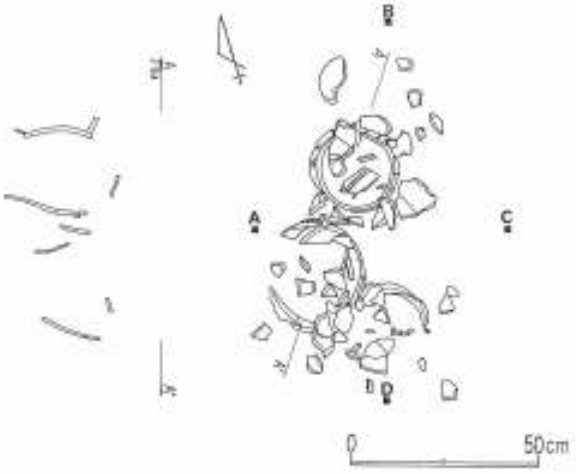

第13図　3号埋甕

4号埋甕（第14・16図）

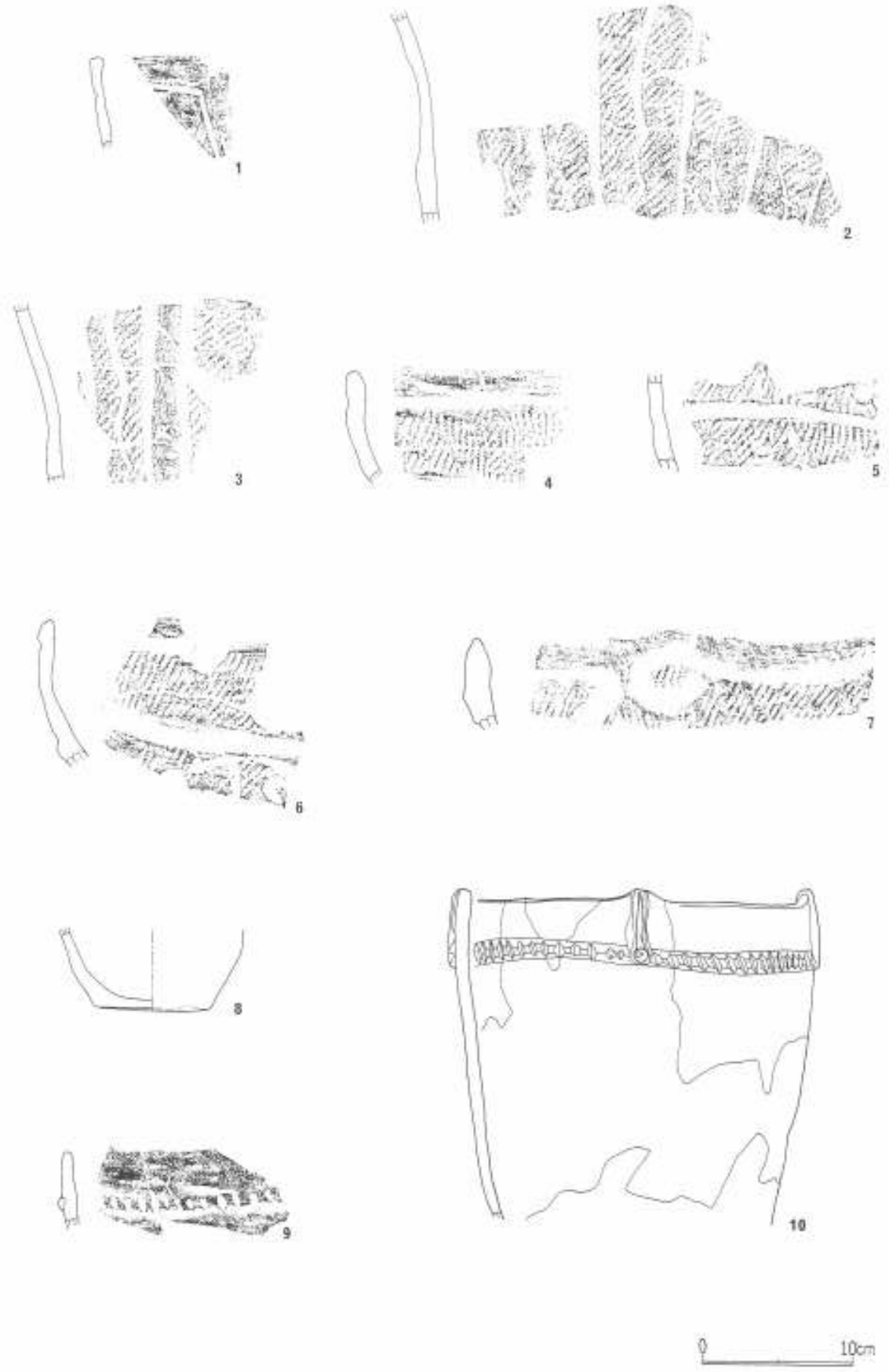



第14図　4号埋甕

5号埋甕（第15・16図）



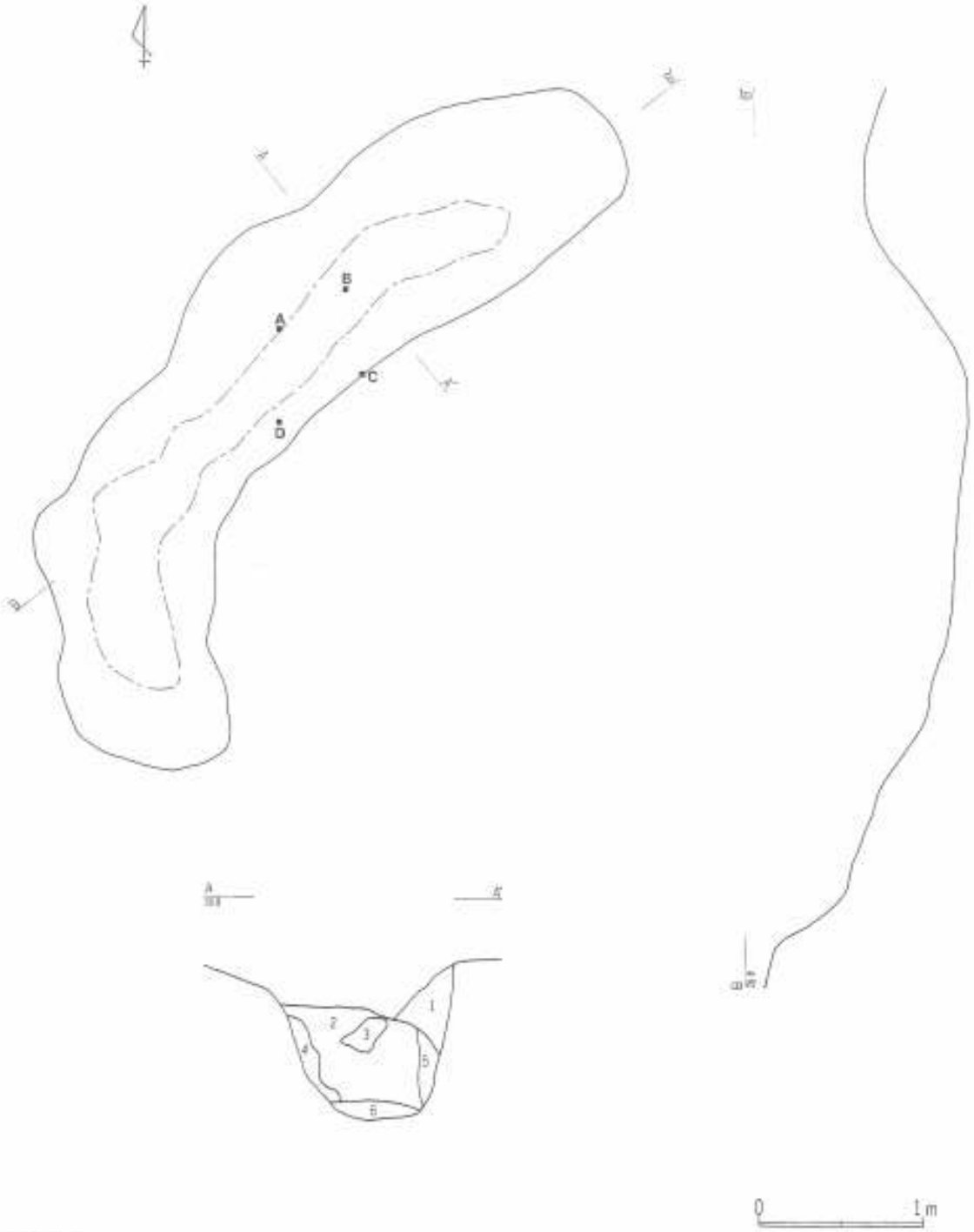

第15図　5号埋甕




第16図　3～5号埋甕出土遺物（1～7：3号埋甕、8：4号埋甕、9・10：5号埋甕）

## (3)土坑

### 1号土坑（第17～19図）

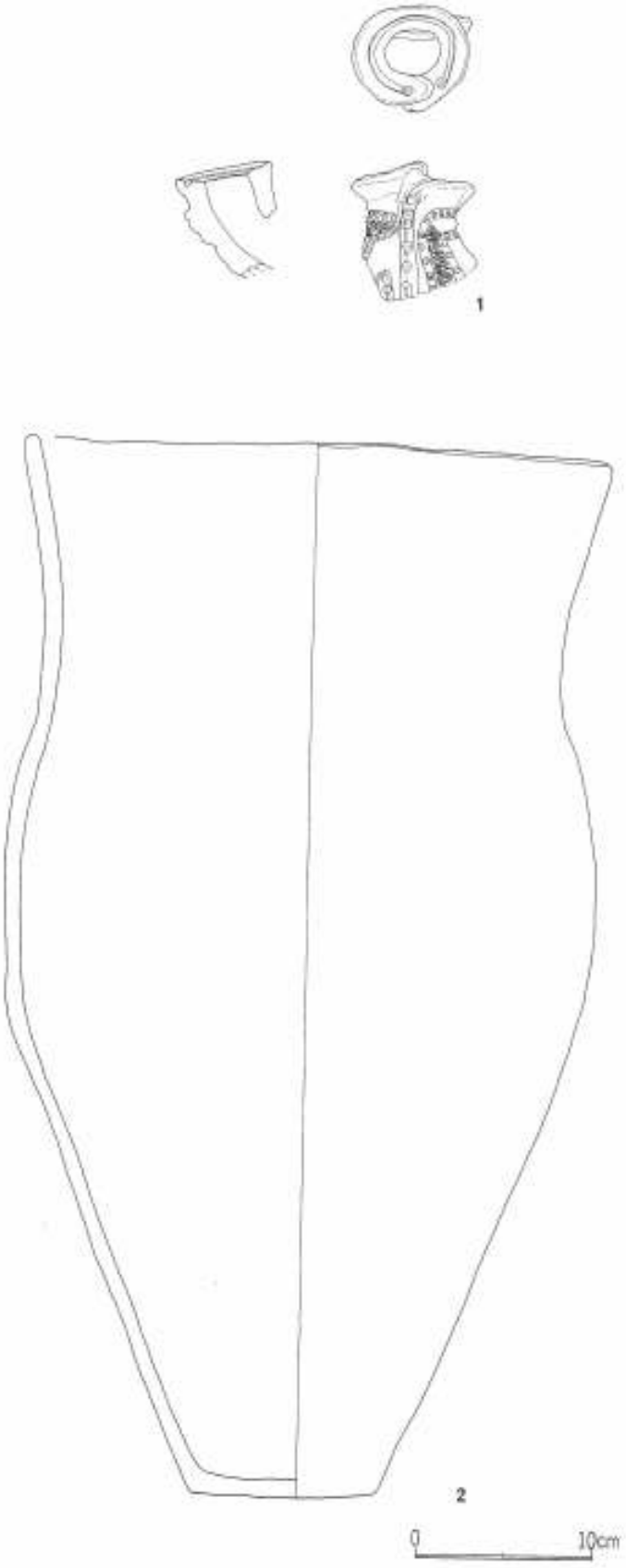



**1号土坑土層**

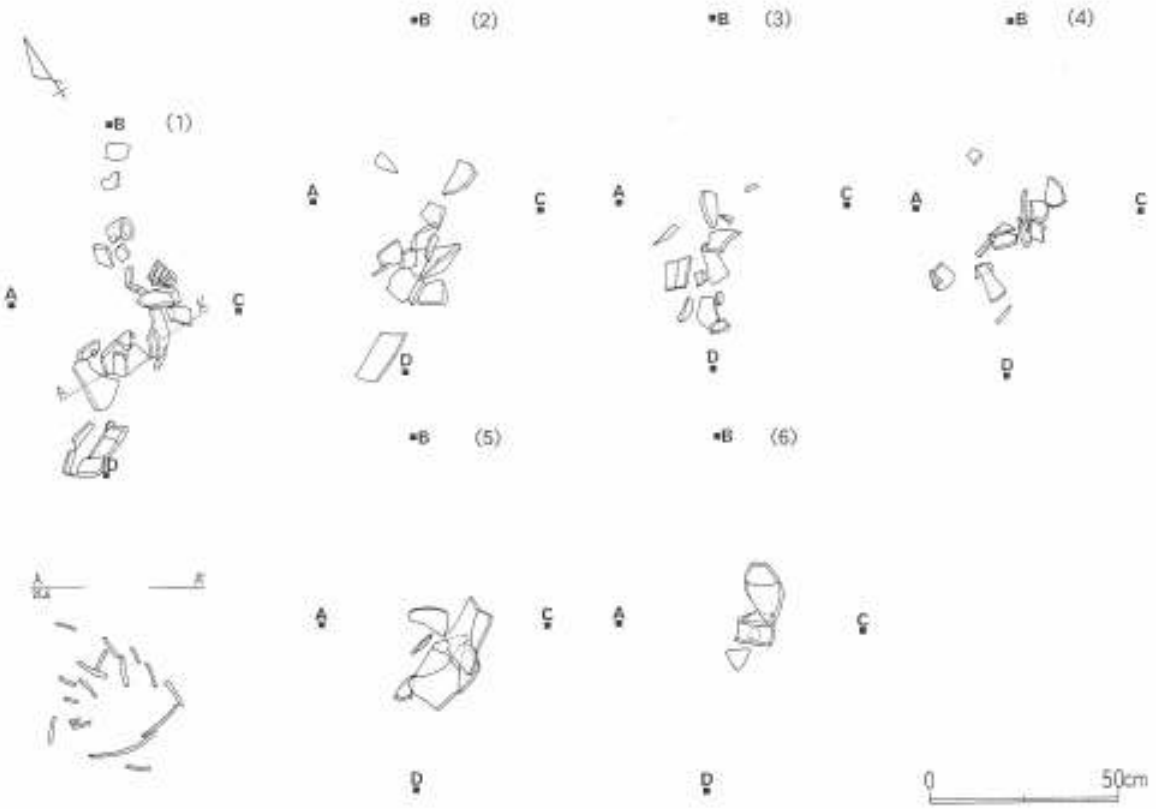
1 黄褐色粘土　2 黒色土　3 灰褐色粘土　4 暗黄褐色粘土

5 黒色土(ローム粒子を多く含む)　6 黒色土

第17図　1号土坑




第18図　1号土坑出土遺物

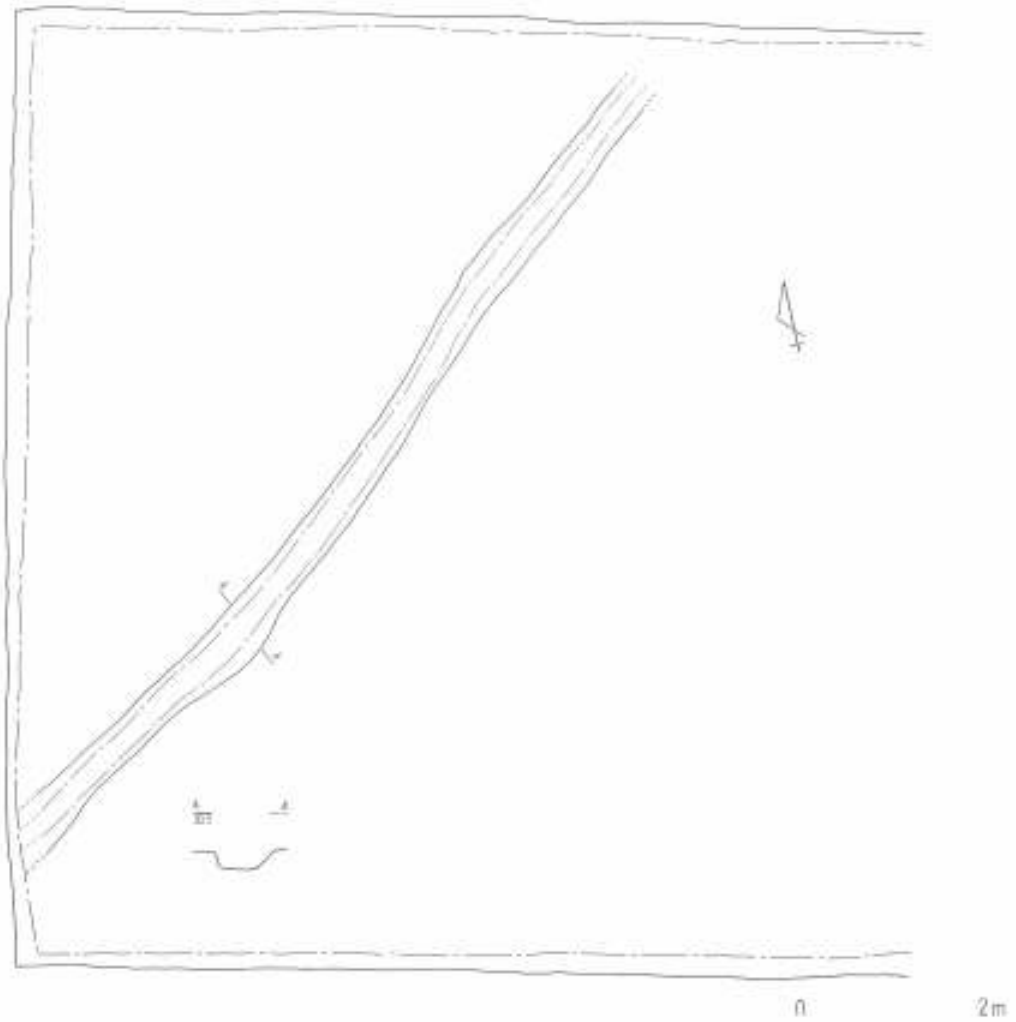



第19図　1号土坑遺物出土状態

**2号土坑**（第21図）

（4）溝跡

1号溝跡（第20図）

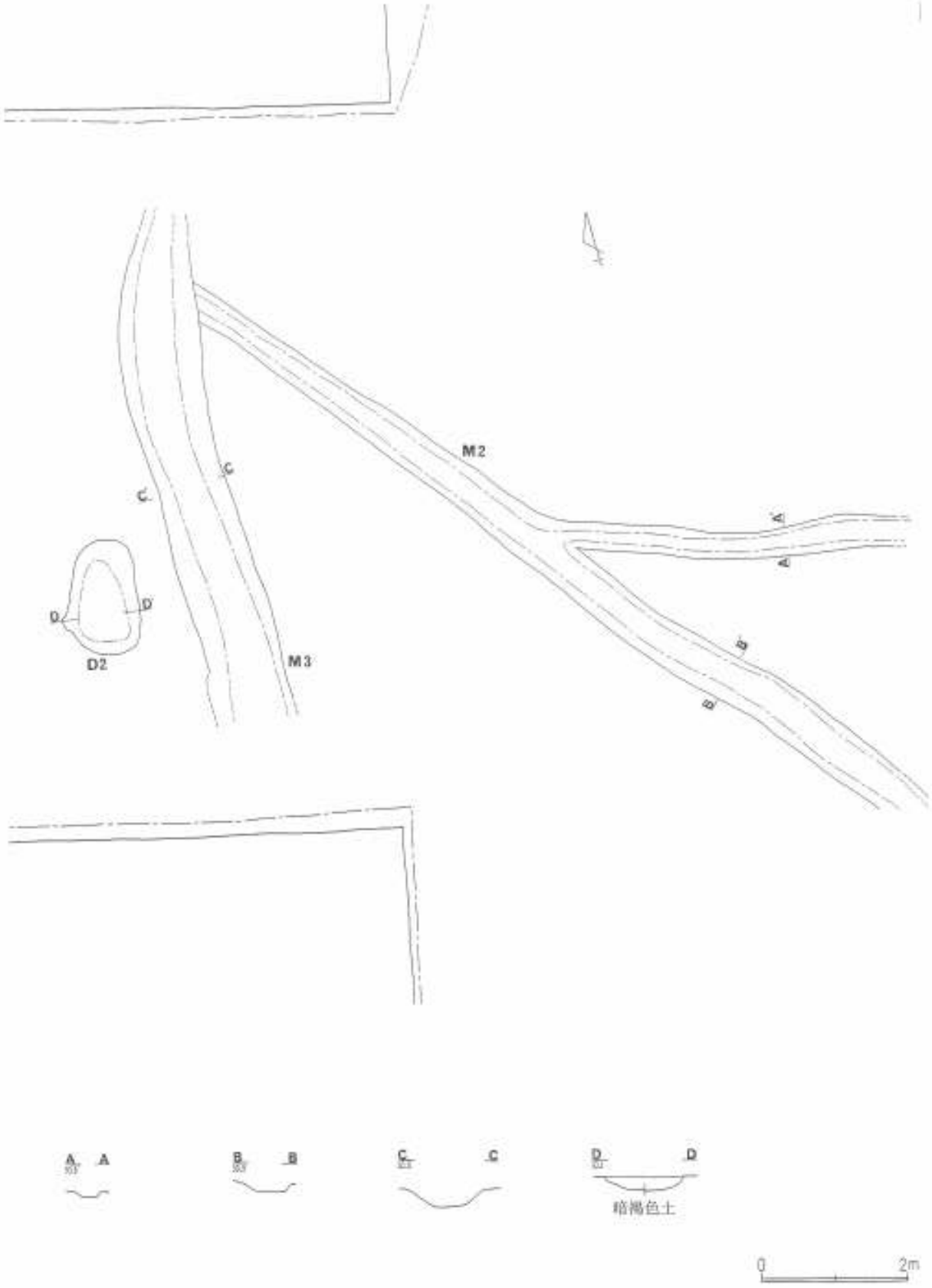



第20図　1号溝跡

2号溝跡（第21図）

3号溝跡（第21図）

4号溝跡（第24図）

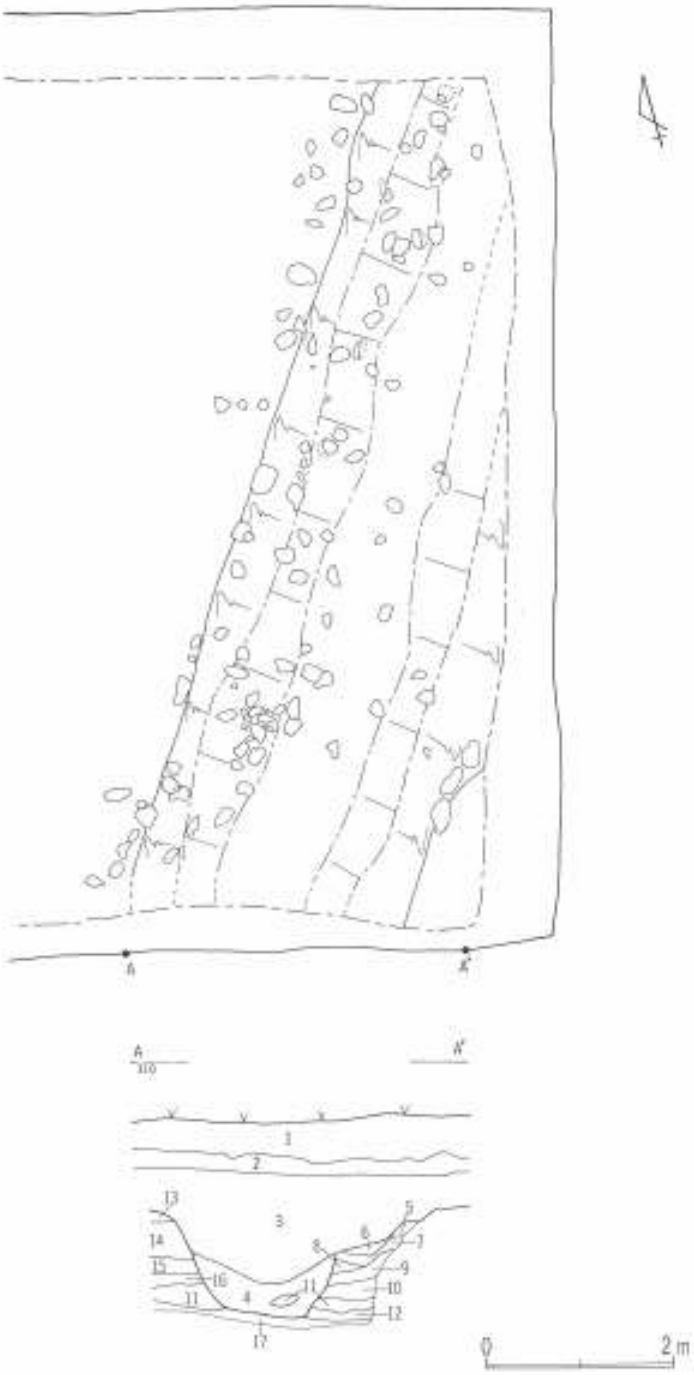



第21図　２号土坑、２・３号溝跡

5号溝跡（第22図）

第22図　5号溝跡

6号溝跡（第23図）



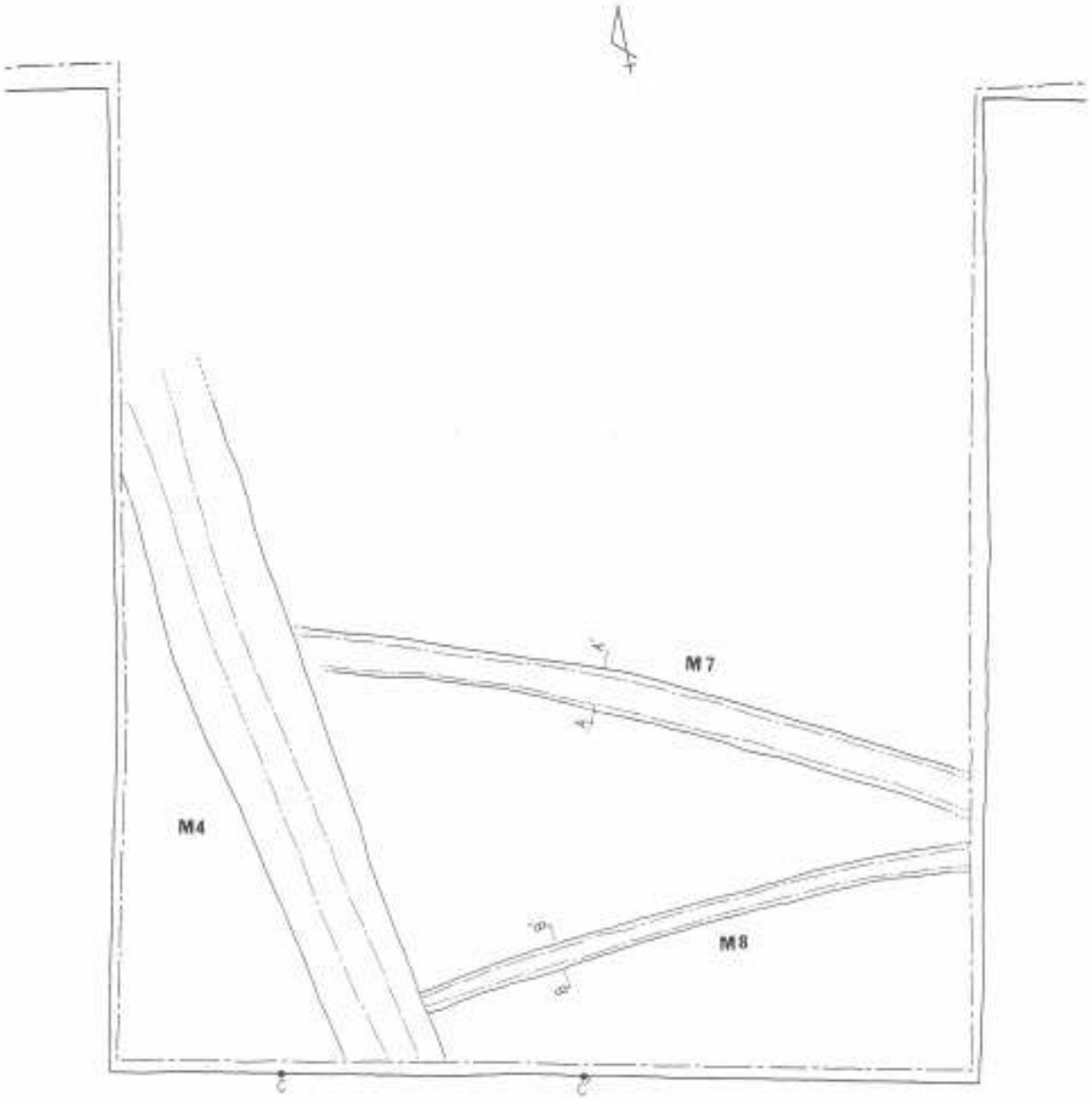

6号溝跡土層

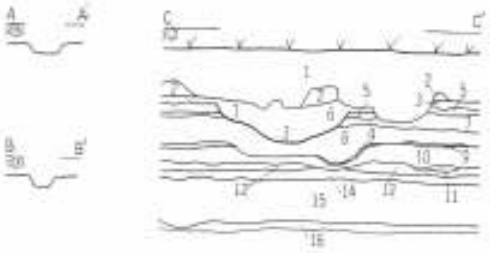
1 表土
2 黄褐色粘質土
3 灰褐色粘質土
4 暗灰色粘質土
5 黄褐色粘質土
6 黄灰色粘質土
7 黒灰色粘質土
8 灰褐色粘質土
9 黒灰色土
10 黒灰色土
11 暗灰色砂
12 黒灰色粘質土
13 暗褐色粘質土
14 暗褐色粘質土
15 暗褐色粘質土
16 暗褐色粘質土
17 黒色粘質土

第23図　6号溝跡

7号溝跡（第24図）

8号溝跡（第24図）



4号溝跡土層

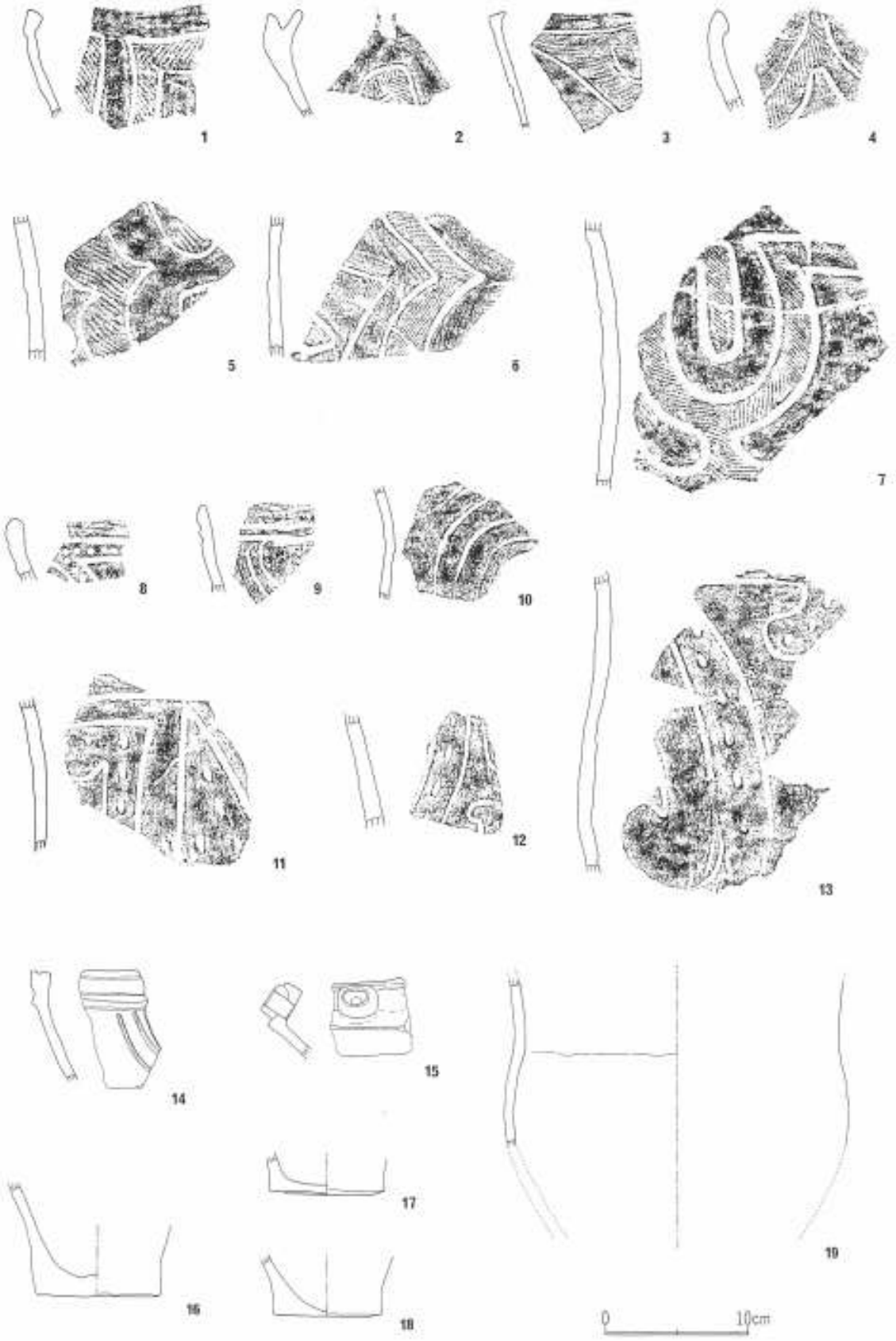
1 表土
2 灰褐色粘質土
3 黒色土
4 黒色土(粘土成分多い)
5 黄褐色粘土
6 暗灰色粘質土
7 灰色砂質土
8 暗灰色土
9 黄灰色粘質土
10 灰色粘質土
11 黒灰色砂
12 黒褐色粘質土
13 灰色砂質土
14 暗灰褐色粘質土
15 黒色粘質土
16 黒色粘質土(15より明るい)

0 2m

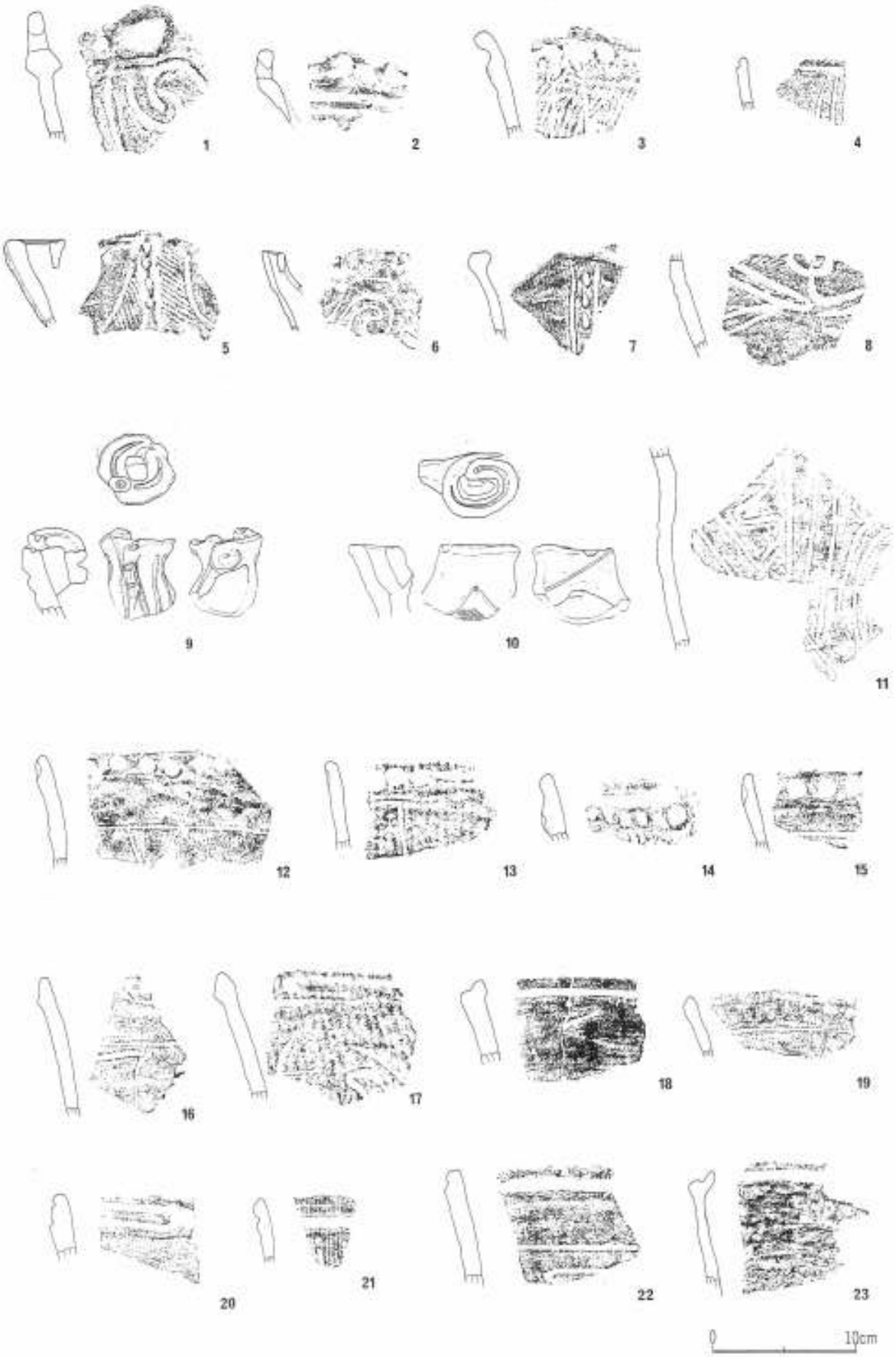
第24図　4・7・8号溝跡

## （5）遺構外出土遺物（第25～31図）

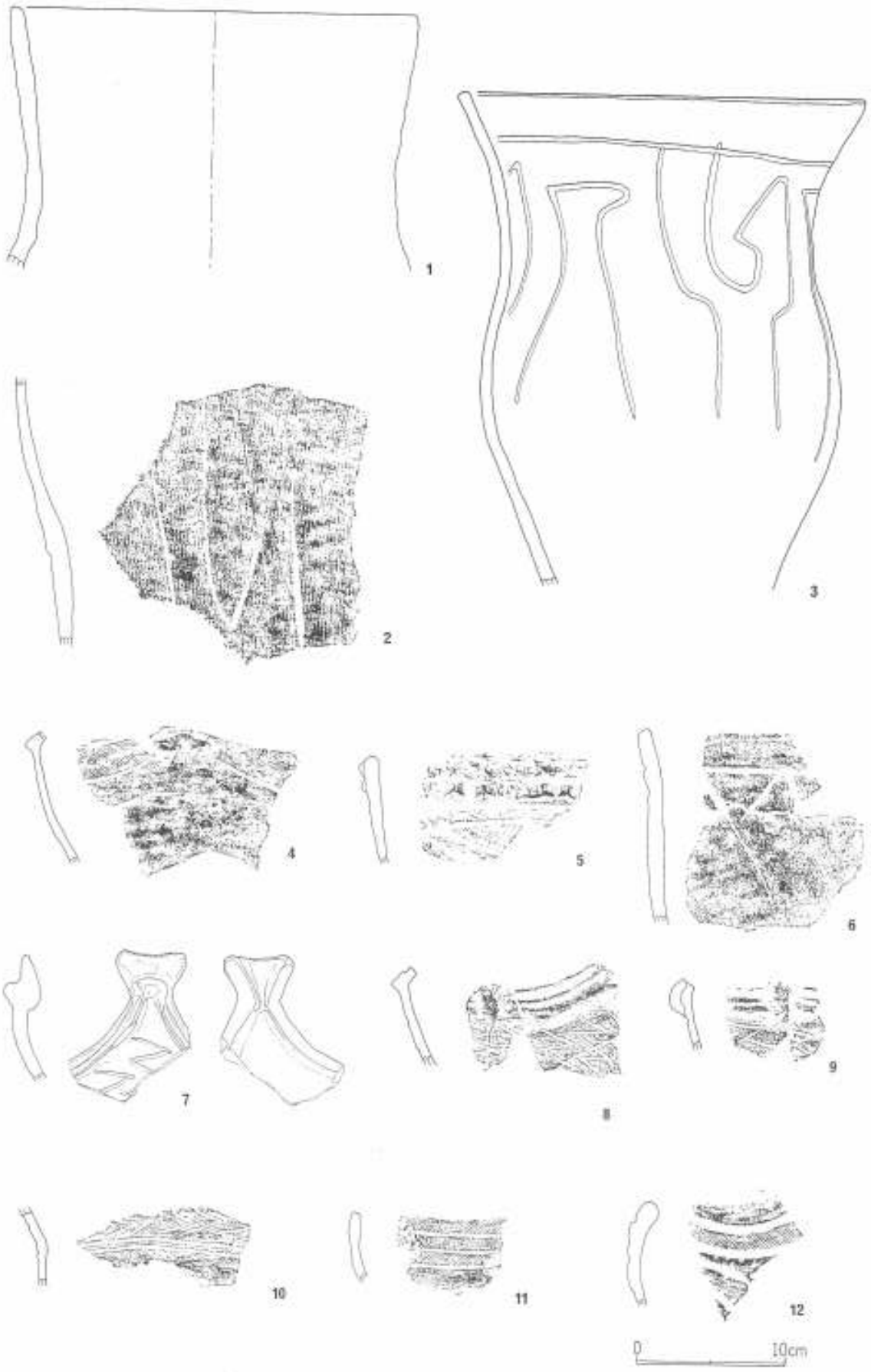
第25図　遺構外出土遺物（1）



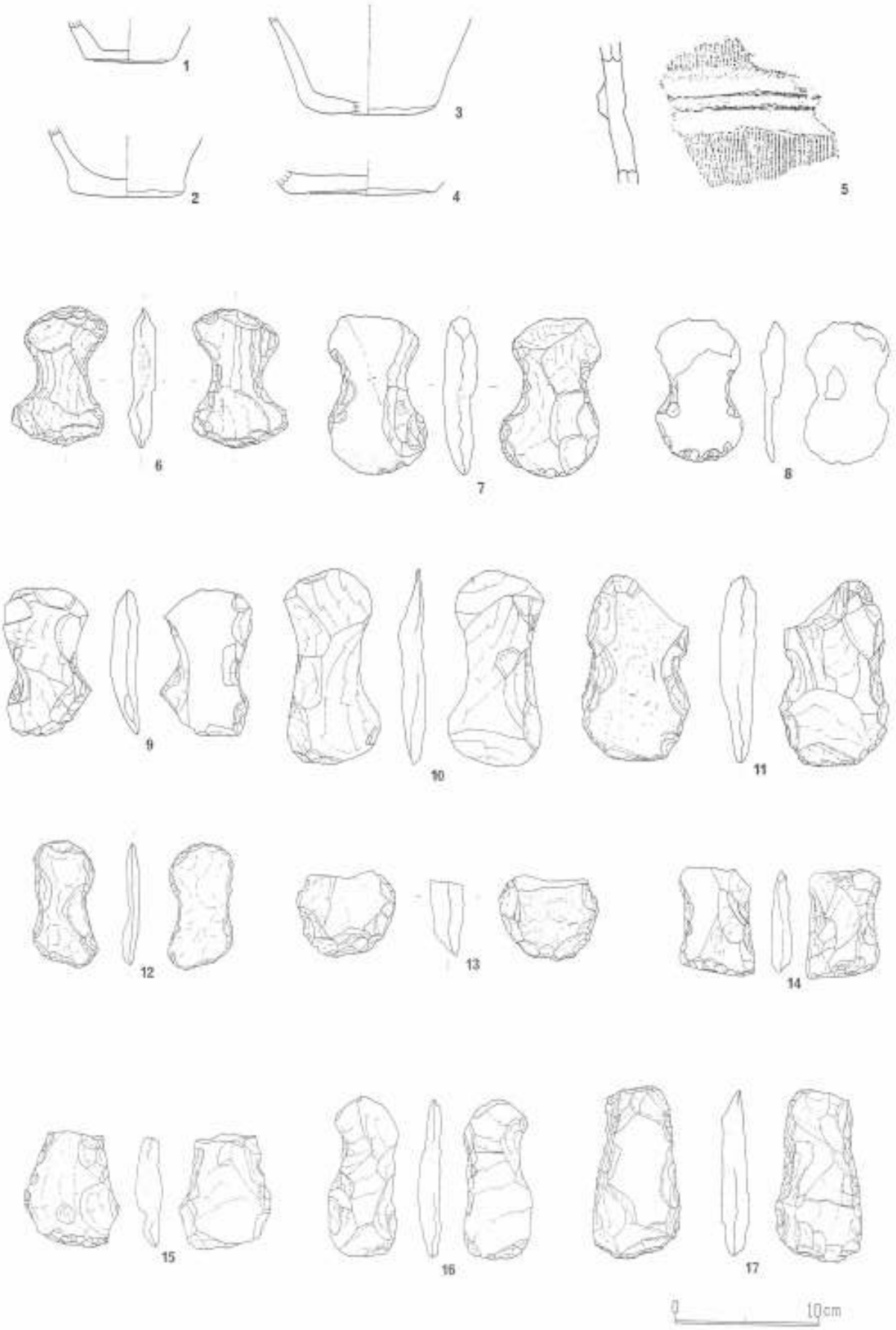

第26図　遺構外出土遺物（2）



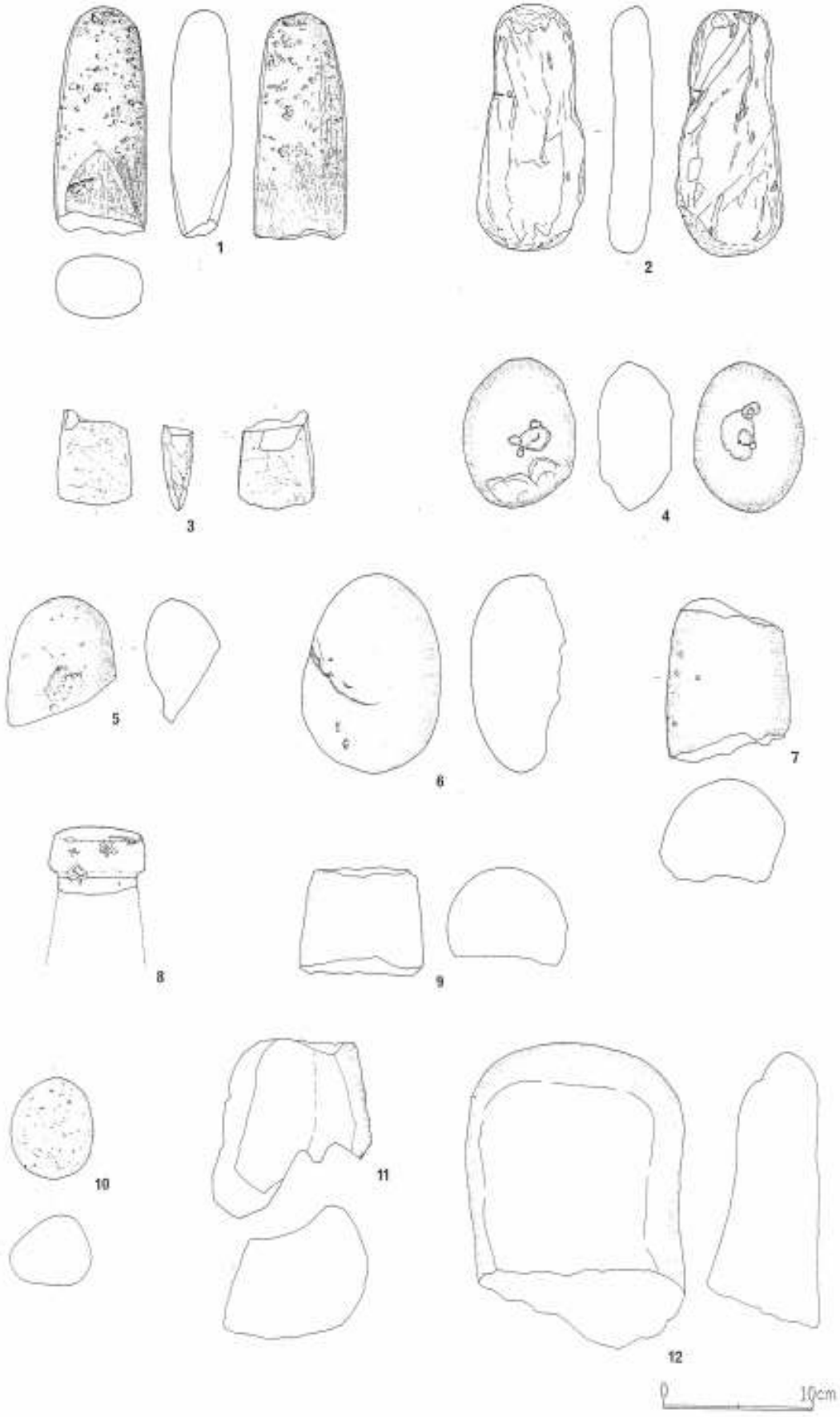

第27図　遺構外出土遺物（3）



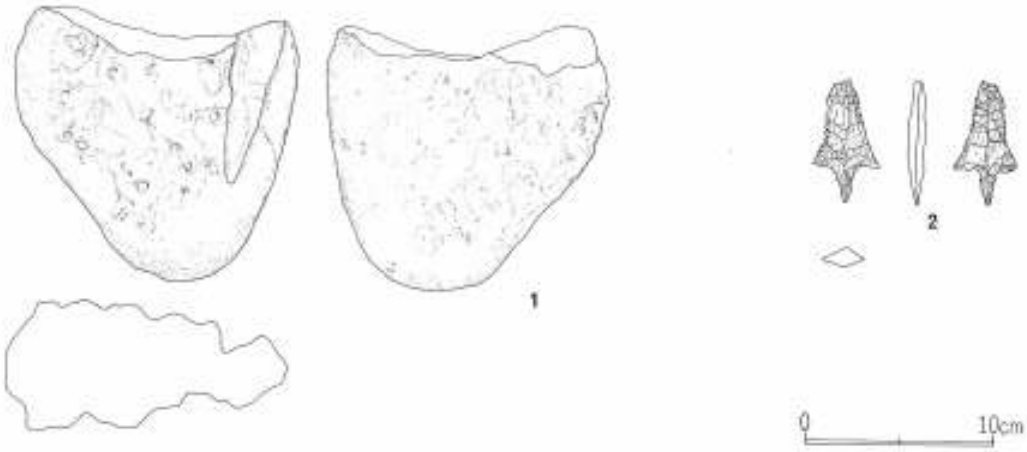

第28図　遺構外出土遺物（4）




第29図　遺構外出土遺物（5）

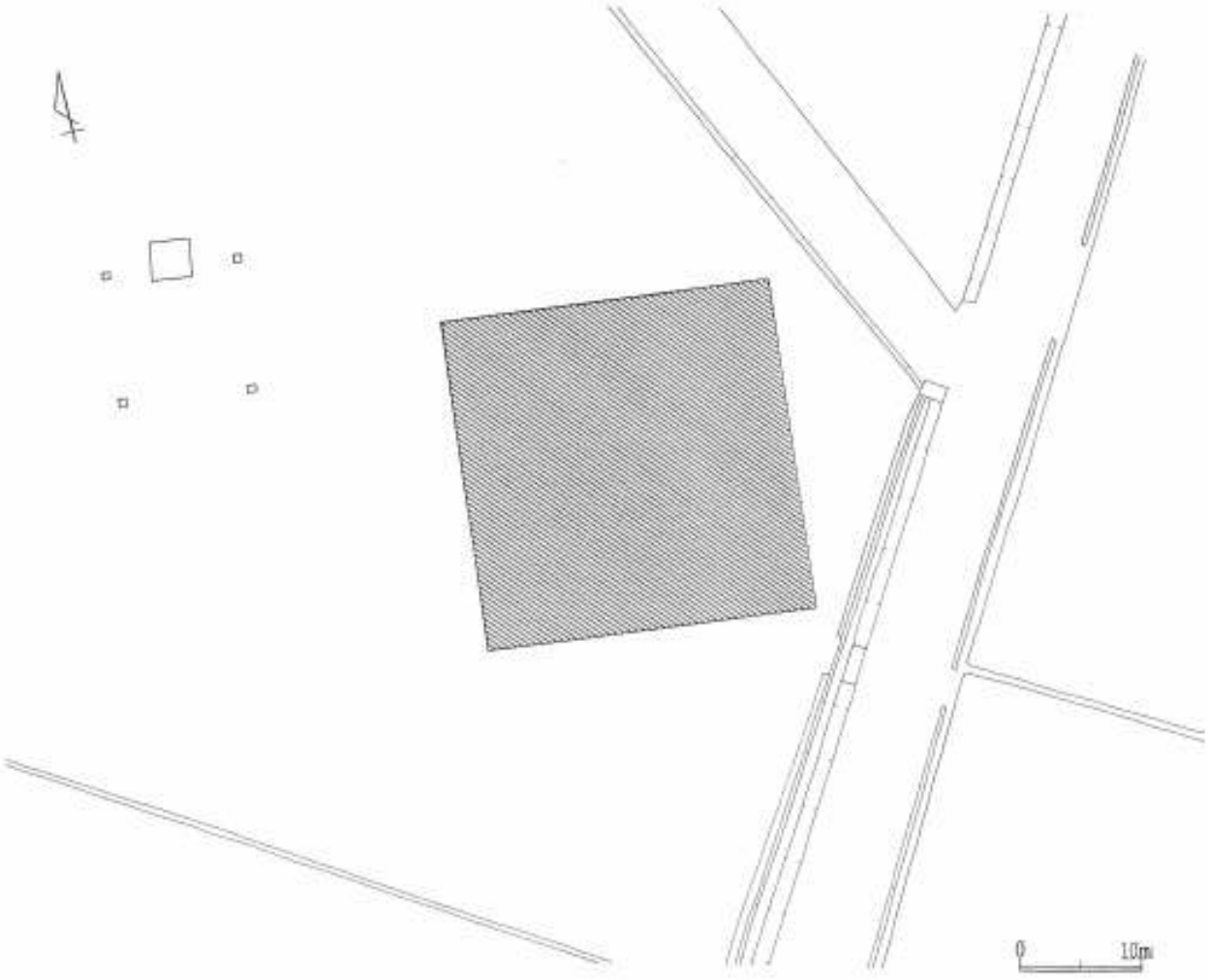



第30図　遺構外出土遺物（6）




第31図　遺構外出土遺物（7）

# V　八反田遺跡




第32図　八反田遺跡位置図

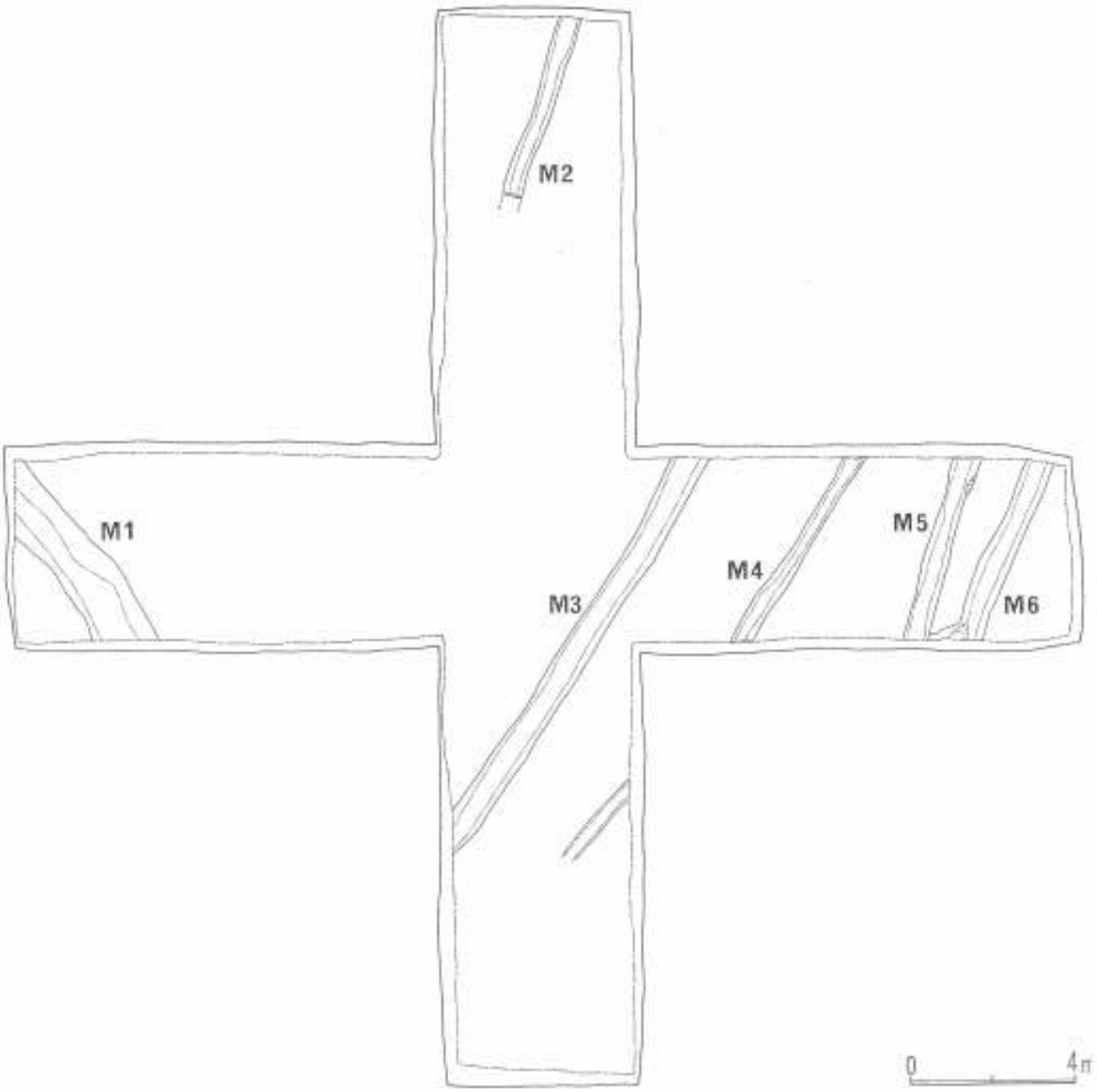
## 1　遺跡の概観

八反田遺跡は、57年度に調査した３箇所の遺跡のうち北側に位置している。

発見された遺構は、溝跡６条が検出された。

１号溝跡は幅約1.5m、深さ約1.2mで、北西から南東方向に検出された。他の５条の溝跡は幅約40～50cm、深さ約20cmで、北東から南西方向に検出された。

３～５号溝跡からは、炭化物が出土した。

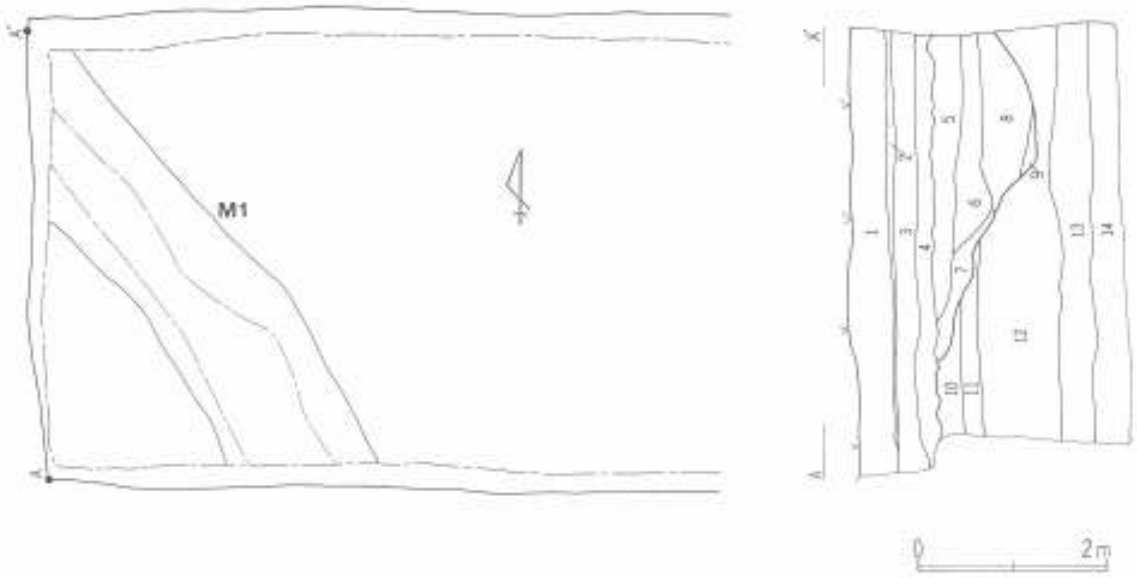



第33図　八反田遺跡全側図

## 2　遺構と遺物

### 溝跡

1号溝跡（第34図）

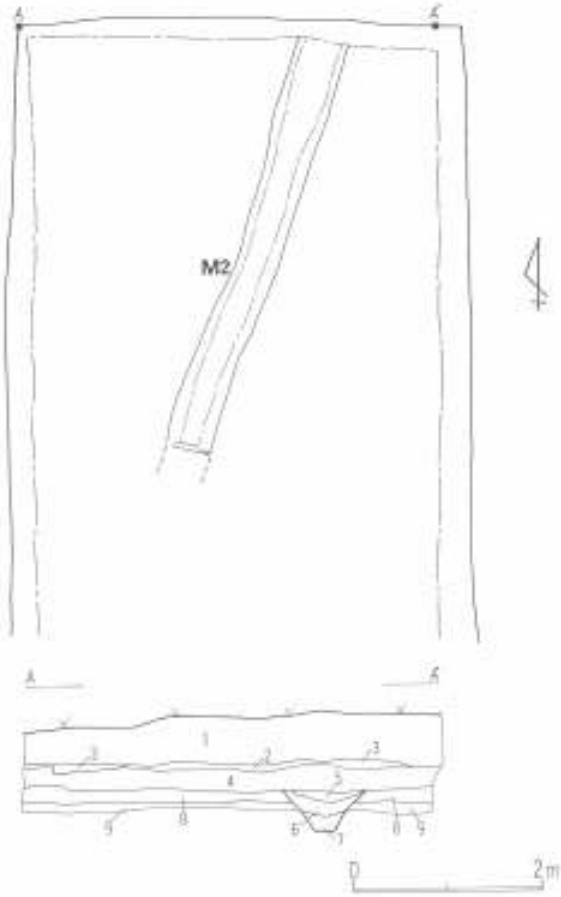



第34図　1号溝跡

1号溝跡土層

1 表土
2 コンクリート
3 暗灰褐色土
4 暗灰褐色土
5 黄褐色土
6 灰褐色土
7 褐色土
8 淡褐色土
9 暗灰褐色粘質土
10 淡灰褐色粘質土
11 茶褐色土
12 灰褐色粘質土(炭化物を含む)
13 灰褐色粘質土
14 青灰褐色粘質土(炭化物を含む)

2号溝跡（第35図）

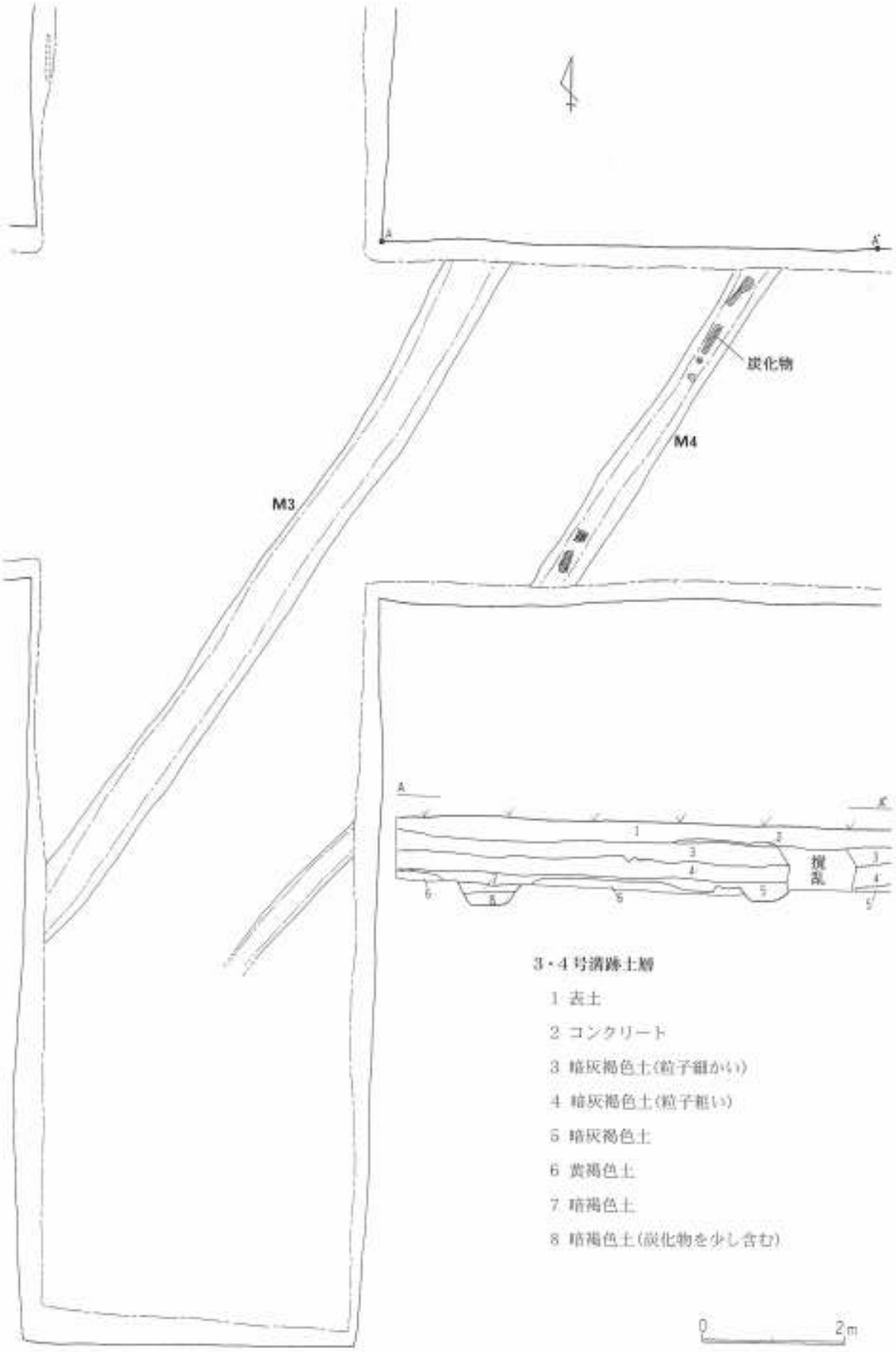



2号溝跡土層

1 表土
2 コンクリート
3 暗灰褐色土
4 暗灰褐色土
5 暗茶褐色土
6 暗褐色土
7 暗灰褐色土
8 暗灰褐色土
9 黄褐色土

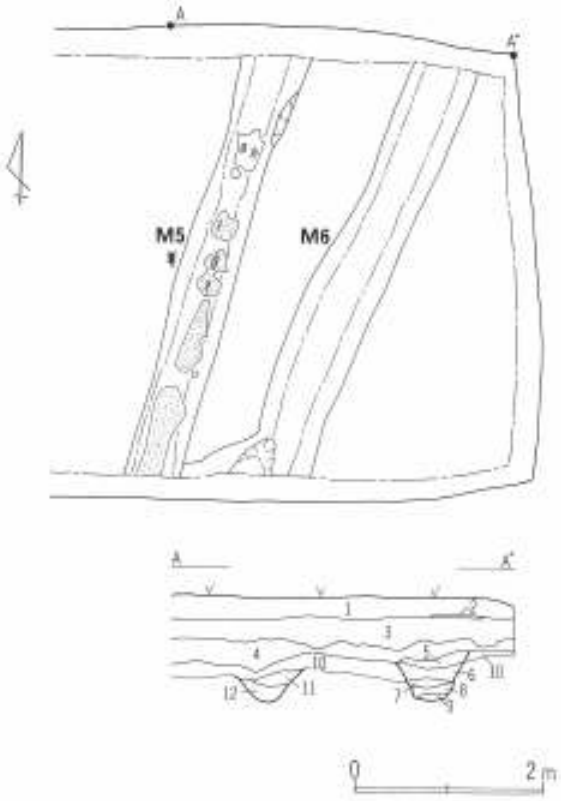
第35図　2号溝跡

## 3・4号溝跡（第36図）




第36図　3・4号溝跡

5・6号溝跡（第37図）




5・6号溝跡土層

1 表土　2 コンクリート　3 暗灰褐色土(粒子細かい)

4 暗灰褐色土(粒子粗い)　5 暗茶褐色土

6 暗茶褐色土(火山灰を少し含む)　7 暗茶褐色土

8 暗褐色土　9 暗灰褐色土　10 暗灰褐色土　11 暗褐色土

12 暗褐色土(炭化物を少し含む)

第37図　5・6号溝跡

# Ⅵ　東耕地遺跡

## 1　遺跡の概観

東耕地遺跡は、昭和57年度に調査した遺跡の中で南側に位置している。

埴輪・土師器の破片が検出され、古墳のあった可能性が考えられるが、鉄塔建設工事により撹乱されており、遺構は確認できなかった。

第38図　東耕地遺跡位置図

# Ⅶ　入川遺跡

## 1　入川遺跡の調査

### (1)調査の経緯

森　原　明　廣

入川遺跡は、埼玉県熊谷市下増田字入川にある。入川遺跡の発掘調査は、電源開発株式会社による送電線用鉄塔の建設工事の事前発掘調査として行なわれた。

1984年11月、電源開発株式会社より熊谷市教育委員会へ、当該地における鉄塔建設工事の計画が申し入れられた。熊谷市教育委員会は、当該地の周辺には、別布条里遺跡をはじめとする多くの遺跡が存在することから、同年12月、試掘調査を行なった。その結果、建設工事予定地には土師器・須恵器等を出土する遺跡が存在することが確認されたので、遺跡名称は小字名より、入川遺跡と命名された。

熊谷市教育委員会は、建設工事予定地区内の遺跡調査の必要性を電源開発株式会社に提示した。両者による協議の結果、埋蔵文化財保護のうえからは望ましいことではないが、事前発掘調査による記録保存が決定した。

1985年１月末日、熊谷市教育委員会より駒沢大学考古学研究室へ調査の依頼があり、現地へ赴いた。入川遺跡は、沖積地に位置し、土層確認や遺構検出に困難さが予想された。しかし、遺跡の重要性などから、学生が行なう発掘調査に相応わしいと判断し、依頼を受けることに決定した。その後熊谷市教育委員会と駒沢大学考古学研究室により、調査準備が着々と進行した。入川遺跡の調査担当には駒沢大学文学部教授・倉田芳郎、熊谷市教育委員会・寺社下博があたり、調査員には駒沢大学講師・太田喜美子、同卒業生越田雅司、同４年生大石謙・黒沢晴彦があたった。調査補助員として、駒沢大学考古学研究会及び考古学専攻の学生有志が参加した。

## （2）調査の方法

小　西　直　樹

発掘調査は、格子目（グリッド）を基本とした調査を実施した。

まず、調査にあたって、最上層の耕作土を重機により、１m削除した。そして真北を基準とした南北の基線と、これに直交する東西の基線を設けた。これを基に、調査区全体に１辺３m方眼のグリッドを設定した。南北線上に、東から西へA，B，C …，東西線上に、北から南へ１，２，３…の番号を付した。各グリッドの名称は、北と東の交点で表現することとし、「F－３区」などとした。

南北F線、東西６線に基本土層を記録するための畔を１m幅で残すこととした。他の畔は、必要に応じて狭めたり、除去をすることによって、広い範囲を同時に、平面的に掘り下げて遺構の確認を行なった。また、試掘溝を必要に応じて設定し、旧傾斜面の広がり及び遺構や土層の確認を行なった。

遺構の名称は、切り合いの激しい古墳時代の住居跡については、確認された順番で１号、２号、３号…と番号を使用した。縄文時代の遺構は、確認されたグリッドの北東交点の名称を使用した。時期不明の遺構は、確認された順番に、１号、２号、３号…と番号を使用した。

確認された遺構は、平面的な広がりを観察した後、必要な土層観察用畔を残して掘り下げた。掘り下げ終了後、土層図を作成し、全ての畔を除去して遺構全体を検出した。遺構全体の平面実測を終了後、遺物を取り上げ、付属施設の確認・検出を行なった。必要に応じて、付加実測を行なった。

出土遺物は原則として、位置・標高・出土状況（方向・表裏）を記録して取り上げた。遺物の実測は状況に応じて、グリッド・遣り方のいずれかの方法を利用した。

遺構の実測は、土層断面図・エレベーション図・平面図を必ず取ることとし、竈は縮尺を変えて、遺構に準じた図面を作成した。実測方法は、上層の遺構（溝）に関してはグリッドにより、下層の遺構（住居跡・土坑）、および旧地形は全て「遣り方」を利用した。貫きの南北ラインは、グリッドと同様に真北を基準とした。

旧地形は、10cm間隔の等高線で実測した。

写真撮影は、遺構の場合、遺物出土状況・土層断面図・遺構全体写真を原則として撮り、必要に応じて、付属施設などの部分写真を撮るようにした。撮影には、４×５判・６×７判及び35mmのカメラをそれぞれ用いた。フィルムは、白黒・カラー及びリバーサルを各カメラを通して用いた。

その他の記録として、調査日誌を作成した。

## （3）調査の経過

森　原　明　廣

入川遺跡の発掘調査及び整理調査は以下の経過で、１９８５年より１９８７年まで行われた。

１９８５年２月２５日　発掘調査が開始される。重機による表土除去終了後、グリッド設定を行う。

２月２６日　埋め戻されていた調査前トレンチを再掘し、基本土層を確認する。

２月２７日　グリッド設定及びベンチマーク設定を終了する。調査区内精査を開始する。

２月２８日～３月１日　積雪及び雨天により野外作業を中止し、室内作業を行う。

３月２日　調査区東側より１号・２号・３号溝が確認され、検出を開始する。

３月３日　１号・２号・３号溝の検出終了後、平面実測を行う。４号溝が確認される。

３月４日　４号溝の検出を行う。２・３号溝は掘り足りない部分が確認される。

３月５日　調査区北側より５号溝の一部が確認される。２・３号溝の再実測を開始する。

３月６日　１～４号溝までの検出・実測を終了し、調査区西側の精査、Ｆライン・６ラインに沿ったトレンチを掘り始める。基本土層第Ⅲ－１層から土師器が多く出土する。

３月７日　Ｆライン・６ライントレンチにおいて基本土層の確認と作図を行う。

３月８日　５号溝の検出・実測終了後、１～６号溝の全景写真を撮影する。

３月９日　土師器集中区の確認・検出を開始する。溝の検出後の掘り下げを開始する。

３月１０日　調査区内の精査を行う。土師器集中区の範囲確認を進める。

３月１１日　土師器集中区以外から出土した遺構外出土遺物（古墳時代）を平板実測で取り上げる。

３月１２日　１号住居跡・２号住居跡・１号土坑が確認される。

３月１３日　２～５号土坑・３号住居跡が確認される。１～５号土坑の検出を開始する。土師器集中区出土遺物を平面実測し、取上げを進める。

３月１４日　１～３号住居跡の検出を開始する。４～７号住居跡が確認される。

３月１５日～２０日　各住居跡の検出及び遺物の取上げを進める。Ｂ－２・Ｄ－２区にトレンチを入れた結果、基本土層第Ⅲ－２・Ⅲ－３層が縄文時代の遺物包含層と判明した。

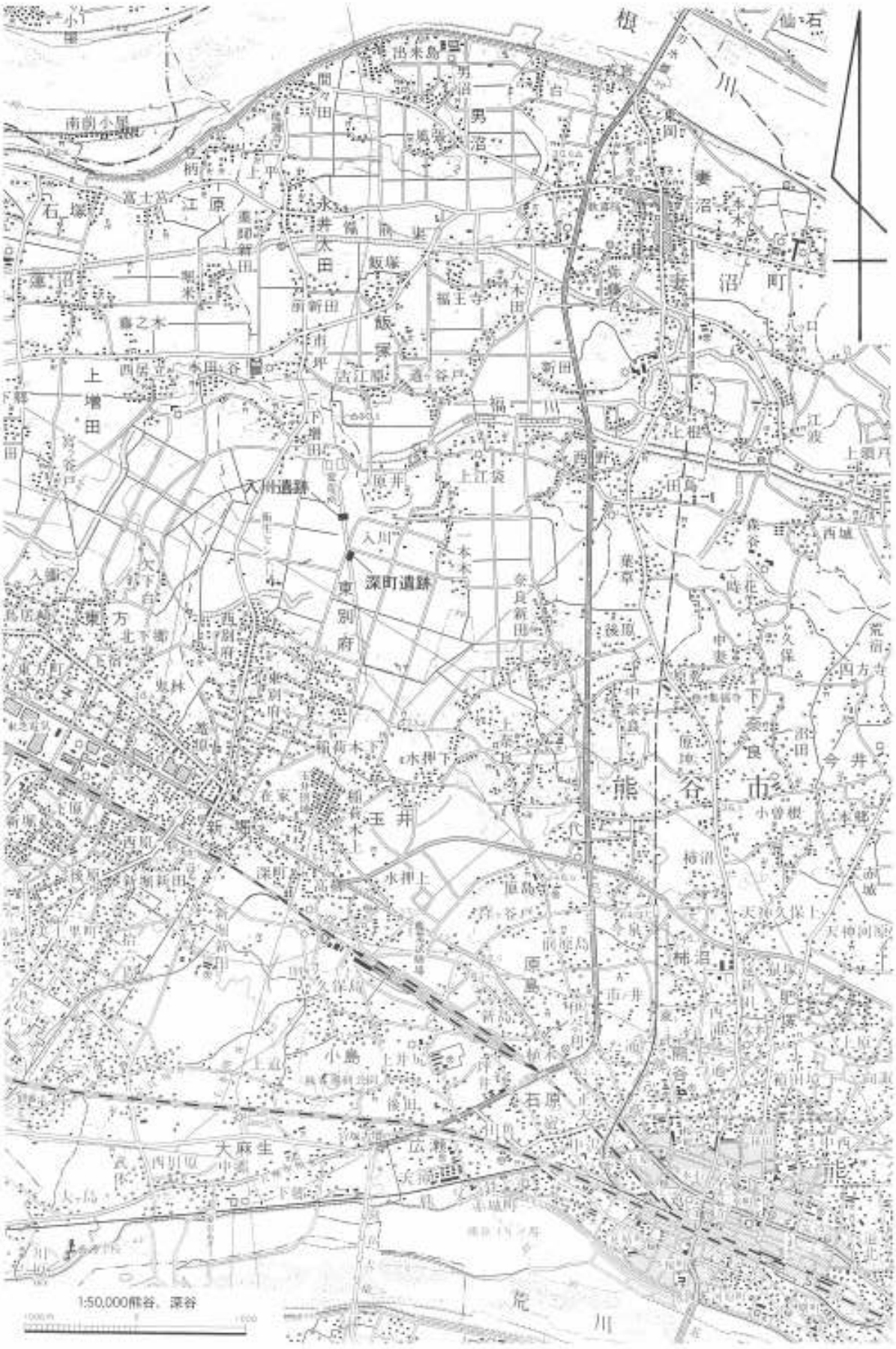
３月２１日～２８日　各住居跡の検出・平面実測を進める。縄文時代の遺物出土状況及び旧地形コンターの平面実測を行う。Ｂ－１竪穴状遺構の検出を行う。

３月２９日　調査区北壁土層の実測を行う。終了全景写真撮影のための清掃を行う。

３月３０日　Ｅ－２土坑の検出を行う。終了全景写真の撮影を行う。

３月３１日　撤収作業を行い、発掘調査を終了した。

１９８５年５月３日より１９８７年１２月２０日まで、駒沢大学において整理作業を行い、全ての調査を終了した。




第39図　入川遺跡・深町遺跡位置図　（国土地理院発行5万分の1「深谷」「熊谷」より転載）

## 2　入川遺跡の概要

### （1）自然環境と立地

鍋　島　直　久

入川遺跡の位置する熊谷市は、関東平野の一部、埼玉県北部のほぼ中央に位置する。

埼玉県の地形は、その形態から東西２地域に分けることができる。１つは東部の平野であり、１つは西部の山地である。また地形の違いは、地質の違いとも深く関係している。すなわち、西部の山地に古い地層（古期地層群・新期地層群）が、東部の平野に新しい地と層（新期地層群・最新期地層群）が主に地層を成している。しかし、細かくみると地質については山地・平野ともに更に複雑に堆積している。地形と地質の境界は、一般に古くより、王子―高崎構造線と呼ばれている。

山地は、地層が帯状に分布する構造を成す秩父山地が埼玉県西部に位置している。三波川帯・北帯・南帯・山中地溝帯・秩父累帯・四万十帯などの諸帯が帯状を成している。丘陵と盆地は、関東平野の西縁に広く分布し、北の児玉丘陵から南の狭山丘陵まで山地か平野に突き出す形を成す。山地の中央部に秩父盆地が位置する。新期地層群の、漸新統・中新統・鮮新統の諸層より成っている。台地は、大宮台地・入間台地・武蔵野台地など扇状地性の地形を示す台地であり、山地より流れ出る河川の谷口付近を扇頂として、大きな複合扇状地形を呈している。台地は、低地と共に関東平野の１部を成し、関東ローム層が洪積統を覆っている。低地・沖積地においては、加須低地・妻沼低地・荒川低地・中川低地など、沖積統より成っており洪積世末に堆積した最も新しい堆積層である。

本遺跡の位置する熊谷市は、関東山地を源とする荒川が関東平野に流れ出す部分であり、市街地は扇状地のほぼ扇央に位置する。また、利根川に沿う妻沼低地上でもある。妻沼低地は、台地を埋没して成形された低地で、利根川・荒川の氾濫が幾度となくくり返されており、自然堤防や微高地等の自然地形がみられる。また、志多見などの一部の地域では河畔砂丘もみられる。熊谷市の西方、荒川の左岸には櫛挽台地（武蔵野ローム面・立川ローム面相当）、右岸に江南台地（下末吉ローム面相当）が位置する。妻沼低地における熊谷市周辺部には、北に妻沼町、東に南河原村・行田市、南は吹上町・大里村・滑川村、西は川本町・深谷市が接する。

入川遺跡は、妻沼低地のほぼ中央に立地しており、遺跡の東方から南方向に２本の小河川が蛇行し、大河川の名残がみられる。

本遺跡は、熊谷市街地の北西約7.5kmに位置し、JR高崎線籠原駅の北東約3.25kmに位置する。遺跡の周辺部は、広く水田や畑地として利用されている。しかし、近年自然堤防上や微高地上を中心に開発が進められ、環境にも多少の変化が生じている。また、近年自然堤防上や微高地上以外の低地において、遺跡の確認が多くされている。

## （2）周辺の遺跡

鍋　島　直　久

入川遺跡は、熊谷市街地の北西、妻沼低地に位置している。妻沼低地と称される平野部は、利根川沿いに加須低地、中川低地と切れ目なく続いており、先土器時代から歴史時代にかけて、多彩な内容の遺跡が多く分布している。本項では、妻沼低地における入川遺跡周辺の遺跡についてみてみたい。

本遺跡の南側に、別府古墳群（25）・玉井古墳群（26）・石原古墳群（30）・三ヶ尻古墳群（　）等がある。また、南方約2.3kmの位置には、八角形の墳丘をもつ古墳が検出された籠原裏遺跡（11）があり、土地区画整理事業の道路建設に伴い、昭和61年８月～９月にかけて発掘が行なわれた。古墳３基・平安時代の住居跡２軒・同時代のピット等が検出された。

同じく熊谷市別府地内において、深町遺跡（4）・寺東遺跡（9）・横間栗遺跡（5）・石田遺跡（24）等の発掘調査が相次いで行なわれた。昭和60年９月～昭和61年３月まで、熊谷市立別府小学校建設に伴い発掘調査された石田遺跡（24）では、縄文時代中期の住居跡・土坑・埋甕や埋没河川・沼地跡が検出された。別府衛生センターの拡張工事に伴い発掘調査された横間栗遺跡（5）では、縄文時代後期の土坑や、古墳時代前期の住居跡・溝跡等が検出された。

本遺跡の西南方向に、中条古墳群（33）・肥塚古墳群（32）等の古墳群がある。いずれも、別府古墳群（25）・玉井古墳群（26）・広瀬古墳群（28）・石原古墳群（30）と同様に自然堤防上に古墳が築造されている。

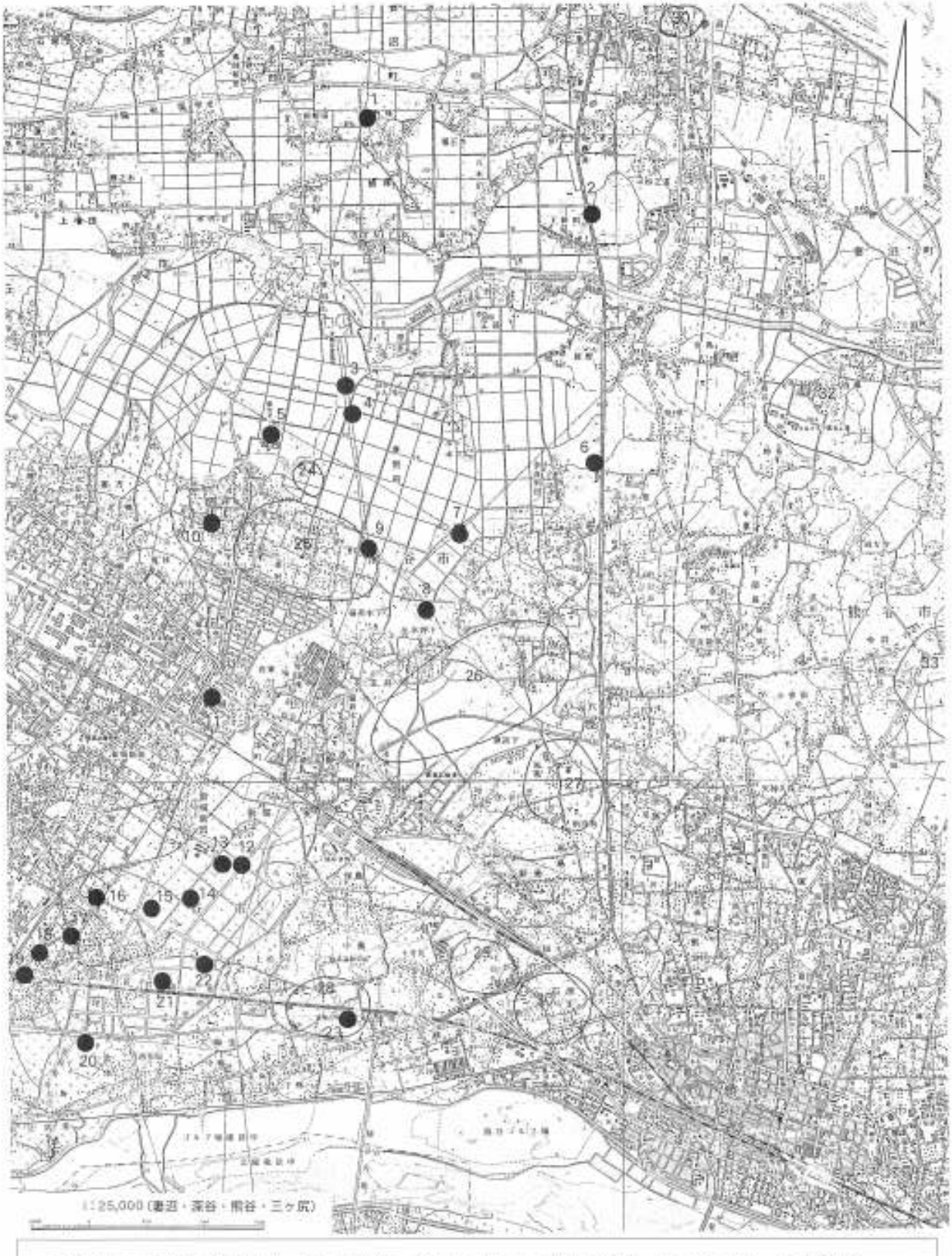
東側には、横塚山古墳（6）が位置し、妻沼町の西南部遺跡群が位置する。

本遺跡の東方から北方にかけては多数の遺跡や、散布地が存在する。妻沼町飯塚遺跡（1）は、弥生時代の遺跡である。同じく妻沼町弥藤吾新田遺跡（2）は古墳時代の遺跡である。弥藤吾新田遺跡からは、五領期５軒・和泉期１軒の住居跡が検出されている。五領期の住居跡からは単口縁の台付甕・壺・高坏・小型坩・石田川式系のS字状口縁台付甕・有段壺や、非在地系の壺の出土などが報告されている。

本遺跡の西方に位置する遺跡・散布地も多く、特に深谷市の上敷免遺跡は著名である。上敷免遺跡は弥生時代の遺跡で、２基の再葬墓が検出され、壺型土器６個体が出土している。他に20個体以上の壺型土器の存在が知られ、熊谷市池上遺跡と並んで多くの資料が出土している。

また遺跡の南西約1.5kmには、西別府廃寺がある。西別府廃寺は、遺構は未確認であるが、出土した三重弧文軒平瓦は７世紀第３四半期に位置づけられるものとされる。

入川遺跡を中心に、妻沼低地の遺跡についてみてきたが、本遺跡周辺の開発に伴い多数の遺跡の検出が予想される。また本遺跡の南方に位置する古墳群との関係も、入川遺跡や周辺の遺跡と少なからず関係するものと思われる。



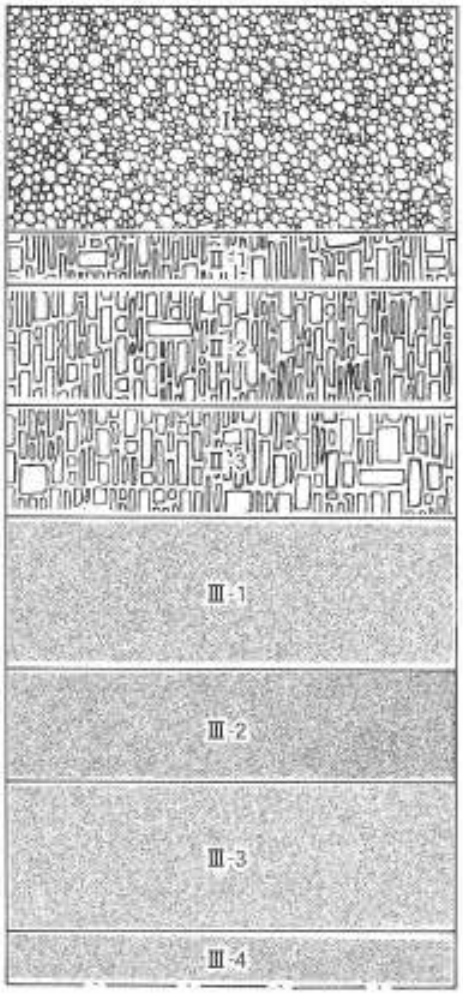

1 飯塚遺跡　2 弥藤吾新田遺跡　3 入川遺跡　4 深町栗遺跡　5 横間栗遺跡　6 横塚山古墳　7 天神遺跡
8 新ヶ谷戸遺跡　9 寺東遺跡　10 西別府廃寺　11 龍原裏遺跡　12 上辻遺跡・下辻遺跡　13 樋ノ口遺跡
14 黒沢館跡　15 若松遺跡　16 三尻中学校校庭遺跡　17 三ヶ尻上古墳跡　18 三ヶ尻天王遺跡　19 三ヶ尻林遺跡
20 社裏遺跡D区　21 松原遺跡　22 庚申塚遺跡　23 宮塚古墳　24 石田遺跡　25 別府古墳群　26 玉井古墳群
27 原島古墳群　28 広瀬古墳群　29 坪井古墳群　30 石原古墳群　31 大我井祭祀遺跡　32 肥塚古墳群
33 中条古墳群

第40図　周辺の遺跡　（国土地理院発行1/25,000図縮小転載）

## （3）遺跡の層序

土　田　智恵子

本遺跡の調査では、土層観察用のトレンチを南北Fライン、東西6ラインにそれぞれ設定した。本遺跡の土層は、8層に細分し、さらに3層にまとめ基本土層とした。各基本土層について、含有物等を下記に記述した。なお、各層の土色について、日本色採研究事業株式会社発行『新版標準土色帖』による土色記号を付した。




第41図　基本土層図

第Ⅰ層　黒褐色土（10YR3/2）。粘性・締り弱。表面耕作土層である。酸化鉄粒・黄褐色土粒を多量に含有。上層部に集中して、白色粒子を多量に含有。

第Ⅱ－1層　暗灰黄色土（5Y4/2）。粘性・締り弱。酸化鉄粒・白色粒子を多量に含有。下層部に多量の砂粒を含有。

第Ⅱ－2層　灰オリーブ色土（5Y5/2）。粘性は強。締りは弱。黒色粒子・酸化鉄粒を多量に含有。部分的に砂粒・スジ状の腐食土を含有。

第Ⅱ－3層　黄灰色土（2.5Y5/1）。粘性・締り強。黒色粒子を上層部に集中的に含有。

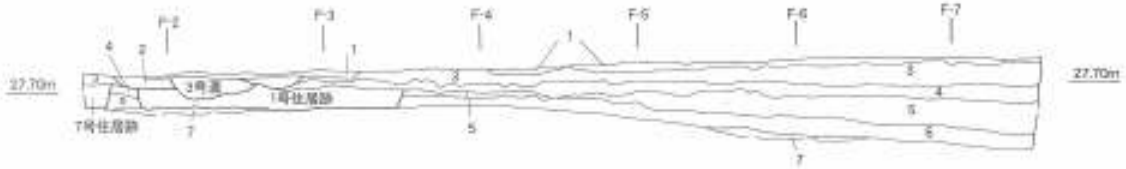
第Ⅲ－1層　暗灰黄色土（2.5Y4/1）。粘性・締り強。酸化鉄粒を多量に、黒色粒子・白色粒子を少量含有。

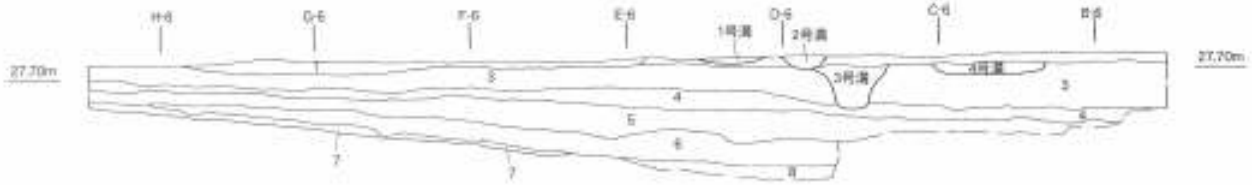
第Ⅲ－2層　黒褐色土（2.5Y2/2）。粘性・締り強。酸化鉄を含有。

第Ⅲ－3層　暗灰黄色土（2.5Y5/1）。粘性・締り強。

第Ⅲ－4層　暗緑灰色土（10GY4/1）。粘性・締りともに極めて強。

縄文時代の遺構確認層は、第Ⅲ－3層である。また、第Ⅲ－2・Ⅲ－3層は、縄文時代後期の遺物を包含する。古墳時代の遺構確認層は、第Ⅲ－1層であり、主として土師器を包含する。時期不明の遺構の確認層は、第Ⅱ－1・Ⅱ－2・Ⅱ－3の各層である。



土層説明

1 黒褐色土(粘性弱、締まりあり、黒色の酸化鉄粒子及び白色粒子を多量に含む。)

2 暗灰黄色度(粘性弱、締まりあり、黒色の酸化鉄粒子及び白色粒子を多量に含む。)

3 黄灰色土(粘性強、締まりあり、大粒の酸化鉄粒子と多量の黒色粒子を含む。)

4 黄灰色土(粘性強、締まりあり、多量の大粒の酸化鉄粒子及び少量の黒色粒子を含む。)

5 暗灰黄色土(粘性強、締まりあり、多量の酸化鉄粒子と少量の黒色粒子を含む。)

6 黒色土(粘性極めて強、締まりあり、少量の酸化鉄粒子及び藻と思われる植物遺体も含む。)

7 暗灰黄色土(粘性強、締まりあり、植物遺体を多量に含む。)

8 暗緑灰色土(通称「青ねば」、粘性極めて強、締まりあり、少量の植物遺体を含む。)

第42図　遺跡土層図

## （3）遺跡の概要

稲　葉　昭　智

入川遺跡には、利根川と荒川に挟まれた沖積地に位置する。遺跡の周辺は、水田・畑地が広がる平坦な地形であり、若干の微高地部分に家屋が点在する。調査区は水田・畑地として利用されてきた部分に位置し、東側に接近して通称「別府沼」の小河川が存在する。調査区面積は20m×20mの400㎡である。調査前の地表面は平坦であり、標高28.4m前後を測る。しかし、旧地表面は調査区北西の平坦面から調査区南東の傾斜面を経て、通称「別府沼」へ至ることが調査により判明した。入川遺跡は水際に立地する遺跡であったと考えられる。

入川遺跡から検出された遺構は、縄文時代の竪穴状遺構１基、土坑１基、古墳時代の竪穴住居跡９軒、遺構とは呼べないが土師器集中区１箇所、時期不明の溝５本、土坑５基である。調査区の南東が傾斜面となるために、溝を除いて遺構は調査区の北西に集中している。以下においては、各時代の遺構について概観する。

＜縄文時代＞

竪穴状遺構として、Ｂ－１竪穴状遺構が検出された。本遺構は旧地形の傾斜面に位置し、形態などから竪穴住居跡の可能性が高いが、大部分が調査区外へ延びることから断定は避けた。土坑としては、Ｅ－２土坑が検出された。縄文時代の遺構は調査区外東側へさらに広く分布すると予想される。遺物は旧地形傾斜面より、縄文土器・打製石斧などが多く出土している。

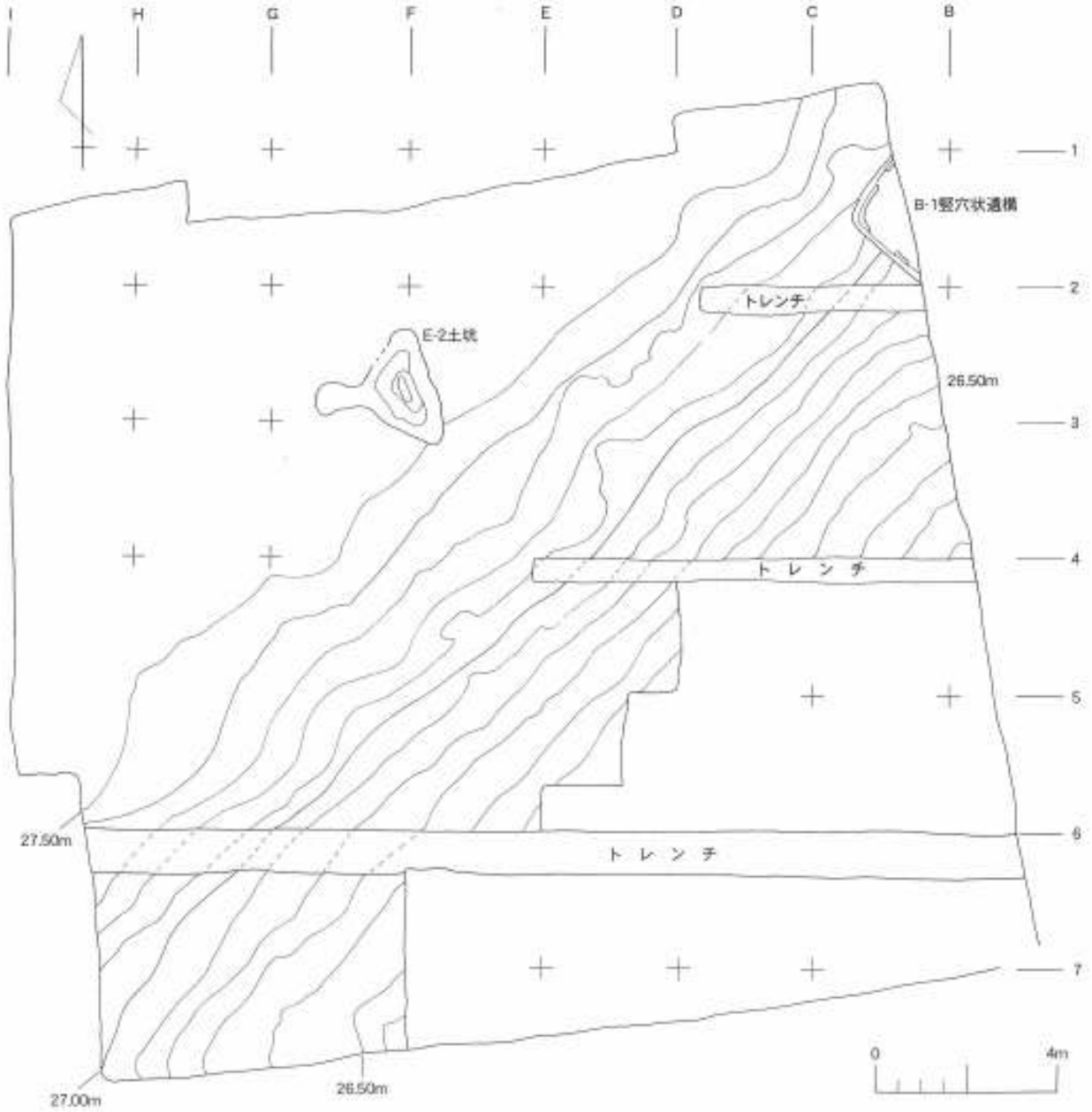
＜古墳時代＞

竪穴住居跡は、１号～９号までの９軒が検出された。調査区内で全容を把握できた竪穴住居跡は１号・２号住居跡のみである。他の住居跡はいずれも調査区外へ延びている。また、９号住居跡は、断面のみによる確認であるが、壁・床の状況から住居跡と判断した。各住居跡の時期区分についての詳細な分析については、別の機会に譲るが、概略的には６号住居跡は五領期、９号住居跡は五領以降であるが詳細不明、他の住居跡は鬼高期と考えられる。なお、調査区内で検出された住居跡群は、さらに西側および北側へ大きく拡がっていると予想される。今後の調査によっては、古墳時代の水際の集落跡の貴重な調査例となり得るであろう。遺物としては、土師器・須恵器・土錘・埴輪・砥石などが出土しているが、特に土師器集中区からは、多量の土師器（古墳時代前期）が出土している。出土状況から祭祀的要素が濃いが、現段階では推測の域を出ない。

＜時期不明＞

溝は１号～５号までの５本が検出された。１号・２号・３号・４号溝は主軸方位が等しく、用途にも共通性があるのかも知れない。但し、５号溝については、主軸方位の差異などから、他の溝とは異なる性格が考えられる。土坑は、１号～５号までの5基が検出されたが、いずれも用途は不明である。

以上、入川遺跡の概観を行なったが、詳細は各時代の項を参照されたい。



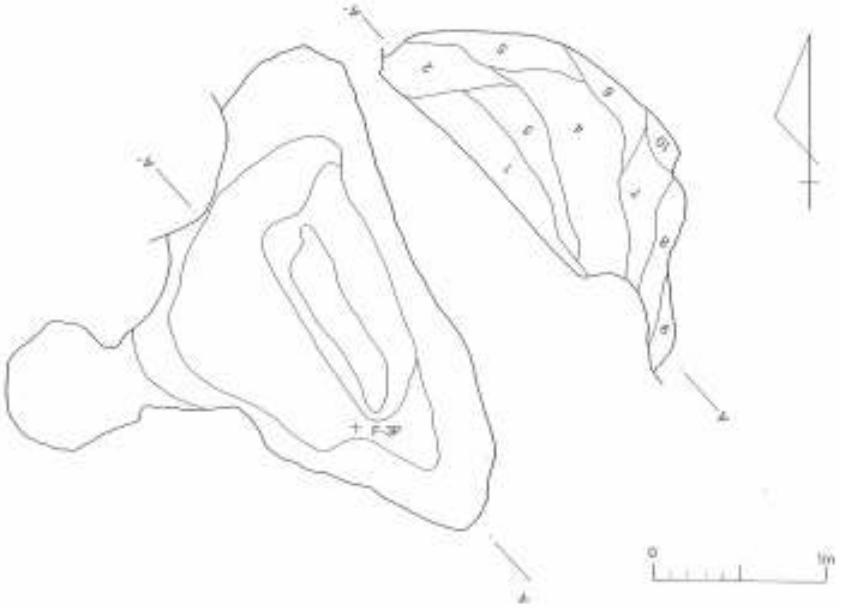

第43図　縄文時代の遺構全体図及び地形コンター図

## 3　入川遺跡の遺構と遺物

### (1)縄文時代の遺構と遺物

#### 1．土坑

E－2土坑（第44・45図）



E-2土坑土層

1 黒褐色土(0.1～0.5cm大の炭化物を多量に含有,黄色土粒を少量含有.)
2 黒色土(0.1～0.5cm大の炭化物・浅黄色粒子を多量に含有.)
3 黒褐色土(炭化物をごく少量に含有,0.5cm大の浅黄色粒子を含有.)
4 黒褐色土(0.1～0.5cm大の炭化物を少量含有,0.7cm大の浅黄色粒子を少量含有.)
5 黒褐色土(2～3cm大の浅黄色土塊を多量に含有.)
6 浅黄色土(0.1cm大の炭化物を少量含有.)
7 黒褐色土(0.1～0.5cm大の浅黄色粒子を多量に含有,炭粒をごく少量含有.)
8 黒褐色土(0.1～0.3cm大の浅黄色粒子をごく少量含有.)
9 黒褐色土(1cm大の浅黄色土を多量に含有.)
10 灰褐色土(0.1～0.3cm大の炭化物を少量含有,2cm大の浅黄色土塊を多く含む.)

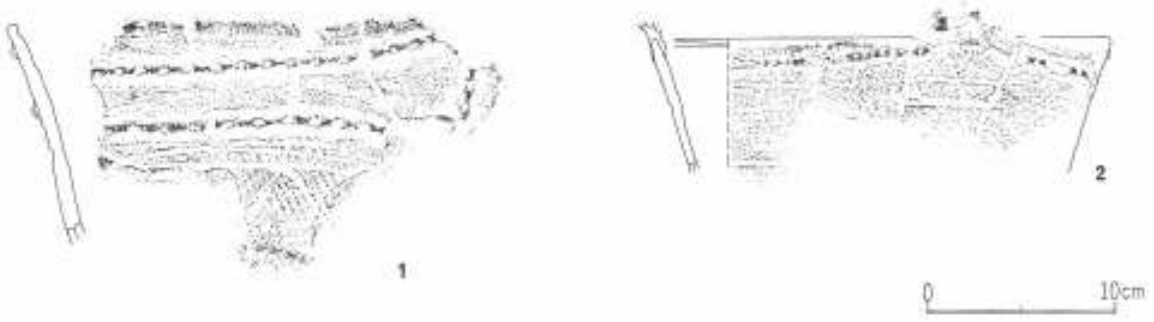
第44図　E－2土坑

E－2土坑は、調査区北側、E－2・E－3・F－2・F－3区に位置する。本土坑の9.85m西にB－1竪穴状遺構が存在する。本土坑は、北側と南側を1号住居跡（古墳時代）の柱穴（$P_5$・$P_6$）によって切られている。確認面は、基本土層第Ⅲ－3層であり、基本土層第Ⅲ－4層を僅かに掘り込んで構築している。保存状況は、良好である。

上端部の規模は、長軸2.92m、短軸2.45m、深さ0.95mを測る。下端部は長軸0.98m、短軸0.20mを測る。長軸方位はN－150°－Eを測り、標高は底部で27.57mである。壁は、東側が約55°、南側が約35°の角度で緩やかに立ち上がる。平面形態は、上端部で西側に張り出し部を持つ不整三角形、下端部で長円形を呈する。断面形態は、U字型を呈する。

覆土は、黒褐色土を主体として10層に分かれる。全層にわたり、炭化物を多量に含有する。

遺物は、縄文式土器片24点、打製石斧1点が検出された。　（小西直樹）




第45図　E－２土坑出土遺物

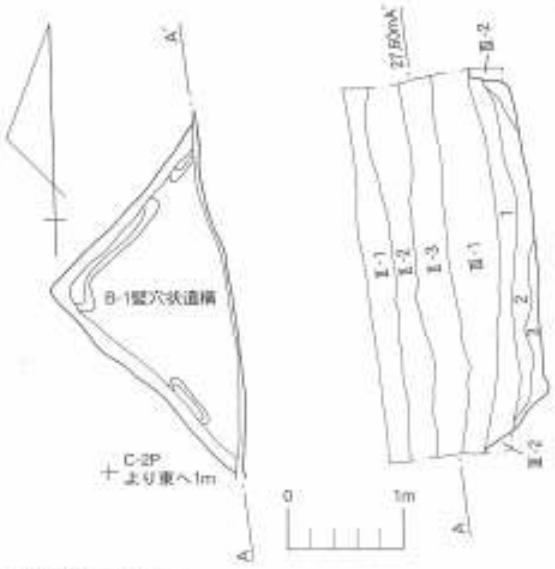
## 2　竪穴状遺構

### B－１竪穴状遺構（第46図）

B－１竪穴状遺構は、調査区北東側、旧地形の緩斜面B－１・B－２区に位置する。同時期であると考えられる遺構は、9.85m西南にE－２土坑が存在する。本遺構は、東側がさらに調査区外へ延びている。現存規模は、北西壁1.7m、西南壁2.5m、深さ0.26m～0.36mを測る。遺存状況は良好である。未調査のため平面形態は不明であるが、方形あるいは長方形を呈すると考えられる。主軸方位は不明である。覆土は砂質土を主体とした３層に分かれる。１層は白色粒子を含む黒褐色土、２層は赤色粒子を含む黒褐色土、３層は黄褐色土粒子を含む黒褐色土である。

標高は、底部で27.05m～27.10mを測り、ほぼ水平である。本竪穴状遺構の北西壁・西南壁の一部から周溝状の施設が検出されている。施設の規模は、現存長m、幅0.15m～0.23m、深さ0.05mを測る。断面形態はU字型を呈する。

本竪穴状遺構は、住居跡である可能性が高い。しかし、遺構の大半が調査区外のため、竪穴状遺構として報告する。（鍋島直久）




B-１竪穴状遺構土層

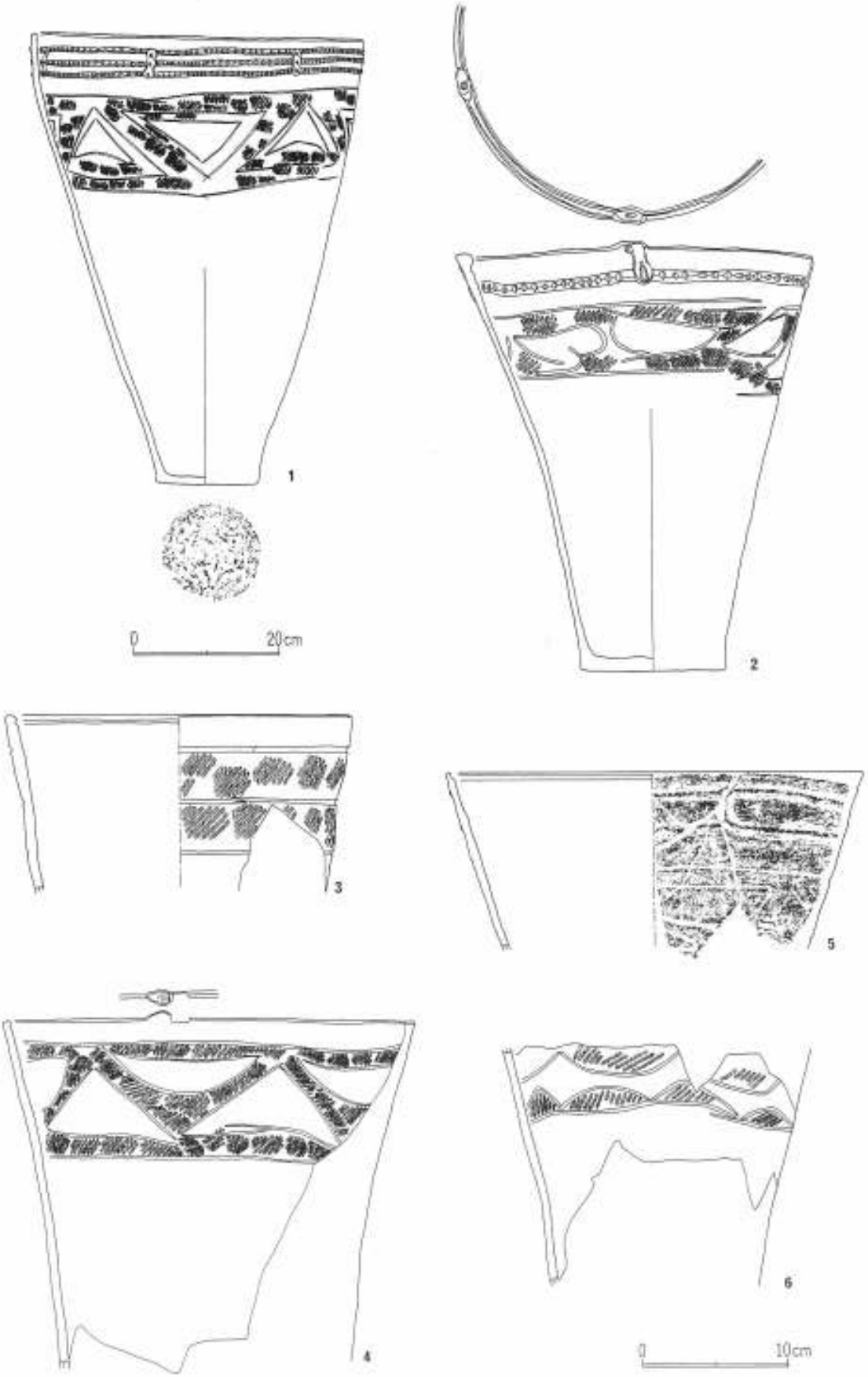
1 黒褐色土(0.1cm大の白色粒子を少量含有,砂質である。)
2 黒褐色土(0.1cm大の赤色粒子を少量含有,砂質である。)
3 黒褐色土(0.1～0.5cm大の黄褐色土粒を少量含有,砂質である。)

第46図　B-1竪穴状遺構

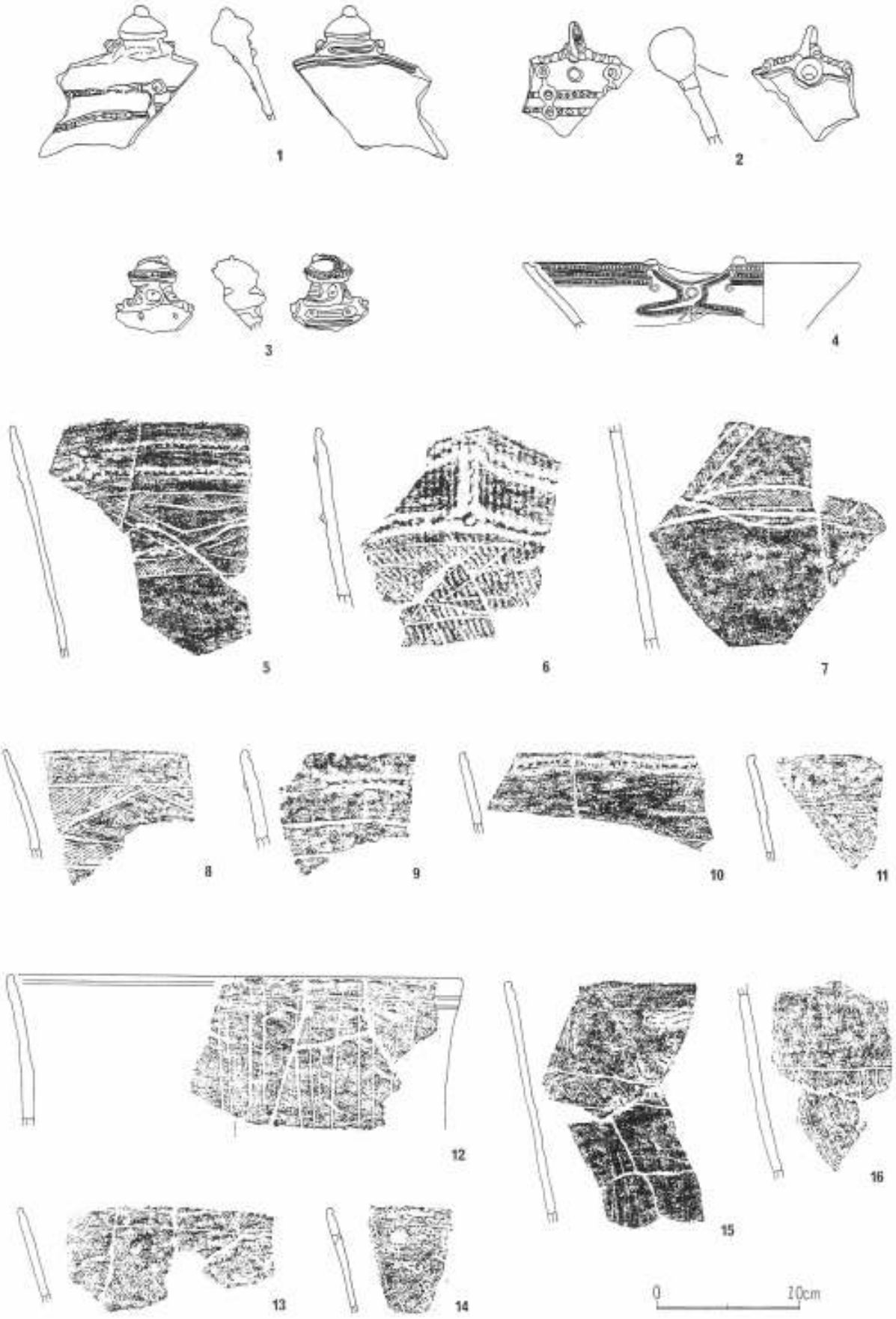
## 3　遺構外出土遺物（第47~51図）

第47～49図の土器は堀之内式期であり、第47・48図の１・２・６・７・９は堀之内Ⅱ式期である。第50図の１～７は加曽利B式期、８・９は後期、10～13は時期不明である。

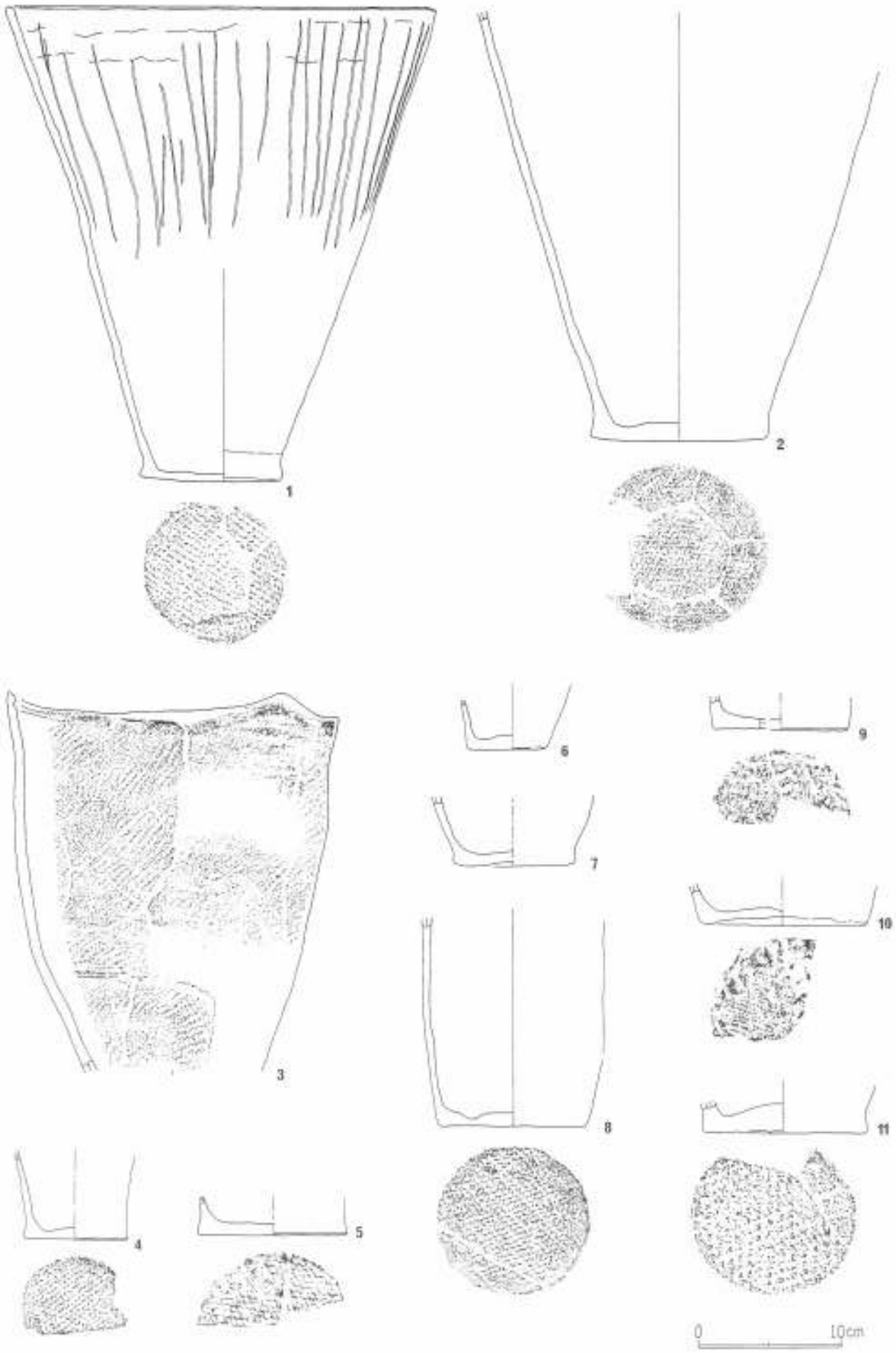
第51図の１～５は打製石斧、６はスクレーパーである。



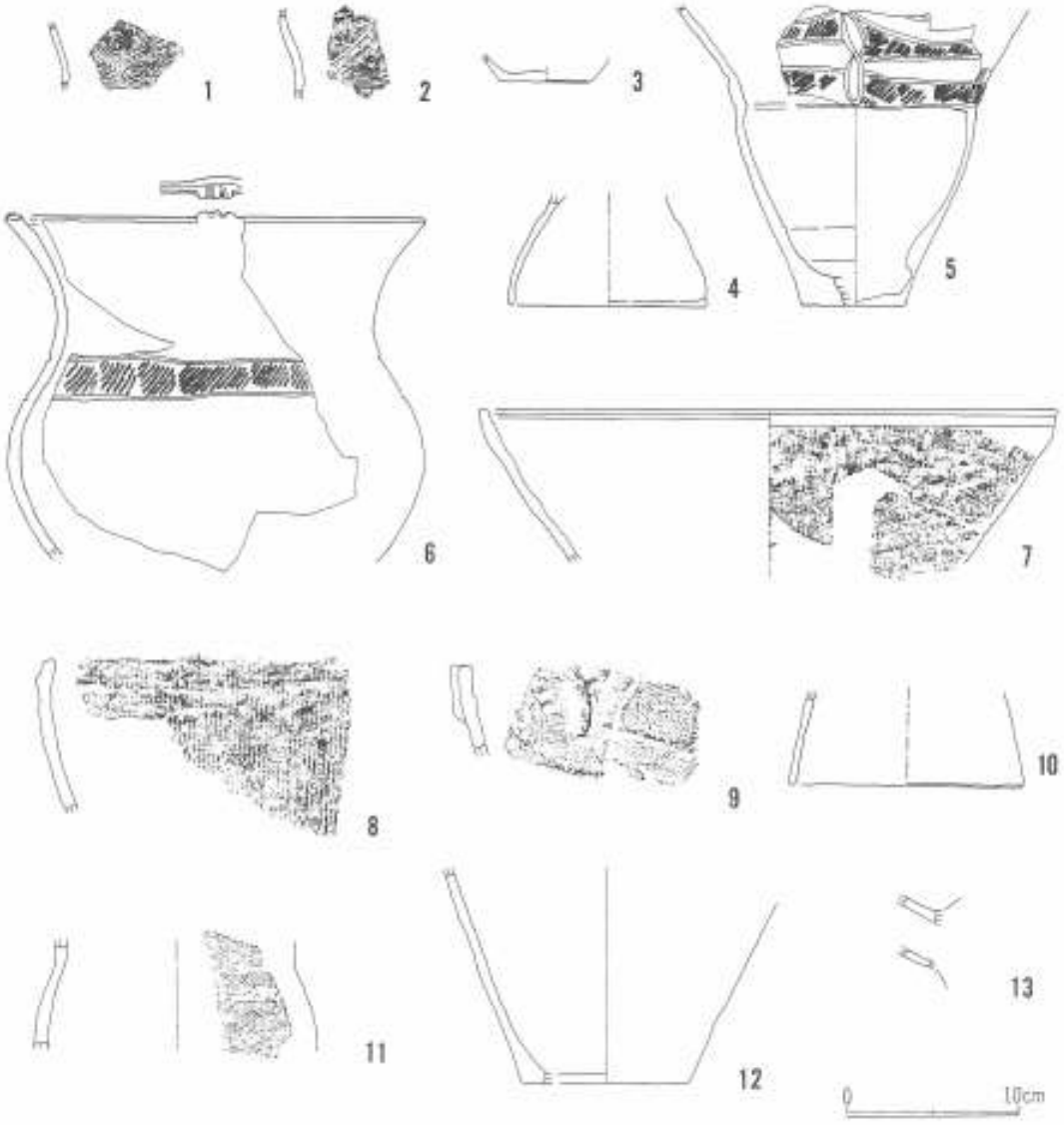

第47図　遺構外出土遺物(1)



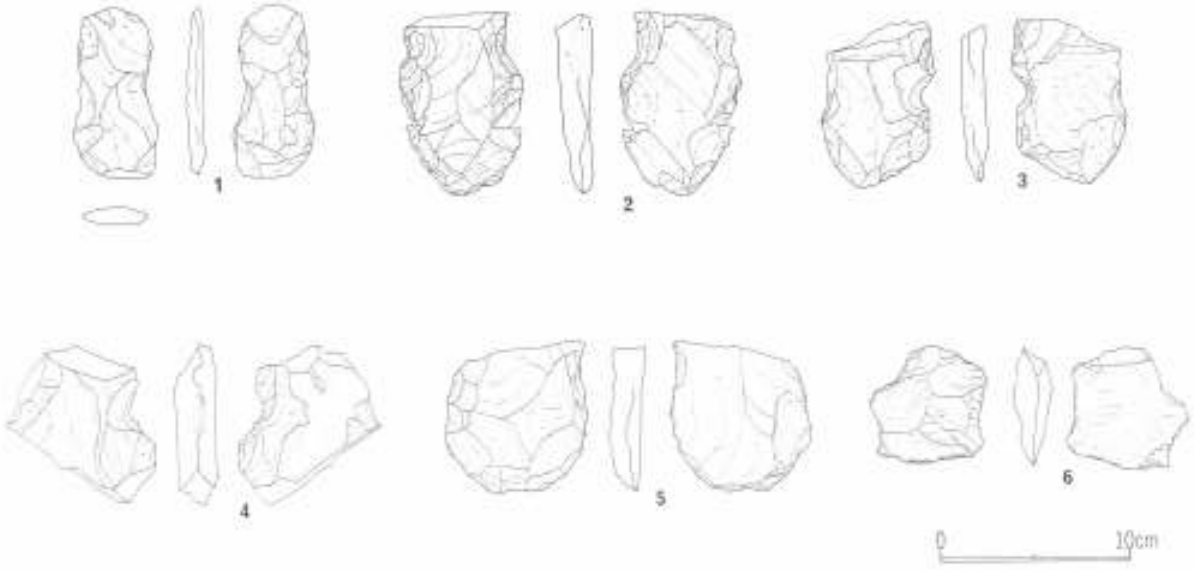

第48図　遺構外出土遺物(2)




第49図　遺構外出土遺物(3)




第50図　遺構外出土遺物(4)




第51図　遺構外出土遺物(5)

## （2）古墳時代の遺構と遺物

### 1．住居跡

**1号住居跡**（第53～56図）

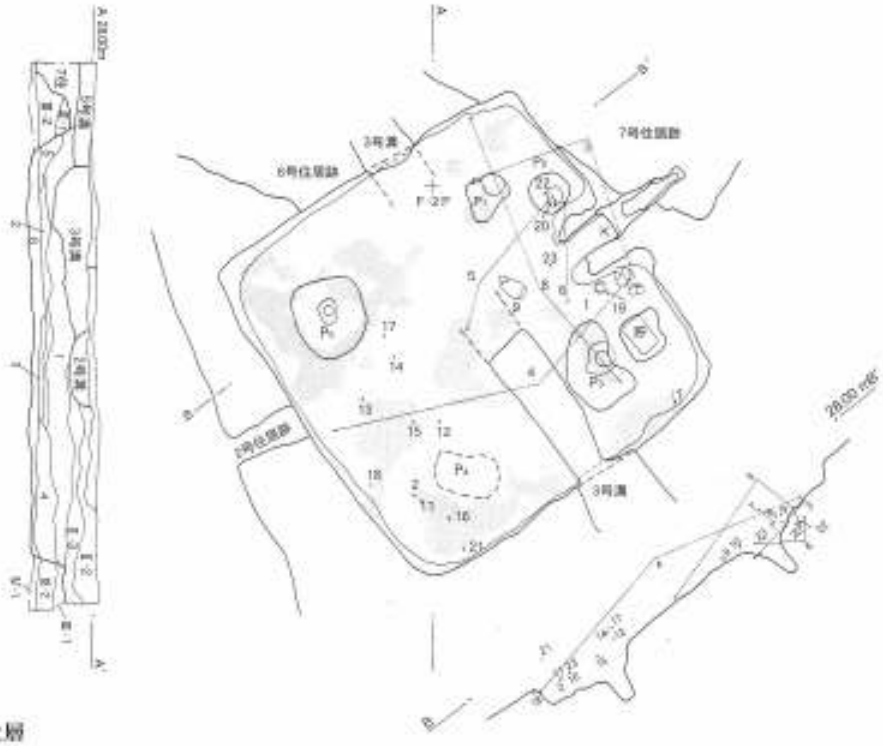
**竪穴**　1号住居跡は、調査区北側、E－1・E－2・E－3，F－2・F－3区に位置する。本住居跡は北壁で6号住居跡と、北東壁で7号住居跡と切り合っている。また、北壁から南壁にかけて2号溝・3号溝に、東壁から西壁にかけて5号溝によって切られている。重複関係は、6号住居跡→7号住居跡→（2号・3号・4号溝）である。規模は、4.2m×4.1m、面積17.2㎡、壁高0.2m~0.4mを測り、遺存状況は良好である。平面形態は正方形を呈し、主軸方位はN－50°－Eである。覆土は5層に分かれる。1層は黒色粒子を多く含む灰色土、2層は焼土粒・炭化物を含む黒褐色土、3層は焼土・炭化物を含む黄灰色土、4層は黒色粒子を含む黄灰色土、5層は白色土を含むオリーブ黒色土である。また、3層上面には僅かであるが、炭化物が堆積して出土している。

**床**　標高は27.3m~27.5mを測り、ほぼ水平である。床面のほぼ全域に貼床が認められる。竈の周囲には認められなかった。貼床には黄褐色土・炭化物を含む黒褐色土が用いられ、厚さは、南側が薄く0.04m、厚い北側で0.15mを測る。周溝・間仕切りなどは検出されていない。本住居跡の床面からは軽石粒や茅状炭化物が出土している。軽石粒は、本住居跡東南端に0.4m×0.2mの範囲で集中して出土した。軽石粒の性格は不明である。茅状炭化物は、床面から壁面に付着するように出土した。茅状炭化物は、残存状況の良好な部分では、編物のように見えることや床面に付着した出土状況から推測して、敷物とする説も出たが、不明確なために本報告においては断定は避けた。

**柱穴**　柱穴は4個（$P_1$・$P_2$・$P_4$・$P_5$）検出された。全て本住居跡の主柱穴である。$P_1$の平面形態は不整形を呈し、断面形態は円筒形を呈する。規模は0.55m×0.51m、深さ0.55mを測る。$P_2$の平面形態は不整形を呈し、断面形態は円筒形を呈する。規模は1.0m×0.5m、深さ0.32mを測る。$P_2$の底面には、炭化物・焼土粒を含む褐灰色土が0.2mの厚さで堆積し、さらに床面に広がる茅状炭化物が堆積する。$P_4$の平面形態は不整方形を呈する。規模は0.7m×0.4mを測る。断面形態および深さは不明である。$P_5$の平面形態は不整円形を呈し、断面形態は円筒形を呈する。規模は0.9m×0.8m、深さ0.56mを呈す。$P_5$の覆土中には、床面の茅状炭化物が落ち込むように堆積している。

**竈**　東壁のほぼ中央に位置する。規模は、全長1.70m、最大幅1.12m、焚口幅0.24m、煙道長0.98mを測る。遺存状況は非常に良好であり、天井部が一部ではあるが残存していた。主軸方位はN－55°－Eであり、住居跡の主軸より北側に5°傾く。煙道部は、住居跡東壁を幅0.35m、奥行0.9m掘り込んで構築されている。煙道部は燃焼部との間に、高さ8cmの垂直に立ち上がる段を経た後、角度約20°で緩やかに立ち上がる。煙道部は、住居跡壁より奥行0.5mの部分でさらに段を持つ。煙道部の両側壁は、ほぼ前面が熱により焼土化し、硬化している。燃焼部は幅0.3m、長さ0.45mを測る。平面形態は長方形を呈するとともに焚口がやや狭くなっている。燃焼部の中央は、やや低く掘り窪めてあり、自然石を利用した支脚が直立した状態で出土した。袖部の規模は、右袖が幅0.25m～0.35m、高さ0.37m、左袖が幅0.27m～0.37m、高さ0.36mを測る。右袖部は、黄褐色土の上に暗灰黄色土、黒褐色土をのせて構築されている。左袖部は、黄褐色土の上に黒褐色土、黄灰色土をのせて

第52図　古墳時代の遺構全体図




1号住居跡覆土土層

1 灰色土(0.1～0.5cm大の炭粒・焼土粒、0.2cm大の黒色粒を少量含有。)
2 黒褐色土(0.2～1cm大の焼土・3cm大の炭化物を多量に含有。)
3 黄灰色土(焼土粒を多量に含有。上方に炭化物を層状に含有。)
4 黄灰色土(0.1～0.2cmの炭粒・黒色粒・焼土粒を少量含有。)
5 オリーブ黒色土(0.1～0.2cm大の炭粒・焼土・白色土を少量含有。)
6 黒褐色土(貼床。0.1～0.5cm大の炭化物・黄褐色土を多量に含有。)

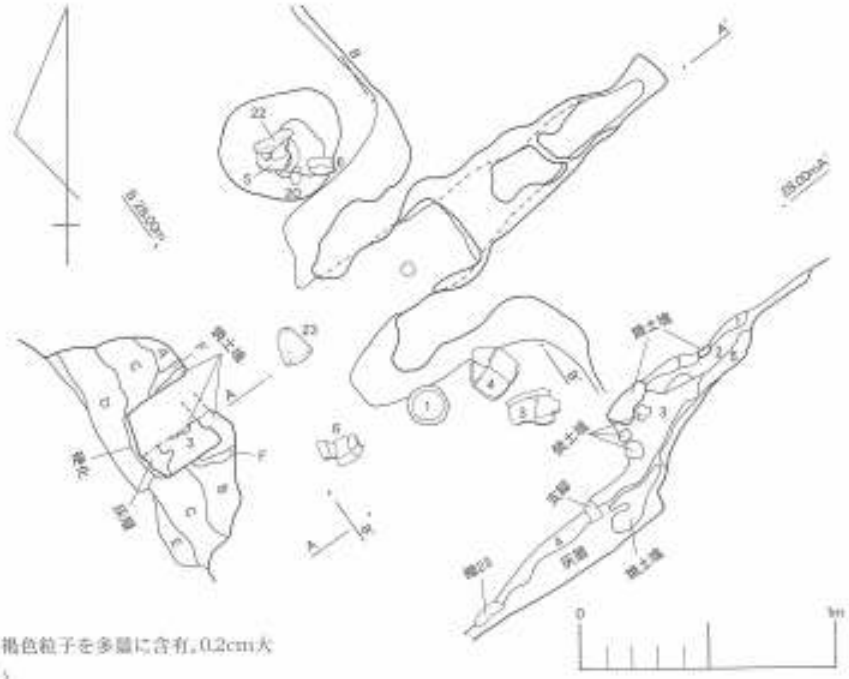
0　2m

**第53図　1号住居跡**

構築されている。袖部の内面は、やや内傾しているとともに、表面から内側まで厚さ0.05mが焼土化し、硬化している。天井部は、煙道部寄りが一部だけ残存している。残存状況の良好な部分では、厚さ0.15mを測る。天井部は、袖部に使用された黒褐色土を用いて構築されているが、焼土化し、硬化している。煙道部・燃焼部・竈の周囲には、灰の堆積が見られる。灰の厚さは、煙道部で0.02m～0.03m、燃焼部で0.2mである。竈の周囲には、黄褐色土を含む灰が厚さ0.02m～0.03m堆積する。煙道部、燃焼部の灰の直上には、焼土塊を多く含むオリーブ褐色土が、厚さ0.02m～0.2mで堆積する。多く含まれる焼土塊は天井部、袖部の構築土であると考えられる。竈の覆土中には灰・焼土粒が多く含まれるが、炭化物はあまり含まない。竈内からは、支脚・土師器片以外の遺物は出土していない。

**貯蔵穴**　本住居跡の東南端、竈の0.5m南に位置する。平面形態は方形を呈し、断面形態は箱形を呈する。規模は、0.48m×0.5m、深さ0.6mを測る。遺存状況は良好である。覆土は、灰色土・黒褐色土・黄灰色土である。特に最下層の黄灰色土中には、多くの炭化物が含まれる。また、竈の左脇には貯蔵穴と考えられる$P_3$がある。$P_3$の平面形態は円形を呈し、断面形態は浅皿形を呈する。規模は、0.44m×0.42m、深さ0.1mを測る。覆土からは、遺物が多く出土している。

**遺物**　床より4・5（杯）・13（器台）・12（鉢）・23（石）、$P_2$内より6・8（杯）・22（石）・覆土中より1・2・3・7・9・10・11(杯)・14（高杯）・15・16・17（壺）18・19・20（甕）・21（支脚）が出土している。　（小西　直樹）




**1号住居跡覆土層**

A 黒褐色土(0.2cm大の褐色粒子を多量に含有。0.2cm大の焼土粒を少量含有。)

B 黄灰色土(0.1cm大の褐色粒子、0.5cm大の白色粒子を多量に含有。炭粒を少量含有。)

C 黒褐色土(0.1～0.3cm大の白色粒子・炭粒・焼土粒を少量含有。)

D 暗灰黄色土(0.1cm大の砂粒・炭粒を多量に含有。)

E 黄褐色土(0.1cm大の砂粒を多量に含有。)

F にぶい黄橙色土(0.5cm大以下の褐色粒子を多量に含有。)

**1号住居跡覆土層**

1 灰色土(0.3cm大の焼土粒を多量に含有。)

2 オリーブ灰色土(0.1cm大の黄色土粒を少量含有。)

3 オリーブ黒色土(焼土塊、0.2cm大の炭粒・焼土粒を多量に含有。)

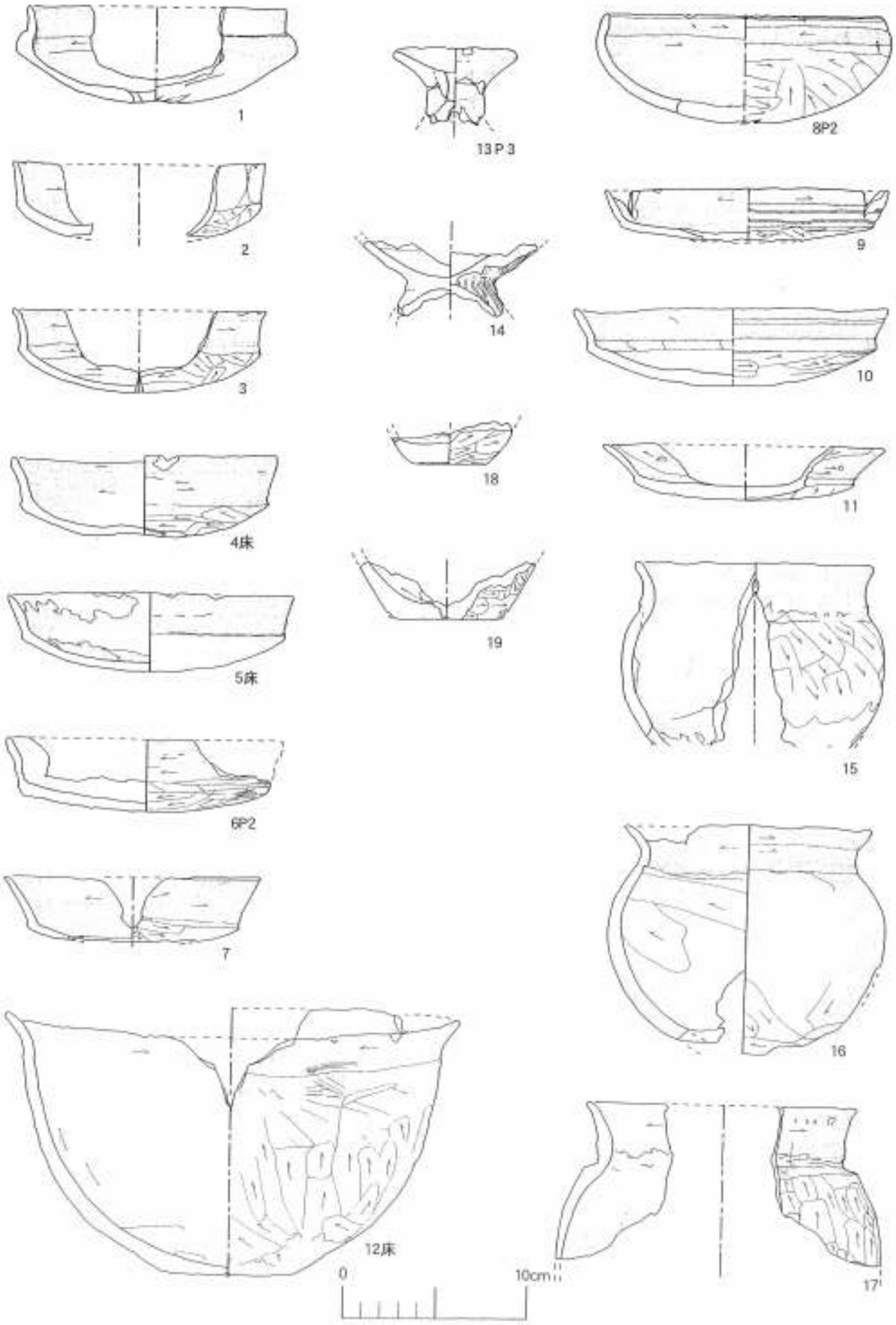
4 オリーブ灰色土(0.1～0.5cm大の炭粒・焼土粒を多量に含有。)

5 灰色土(0.5cm大の炭化物を多量に含有。)

**第54図　1号住居跡竈**

## 表1　1号住居跡出土遺物観察表

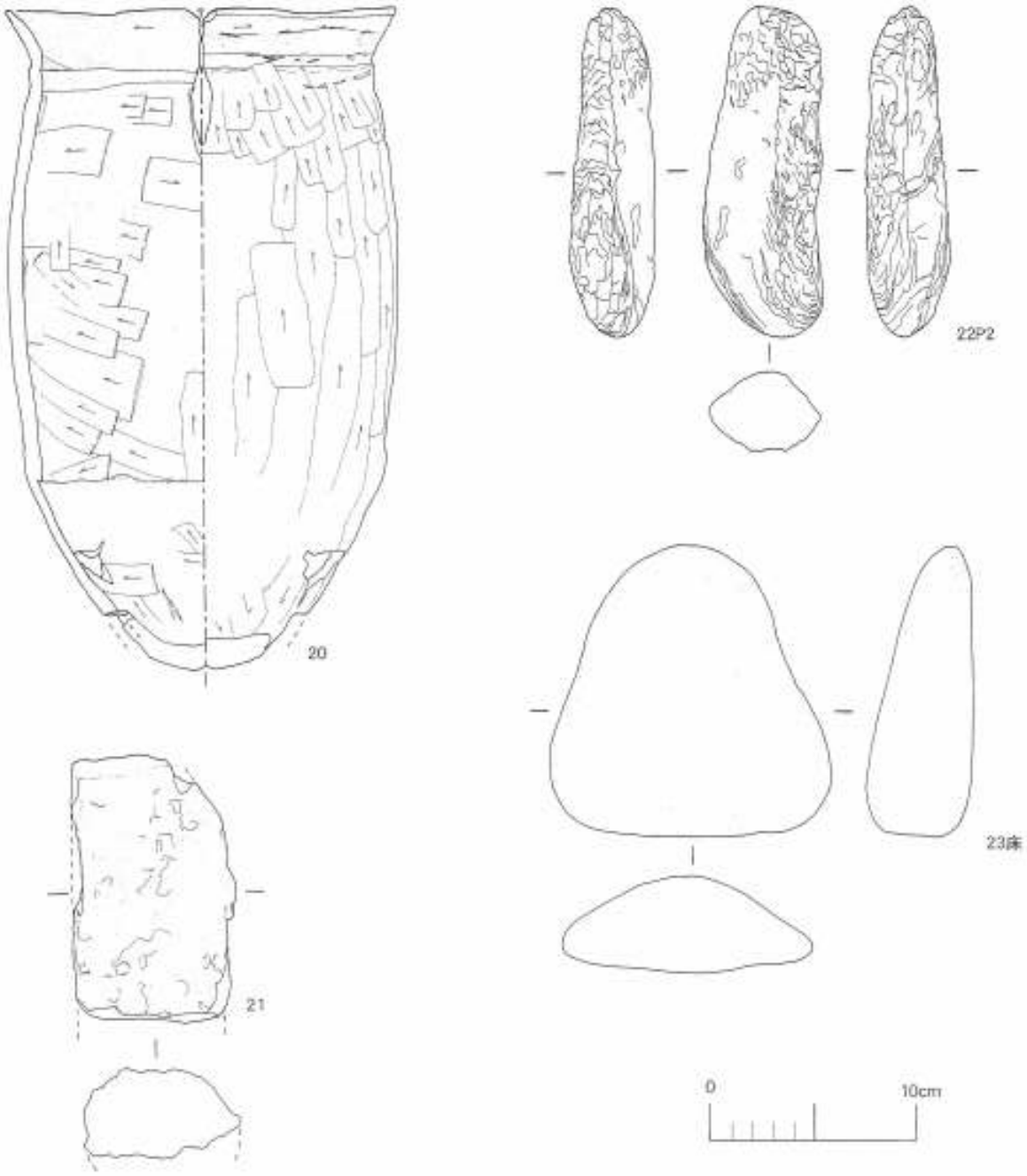
| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 55-1 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(14.3)<br>残高5.2<br><br>1/4残 | 胎：0.1～1.0大の赤色粒子、砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5YR7/4（にぶい橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸底の体部より、丸味を持つ厚い稜を経て、ほぼ直立する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」の後に、横方向の「撫で」により稜を作る。稜上部は、工具により鋭く段差を作る。稜は、「撫で」。<br>体部は、不定方向の「雑削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部上位は、横方向の「撫で」が残る。 |
| 備考 | 外面下位は、著しく風化し、細かく剥落する。 | | | | | | |




第55図　1号住居跡出土遺物(1)

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 胎質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 55-2 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(14.0)<br>残高4.1<br><br>1/4残 | 胎：0.5～1.0大の黒色雲母粒、白色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR7/2（にぶい黄橙色） | 丸底の体部より、僅かな稜を経て、僅かに外傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | 外面の大部分が淡く吸炭、口縁部が剥落。 | | | | | | |
| 55-3 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(14.0)<br>残高4.5<br><br>1/4残 | 胎：1.0～2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外吸炭のため不詳。 | 丸底の体部より、明確な稜を経て、ほぼ直立する口縁部に至り、口唇部において急に外傾する。 | 口縁部と口唇部には「横撫で」。さらに、口縁部下位に工具による横方向の「撫で」により稜を作る。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 内外面ともに淡く吸炭。 | | | | | | |
| 55-4 | 杯<br>土師 | 床直 | 口径14.3<br>器高4.3<br><br>完(口縁一部欠) | 胎：0.1～0.5大の白色粒子、黒色雲母粒を少量に含有。<br>焼：良<br>色：内外吸炭のため不詳。 | 粘土紐の巻き上げ。<br>淡い丸底の体部より、上へ持ち上がる形態を呈す明確な稜を経て、僅かな屈曲を持つ口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「篦撫で」。 |
| 備考 | 外面の大部分が強く吸炭。 | | | | | | |
| 55-5 | 杯<br>土師 | 床直 | 口径15.6<br>器高4.3<br><br>完 | 胎：0.1～0.5大の黒色粒子、赤色粒子を少量含有。<br>焼：普通<br>色：内外2.5YR7/6（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>淡い丸底の体部より、僅かな稜を経て、外傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「篦撫で」?。 |
| 備考 | 内外面とも著しく剥落。 | | | | | | |
| 55-6 | 杯<br>土師 | Pit2内 | 口径(15.0)<br>器高4.0<br><br>口縁部の1/2のみ欠 | 胎：2.0～0.5大の赤色粒子、0.5大の黒色雲母粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5Y4/4（にぶい赤褐色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>偏平気味の体部より、僅かな稜を経て、緩く屈曲して立ち上がる口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」の後、稜を含めて、横方向の「撫で」を何段かに分けて施している。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | 内外面ともほぼ全域が吸炭。内面は確かく剥落する | | | | | | |
| 55-7 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(14.0)<br>残高3.5<br><br>口縁部1/4残 | 胎：0.1~1.0大の黒色雲母粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR8/2（灰白色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>僅かな稜を経て、外傾する口縁部に至る。口唇部は、著しく外反する。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「不明」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 55-8 | 杯<br>土師 | Pit2内 | 口径(15.0)<br>残高6.0<br><br>口縁部1/2、体部1/4残 | 胎：0.5~1.5大の赤色粒子、0.3大の黒色雲母粒、0.1大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/8（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>丸底の体部より、中位に段を持ち内弯する口縁部に至る。口縁部と体部との境は、僅かなくぼみにより画される。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 55-9 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(15.6)<br>残高3.0<br><br>口縁部1/2、体部一部残 | 胎：0.5大の砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/6（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>偏平気味の体部より、僅かな稜を経て外傾する口縁部に至る。口縁部中位には、整形によるくぼみを持つ。 | 口縁部は「横撫で」の後、工具による横方向の「撫で」が、何段かに分けて施される。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | 口縁部内面が一様に淡く吸炭。体部内面は、磨滅する。 | | | | | | |

| 番号 | 器種<br>種別 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 55-10 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(19.0)<br>器高4.2<br><br>1/4残 | 胎：1.0大の黒色雲母粒、赤色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外吸炭のため不詳。 | 粘土紐の巻き上げ。<br>浅い丸底の体部より、明確な稜を経て、外傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に横方向の「撫で」により、稜を作る。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | 器体の内外全面に吸炭がある。 | | | | | | |
| 55-11 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(15.5)<br>器高3.0<br><br>口縁部1/4、体部1/2残 | 胎：0.5-1.0大の赤色粒子、白色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>浅くほぼ偏平な体部から、明確な稜を経て、外反する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に「筋撫で」が残り、稜を作る。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 体部内面の極一部が淡く吸炭。 | | | | | | |
| 55-12 | 鉢<br>土師 | 床直 | 口径(24.3)<br>底径(7.4)<br>器高14.3<br><br>口縁部～底部1/2残。 | 胎：3.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR7/2（にぶい黄橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>平底より、丸みをもって、立ち上がり、僅かに外反する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、ほぼ縦方向の「篦削り」。<br>底部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は「篦撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 55-13 | 器台<br>土師 | Pit3内 | 口径(6.6)<br>接合部径(3.1)<br>残高4.3<br>器受部～脚部1/4残。 | 胎：1.0～2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR5/8（明赤褐色） | 脚部に突起を持つ器受部を底込む。接合部に上→下へ穿孔。透孔は、外面より穿孔。<br>透孔を持つ脚部より、僅かに内彎する器受部に至る。 | 器受部は不明。<br>脚部は「篦撫で」。 | 不明。 |
| 備考 | 器体外面の一部が淡く吸炭。透孔は、現存1孔。6号住出土遺物と接合。 | | | | | | |
| 55-14 | 台付甕<br>土師 | 覆土 | 接合部径(4.8)<br>残高4.0<br><br>甕部と脚部の一部残。 | 胎：0.1～1.0大の黒色雲母粒、砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5YR8/2（灰色） | 脚部に甕部をはめ込み、内面と外面に「撫で付け」による補強がなされている。<br>脚部より内彎しながら立ち上がる甕部に至る。 | 甕部から脚部にかけて、縦方向の強い「刷毛目」。 | 底部は「篦撫で」。<br>脚部は「撫で」。 |
| 備考 | 甕部内面が吸炭。 | | | | | | |
| 55-15 | 小型壺<br>土師 | 覆土 | 口径(13.8)<br>残高11.0<br><br>口縁部～胴部1/4残。 | 胎：0.5～2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内7.5YR8/3（浅黄橙色）外2.5YR7/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸みを持つ胴部より、外反する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は「篦撫で」。 |
| 備考 | 外面の大部分が剥落する。 | | | | | | |
| 55-16 | 小型壺<br>土師 | 覆土 | 口径13.5<br>残高12.6<br><br>胴部1/4、口縁部の一部欠。 | 胎：1.0-3.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内10YR8/3（浅黄橙色）外5YR5/8（明赤褐色） | 粘土帯積み上げ。<br>ほぼ球形を呈する胴部より、外反する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>頸部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は「篦撫で」。 |
| 備考 | 胴部上半の外面が吸炭。 | | | | | | |
| 55-17 | 甕<br>土師 | 覆土 | 口径(14.8)<br>残高8.6<br><br>口縁部～胴部上半1/4残。 | 胎：0.1～3.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内10YR8/2（白色）外5YR7/6（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>張りのない胴部より、明確な肩部を経て、僅かに外反する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、縦方向の「篦削り」後、頸部から胴部最上位にかけて、強い横方向の「撫で」が残る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は「撫で」。 |
| 備考 | 口縁部外面が淡く吸炭。 | | | | | | |



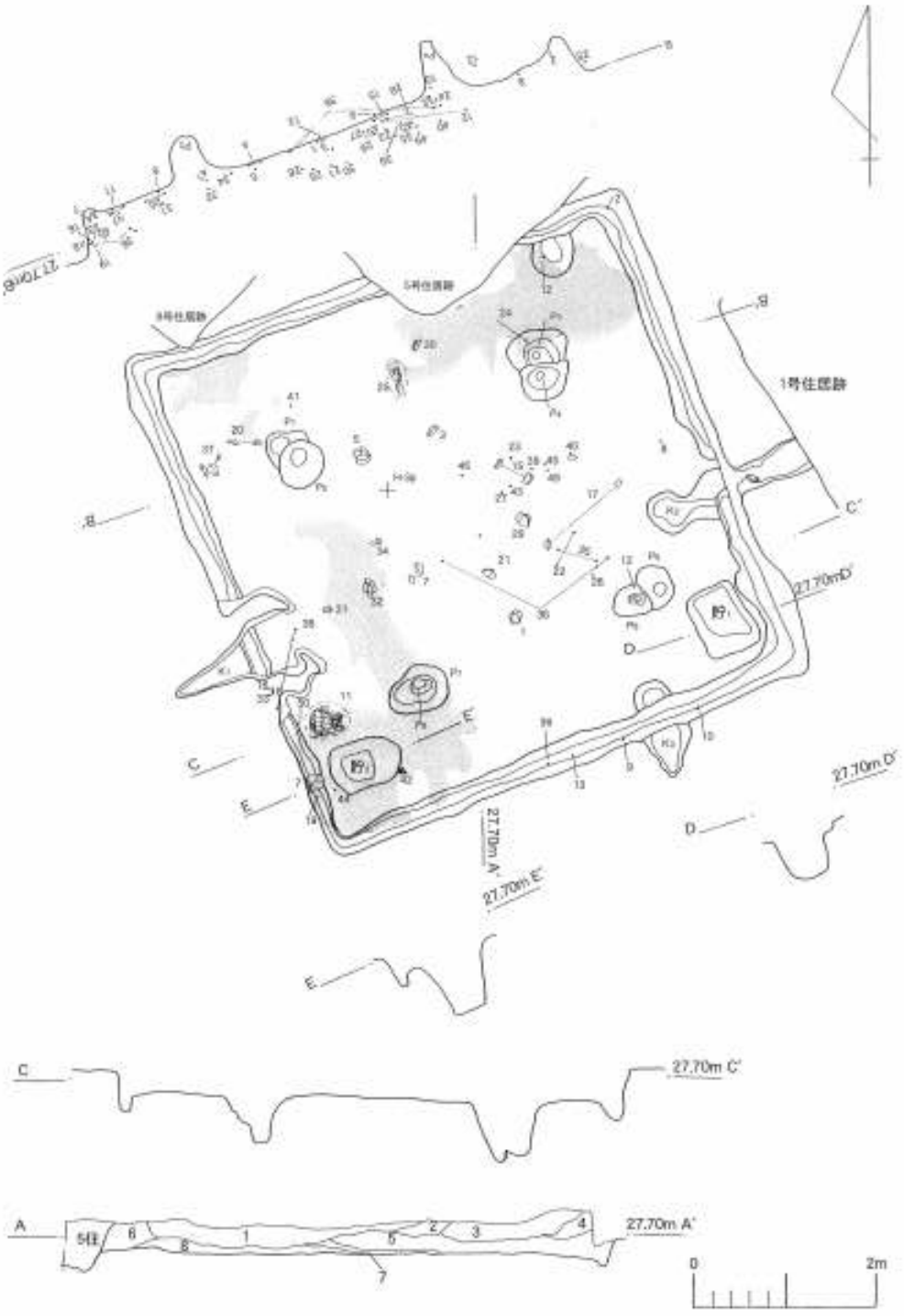

第56図　1号住居跡出土遺物(2)

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 胎質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 55-18 | 甕<br>土師 | 覆土 | 底径(4.0)<br>現高2.4<br><br>胴部の一部～底部残。 | 粘：1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/6（橙色） | 平底より立ち上がる。 | 胴部は「箆削り」。 | 不明。 |
| 備考 | 底部に木葉痕あり。 | | | | | | |

| 番号 | 器種種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 55-19 | 甕<br>土師 | 覆土 | 底径6.2<br>現高3.2<br><br>底部のみ残。 | 胎：0.1-1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内7.5YR8/3（浅黄橙色）外2.5YR6/8（橙色） | 平底より立ち上がる。 | 胴部は「筆削り」。<br>底部は不明。 | 胴部は「筆撫で」。 |
| 備考 | 器体外面の一部に吸炭あり。 | | | | | | |
| 55-20 | 長胴甕<br>土師 | 覆土 | 口径(19.0)<br>残高32.0<br><br>口縁部～胴部1/4残。<br>底部欠損。 | 胎：0.5大の黒色雲母粒。2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内2.5YR5/3（にぶい赤褐色）外10YR7/2（にぶい黄橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>張りのない胴部より、僅かに直立する頸部を経て、外傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>頸部は横方向の「撫で」が巡る。<br>胴部は、縦方向の「筆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、ほぼ横方向の「筆撫で」。 |
| 備考 | 胴部内面中位が帯状に著しく吸炭。胴部外面にまばらに吸炭がある。 | | | | | | |
| 55-21 | 支脚<br>土製品 | 覆土 | 上部径(5.0)<br>残高13.0<br><br>1/2残 | 胎：0.5大の砂粒を少量含有。<br>焼：普<br>色：7.5YR7/3（にぶい橙色） | 手捏ね。<br>ほぼ円筒形を呈する。 | 表面は「筆削り」と「撫で」が施される。 | |
| 備考 | 上端部の一部が淡く吸炭。 | | | | | | |
| 55-22 | 石 | Pit2内 | 最大長16.1<br>最大幅5.6<br>最大厚4.0<br>重量530g | 片岩<br><br>完 | | | |
| 備考 | 著しく剥落する。 | | | | | | |
| 55-23 | 石 | 床直 | 最大長14.0<br>最大幅13.4<br>最大厚5.1<br>重量1230g | 砂岩。<br><br>完 | | | |
| 備考 | ほぼ全面に吸炭あり。(出土時に下面であった側の吸炭は著しい。) | | | | | | |

## 2号住居跡（第57~62図）

**竪穴**　2号住居跡は、調査区北西、F－2・F－3・H－2・H－3区に位置する。本住居跡は北壁西側で8号住居跡と、北壁東側で5号住居跡と切り合っている。東側竈（$K_1$）は、煙道先端部を1号住居跡によって切られている。また、住居跡上部を2号土坑によって切られている。重複関係は、2号住居跡→（1号住居跡―8号住居跡）→5号住居跡→2号土坑である。本住居跡は、壁の拡張は確認されなかったが、竈の移道が3回、柱穴の移動が2回行なわれている。本報告では、2号住居跡は建て替えの行なわれた住居跡と考え、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期に分けて報告する。




2号住居跡覆土土層

1 黒色土(0.5cm大の焼土粒を多量に含有。)
2 黒褐色土(0.1cm大の黄色土粒・黒色粒子を少量含有。)
3 黒褐色土(0.1～0.5cm大の黄色粒子・黒色粒子を少量含有。)
4 黒褐色土(0.1cm大の黒色粒子・黄色粒子を多量に含有。炭粒を少量含有。)
5 黒褐色土(0.1cm大の黄色土粒を少量含有。炭粒・焼土粒を多量に含有。)
6 黒褐色土(0.1cm大の黒色粒子、焼土粒・炭粒を少量含有。)
7 黒色土(炭化物を層状に多量に含有。)
8 黒褐色土(炭粒・焼土粒を少量含有。黒色粒子をごく少量含有。)

第57図　2号住居跡

Ⅰ期

**竪穴**　規模は5.8m×5.7m、壁高0.41m～0.45m、面積33.06㎡を測る。平面形態は、正方形を呈し、主軸方位はN－160°－Eである。

**床**　標高は27.4m～27.6mを測り、水平である。現存する周溝は、Ⅰ期の竈（$K_3$）を切っているため、Ⅰ期の周溝の存在は不明である。貼床は検出されなかった。

**柱穴**　4個（$P_1$・$P_3$・$P_5$・$P_7$）検出され、全て主柱穴である。$P_1$は現存規模0.4m×0.4m、深さ0.16mを測る。平面形態は円形を呈し、断面形態は円筒形を呈する。$P_3$は現存規模0.7m×0.38m、深さ0.6mを測る。平面形態は円形を呈し、断面形態は円筒形を呈する。$P_5$は現存規模0.5m×0.32m、深さ0.58mである。平面形態は円形を呈し、断面形態は円筒形を呈する。

Ⅰ期の柱穴は、Ⅰ期のみで廃絶されたか、Ⅱ期にも継続して使用されたかは不明である。

**竈**　$K_3$は南壁の住居跡東南端より西へ1.42mに位置する。規模は、全長1.08m、最大幅0.52m、煙道長0.52mを測る。主軸方位はN－165°－Eである。$K_3$は建て替え時に破壊されたと考えられる。煙道部は南壁を幅0.6m、奥行0.5mで三角形に掘り込んで構築されている。火床が僅かに残存しており、平面形態は円形を呈し、断面形態は皿形を呈する。規模は0.4m×0.3mを測る。火床には炭化物・焼土粒が残存していた。$K_3$の覆土は5層に分かれるが、黒褐色土・黄灰色土が主となる。覆土中には、灰があまり含まれていない。

**貯蔵穴**　貯$_1$は$K_3$の東側0.6mに位置する。平面形態は長方形を呈し、断面形態は箱形を呈する。規模は0.8m×0.6m、深さ0.52mを測る。貯$_1$の底面は平坦であり、覆土には炭化物が含まれる。貯$_1$からは土師器片が出土している。貯$_1$は$K_2$にも近接しているため、Ⅱ期に属する可能性もあるが、本報告ではⅠ期に属すると考えた。

Ⅱ期

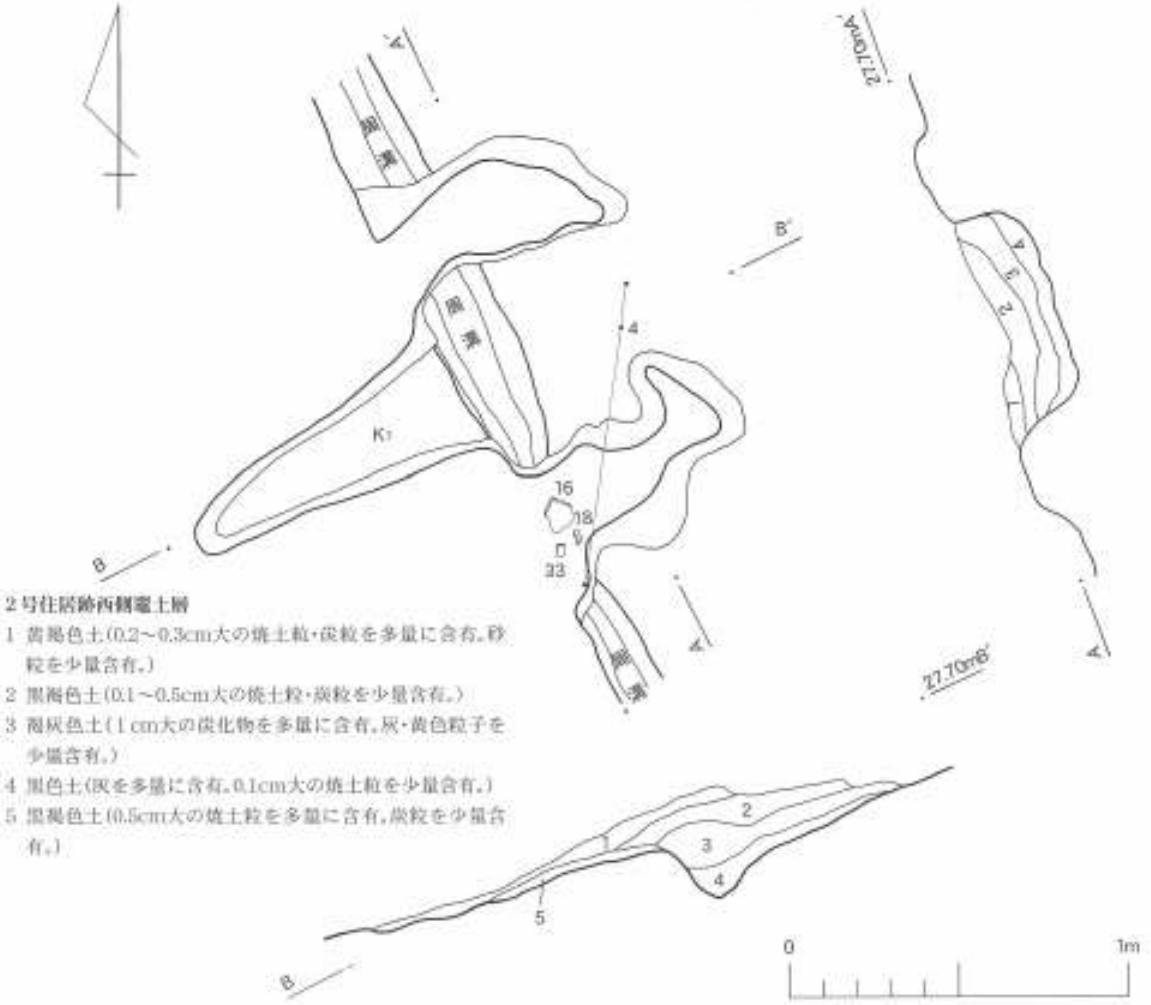
**竪穴**　平面形態・規模はⅠ期と同じである。主軸方位はN－70°－Eである。

**床**　標高・状況ともⅠ期と同じである。周溝は、Ⅱ期には存在したと考えられる。周溝は全ての壁に存在するが、東壁の$K_2$の北側で1箇所のみ途切れている。規模は、幅0.14m～0.49m、深さ0.08m～0.23mを測る。断面形態はU字形を呈する。周溝はⅢ期にも継続して使用されたと考えられる。周溝内より土師器片が出土している。

**柱穴**　Ⅰ期の4個（$P_1$・$P_3$・$P_5$・$P_7$）、Ⅲ期の4個（$P_2$・$P_4$・$P_6$・$P_8$）のいずれかが使用されたと考えられるが、現時点では不明である。

**竈**　$K_2$は東壁の住居跡東南端より北へ1.95mに位置する。$K_2$は東側の1号住居跡によって切られる。現存規模は、全長1.88m、最大幅0.52m、煙道長0.88mを測る。主軸方位はN－65°－Eであるが、Ⅰ期と同様に、袖部・天井部は残存しない。煙道部は東壁を幅0.17m、奥行0.8mで掘り込んで構築されている。煙道部の内面は焼土化していた。煙道部より土製支脚が横転した状態で出土した。火床と考えられる部分が0.4m×0.4mの円形を呈する範囲で検出された。火床から煙道にかけて、灰が薄く堆積していた。$K_2$の覆土は5層に分かれるが、下層ほど焼土塊・炭化物・灰を多く含んでおり、黒褐色土・灰黄褐色土が主となる。

**貯蔵穴**　Ⅱ期に属する貯蔵穴は検出されていない。しかし、$K_2$の南側0.78mに位置する貯$_1$がⅡ期




第58図　2号住居跡西側竈

に属する可能性はある。

Ⅲ期

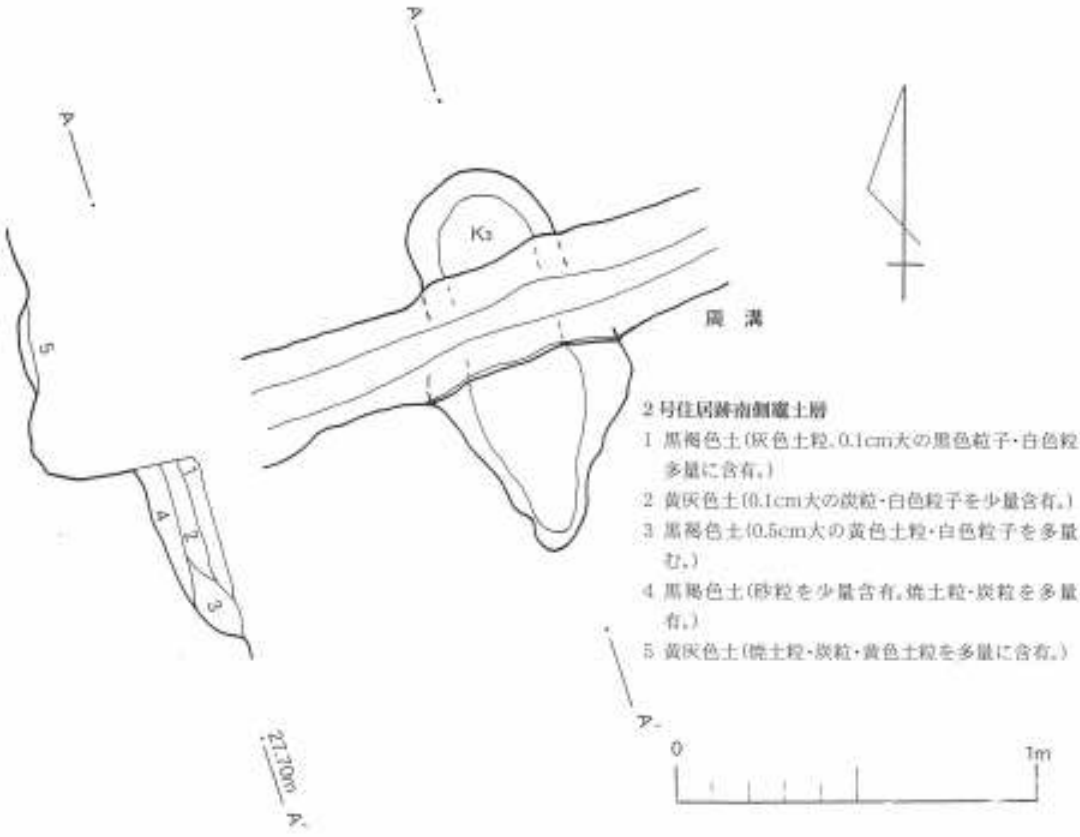
**竪穴**　形態・規模はⅠ・Ⅱ期と同じである。主軸方位はN－110°－Wである。遺存状況は良好である。覆土は8層に分かれる。1層は黒色土、2層は黒褐色土、3層は黄色粒子・黒色粒子を多く含む黒褐色土、4層は炭粒を含む黒褐色土、5層は黄色土粒を含む黒褐色土、6層は焼土粒を含む黒褐色土、7層は炭化物を層状に含む黒色土、8層は黒褐色土である。

**床**　標高・状況はⅠ・Ⅱ期と同じである。周溝はⅡ期から継続して使用されたと考えられる。

**柱穴**　4個（$P_2$・$P_4$・$P_6$・$P_8$）検出され、全て主柱穴である。$P_2$の平面形態は楕円形を呈し、断面形態はU字形を呈する。規模は0.54m×0.48m、深さ0.48mを測る。$P_4$の平面形態は楕円形を呈し、断面形態は円筒形を呈する。規模は0.5m×0.4m、深さ0.64mを測る。$P_6$の平面形態は不整円形を呈し、断面形態はV字形を呈する。規模は0.4m×0.4m、深さ0.64mを測る。$P_8$の平面形態は楕円形を呈し、断面形態は円筒形を呈する。規模は0.24m×0.16m、深さ0.5mを測る。Ⅲ期の柱穴はⅡ期にも使用された可能性がある。

2号住居跡東側竈土層

1 黒色土(0.5cm大の焼土粒、0.1cm大の黄色粒子を少量含有。)
2 黄橙色土(0.1～0.5cm大の黒色粒子、黄色粒子を少量含有。)
3 黒褐色土(0.5～1cm大の黄色粒子・黒色粒子を多量に含む。砂粒を少量含有。)
4 灰黄褐色土(0.5～1cm大の黄色粒子を多量に含有。焼土・炭粒・灰を少量含有。)
5 黒褐色土(砂粒・焼土塊・炭粒を多量に含有する。)




2号住居跡南側竈土層

1 黒褐色土(灰色土粒、0.1cm大の黒色粒子・白色粒子を多量に含有。)
2 黄灰色土(0.1cm大の炭粒・白色粒子を少量含有。)
3 黒褐色土(0.5cm大の黄色土粒・白色粒子を多量に含む。)
4 黒褐色土(砂粒を少量含有。焼土粒・炭粒を多量に含有。)
5 黄灰色土(焼土粒・炭粒・黄色土粒を多量に含有。)

第59図　2号住居跡東・南側竈

竈　$K_1$は西壁の住居跡西南端より北へ2.0mに位置する。規模は、全長1.62m、最大幅1.5m、焚口幅0.4m、煙道長0.86mを測る。遺存状況は良好である。主軸方位はN－115°－Wである。煙道部は西壁を幅0.42m、奥行0.8mで細長い三角形に掘り込んで構築されている。煙道部は燃焼部との間に、高さ0.15mの角度約80°の段を経た後、緩やかに立ち上がる。燃焼部には、明確な火床は確認されなかったが、燃焼部は住居跡床面よりも、やや低くなっている。袖部の平面形態は、ほぼ平行に延びているが、焚口は燃焼部を囲むように狭くなっている。袖部の内面は焼土化し、硬化している。煙道部・燃焼部には、黒褐色土を含む灰が堆積していた。厚さは、煙道部で0.05m～0.1m、燃焼部で0.03m～0.11mを測る。$K_1$の覆土は、$K_2$・$K_3$の覆土に比べ炭化物・灰・焼土が多く含まれる。

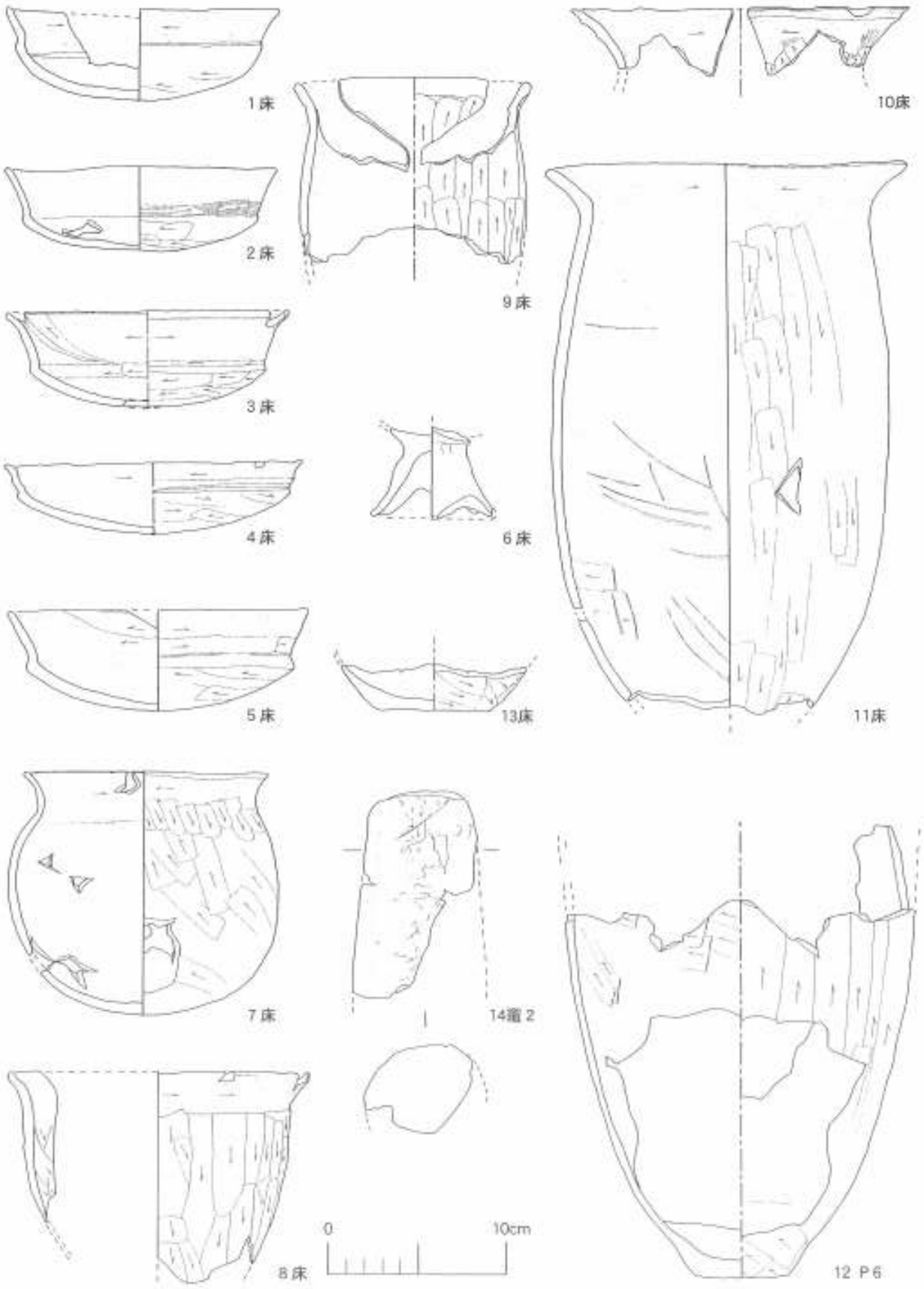
**貯蔵穴**　貯$_2$は$K_1$の南側0.6mに位置する。平面形態は長方形を呈し、断面形態は箱形を呈する。規模は0.8m×0.5m、深さ0.66mを測る。

遺物　床より1・2・3・4・5（杯）6（高杯）・7（壺）・8（甑）・9・10・11（甕）、$P_6$より12（甕）、覆土中より15（須恵器杯）・16～39（杯）・47（高杯）・41・42（壺）・43・44（甕）・45・46（甑）・50（紡錘車）・51（支脚）・49（器種不明）が出土している。

**表２　２号住居跡出土遺物観察表**

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 60-1 | 杯<br>土師 | 床直 | 口径15.5<br>器高5.2<br><br>口縁部1/4欠 | 胎：0.1大の黒色粒子を多量、白色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸底の体部より、丸味を持つ厚い稜を経て、外反する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に横方向の弱い「箆撫で」。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部上位は、横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 体部外面は磨滅し、約1/3に煤炭。 | | | | | | |
| 60-2 | 杯<br>土師 | 床直 | 口径15.4<br>器高4.7<br><br>口縁部1/4欠 | 胎：0.1～1.0大の白色粒子を多量、赤色粒子・黒色雲母粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸底の体部より、僅かな稜を経て、外反する口縁部に至る。口唇部は平坦である。 | 口縁部は「横撫で」後、下位に強い「箆撫で」が巡る。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は不明。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 60-3 | 杯<br>土師 | 床直 | 口径(16.0)<br>残高5.5<br><br>1/2残 | 胎：0.5大の砂粒を多量、1.0大の赤色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/6（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸底の体部より、明確な稜を経て、外反する口縁部に至る。口唇部は丸みを持ち先細る。 | 口縁部は「横撫で」後、下位に強い「箆撫で」が巡る。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、横方向の「撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 60-4 | 杯<br>土師 | 床直 | 口径(17.0)<br>器高4.0<br><br>1/2残 | 胎：0.5～1.5大の赤色粒子・0.5大の黒色雲母粒を多量に含有する。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/6（橙色） | 浅い丸底の体部より、丸みを持つ稜を経て、屈曲しながら立ち上がる口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」の後、２段にわたり「箆撫で」が巡る。<br>体部は不定方向の「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は不明。 |
| 備考 | 器体内外面が煤炭。内面の磨滅は著しい。 | | | | | | |

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 胎質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 60-5 | 杯<br>土師 | 床直 | 口径17<br>器高5.7<br><br>完(口 縁 一部欠) | 胎：0.1大の砂粒を多量、0.2~1.0大の黒色雲母粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/8（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。丸底の体部より、明確な稜を経て、外傾する口縁部に至る。口唇部は丸みを持っている。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位と稜に「篦撫で」が巡っている。<br>体部は、「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | 器体内面に細かな剥落が多くある。 | | | | | | |
| 60-6 | 高杯<br>土師 | 床直 | 裾径(7.1)<br>残高4.7<br><br>脚部のみ残、裾部一部残 | 胎：0.5大の黒色粒子、0.1大の白色粒子含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR7/6（橙色） | 粘土帯積み上げ。脚部に杯部をのせて接合。中ぶくらみの脚部より、急に広がる裾部に至る。 | 脚部は「横撫で」。 | 脚部は「横撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 60-7 | 小型壺<br>土師 | 床直 | 口径13.8<br>器高13.7<br><br>完 | 胎：1.0大の黒色粒子・白色粒子、1.0~3.0大の赤色粒子を多量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土帯の積み上げ。最大経を胴部中位に持つほぼ球形の胴部より、弱く括れた頸部より、外反する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、上位においてはほぼ縦方向、下位においては、不定方向の「篦削り」。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>胴部は「篦撫で」。 |
| 備考 | 胴部外面下半が炭く吸炭。 | | | | | | |
| 60-8 | 甕<br>土師 | 床直 | 口径17.8<br>器高11.8<br><br>口縁部~胴部上位1/2残 | 胎：1.0~2.0大の白色粒子、赤色粒子、黒色雲母粒を多量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/6（橙色） | 粘土帯の積み上げ。張りの無い胴部より、緩やかに外反する口縁部に至り、口唇部においてほぼ直立する。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、縦方向の「篦削り」。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>胴部は「篦撫で」。 |
| 備考 | 口縁部内面の一部が炭く吸炭。 | | | | | | |
| 60-9 | 甕<br>土師 | 床直 | 口径(13.4)<br>残高10.5<br><br>口縁部~胴部上半1/2残。 | 胎：1.0~3.0大の砂粒を多量含有。<br>焼：良<br>色：内吸炭等により不詳。外5YR5/8（明赤褐色） | 粘土帯の積み上げ。張りの無い胴部より、外傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、縦方向の「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体内面が炭く吸炭、大部分が磨滅。 | | | | | | |
| 60-10 | 甕<br>土師 | 床直 | 口径(18.0)<br>残高3.9 | 胎：1.0大の砂粒を含有。<br>焼：良<br>色：内外吸炭・磨滅により不詳。 | 口縁部は、外反し、口唇は、先細る。 | 口縁部は「横撫で」の後に、下位に下→上への「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面の大部分が磨滅、外面の一部が吸炭。 | | | | | | |
| 60-11 | 長胴甕<br>土師 | 床直 | 口径20.3<br>残高30.9 | 胎：0.1~3.0大の砂粒を多量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。張りの無い長胴より、外反する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、縦方向の「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、横方向の「篦撫で」。 |
| 備考 | 胴部内面に吸炭部が、巡っている。 | | | | | | |
| 60-12 | 長胴甕<br>土師 | P106内 | 底径<br>残高<br><br>底部完、胴部下半1/2残 | 胎：1.0~3.0大の砂粒を多量、1.0大の黒色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内7.5YR7/6（橙色）<br>外2.5YR6/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。平底よりやや丸みを持って立ち上がる胴部に至る。 | 胴部は、縦方向の「篦削り」。胴部下位は、不定方向の「篦削り」。 | 胴部は横方向の「篦撫で」。 |
| 備考 | 胴部外面の1/4に吸炭がある。 | | | | | | |

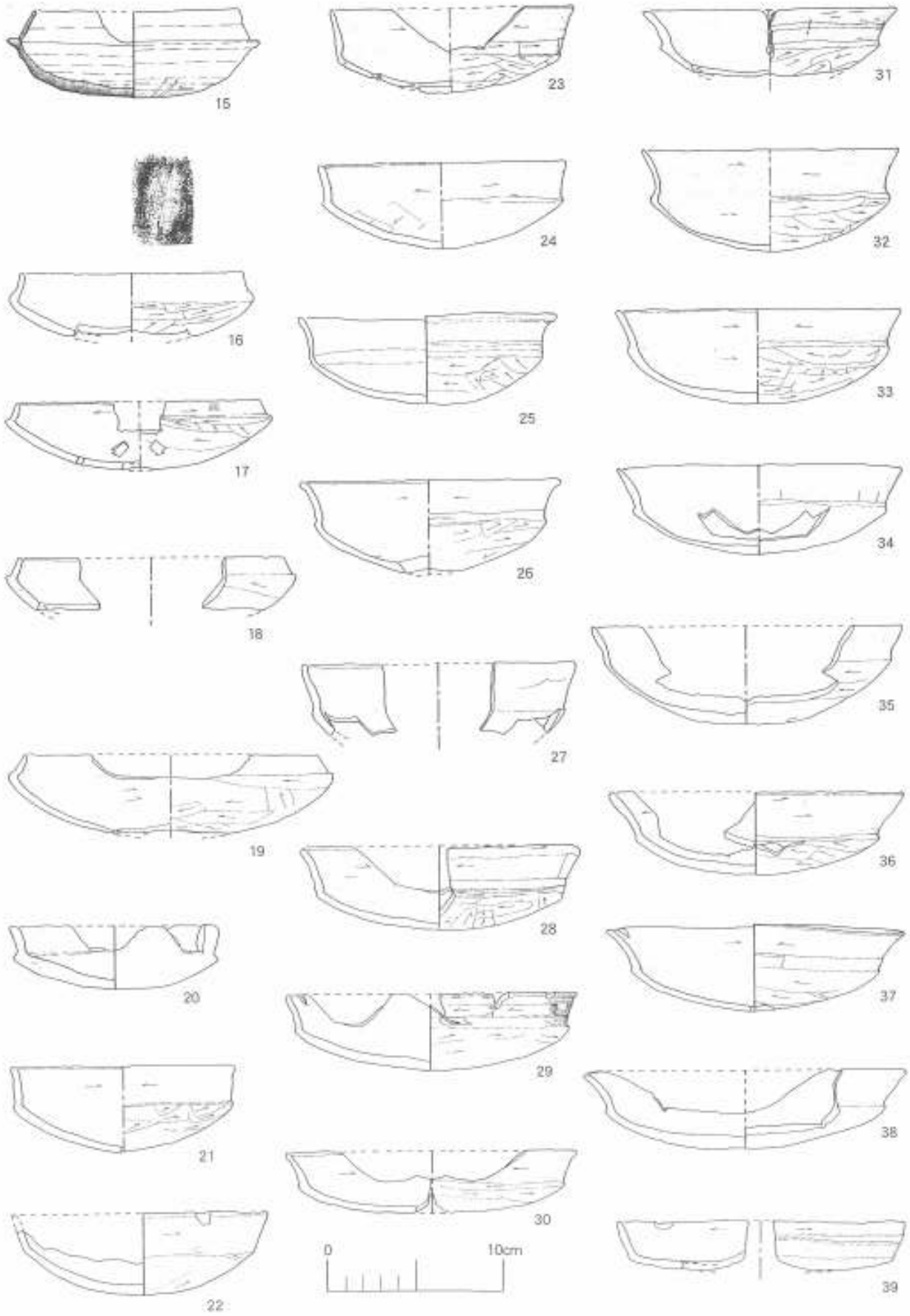



第60図　2号住居跡出土遺物(1)

| 番号 | 器種<br>種別 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 60-13 | 甕<br>土師 | 床 | 底径(6.4)<br>残高2.7<br><br>底部1/4欠 | 胎：0.1~1.0大の砂粒を多量含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR8/2（灰白色） | 平底より立ち上がる。 | 胴部は「箆削り」。<br>底部は「箆削り」。 | 不明。 |
| 備考 | 器体外面は淡い吸炭がある。 | | | | | | |
| 60-14 | 支脚<br>土製品 | 竈2内 | 上部径6.0<br>残高11.7<br><br>上半部残 | 胎：0.5大の砂粒、1.0大の小石を含有。<br>焼：良<br>色：10YR5/3（にぶい黄褐色） | 手捏ね。<br>多角柱を呈し、据部へ向かい僅かに広がる。 | 表面は「箆削り」を施している。 | |
| 備考 | 一部に著しい吸炭がある。 | | | | | | |
| 61-15 | 杯<br>須恵 | 覆土 | 口径11.6<br>器高5.0<br><br>完(口縁一部欠) | 胎：0.1大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外N5/0（灰色） | 轆轤右回転成形。<br>平底ぎみの底部から丸みを持って立ち上がり、突出した稜を経て、内傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、指による「撫で」。<br>体部最下位を轆轤右回転箆削りで整えている。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、轆轤右回転の撫で。 |
| 備考 | 底部に箆記号あり。 | | | | | | |
| 61-16 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(12.8)<br>残高3.7<br><br>1/4残 | 胎：0.5大の黒色雲母粒を含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR5/8（明赤褐色） | 丸底の体部より、丸みを持つ稜を経て、僅かに内傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>稜は、横方向の「撫で」が巡っている。<br>体部は、「箆削り」 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体の内外面の一部が吸炭。内面が細かく剥落。 | | | | | | |
| 61-17 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(14.0)<br>残高4.0<br><br>1/2残 | 胎：0.5大の黒色雲母粒・赤色粒子を含有。<br>焼：良<br>色：内2.5YR6/6（橙色）外吸炭のため不詳。 | 粘土紐の巻き上げ。<br>浅い丸底の体部より、鋭い稜を経て、内傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>稜は、横方向の「撫撫で」が巡っている。<br>体部は、「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に横方向の「撫で」が巡っている。<br>体部は不明。 |
| 備考 | 器体の外面が著しく、内面の一部が吸炭。 | | | | | | |
| 61-18 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(16.6)<br>残高3.0<br><br>1/4残 | 胎：0.1～0.2大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR5/6（明赤褐色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>丸底の体部より、明確な稜を経て、内傾する口縁部に至る。口唇部はほぼ平坦である。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に「箆撫で」が巡っている。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | 器体の内外面が吸炭。 | | | | | | |
| 61-19 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(16.6)<br>残高4.9<br><br>1/2残 | 胎：0.4大の黒色雲母砂・0.2-0.3大の赤色粒子を含有。<br>焼：良<br>色：内5YR7/4（にぶい橙色）外吸炭等により不詳。 | 粘土紐の巻き上げ。<br>浅い丸底の体部より、明確な稜を経て、内傾する口縁部に至る。 | 口唇部は、「横撫で」。<br>体部は、「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、不定方向の「撫で」の後、上位に、横方向の「撫で」。が、巡っている。 |
| 備考 | 体部外面の1/2が吸炭。 | | | | | | |
| 61-20 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径11.8<br>器高3.6 | 胎：1.0~1.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：普<br>色：内外剥落のため不詳。 | 粘土紐の巻き上げ。<br>浅い丸底の体部より、明確な稜を経て、外傾する口縁部に至る。口唇部は、肥厚している。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部上位に横方向の「撫で」が、巡っている。 |
| 備考 | 器体内外面の剥離が著しい。 | | | | | | |

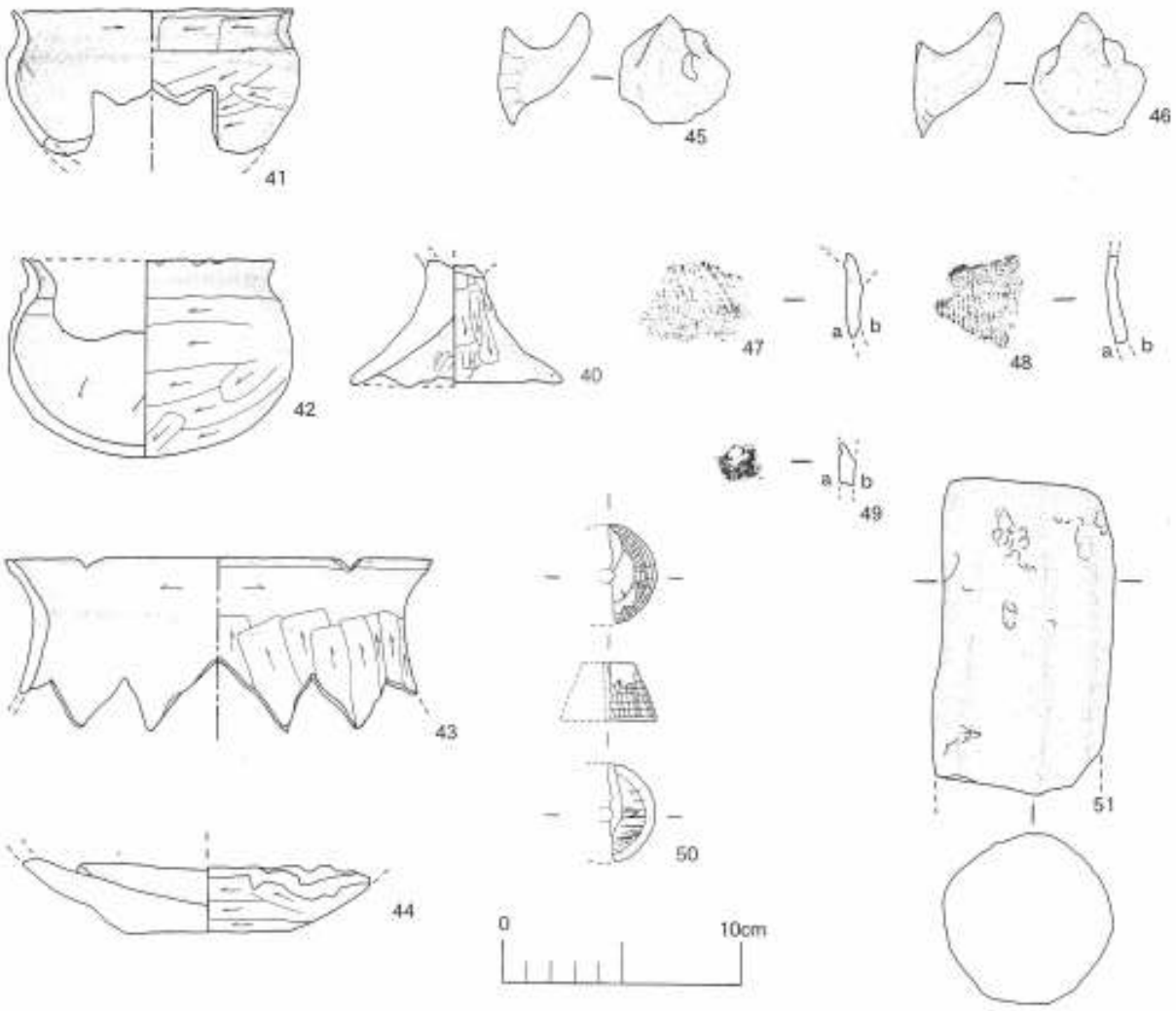
| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 61-21 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(13.0)<br>残高4.9<br><br>1/2残 | 胎：1.0大の白色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR5/8（明赤褐色） | 丸底の体部より、僅かな稜を経て、ほぼ直立する口縁部へ至る。口唇部は、ほぼ平坦である。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>口唇部は、横方向の「撫で」が巡っている。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | 体部外面の一部が吸炭。器体内面が微かく剥落。 | | | | | | |
| 61-22 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(14.5)<br>残高4.8<br><br>口縁部1/4残<br>体部1/2残 | 胎：0.1大の黒色雲母粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/6（橙色） | 丸底の体部より、外傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面が広く磨滅する。 | | | | | | |
| 61-23 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径14.0<br>残高9.8<br><br>口縁部・体部<br>1/4欠 | 胎：1.0大の砂粒を多量、1.0大の赤色粒子を少量含有する。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 丸底の体部より、僅かな稜を経て、僅かに外傾する口縁部へ至る。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に強い「篦撫で」が巡る。<br>体部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部上位は「撫で」が巡っている。 |
| 備考 | 体部外面の1/4が吸炭。体部内外面が磨滅する。 | | | | | | |
| 61-24 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(14.0)<br>残高5.0<br><br>1/4残 | 胎：2.0大の赤色粒子・1.0大の白色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>丸底の体部より、丸みを持つ稜を経て、ほぼ直立する口縁部に至る。口唇部は、ほぼ平坦である。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に強い「篦撫で」が巡る。<br>体部は、「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「篦撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面の磨滅が著しい。 | | | | | | |
| 61-25 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径15.0<br>器高5.0<br><br>完(口縁一部欠) | 胎：0.5大黒色雲母粒を多量、0.5~2.0大の赤色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 丸底の体部より、僅かに残存する稜を経て、外反する口縁部に至る。口唇部は、肥大し、ほぼ平坦である。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に工具により凹みを巡らしている。<br>体部は、「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面の大部分が著しく磨滅する。 | | | | | | |
| 61-26 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(15.0)<br>残高5.2<br><br>1/4残 | 胎：1.0大の白色粒子・赤色粒子を含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>丸底の体部より、僅かな稜を経て、下位に僅かな段を持つ口縁部に至る。口唇部は、くぼみを持つ。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に強い「篦撫で」が巡る。<br>体部は、不定方向の「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 体部外面1/2が吸炭。器体内面が著しく磨滅する。 | | | | | | |
| 61-27 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(15.5)<br>残高4.0<br><br>口縁部1/4残 | 胎：0.5~1.0大の黒色雲母粒含有。<br>焼：良<br>色：内吸炭のため不詳。外2.5YR7/8（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>僅かな稜を経て、僅かに屈曲する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、不明。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、不明。 |
| 備考 | 口縁部内面が吸炭。 | | | | | | |
| 61-28 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径15.8<br>器高4.7<br><br>口縁部の1/4<br>体部の一部欠 | 胎：0.1~0.5大の白色粒子、0.2大の黒色雲母粒を含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色）外吸炭のため不詳。 | 粘土紐の巻き上げ。<br>浅い丸底の体部より、僅かな稜を経て緩く外反する口縁部に至る。口唇部は、段差を持つ。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に「篦撫で」が巡り、稜を作る。<br>体部は、不定方向の「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。口唇部は、工具による横方向の「撫で」により、段差を持つ。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体外面のほぼ全面が著しく、内面の一部が強く吸炭。内面の一部が細かく剥落。 | | | | | | |

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 61-29 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径16.8<br>器高4.4<br><br>1/4欠 | 胎：0.5~1.5大の砂粒・黒色雲母粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/8（橙色） | 浅い丸底の体部より、明確な稜を経て、緩く外反する口縁部に至る。 | 口縁部は、強い「箆撫で」が、3段に施されている。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面が著しく吸炭するが、大部分が磨滅する。 | | | | | | |
| 61-30 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(17.0)<br>残高3.6<br><br>1/4残 | 胎：0.5大の砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内吸炭・磨滅のため不詳。外2.5YR5/6（明赤褐色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>浅い丸底の底部より、丸みを持つ稜を経て、外反する口縁部に至る。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>稜は、下位に「箆撫で」が巡っている。<br>体部は「箆削り」 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面が吸炭するが、大部分が磨滅する。 | | | | | | |
| 61-31 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(15.0)<br>残高4.0<br><br>口縁部1/4残 | 胎：0.2~0.4大の白色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR5/6（にぶい褐色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>体部より、明確な稜を経て、緩く外反する口縁部に至る。 | 口唇部は、「横撫で」の後、中位と下位に、強い「箆撫で」が巡る。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面の1/2が吸炭。 | | | | | | |
| 61-32 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(14.6)<br>器高5.8<br><br>1/2残 | 胎：1.0大の白色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内摩滅のため不詳。外2.5YR7/6（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>丸底の底部より、丸みを持つ稜を経て、外反する口縁部に至る。 | 口唇部は、「横撫で」。<br>稜は、横方向の「撫で」が巡る。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面が著しく磨滅する。 | | | | | | |
| 61-33 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(16.5)<br>残高5.4<br><br>1/4残 | 胎：0.5大の赤色粒子、黒色雲母粒を含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR5/8（明赤褐色） | 丸底の体部より、僅かな稜を経て、外傾する口縁部に至る。口唇部は、ほぼ平坦である。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に「箆撫で」が巡り、稜を作る。<br>体部は、「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、上位に横方向の「撫で」が巡る。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 61-34 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径16.2<br>器高5.5<br><br>口縁部の1/4<br>体部の一部欠 | 胎：0.2大の砂粒、0.1大の黒色雲母粒を含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/8（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>丸底の体部より、明確な稜を経て、外反する口縁部に至る。口唇部は、ほぼ平坦である。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に「箆撫で」が巡り、稜を作る。<br>体部は、「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 体部外面の1/2が炭く吸炭。器体内外面の磨滅が著しい。 | | | | | | |
| 61-35 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(18.0)<br>残高5.0<br><br>1/4残 | 胎：0.1~0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内磨滅のため不詳。外2.5YR7/8（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>丸底の体部より、僅かに残存する稜を経て、外反する口縁部に至る。口唇部は、平坦である。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面が著しく磨滅。 | | | | | | |
| 61-36 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径16.8<br>器高4.7<br><br>1/4欠 | 胎：0.1~1.0大の白色粒子、赤色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>丸底の体部より、僅かな稜を経て、外反する口縁部に至る。口唇部は、ほぼ平坦であり、くぼみを持つ。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に弱い「箆撫で」が巡り、稜を作る。<br>体部は、「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |




第61図　2号住居跡出土遺物(2)

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 胎質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 61-37 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径17.0<br>器高4.9<br><br><br>1/4欠 | 胎：1.0~1.5大の黒色雲母粒、1.0大の白色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 丸底の体部より、明確な稜を経て、外反する口縁部に至る。口唇部は、ほぼ平坦である。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位は、強い「篦撫で」が巡り、稜を作る。<br>体部は、不定方向の「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 体部外面の1/4が吸炭。内面は、磨滅が著しく、一部が剥落する。 | | | | | | |
| 61-38 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径18.5<br>器高4.5<br><br>口縁部1/2、体部1/4欠 | 胎：0.1大の赤色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>浅い丸底の体部より、僅かな稜を経て、外反する口縁部に至る。 | 口唇部は、「横撫で」。<br>体部は、「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体外面の一部が淡く吸炭。内外面は著しく磨滅し、内面は細かく剥落。 | | | | | | |
| 61-39 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(16.4)<br>残高2.8<br><br><br>1/4残 | 胎：0.5大の砂粒、黒色雲母粒を多量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/8（橙色） | 浅い平底気味の体部より、僅かに残存する稜から、外傾する口縁部に至る。 | 口唇部は、強い「篦撫で」が巡る。<br>体部は、「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面が著しく磨滅。 | | | | | | |
| 62-40 | 高杯<br>土師 | 覆土 | 脚径8.9<br>残高5.3<br><br>脚部のみ残<br>脚部1/4欠 | 胎：0.5～1.0の白色粒子を多量含有。<br>焼：良<br>色：内外5Y8/1（灰白色） | 粘土帯積み上げ。<br>脚部より、緩やかに広がる裾部に至る。端部は、丸みを帯びている。 | 脚部は、縦方向の「篦撫で」の後、裾部を「横撫で」。 | 脚部は、「篦撫で」。<br>裾部は、「横撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面の一部が淡く吸炭。 | | | | | | |
| 62-41 | 小型壺<br>土師 | 覆土 | 口径(11.8)<br>残高6.0<br><br><br>1/4残 | 胎：0.1～0.3大の砂粒を含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 丸みを持って、内彎しながら立ち上がる胴部より、外反する口縁部に至る。 | 口縁部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は「篦削り」。 | 口縁部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は不明。 |
| 備考 | 器体内面が細かく剥落する。 | | | | | | |
| 61-42 | 小型壺<br>土師 | 覆土 | 口径10.5<br>器高8.3<br><br>口縁部1/4欠 | 胎：0.2~1.0大の砂粒を多量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/8（橙色） | ほぼ球形の胴部より、強く外反する口縁部に至る。胴部と口縁部との境に、僅かな段を有す。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>胴部は「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は「篦削り」。 |
| 備考 | 体部外面の一部に吸炭がある。外面が著しく、内面が細かく剥落。 | | | | | | |
| 61-43 | 甕<br>土師 | 覆土 | 口径(18.0)<br>現高7.3<br><br>口縁部、胴部上位1/3残 | 胎：1.0大の砂粒を多量含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR8/2（灰白色） | 粘土体の積み上げ。<br>胴部より、外反する口縁部に至る。口唇部は、直立し、先細る。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>胴部は、ほぼ縦方向の「篦削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 外面が淡く吸炭。 | | | | | | |
| 61-44 | 甕<br>土師 | 覆土 | 底径6.9<br>残高3.4<br><br><br>底部 | 胎：0.1~2.0大の砂粒を多量含有。<br>焼：良<br>色：内外吸炭・磨滅等により不詳。 | 平底より立ち上がる。 | 胴部は、「篦削り」の後、底部との接合部は、横方向の「撫でつけ」が、施されている。<br>底部「篦削り」 | 不明。 |
| 備考 | 器体外面にまばらに吸炭がある。 | | | | | | |



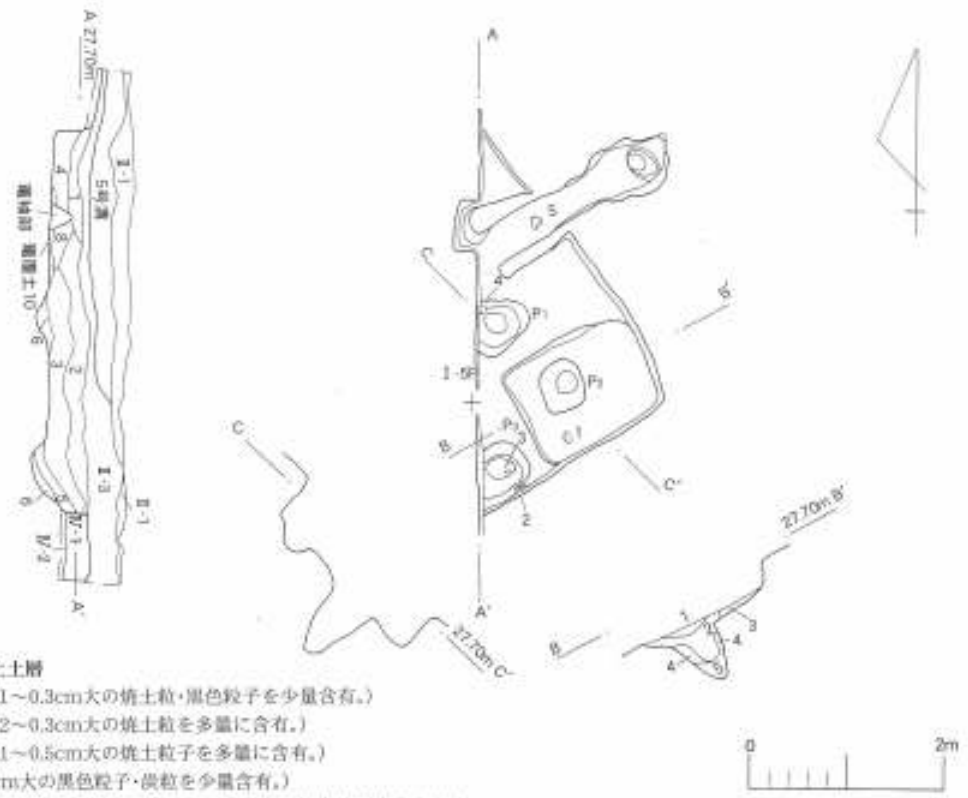

第62図　2号住居跡出土遺物(3)

| 番号 | 器種種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 62-45 | 把手土師 | 覆土 | 現高4.8<br>把手破片 | 胎：0.5~1.0大の砂粒を多量含有。<br>焼：良<br>色：2.5YR 7/8（橙色） | 手捏ね。<br>上方へ内彎し、先端部が尖る。 | | |
| 備考 | 一部に炭化がある。全体的に磨滅。 | | | | | | |
| 62-46 | 把手土師 | 覆土 | 現高5.2<br>把手破片 | 胎：0.5~1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：2.5YR 7/8（橙色） | 手捏ね。<br>上方へ内彎し、先端部が尖る。 | | |
| 備考 | 全体的に磨滅。 | | | | | | |

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 62-47 | 甕<br>土師 | 覆土 | 器厚0.40～0.55<br>胴部破片 | 胎：0.2大の黒色雲母粒・赤色粒子を含有。<br>焼：良<br>色：内10YR 8/1（灰白色）<br>外10YR8/2(灰白色) | | 「刷毛目」が施されている。 | |
| 備考 | | | | | | | |
| 62-48 | 土師 | 覆土 | 器厚0.50～0.70<br>口縁付近破片 | 胎：0.2大の黒色粒子、白色砂粒を含有。<br>焼：良<br>色：内10YR8/1（灰白色）<br>外10YR8/2（灰白色） | | 「刷毛目」が施されている。 | |
| 備考 | | | | | | | |
| 62-49 | 土師 | 覆土 | 器厚0.6～0.7 | 胎：0.1大の黒色雲母粒、1.0大の砂粒を含有。<br>焼：良<br>色：5YR 7/6（橙色） | | | |
| 備考 | 籾痕あり。 | | | | | | |
| 62-50 | 紡錘車<br>石製品 | 覆土 | 上径(2.2)<br>底径(4.0)<br>孔径(0.2～0.4)<br>器高2.4<br>重量20g<br>約1/2残 | 滑石<br>色：10YR 3/1（黒褐色） | | 側面は、縦方向と横方向に強い「削り」が施されている。<br>下面の縁辺には、「削り」が施される、擦痕がある。 | |
| 備考 | | | | | | | |
| 62-51 | 支脚<br>土製品 | 覆土 | 上部径7.0<br>残高12.0<br>上半部残 | 胎：0.1-0.2大の砂粒を多量に含有。<br>焼：普<br>色：2.5YR 8/3（淡黄色） | 手捏ね。<br>ほぼ円筒形を呈する。 | 表面は、「指削り」を施している。 | |
| 備考 | | | | | | | |

### 3号住居跡（第63～65図）

**竪穴**　3号住居跡は、調査区西側、H－4・H－5区に位置する。本住居跡の東南には、2号住居跡が隣接して存在し、5.2m北には8号住居跡が、8.2m北東には1号住居跡が存在する。また、本住居跡は、西側がさらに調査区外へ延びる。現存規模は、北東壁3.3m、東南壁2.2mを測る。壁高は、0.32m～0.48mを測る。遺存状況は良好である。平面形態は、不明であるが、方形あるいは長方形を呈すると考えられる。主軸方位は、N－58°－Eである。覆土は、6層に分かれる。1層は焼土粒・黒色粒子を含む黒褐色土、2層は焼土粒・黒色粒子を多く含む黒褐色土、3層は焼土粒を多く含む黒褐




**3号住居跡覆土土層**

1 黒褐色土(0.1～0.3cm大の焼土粒・黒色粒子を少量含有。)
2 黒褐色土(0.2～0.3cm大の焼土粒を多量に含有。)
3 黒褐色土(0.1～0.5cm大の焼土粒子を多量に含有。)
4 黒色土(0.1cm大の黒色粒子・炭粒を少量含有。)
5 黒褐色土(0.1cm大の黒色粒子、0.2～0.5cm大の焼土粒を少量含有。)
6 黒褐色土(0.2～0.5cm大の炭化物・焼土粒を少量含有。)

**3号住居跡柱穴(B－B')土層**

1 黒褐色土(0.2cm大の炭粒・黒色粒子を少量含有。)
2 黒褐色土(炭化物を多量含有。)
3 黄灰色土(0.1cm大の黒色粒子を多量含有。)
4 黒褐色土(0.1cm大の黒色粒子を少量含有。)
5 黒褐色土(0.1cm大の炭粒少量含有。)

**第63図　3号住居跡**

色土、4層は黒色粒子・炭粒を含む黒色土、5層は黒色粒子・焼土粒を含む黒褐色土、6層は炭化物・焼土粒を含む黒褐色土である。

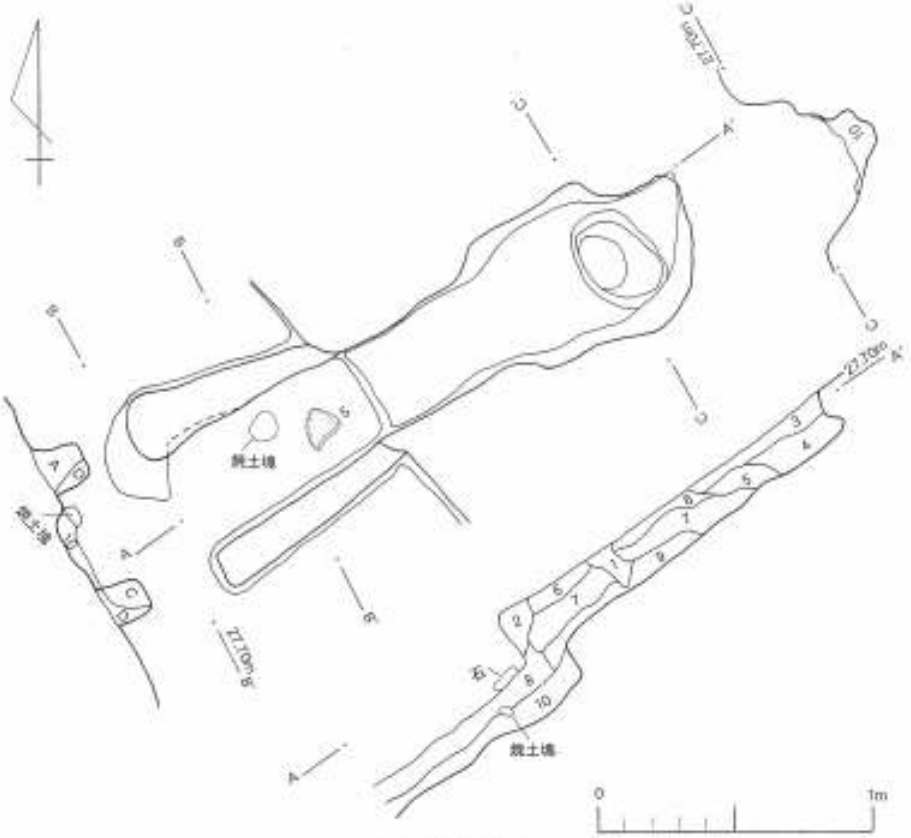
**床**　標高は27.3m～27.4mを測り、ほぼ水平である。本住居跡東南端は、1.5m×1.1m、深さ0.1mの規模で落ち込んでいる。落ち込み内には、$P_2$が存在するが、性格は不明である。本住居跡からは貼床・周溝は検出されていない。

**柱穴**　柱穴は3個（$P_1$・$P_2$・$P_3$）検出された。主柱穴は$P_2$であると考えられる。$P_1$の平面形態は不整楕円形を呈し、断面形態は半円形を呈す。$P_1$は西側がさらに調査区外へ延びるため、現存規模は0.58m×0.52m、深さ0.1mを測る。$P_2$の平面形態は不整円形を呈し、断面形態はU字形を呈す。規模は0.51m×0.44m、深さ0.65mを測る。$P_3$の平面形態は楕円形を呈し、断面形態は皿形を呈す。$P_3$は西側がさらに調査区外へ延びるため、現存規模は0.45m×0.51m、深さ0.2mを測る。

**竈**　北東壁に位置し、本住居跡東南壁より、20mを測る。規模は、全長2.24m、最大幅0.8m、焚口幅0.15m、煙道長1.4mを測る。遺存状況はやや良好であるが、天井部は全く残存していなかった。主軸方位はN－55°－Eであり、住居跡の主軸より北側に3°傾く。煙道部は住居跡北東壁を幅0.38m、奥行1.35m掘り込んで構築されている。平面形態は、ほぼ長楕円形を呈すが、先端部は広がりを見せ

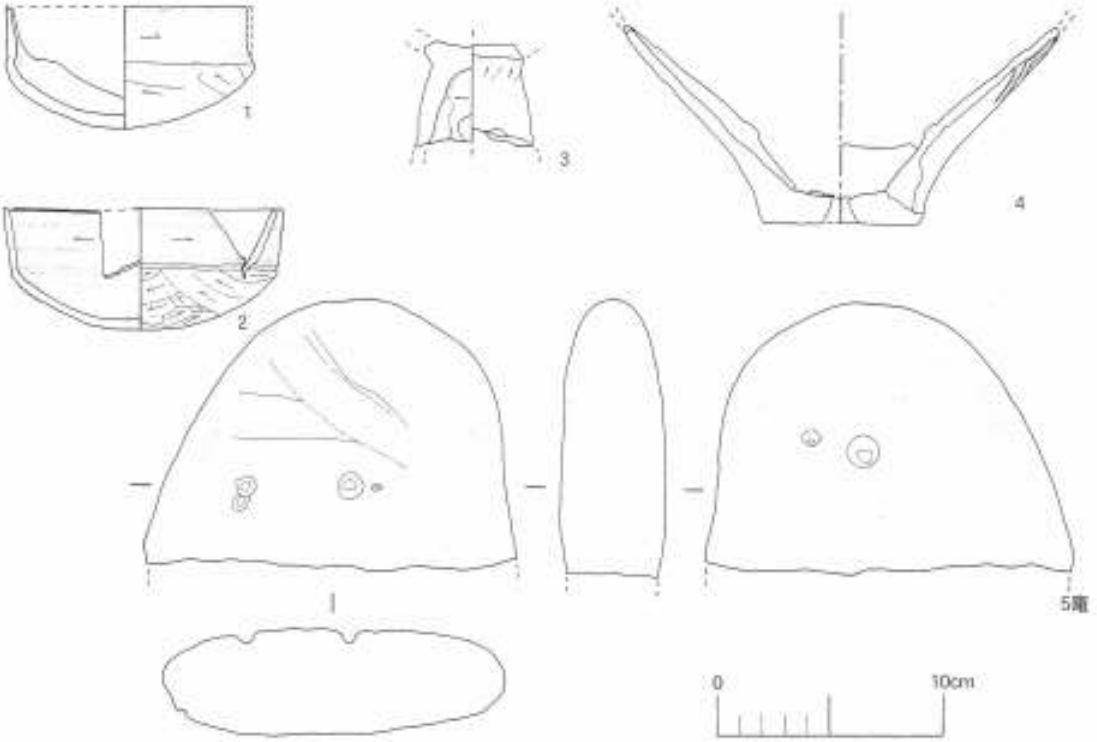
る。煙道部の内面底部は平坦であるが、先端部には楕円形の落ち込みが見られる。規模は0.4m×0.3m、深さ0.2mである。落ち込み底部には、炭化物が付着し、さらに灰が充満していた。灰層からは土師器片も出土している。燃焼部は、幅0.35m、長さ0.8mを測る。燃焼部のほぼ中央は火床となっており、底面より0.05m堀り窪めてある。袖部は、床面を0.02m～0.03m掘り窪めた後、粘土質の暗灰黄色土をのせて構築されている。袖部の平面形態は、ほぼ平行に伸びているが、焚口はやや狭くなっている。袖部の内面は焼土化し、硬化している。煙道部・燃焼部・竈の周囲には、黒色の灰が堆積している。厚さは、煙道部で0.01m～0.02m、燃焼部で0.15m～0.3m、竈前面・袖部の外側で0.01m～0.04mである。竈内の覆土は、9層に分かれるが、いずれも黒褐色土であり、炭化物や焼土粒を含む土が多い。

**遺物**　$P_2$より3（台付甕）、竈内より5（石）、覆土中より1・2（杯）が出土している。




3号住居跡竈土層
1 黒褐色土(0.5cm大の焼土粒を多量に含有。)
2 黒褐色土(0.2cm大の炭粒・焼土粒を少量含有。)
3 黒褐色土(0.2cm大炭粒を少量含有。)
4 黒褐色土(0.1cm大の炭粒・焼土粒を少量含有。)
5 黒褐色土(0.1cm大の焼土粒を少量含有。)
6 黒褐色土(0.2～0.5cm大の黒色粒子を多量に含有。)
7 黒褐色土(0.2～0.3cm大の焼土粒・炭粒0.1cm大の黒色粒子を少量含有。)
8 黒褐色土(下方に1cm大の焼土・炭化物を多量含有。)
9 黒褐色土(焼土塊・炭粒を多量に含有。)
10 灰層
A 灰黄褐色土(黄色土塊を多量に含有。)
B 暗灰黄色土(0.1cm大の黒色粒子を少量含有。)
C 褐色土(褐灰色土・黒色土を少量含有。)
D 灰黄褐色土(褐灰色土塊・黒色粒子を少量含有。)

**第64図　3号住居跡竈**




第65図　3号住居跡出土遺物

表３　３号住居跡出土遺物観察表

| 番号 | 器種種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 65-1 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(11.0)<br>器高5.5<br>1/2残 | 胎：0.5~1.0大の黒色雲母粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR 7/6（橙色） | 丸底の体部より僅かな稜を経て、ほぼ直立する口縁部に至る。口唇部はほぼ平坦である。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | 内外面とも磨滅する。 | | | | | | |
| 65-2 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径12.6<br>器高5.4<br>ほぼ完(口縁部一部欠) | 胎：0.5~1.0大の黒色雲母粒、赤色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR 5/8（明赤褐色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸底の体部より僅かな稜を経て、ほぼ直立する口縁部に至る。口唇部はほぼ平坦である。 | 口縁部は「横撫で」後、下位に横方向の「撫で」により稜を作る。<br>体部は、「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 65-3 | 台付甕<br>土師 | Pit内 | 残高4.2<br>脚部のみ残 | 胎：1.0大の赤色粒子、黒色雲母粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外炭のため不詳。 | 不明。<br>中ぶくらみの脚部より、裾部へ至る。 | 「撫で」。 | 「撫で付け」。 |
| 備考 | 内外面とも淡く吸炭。 | | | | | | |
| 65-4 | 甕<br>縄文 | 覆土 | 底径(6.9)<br>残高<br>底部1/2、胴部下位一部残。 | 胎：0.5~1.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：普通<br>色：内外5YR6/3（にぶい橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>ほぼ平坦な底部より直線的に立ち上がる。 | 胴部に斜行の沈線が現存２本巡る。 | 不明。 |
| 備考 | 底部に網代痕。外面は吸炭し、著しく剥落。 | | | | | | |

| 番号 | 器種種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 底形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 65-5 | 凹石 | 竈 | 最大長12.1<br>最大幅16.4<br>最大厚4.6<br>重量1300g<br><br>約1/2残 | 砂岩。 | | | |
| 備考 | 炉縁に沿って被熱する。 | | | | | | |

**4号住居跡**（第66～68図）

**竪穴**　4号住居跡は、調査区北側、C－0・C－1・D－1区に位置する。本住居跡は、西側を7号住居跡によって切られ、また、上部を3号土坑によって切られる。重複関係は、4号住居跡→7号住居跡→3号土坑である。本住居跡は、北側がさらに調査区外へ延びる。現存規模は、北壁1.15m、東壁3.91m、南壁1.43mを測る。壁高は、0.1m～0.25mを測る。遺存状況は非常に悪い。平面形態は不明であるが、方形あるいは長方形を呈すると考えられる。主軸方位は、N－115°－Eである。覆土は、2層に分かれる。1層は砂粒・炭粒を含む黄灰色土、2層は砂粒・炭粒を含む暗灰黄色土である。

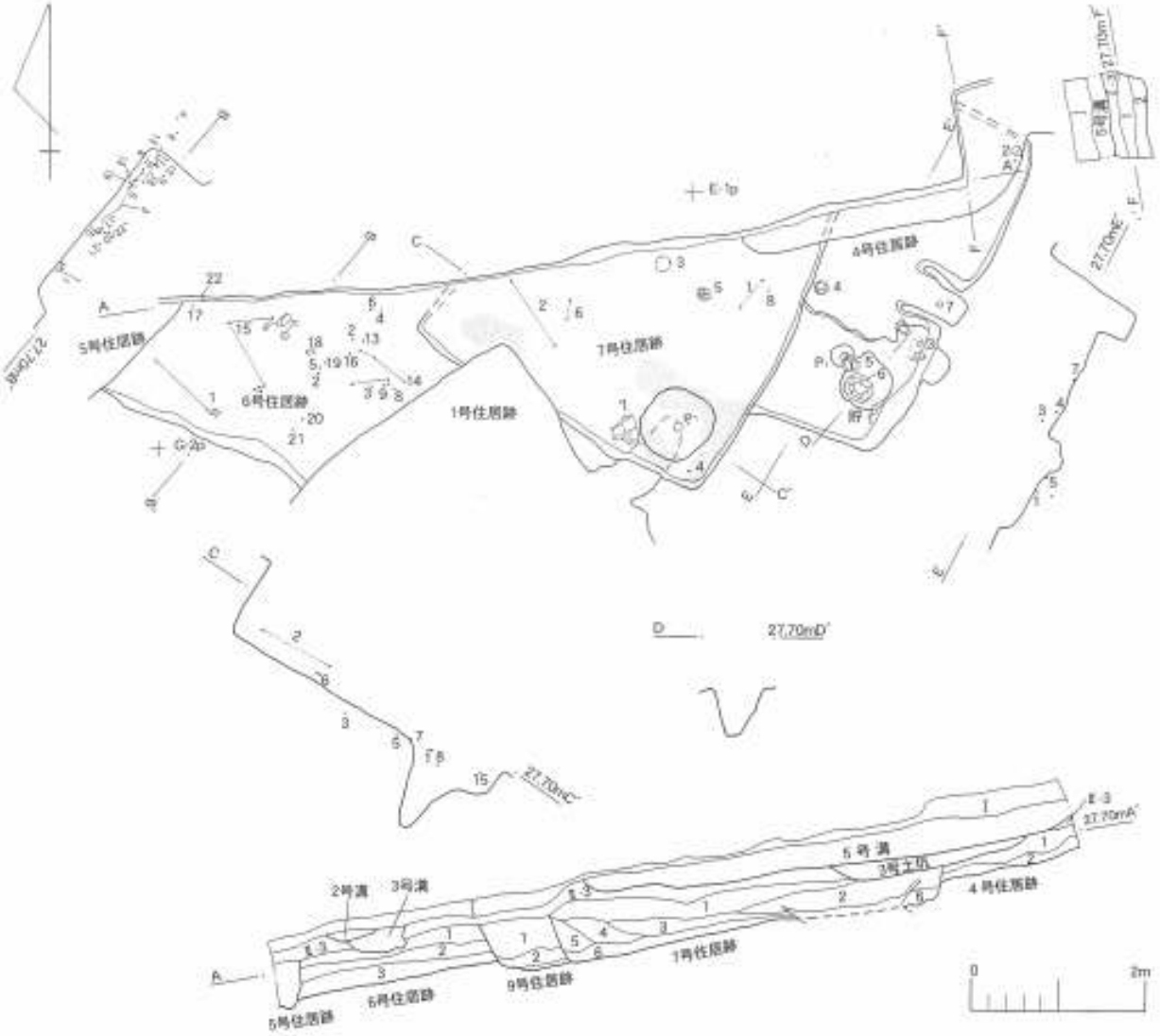
**床**　標高は27.22m～27.50mを測る。本住居跡の床面は、墳砂による荒れが著しく、確認が非常に困難であったが、南側より北側が高くなっていることは確認された。比高差は、0.2mを測るが、原因は不明である。貼床は見られないが、竈の前面および貯蔵穴の周囲は硬く踏み締められていた。周溝は、検出されなかった。

**柱穴**　柱穴は1個（$P_1$）検出された。貯蔵穴の西側に隣接して位置する。$P_1$の平面形態は円形を呈し、断面形態は皿形を呈す。規模は0.26m×0.24m、深さ0.15mを測る。

**竈**　東壁のほぼ中央に位置する。規模は、全長0.74m、最大幅0.60m、焚口幅0.38mを測り、煙道部は検出されなかった。遺存状況は悪い。主軸方位はN－115°－Eであり、住居跡の主軸方位と合致する。燃焼部は、住居跡東壁を0.3m、奥行0.12m掘り込んで構築されている。燃焼部の底面は、焚口に向かって徐々に低くなっている。また、燃焼部の中央からは、土製支脚が直立した状態で検出された。袖部は、暗褐色土と黒褐色土を用いて構築されている。袖部の内部は、やや内傾していると共に、表面から内側まで厚さ0.02m～0.04mで焼土化し、硬化している。袖部の平面形態は、焚口に向かって直線的に開く形を呈する。燃焼部および竈の前面には、灰と炭化物が混合して堆積する。厚さは0.02m～0.04mである。竈の覆土は、焼土粒・炭粒を含む黒褐色土が主となるが、部分的に多く含む。

**貯蔵穴**　本住居跡の東南、竈の南側に位置する。平面形態は円形、断面形態は擂鉢形を呈する。規模は、0.62m×0.54m、深さ0.53mを測る。覆土上部より土師器が潰れて出土している。

**遺物**　床より1・5（杯）、竈内より7（支脚）、貯蔵穴内より6（甕）、覆土中より2・3・4（杯）が出土している。




**4号住居跡覆土土層**

1 黄灰色土(0.5cmの炭粒、0.1cm大の砂粒を少量含有。)
2 暗灰黄色土(0.1cm大の炭粒・砂粒を少量含有。)

**6号住居跡覆土土層**

1 灰黄褐色土(0.2cm大の白色粒子・炭粒を少量含有。)
2 褐灰色土(0.2cm大の黄色土粒・白色粒子を少量含有。)
3 黄灰色土(0.2cm大の白色粒子、0.1cm大の焼土粒・炭粒を少量含有。)

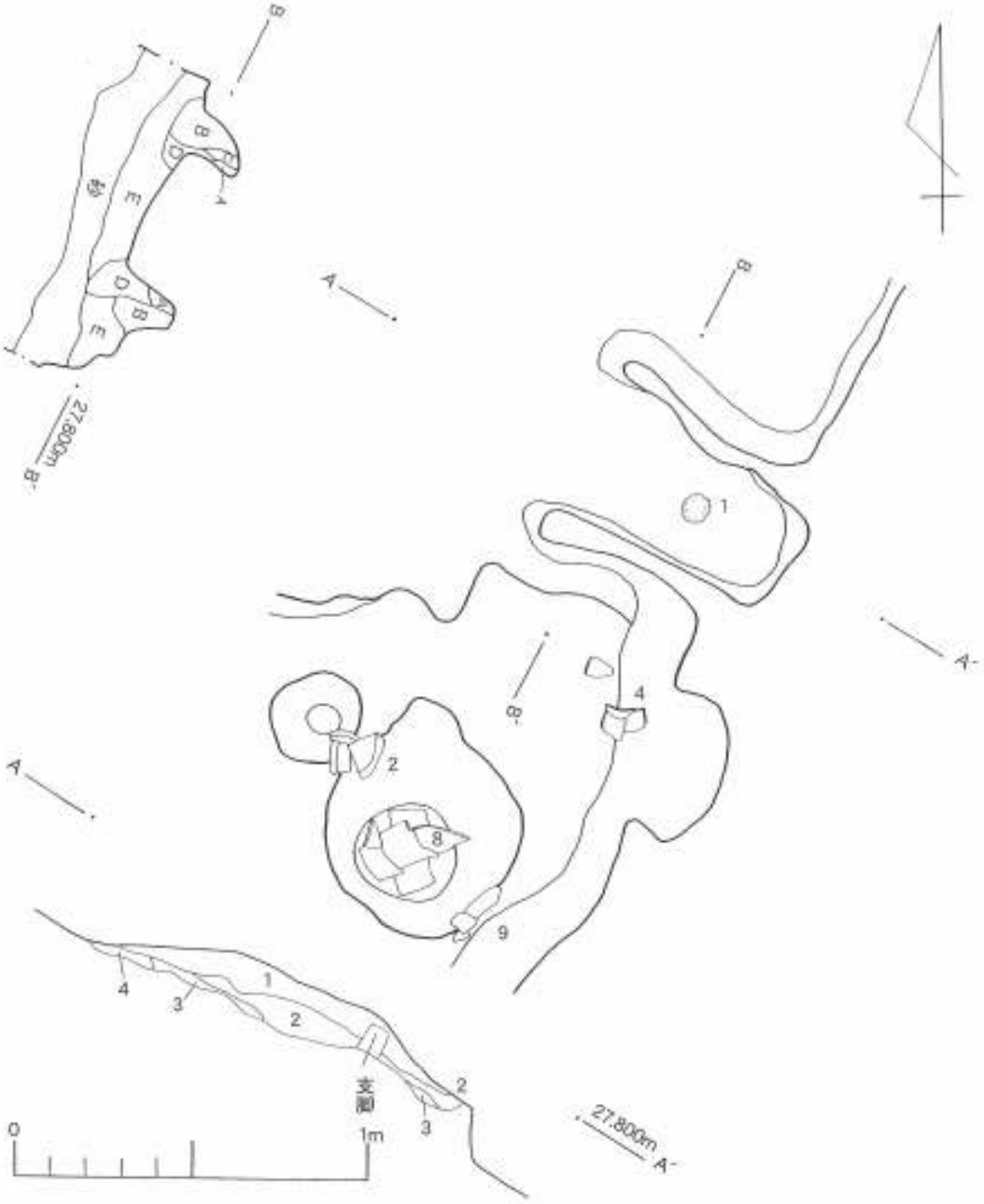
**7号住居跡覆土土層**

1 褐灰色土(砂粒・焼土粒を少量含有。)
2 黒褐色土(0.5cm大の炭粒・焼土粒を少量含有。)
3 黄灰色土(砂粒、0.1～0.5cm大の炭粒を少量含有。)
4 褐灰色土(0.1cm大の褐色粒子・炭粒・砂粒を少量含有。)
5 黄灰色土(0.1～0.3cm大の砂粒・炭化物を多量に含有。)
6 黒褐色土(0.1cm大の褐色粒子を少量含有。炭粒をごく少量含有。)

**9号住居跡覆土土層**

1 黄灰色土(0.1～0.2cm大の炭粒・焼土粒を少量含有。)
2 黄灰色土(0.1～0.3cmの炭粒・焼土粒・砂粒を少量含有。)
3 灰黄褐色土(0.2cm大の褐色粒子、0.1cm大の炭粒を少量含有。)

第66図　4・6・7・9号住居跡

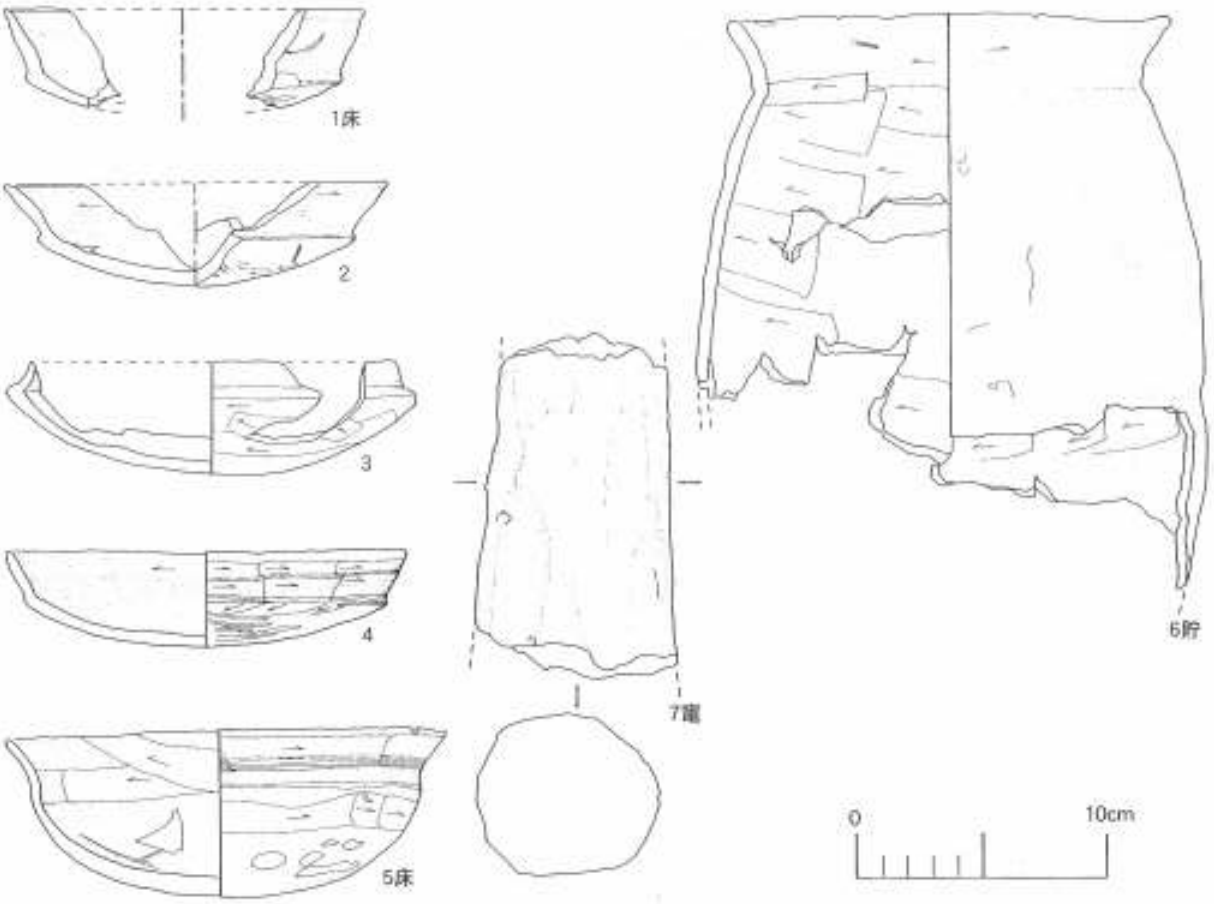



4号住居跡竈土層

1 黒褐色土(0.1cm大の焼土粒・炭粒を少量含有。)
2 炭化物層。
3 黒褐色土(砂を極めて多量に含有。埴砂とも考えられる。)
4 黒褐色土(0.1cm大以下の砂粒を少量含有。焼土粒・炭粒を多量に含有。)

A 橙色土(埴土化している。)
B 黒褐色土(炭粒・焼土・0.1cm大の茶褐色粒子を少量含有。)
C 黄褐色土(0.5～1cm大の褐色土粒を少量含有。)
D 暗褐色土(0.1cm大の炭粒を少量含有。)
E 黄褐色土(0.1cm大の白色粒子・砂粒を少量含有。)

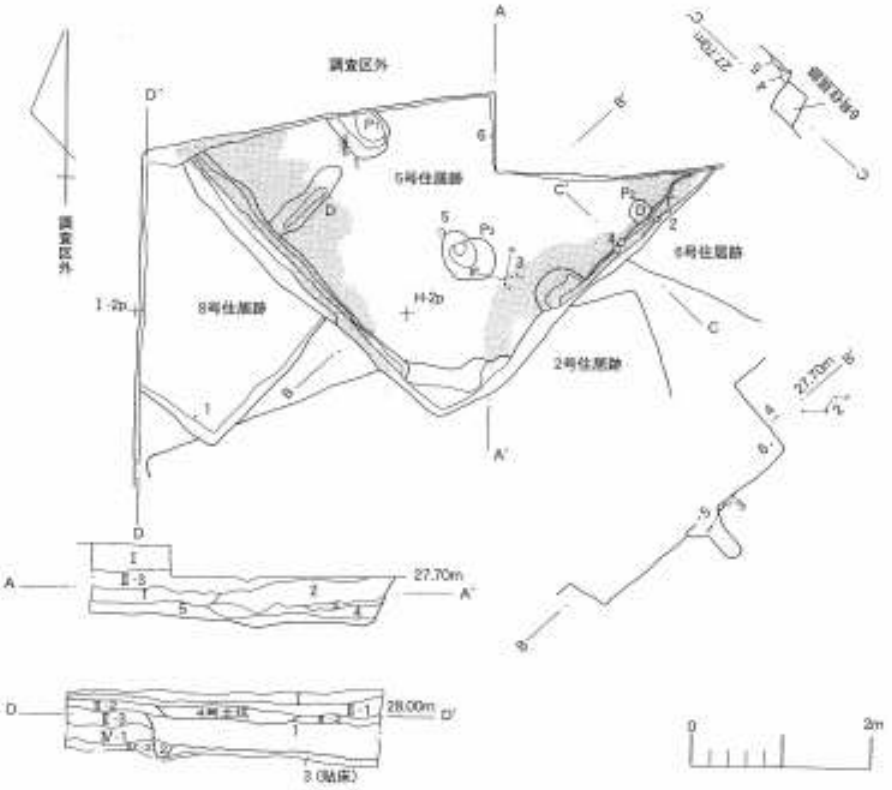
第67図　4号住居跡竈




第68図　4号住居跡出土遺物

表４　４号住居跡出土遺物観察表

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 68-1 | 杯<br>土師 | 床直 | 口径(14.0)<br>残高3.9<br><br>口縁部1/4残 | 胎：0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内5YR 8/4（淡橙色）<br>外10YR8/4(淡黄橙色) | 粘土紐の巻き上げ。明確な稜を経て、緩かな屈曲を持ちながら外傾する口縁部に至る。口唇部内面に沈線が巡る。 | 口縁部は「横撫で」と横方向の「撫で」。<br>体部は、「笠削り」 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は不明。 |
| 備考 | 体部外面に炭化がある。 | | | | | | |




**5号住居跡覆土土層**

1 黄灰色土(0.1～0.2cmの炭粒・黄色土粒・焼土粒を少量含有。)
2 灰色土(炭粒・黄色土粒・黒色土粒含有。)
3 黒色土(下方に炭化物・焼土粒を多量に含有。)
4 黄灰色土(1cm大の黄色土塊・炭粒含有。)
5 黄灰色土(黄色土塊・焼土を含有。)

**8号住居跡覆土土層**

1 褐灰色土(炭化物・焼土粒少量、黒色粒子・黄色土粒・白色砂粒を多量に含有。)
2 褐灰色土(黒色粒子を多量に含有。0.1cm大の炭粒を少量含有。)
3 黄橙色土(貼床。焼土粒を少量含有。)

**第69図　5号住居跡・8号住居跡**

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 胎質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 68-2 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(15.4)<br>器高4.3<br><br>口縁部1/4、<br>体部2/3残 | 胎：0.5大の黒色雲母粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR 7/4（にぶい橙色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>浅い丸底の体部より、明確な稜を経て、外傾する口縁部に至る。口唇部に段を持つ。 | 口縁部は「横撫で」後、下位に工具による「撫で」により稜を作る。<br>体部は、「箆削り」 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は不明。 |
| 備考 | 内面のほぼ全域が磨滅。 | | | | | | |
| 68-3 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径14.6<br>器高4.4<br><br>1/3残 | 胎：0.5～1.0大の黒色雲母粒、砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内2.5YR6/8（橙色）<br>外吸炭のため不詳。 | 粘土紐の巻き上げ。<br>浅い丸底の体部より、極めて明確な稜を経て、内傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」後、下位に「撫で」により稜を作る。<br>体部は「箆削り」 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 器体外面のほぼ全域、内面の1/3に著しい吸炭がある。 | | | | | | |
| 68-4 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径16.0<br>器高3.9<br><br>ほぼ完(口縁部一部欠) | 胎：1.0大の黒色雲母粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5Y7/6（橙色） | 浅い丸底の体部より、僅かな稜を経て、緩く外傾する口縁部に至る。 | 口唇部は、工具による横方向の「撫で」が、何段かに分けて施される。<br>体部は「箆削り」 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | 体部外面の一部に吸炭がある。内面のほぼ全域が磨滅。外面は細かく剥落。 | | | | | | |

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 68-5 | 杯<br>土師 | 底直 | 口径17.7<br>器高7.7<br><br>ほぼ完(口縁部一部欠) | 胎：0.8大の黒色雲母粒、0.1~0.4大の砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 6/6（橙色） | 粘土紐巻き上げ。<br>深い丸底の体部より、外反する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」と縦方向の「撫で」が施される。<br>体部は、上位においては、ほぼ横方向、下位においては不定方向の「笠削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>天部は「撫で」。 |
| 備考 | 体部内・外面のほぼ全域に炭化物がある。外面は大きく剥落。 | | | | | | |
| 68-6 | 長胴甕<br>土師 | 貯内 | 口径17.8<br>残高23.0<br><br>口縁部～胴部上半残。 | 胎：0.5~3.0大の砂粒、0.5大の赤色粒子少量含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5YR8/2（灰白色） | 粘土帯積み上げ。<br>張りの無い胴部上半より、緩く外反する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、「撫で」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、ほぼ横方向の「笠撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面の約1/2に炭化物がある。 | | | | | | |
| 68-7 | 支脚<br>土製品 | 竈内 | 現高13.8<br><br>上端部、下端部欠。 | 胎：砂粒を少量含有する粘土。<br>焼：普<br>色：10YR 8/4（浅黄橙色） | 手捏ね。<br>ほぼ円柱形を呈する。 | 縦方向の「笠削り」。 | |
| 備考 | | | | | | | |

**5号住居跡**（第69・70図）

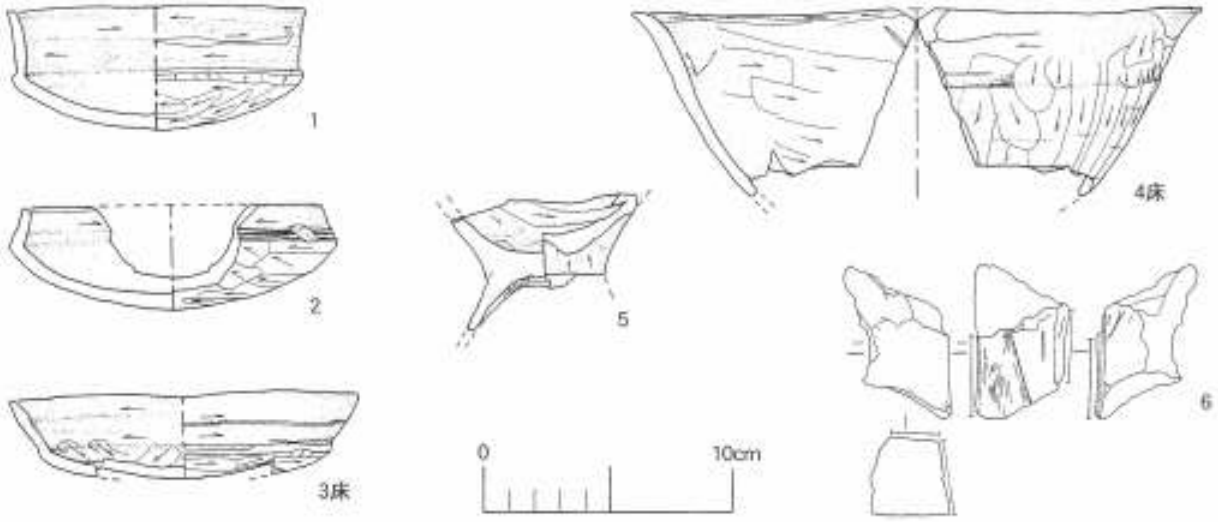
**竪穴**　5号住居跡は、調査区北西、F－1・G－1・G－2・H－1・H－2区に位置する。本住居跡は南東壁で2号住居跡と6号住居跡を、西南壁で8号住居跡を切っている。また、上部は5号土坑によって切られている。本住居跡は、北側がさらに調査区外に延びる。平面形態は不明であるが、方形あるいは長方形を呈すると考えられる。現存規模は、南東壁4.5m、西南壁4.0m、壁高0.40m～0.45mを測る。遺存状況は良好である。主軸方位は不明である。覆土は、5層に分かれる。1層は黄色粒子を含む黄灰色土、2層は黒色粒子を多く含む灰色土、3層は炭化物を層状に多く含む黒色土、4層は黄色粒子を含む黄灰色土、5層は焼土を多く含む黄灰色土である。さらに、床面の茅状炭化物上面には、火山灰と考えられる土が薄く堆積して出土している。

**床**　標高は27.4m～27.5mを測り、ほぼ水平であるが、南側にやや傾斜する部分も見られる。周溝は、南東壁・西南壁ともに見られるが、住居跡南東端には見られず、緩やかに落ち込む形になっている。南東壁の周溝は、幅0.11m～0.24m、深さ0.03m～0.04mを測り、断面形態は、U字形を呈する。西南壁の周溝は、幅0.08m～0.38m、深さ0.03m～0.1mを測り、断面形態は、U字形を呈する。本住居跡からは、間仕切りが西南壁側より検出された。平面形態は長楕円形を呈し、短軸の断面形態は浅皿形を呈する。規模は、幅0.3m～0.24m、長さ1.0m、深さ0.02m～0.04mを測る。間仕切りは、

西南壁にほぼ直交し、周溝と接しているが、連続はしていない。本住居跡の床面からは、茅状炭化物が出土している。茅状炭化物は、西南壁・南東壁に沿うように出土しているが、住居跡の中央部からは出土していない。床面から壁面に付着するように出土している状態は１号住居跡と類似している。１号住居跡と同様に、敷物と推測する説も出たが、不明確なために本報告では断定は避けた。

**柱穴**　柱穴３個（$P_1$・$P_2$・$P_3$）検出された。主柱穴は$P_3$であると考えられ、$P_1$・$P_2$は、本住居跡に伴うか不明である。$P_1$は北側が調査区外へ延びる。平面形態は長楕円形を呈すると考えられる。断面形態は、箱形を呈す。現存規模は、0.6m×0.5m、深さ0.4mを測る。$P_2$の平面形態は円形を呈し、断面形態は浅皿形を呈する。規模は0.22m×0.2m、深さ0.2mを測る。$P_3$の平面形態は楕円形を呈し、断面形態は円筒形を呈する。規模は0.64m×0.52m、深さ0.65mを測る。

**遺物**　床より３（杯）・４（鉢）、覆土中より１・２（杯）・５（台付甕）・６（砥石）・７（種子）が出土している。




第70図　5号住居跡出土遺物

## 表５　５号住居跡出土遺物観察表

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 胎質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 70-1 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(11.0)<br>器高5.0<br><br>1/3残。 | 胎：1.0大の黒色雲母粒、赤色粒子、白色粒子少量含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR 7/8（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。丸底の体部より、明確な稜を経て、緩く外傾する口縁部に至る。口唇部は、中央が僅かにくぼむが、ほぼ平坦である。 | 口縁部は「横撫で」の後、工具による横方向の「撫で」で稜を作る。<br>体部は、「筆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。の後、下位に横方向の「撫で」が施される。<br>体部は「撫で」。口唇部は、工具による、「撫で」を残らす。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 70-2 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(12.0)<br>器高4.2<br><br>1/2残。 | 胎：0.4大の赤色粒子を多量、0.1~0.5大の砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR 6/6（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。浅い丸底の体部より、稜を経て、内傾する口縁部に至る。 | 口縁部は、「横撫で」の後、工具による「撫で」により稜を作る。<br>体部は「筆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、「撫で」 |
| 備考 | 口縁部外面の一部に焼炭がある。 | | | | | | |
| 70-3 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(14.0)<br>残高3.4<br><br>口縁部1/4、体部一部残。 | 胎：0.1～0.2大の黒色雲母粒、白色粒子を含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR 7/6（橙色） | 粘土紐の巻き上げ。体部より、明確な稜を経て、緩く外傾する口縁部に至る。口縁部中位には、沈線を持つ。 | 口縁部は「横撫で」の後、工具による「撫で」により稜を作る。<br>体部は、下半部に「筆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」の後、筆状工具による「磨き」が施される。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 70-4 | 鉢<br>土師 | 床直 | 口径(23.0)<br>残高7.6<br><br>口縁部～体部1/4残。 | 胎：0.2～0.5大の黒色雲母粒、1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 8/1(灰白色) 外10YR8/2(灰白色) | 粘土帯積み上げ。緩く内彎気味に立ち上がる胴部より、緩やかに外反する口縁部に至る。口縁部と胴部の境には、僅かなへこみを持つ。 | 口縁部は「横撫で」の後、口縁部下位から胴部には、縦方向の「筆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>口縁部から胴部には「筆撫で」が施される。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 70-5 | 台付甕<br>土師 | 覆土 | 残高5.3<br><br>甕底部、脚部の一部残。 | 胎：0.5大の黒色雲母粒を多量、1.0大の白色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内5YR7/6(橙色)<br>外10YR8/2(灰白色) | 甕部に脚部をはめ込み接合部外面は粘土紐により補強される。<br>甕部は、接合部より緩やかに立ち上がる。 | 接合部は「撫で付け」。<br>甕部・脚部は不明。 | 甕部は「撫で」。<br>脚部は、筆状工具による「撫で付け」。 |
| 備考 | 甕部外面の1/3に焼炭がある。 | | | | | | |

| 番号 | 器種種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 70-4 | 砥石 石製品 | 覆土 | 最大長6.2<br>最大幅4.2<br>重量90g<br><br>破片残存。 | 軽石 | | | |
| 備考 | 使用痕は3面のみ残存。 | | | | | | |

**6号住居跡**（第66・71・72図）

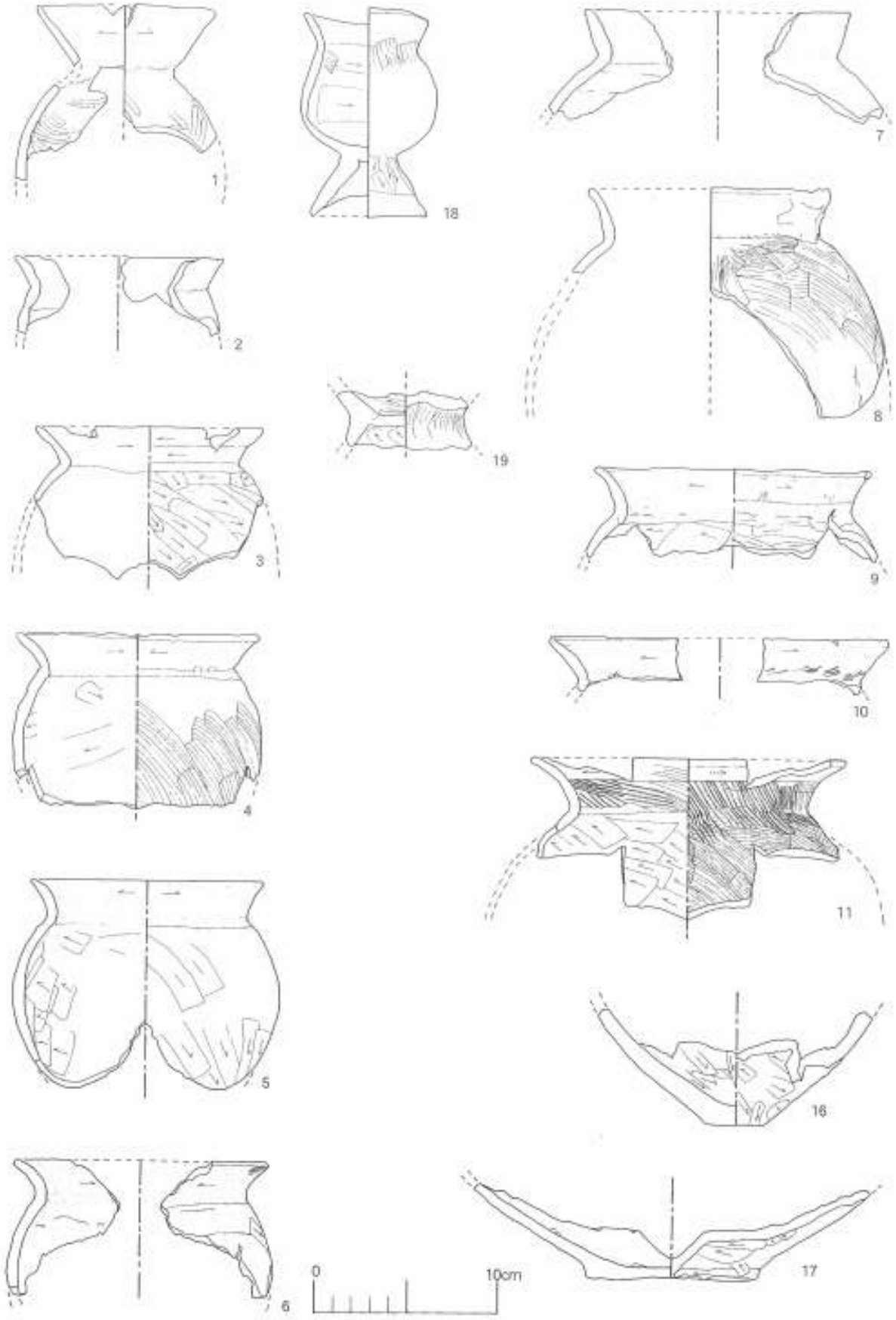
**竪穴**　6号住居跡は、F－1・G－1区に位置する。本住居跡は北西側で5号住居跡と、東側で1号住居跡および7号住居跡と切り合っている。また、上部を3号溝によって切られている。重複関係は6号住居跡→5号住居跡→7号住居跡→1号住居跡である。本住居跡は、北側がさらに調査区外へ延びている。現存規模は、西南壁が2.4m、壁高0.2mである。遺存状況は悪い。平面形態は、不明である。主軸方位は不明である。覆土は3層に分かれる。1層は白色粒子・炭粒を含む灰黄褐色土、2層は黄色土粒を含む褐灰色土、3層は焼土粒を含む黄灰色土である。

**床**　標高27.31m～27.42mを測り、南側へ傾斜している。貼床・周溝は検出されなかった。

**遺物**　覆土より1（坩）・2～9・12・14・15・17（壺）・10・11・16・22・23（甕）・13・18～21（台付甕）が出土している。

**表6　6号住居跡出土遺物観察表**

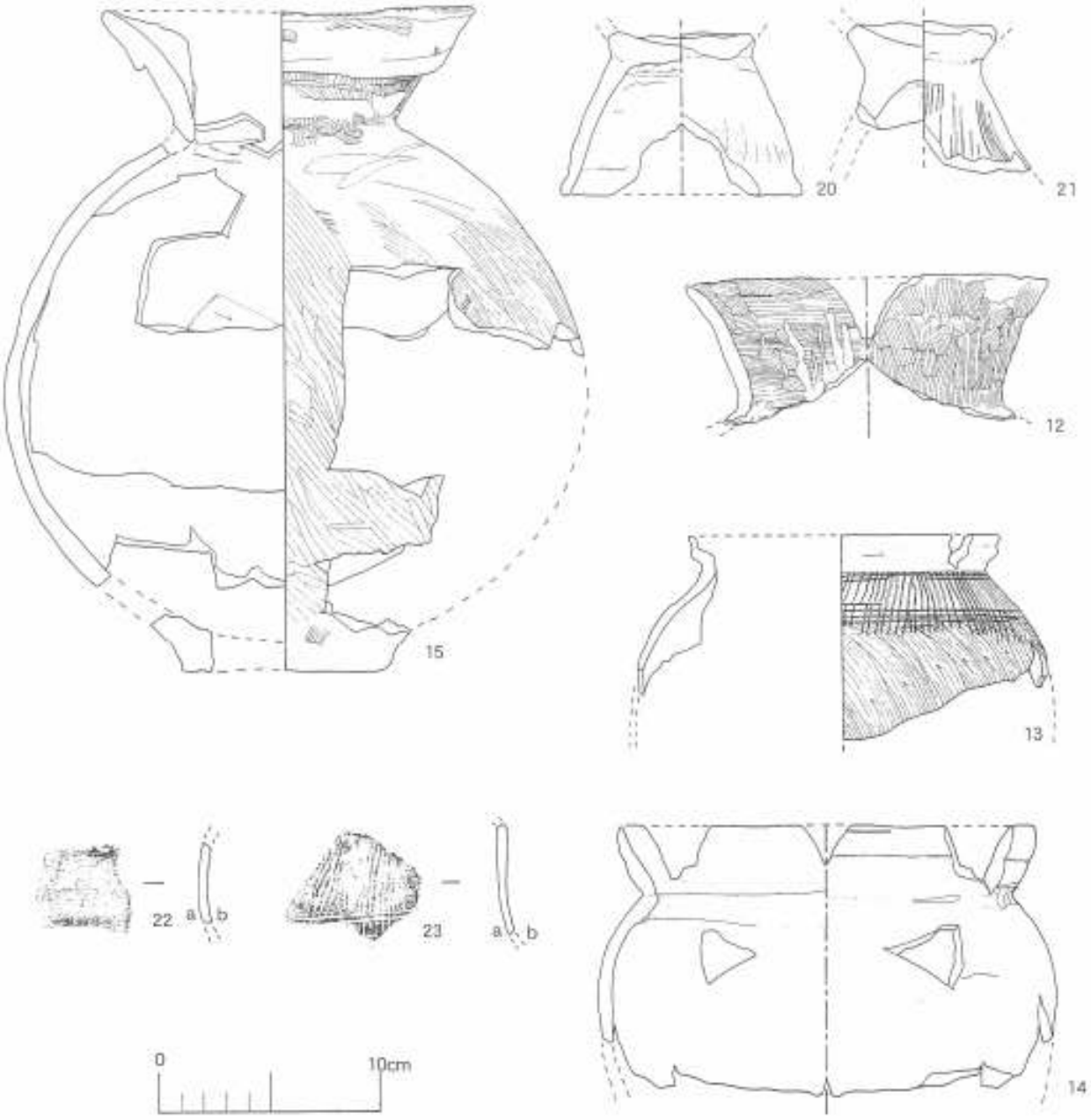
| 番号 | 器種種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 71-1 | 坩<br>土師 | 覆土 | 口径9.8<br>残高11.8<br><br>口縁部の一部欠、胴部上半2/3残。 | 胎：1.0~3.0大の砂粒を含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR 7/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>ほぼ球形を呈する胴部から、外傾する口縁部に至る。 | 口唇部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は、不定方向の「磨き」。 | 口縁部は、横方向の「撫で」。<br>胴部上位は、「撫で」、下位においては、工具による強い「撫で」が、横方向に施される。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 71-2 | 小型壺<br>土師 | 覆土 | 口径(11.4)<br>残高4.3<br><br>口縁部1/3、胴部一部残。 | 胎：0.3~1.0大の砂粒、赤色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 8/2（灰白色） | 粘土帯積み上げ。<br>胴部より、緩く外傾する口縁部に至る。口唇部は、ほぼ平坦である。 | 口縁部は、横方向の「撫で」。 | 口縁部は、横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 口縁部外面の一部が淡く煤炭。 | | | | | | |
| 71-3 | 小型壺<br>土師 | 覆土 | 口径(12.5)<br>残高8.4<br><br>口縁部～胴部上半1/3残。 | 胎：1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5YR8/3（浅黄橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸みを持って立ち上がる胴部より、外傾する口縁部に至る。口縁部は、中位で切り換えし、外位より著しく外傾する。 | 口縁部は「横撫で」。<br>頸部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は、斜位の「刷毛目」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、不明。 |
| 備考 | 器体内面のほぼ全面、外面の口縁部と胴部の一部が著しく炭化する。 | | | | | | |




第71図　6号住居跡出土遺物(1)

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 71-4 | 小型壺<br>土師 | 覆土 | 口径(14.4)<br>残高9.7<br><br>口縁部～胴部上半1/3残。 | 胎：0.1～0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 8/2（灰白色） | 粘土帯積み上げ。<br>ほぼ球形を呈する胴部より、僅かに外反する口縁部に至る。 | 口縁部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は、「刷毛目」。 | 口縁部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は、「撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 71-5 | 小型壺<br>土師 | 覆土 | 口径(12.8)<br>残高11.4<br><br>口縁部～胴部上半1/3残。 | 胎：0.2～0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 8/2（灰白色） | 粘土帯巻き上げ。<br>球形を呈する胴部より外反する口縁部に至る。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>頸部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は「笠撫で」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、「笠撫で」。 |
| 備考 | 胴部外面の全面に吸炭がある。 | | | | | | |
| 71-6 | 小型壺<br>土師 | 覆土 | 口径(14.0)<br>残高7.5<br><br>口縁部～胴部上位1/4残。 | 胎：0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 8/2（灰白色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸みを持つ胴部から外反する口縁部に至る。<br>口唇部は、矩形を呈する。 | 口縁部は「横撫で」後、頸部に横方向の「撫で」。<br>胴部は「撫で」。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>胴部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面の約1/2に吸炭がある。 | | | | | | |
| 71-7 | 壺<br>土師 | 覆土 | 口径(14.4)<br>残高6.2<br><br>口縁部～胴部上位1/4残。 | 胎：1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 8/2（灰白色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸みを持つ胴部から外傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」後、頸部に横方向の「撫で」。<br>胴部は「撫で」 | 口縁部は、「横撫で」。<br>胴部は、「撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 71-8 | 壺<br>土師 | 覆土 | 口径(12.9)<br>残高12.5<br><br>口縁部1/2、胴部1/4残。 | 胎：0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 8/2（灰白色） | 粘土帯積み上げ。<br>ほぼ球形を呈する胴部より、緩く外傾する口縁部に至る。口唇部に丸みを持つ。 | 口縁部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は、斜位の「刷毛目」。 | 口縁部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は、「笠撫で」。 |
| 備考 | 胴部外面の一部に吸炭がある。口縁部外面に粘土が付着している。 | | | | | | |
| 71-9 | 壺<br>土師 | 覆土 | 口径(15.1)<br>残高4.5<br><br>口縁部1/2、胴部極一部残。 | 胎：0.5～3.0大の砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 8/2（灰白色） | 粘土帯積み上げ。<br>胴部より、緩く外反する口縁部に至る。外反は、上位において、著しくなる。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>胴部は、「撫で」 | 口縁部は、「横撫で」。<br>胴部は、「笠撫で」。 |
| 備考 | 胴部内面と外面の一部に吸炭がある。 | | | | | | |
| 71-10 | 甕<br>土師 | 覆土 | 口径(18.6)<br>残高3.1<br><br>口縁部1/4残。 | 胎：1.0大の赤色粒子、0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR 8/3（淡黄色） | 粘土帯積み上げ。<br>口縁部は外反し、口唇部は、矩形を呈する。口縁部上位内面に僅かなへこみを持つ。<br>外面に焦跡が残る。 | 横方向の「撫で」。 | 横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 口縁部外面の上位が吸炭。外面頸部付近に工具痕残存。 | | | | | | |
| 71-11 | 甕<br>土師 | 覆土 | 口径(17.6)<br>残高8.8<br><br>口縁部1/2、胴部上半一部残。 | 胎：0.1以下の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 8/3（浅黄橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸みを持つ胴部より、外反する口縁部に至る。<br>口唇部は、矩形を呈する。 | 胴部は、不定方向の「刷毛目」後、口縁部よりの左上→右下への強い「刷毛目」と交差する。<br>口縁部上位は、「刷毛目」の上を「横撫で」。 | 口縁部は、斜位の「刷毛目」後、上位に「横撫で」。<br>胴部は、右下→左上への「笠撫で」後、頸部に余った粘土を「撫で付け」。 |
| 備考 | | | | | | | |

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 72-12 | 壺<br>土師 | 覆土 | 口径(16.0)<br>残高6.6<br><br>口縁部1/4残。 | 胎：1.0大の黒色雲母粒。赤色粒子、砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/6(橙色) | 粘土帯積み上げ。<br>緩やかに外反する。 | 横方向の密な「刷毛目」。 | ほぼ縦方向の密な「刷毛目」。 |
| 備考 | 内外面の一部が著く吸炭。 | | | | | | |
| 72-13 | S字甕<br>土師 | 覆土 | 口径14.0<br>残高10.0<br><br>口縁部～胴部上半1/2残。 | 胎：1.0～2.0大の砂粒を極めて多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5Y 8/1.5（灰白色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸みを持つ胴部より、下段で外反し、上段で僅かに外傾するS字状の口縁部に至る。口唇部は、ほぼ平坦である。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>頸部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は、下位で右下→左上への「刷毛目」、上位で右上→左下への「刷毛目」後、頸部と肩部に横方向の「刷毛目」が巡る。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>胴部は、不明。 |
| 備考 | 接合はできないが、同一個体の脚部(極一部残)を持つ。 | | | | | | |
| 72-14 | 壺<br>土師 | 覆土 | 口径(19.0)<br>残高12.5<br><br>口縁部～胴部上半1/3残。 | 胎：0.1～0.2大の砂粒、0.1大の黒色母雲粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内7.5YR7/4（にぶい橙色）外吸炭のため不詳。 | 粘土帯積み上げ。<br>ほぼ球形を呈する胴部より、中位に段を持ち内彎する口縁部に至る。 | 口縁部、頸部には、横方向の「撫で」。<br>胴部には、「笠撫で」。 | 口縁部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は、「笠撫で」。 |
| 備考 | 器体外面の全面、内面の一部が著しく吸炭。 | | | | | | |
| 72-15 | 壺<br>土師 | 覆土 | 口径17.0<br>底径9.7<br>器高30.3<br><br>口縁部～胴部約1/2、底部極一部残。 | 胎：0.1～2.5大の砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内2.5YR 6/8（橙色）外2.5YR5/8（明赤褐色） | 粘土帯積み上げ。<br>平底より、ほぼ球形を呈する胴部を経て、緩く外反する口縁部に至る。口縁部上位は、折り返し口縁を呈する。 | 口縁部は、「刷毛目」後、折り返し部に横方向の「撫で」。口唇部に、「刺突」が施される。<br>胴部は、「刷毛目」後、上→下への「磨き」。<br>底部は不明。 | 口縁部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は、「笠撫で」。 |
| 備考 | 底部に吸炭。 | | | | | | |
| 72-16 | 甕<br>土師 | 覆土 | 底径(3.2)<br>底径6.2<br><br>底部～胴部下位約1/2残。 | 胎：1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内10YR 7/2（にぶい黄橙色）外10YR8/3（浅黄橙色） | 不明。<br>平底より、僅かに内彎気味に立ち上がる。 | 胴部は、「笠撫で」<br>底部は、不詳。 | 「笠撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面に吸炭がまだらにある。 | | | | | | |
| 72-17 | 壺<br>土師 | 覆土 | 底径9.4<br>残高5.2<br><br>底部一部欠、胴部下位1/3残。 | 胎：0.5～1.0大の砂粒、1.0大の赤色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内2.5YR 7/2（灰黄色）外吸炭、赤化のため不詳。 | 粘土帯積み上げ。<br>平底より、緩やかに立ち上がる。 | 胴部は、「笠撫で」。<br>底部は、不定方向の「笠削り」。 | 「笠撫で」。 |
| 備考 | 器内面の1/3、外面の一部に吸炭がある。器体外面の赤化が著しい。 | | | | | | |
| 72-18 | 小型台付甕<br>土師 | 覆土 | 口径6.7<br>接合部径3.0<br>最径6.7<br>器高11.5<br><br>ほぼ完(脚部の一部欠) | 胎：0.5～1.5大の砂粒を多量、1.0大の黒色雲母粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 8/2（灰白色） | 粘土帯積み上げ。口唇部は、指により、押圧、胴部に甕部を乗せ、外面を上→下への「撫でつけ」により接合。円錐台形の脚部より、下位に最大径を持つ胴部を経て、外傾気味に広く口縁部に至る。 | 頸部は、縦方向の「刷毛目」。胴部下位は、「笠撫で」。接合部は、上→下への「撫で付け」。裾部は、横方向の「撫で」。 | 口縁部は、横方向の「笠撫で」。胴部は、不定方向の「笠撫で」。<br>脚部上位は、縦方向の「笠撫で」。下位は、横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 器体外面の磨滅は著しい。 | | | | | | |
| 72-19 | 台付甕<br>土師 | 覆土 | 接合部径6.1<br>残高3.1<br><br>接合部のみ残 | 胎：0.5～3.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 8/4（浅黄橙色） | 甕部と脚部を接合。 | 縦方向の「刷毛目」。 | 「撫で」。 |
| 備考 | 甕部底面に吸炭がある。 | | | | | | |




第72図　6号住居跡出土遺物(2)

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 胎質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 72-20 | 台付甕<br>土師 | 覆土 | 接合部径6.5<br>底径(11.0)<br>残高7.5<br><br>接合部,脚部1/3残。 | 胎：1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5YR8/3（浅黄橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>接合部より,膨らみをもって開き,胴部で僅かに切り返して開く。 | 脚部下位～胴部へ縦方向の「刷毛目」後,胴部に横方向の「撫で」。 | 横方向の「箆撫で」。 |
| 備考 | 甕部底面に炭化がある。内外面は,磨滅。 | | | | | | |

| 番号 | 器種・種類 | 位置 | 法量(cm) | 胎質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 72-21 | 台付甕 土師 | 覆土 | 接合部径5.2 残高7.0<br>接合部、脚部1/3残(脚部欠) | 胎：1.0～3.0大の大粒の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 不明。<br>接合部より、ほぼ直線的に開く。 | 接合部～脚部には、縦方向の「刷毛目」。 | 脚部上位は「撫で」、下半には、「刷毛目」。 |
| 備考 | 脚部底面に吸炭がある。内外面ともに、摩滅が著しい。 | | | | | | |
| 72-22 | 甕 土師 | 覆土 | 器厚0.40～0.45<br>胴部破片 | 胎：0.1～0.2大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内7.5YR8/3（浅黄橙色）外吸炭のため不詳。 | | 「刷毛目」。 | |
| 備考 | 外面に吸炭がある。 | | | | | | |
| 72-23 | 甕 土師 | 覆土 | 器厚0.30～0.45<br>胴部上位破片 | 胎：0.1大の砂粒、0.1～0.5大の赤色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR 7/6（橙色） | 粘土帯積み上げ。 | 縦方向の「刷毛目」、平行線文。 | |
| 備考 | | | | | | | |

**7号住居跡**（第66・73図）

**竪穴**　7号住居跡は、調査区北側、D－1・E－1区に位置する。本住居跡は西壁で9号住居跡および6号住居跡を切り、東壁で4号住居跡を切っている。また、南壁の一部を1号住居跡により切られ、上部東側を3号土坑によって切られている。本住居跡は、北側がさらに調査区外へ延びている。平面形態は不明であるが、方形あるいは長方形を呈すると考えられる。現存規模は、東壁3.2m、南壁3.6m、西壁0.6m、壁高0.4m～0.6mを測る。遺存状態は良好である。主軸方位は、不明である。覆土は6層に分かれる。1層は砂粒・焼土粒を含む褐灰色土、2層は炭粒・焼土粒を含む黒褐色土、3層は砂粒・炭粒を含む黄灰色土、4層は褐色粒子を含む褐灰色土、5層は炭化物を多く含む黄灰色土、6層は褐色粒子を含む黒褐色土である。

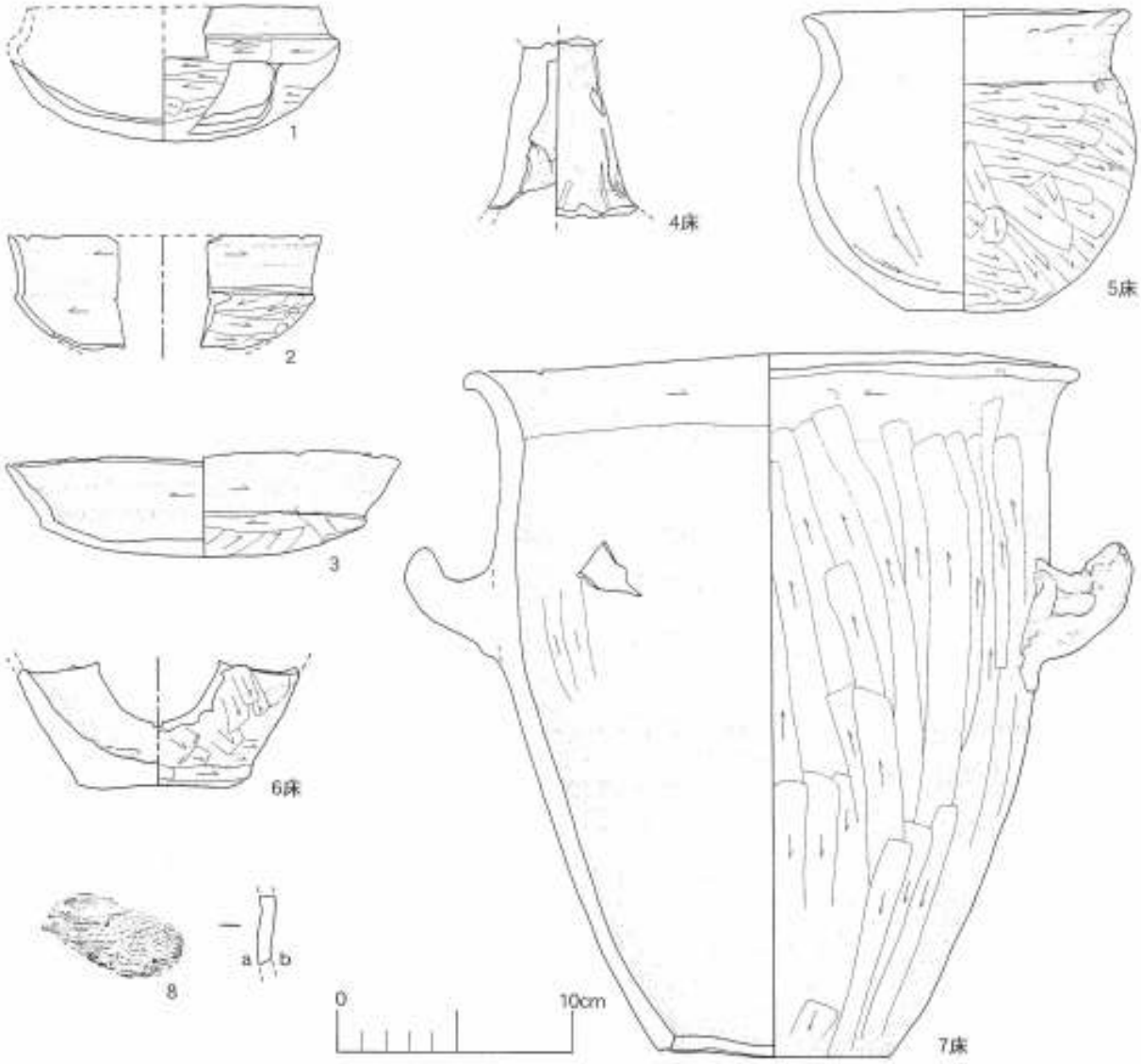
**床**　標高は27.21m～27.32mを測る。ほぼ平坦であるが、住居跡中央部がやや隆起する。貼床・周溝は検出されなかった。本住居跡の床面からは炭化物が出土している。炭化物は、住居跡西壁および柱穴$P_1$周囲に集中して出土し、部分的には床面から壁面にかけて付着している。特に、柱穴周囲の炭化物は厚く堆積している。

**柱穴**　柱穴は1個（$P_1$）検出された。$P_1$の平面形態は円形を呈し、断面形態は漏斗形を呈する。規模は、0.82m×0.74m、深さ0.88mを測る。覆土は炭化物を多く含む。

**遺物**　床より4（高杯）・5（壺）・6（甕）・7（甑）、覆土中より1・2・3（杯）・8（器種不明）が出土している。

## 表７　７号住居跡出土遺物観察表

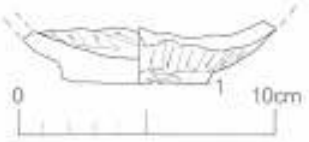
| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 73-1 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(12.4)<br>器高5.7<br><br>口縁部1/4残,<br>体部1/2残 | 胎：0.5～1.0大の砂粒、0.2大の黒色雲母粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/6（橙色） | 粘土紐巻き上げ。<br>深い半球状を呈する体部より明確な稜を経て緩やかに内傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に横方向の「撫で」により、稜を作る。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | 口縁部外面が、まだらに淡く吸炭。内外面が磨滅する。 | | | | | | |
| 73-2 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径(13.3)<br>残高5.8<br><br>口縁部1/4残 | 胎：0.1～0.3大の黒色雲母粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内7.5YR8/3（浅黄橙色）外2.5YR6/8（橙色） | 明確な稜を経て、僅かに外傾する口縁部に至る。<br>口唇部は、ほぼ平坦である。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に工具による横方向の「撫で」により、稜を作る。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 73-3 | 杯<br>土師 | 覆土 | 口径17.0<br>器高4.4<br><br>完 | 胎：0.5大の黒色雲母粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外吸炭のため不詳。 | 浅い偏平状の体部より稜を経て、僅かに屈曲しながら外傾する口縁部に至る。口唇部は、僅かにくぼみをもち平坦である。 | 口縁部は「横撫で」の後、下位に工具による横方向の「撫で」により、稜を作る。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | 内外面のほぼ全面が吸炭。内面の剥落は、特に著しい。 | | | | | | |
| 73-4 | 高杯<br>土師 | 床直 | 残高7.7<br><br>脚部残 | 胎：0.1～0.5大の砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/6（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>ほぼ直線的に広く脚部より、緩やかに広がる裾部に至る。 | 脚部は縦方向の強い「箆撫で」。 | 脚部は、横方向の「箆撫で」。 |
| 備考 | 外面が磨滅する。 | | | | | | |
| 73-5 | 小型壺<br>土師 | 床直 | 口径14.0<br>底径5.3<br>器高13.0<br><br>ほぼ完(胴部の一部欠) | 胎：0.2～1.0大の砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>平底より、ほぼ球形を呈する胴部を経て、緩かに外反する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は「箆削り」。<br>底部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は「箆撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 73-6 | 甕<br>土師 | 床直 | 底径(7.0)<br>残高5.4<br><br>底部～胴部下位1/4残。 | 胎：2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外吸炭のため不詳。 | 不明。<br>ほぼ平坦な底部より、滑らかに立ち上がる胴部に至る。 | 胴部は「箆削り」。 | 不明。 |
| 備考 | 器体内外面のほぼ全面に吸炭。底部に木葉痕。 | | | | | | |
| 73-7 | 甑<br>土師 | 床直 | 口径26.1<br>孔径9.8<br>器高30.1<br><br>ほぼ完。 | 胎：0.5～2.0大の砂粒、1.0大の白色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR8/3（淡黄橙色） | 粘土帯の積み上げ。把手部は「手捏ね」。<br>孔部より張りを持たない胴部を経て、外反する口縁部に至る。口唇部は、不整形である。 | 口縁部は「横撫で」後、口唇部を「撫で」「撫で付け」等により作り出されている。<br>胴部は、縦方向の「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は「箆撫で」。 |
| 備考 | 胴部下位外面の一部に著しい吸炭、器体の内外面の大部分に淡い吸炭。 | | | | | | |
| 73-8 | 土師 | 覆土 | 器厚0.5～0.6<br><br>胴部破片 | 胎：0.2～0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR8/2（灰色） | | ほぼ横方向の「刷毛目」。 | 不明。 |
| 備考 | | | | | | | |




第73図　7号住居跡出土遺物

**8号住居跡**（第69・74図）

**竪穴**　8号住居跡は、調査区北西端、H－1・H－2区に位置する。本住居跡は東南側で2号住居跡を切っている。また、本住居跡は東側を5号住居跡によって切られ、上部を4号土坑によって切られている。重複関係は、2号住居跡→8号住居跡→5号住居跡→4号土坑である。本住居跡は、西側と北側がさらに調査区外へ延びている。平面形態は不明であるが、方形あるいは長方形を呈すると考えられる。現存規模は、東南壁1.9m、南壁1.0mを測る。壁高は、0.32m～0.51mを測る。遺存状況は良好である。主軸方位は、不明である。覆土は、主として11層のみであり、褐灰色土である。




第74図　8号住居跡出土遺物

**床**　標高27.5m~27.66mを測り、北にやや傾斜する。貼床は、にぶい黄橙色土を厚さ0.5cm～10cmで貼っている。周溝は西南壁側に見られる。規模は、幅0.2m、深さ0.14mを測る。本住居跡では、柱穴・竈・貯蔵穴は検出されなかった。

**遺物**　覆土中より１（甕）が出土している。

表８　８号住居跡出土遺物観察表

| 番号 | 器種 種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 74-1 | 甕 土師 | 覆土 | 底径5.7<br>残高2.5<br><br>底部～胴部下位一部残。 | 胎：1.0~3.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5YR7/3（にぶい橙色） | 平底より立ち上がる。 | 胴部～底部は、縦方向の「箆削り」。 | 「箆撫で」。 |
| 備考 | 内面の一部が炭化。 | | | | | | |

**９号住居跡**（第66図）

**竪穴**　9号住居跡は、調査区北側、Ｆ－１区に位置する。本住居跡は、調査区北壁土層によってのみ確認された。本住居跡は、西壁を６号住居跡に切られ、東壁を７号住居跡によって切られている。本住居跡は、北側がさらに調査区外へ延びる。平面形態は不明である。壁高は、0.6mを測る。覆土は３層に分けられる。１層は炭粒・焼土を含む黄灰色土、２層は砂粒を含む黄灰色土、３層は炭粒を含む灰黄褐色土である。

**床**　標高は27.28m～27.30mを測り、ほぼ水平である。周溝・貼床は検出されなかった。

**遺物**　出土していない。

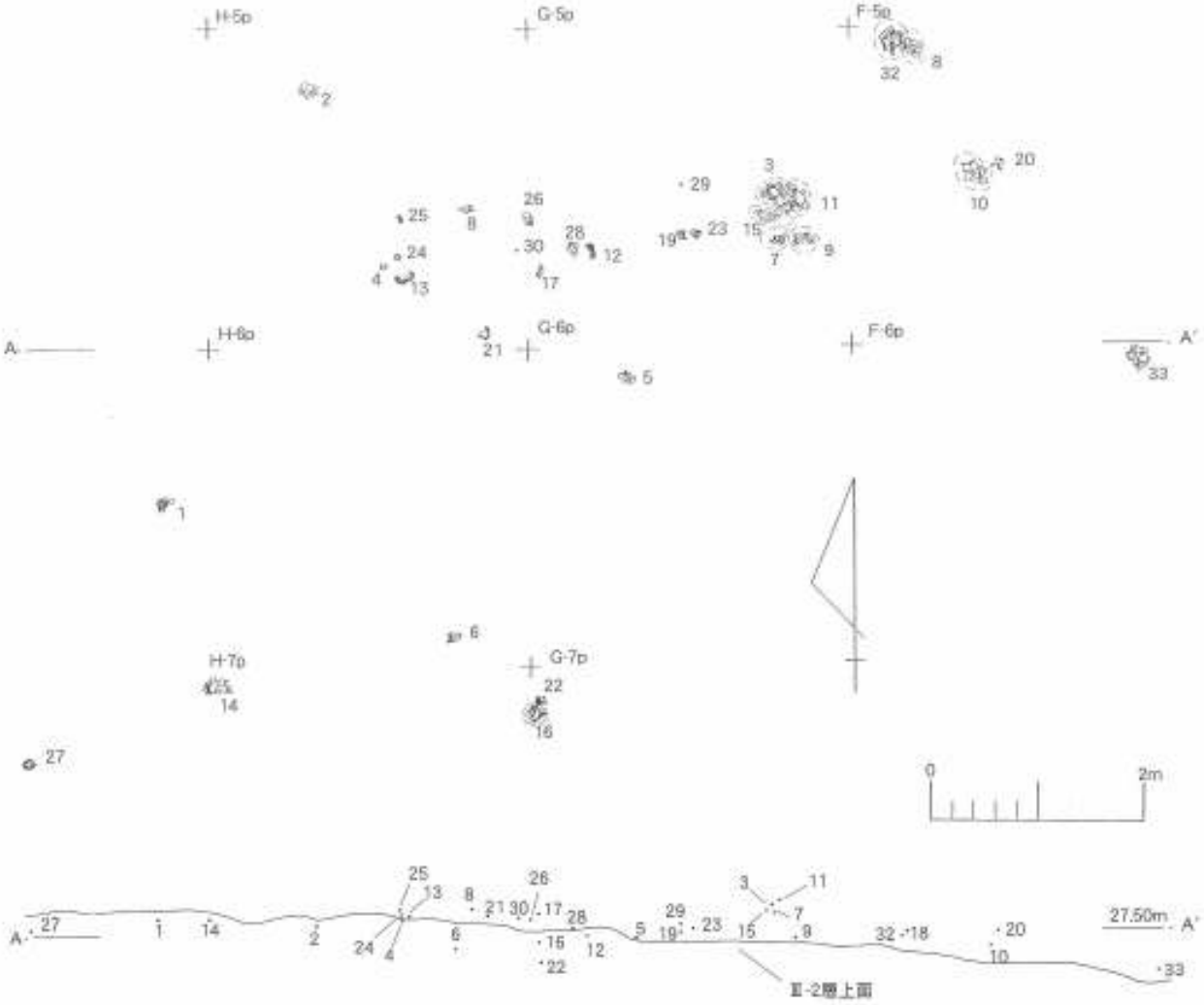
## 2. 遺構外出土の遺物

### イ. 土師器－集中区出土土師器（第75～77図）

入川遺跡の遺構外出土土師器のうち，調査区西南側，E－4・E－5・E－6・F－4・F－5・F－6・F－7・G－5・G－6・G－7・H－5・H－6・H－7区から集中して出土した土師器群は，土師器集中区出土土師器として分けて扱う。他の遺構外出土土師器とは，明らかに出土状況・性格が異なり，遺構は伴わないが，一群にまとめて扱う必要があると考えられたためである。

また，本稿でとりあげた33点は，土師器集中区から出土した土師器片を接合し，検討の結果，報告の必要があると判断された資料である。

土師器集中区は，旧地形の平坦部から傾斜への変換点に位置している。土師器集中区の北側が旧地




第75図　土師器集中区

形の平坦部にあたり、古墳時代の集居跡群が存在する。調査時には、土師器の分布状況が著しく密であったために、溝・住居跡などの遺構の存在を考慮し、特に入念に精査を重ねた。しかし、遺構の存在は確認されず、土師器が8m×3mの幅で、北東から西南へ延びる帯形を呈して密な分布をしていた。土師器の分布は、旧地形の等高線にほぼ沿っている。特に、E－5・F－5・G－5区には密な分布が見られる。しかし、G－6・G－7・H－6・H－7区は比較的に分布が疎である。出土層位は、基本土層第Ⅲ－1層であり、層内下部に集中して出土している。

土師器集中区から出土した土師器には、古墳時代の古い時期の土師器の特徴を示す資料が多い。同時期の土師器を出土する遺構には、6号住居跡がある。6号住居跡は、調査区北側、土師器集中区の約10m北に位置する。土師器集中区と6号住居跡の関係は不明である。土師器集中区から出土した遺物は土師器のみであり、各土師器はあまり時期差がないと考えられることも特徴である。

土師器集中区の性格は、現在のところ不明である。しかし、旧地形における出土位置・特異な出土状況・出土土師器の時期や内容などから、何らかの人為的な要因（遺棄・破棄・祭祀関係など）が影響している可能性が高いと考えられる。ただし、土師器集中区が自然的な要因で形成された可能性もあるため本報告では断定は避けておく。

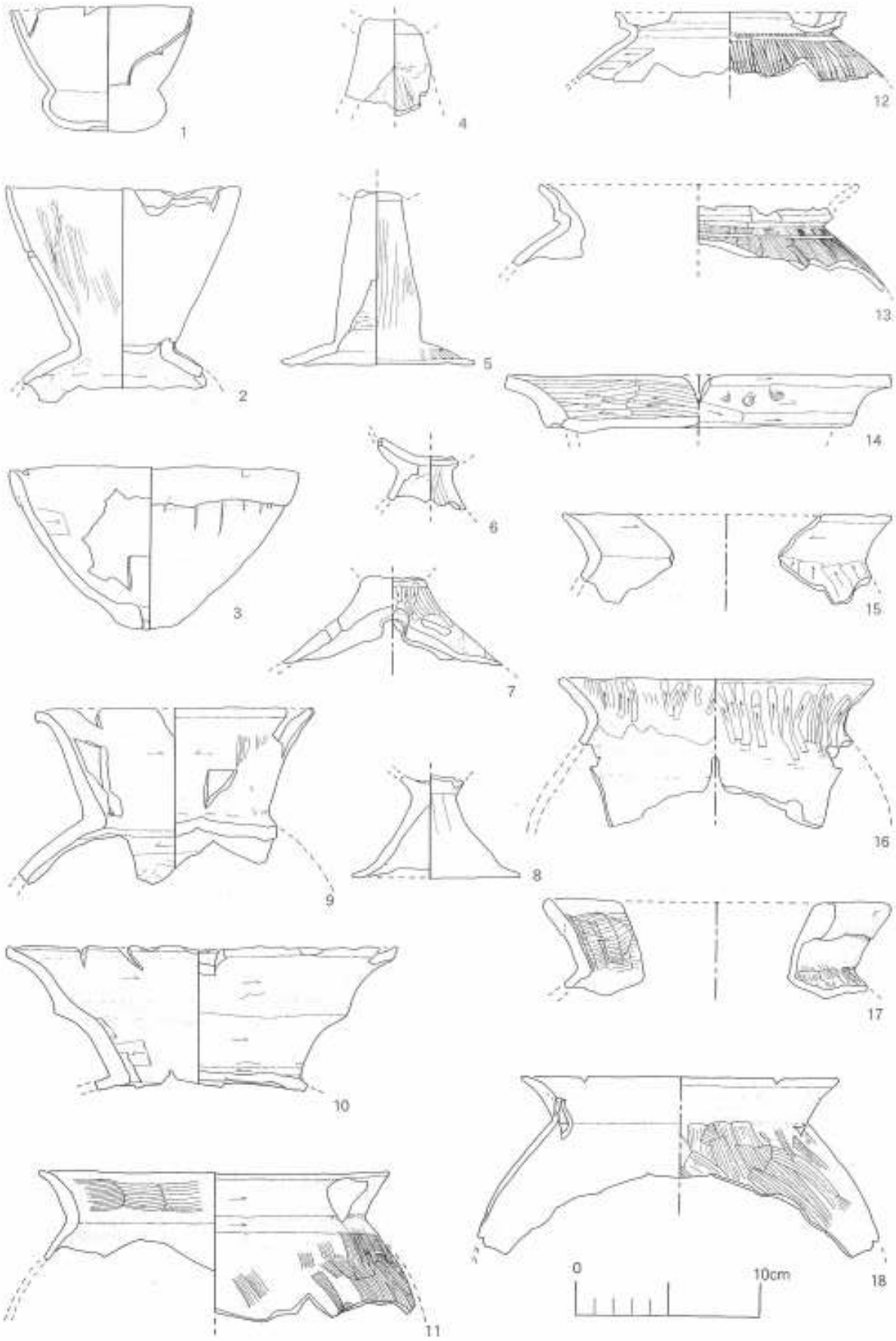
**遺物**　1・2（坩）、3・22（甑）、4・5・7・8・33（高 坏）、9・23（壺）、10・11・14～21・31・32（甕）、12・13・24～30（台付甕）

**表9　土師器集中区出土遺物観察表**

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 76-1 | 坩<br>土師 | | 口径(10.0)<br>器高6.8<br><br>ほぼ完(口縁部1/2欠) | 胎：0.5～1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR7/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>扁平した球形を呈する胴部より、内彎しながら立ち上がる口縁部に至る。底部の中央部にくぼみを持つ。 | 口縁部は横方向の「撫で」。<br>胴部は不明 | 口縁部・胴部には、横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 外面の約1/3が吸炭。内外面とも著しく磨耗。 | | | | | | |
| 76-2 | 坩<br>土師 | | 口径12.7<br>残高11.7<br><br>口縁部(一部欠)胴部上位の一部残 | 胎：0.1大の砂粒を多量、1.0大の赤色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR8/2（灰白色） | 粘土帯積み上げ。<br>胴部より、直線的に開き、上位において僅かに内彎する口縁部に至る。 | 口縁部の一部に横方向の「撫で」が確認できる。<br>胴部は不明。 | 口縁部は、横方向の「撫で」後、縦方向の「磨き」が施される。<br>胴部は不明。 |
| 備考 | 口縁部内外面の上位の一部が吸炭。 | | | | | | |
| 76-3 | 小型甕<br>土師 | | 口径15.5<br>底径3.5<br>器高8.7<br><br>ほぼ完(胴部1/4欠) | 胎：1.0～2.5大の砂粒を粗多量、1.0大の赤色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。上位に粘土帯を張り、折り返し口縁とする。孔は、内面より回転穿孔。<br>単孔を持つ底部より、直線的に開き、折り返し口縁に至る。 | 口縁部・胴部には弱い「撫で」。<br>底部は「撫で付け」が施され、余剰した粘土を孔の内面に張り付ける。 | 「笹撫で」。 |
| 備考 | 内面下位の一部が吸炭。内面が著しく磨耗。 | | | | | | |

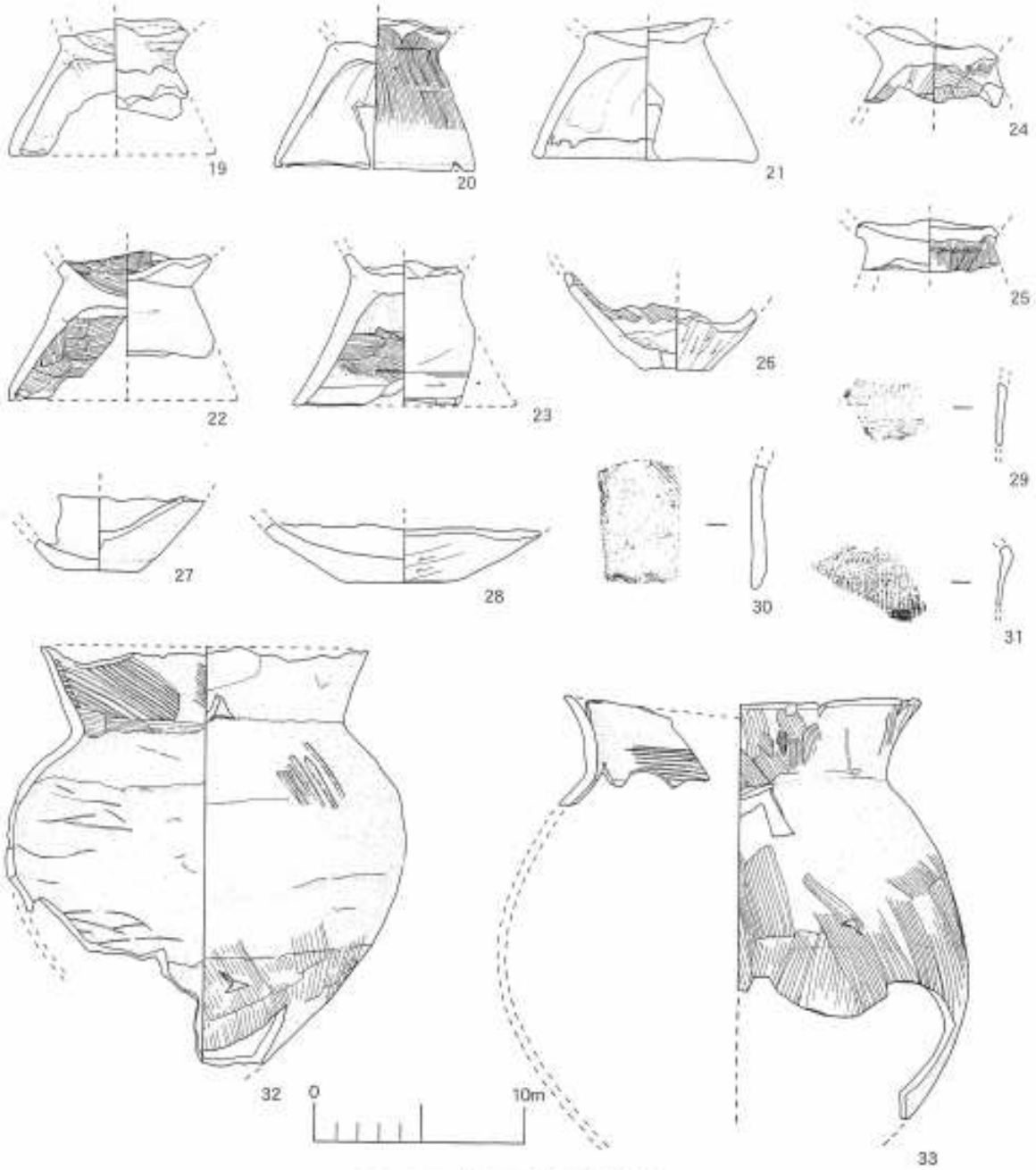
| 番号 | 器種種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 76-4 | 高杯<br>土師 | | 残高4.9<br><br>脚部のみ残 | 胎：0.5～1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR8/2（灰白色） | 粘土帯積み上げ。<br>透し孔は、外面より穿孔。<br>脚部は、直線的に開く。 | 縦方向の「磨き」。 | 「撫で」。 |
| 備考 | 外面の一部に吸炭がある。透し穴は、現存３孔ある。 | | | | | | |
| 76-5 | 高杯<br>土師 | | 脚径10.5<br>残高7.4<br><br>脚部のみ残（脚部一部欠） | 胎：0.5～2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 不明。<br>中位に僅かな張りを持ち直線的に開く。脚部に至り、ほぼ横方向に著しく開く。 | 脚部・裾部に「磨き」。 | 脚部は、工具による横方向の「撫で」後、「磨き」。脚部は「撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 76-6 | 器台<br>土師 | | 接合部径3.0<br>残高3.9<br><br>脚部上位～器受部の一部残。 | 胎：1.0大の赤色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR7/4（にぶい橙色） | 粘土帯積み上げ。接合部の孔は、整形後、上→下へ穿孔。透孔は、外面より回転穿孔。<br>外反気味に開く脚部より、丸みを持って立ち上がる器受部に至る。 | 器受部は不明。<br>接合部～脚部は、上→下への「磨き」。 | 器受部は不明。<br>脚部は、「筮撫で」後、穿孔による余剰粘土を「撫で付け」。 |
| 備考 | 透孔は、現存３孔。 | | | | | | |
| 76-7 | 高杯<br>土師 | | 残高4.7<br><br>脚部1/4のみ残。 | 胎：0.2～1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR8/2（灰白色） | 粘土帯積み上げ。<br>透し孔は、外面より回転穿孔。<br>脚部上位で緩く開き、中位からやや大きく開く。 | 上位～中位にかけては、縦方向の「磨き」。下位においては「筮撫で」。 | 「撫で」。 |
| 備考 | 器体内外面の一部に吸炭がある。透し穴は、現存３孔ある。 | | | | | | |
| 76-8 | 高杯<br>土師 | | 接合部径3.4<br>脚径(9.2)<br>残高5.7<br><br>脚部のみ残（脚部2/3欠） | 胎：1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内吸炭のため不詳。外2.5YR5/8（明赤褐色） | 粘土帯積み上げ。脚部に杯部を乗せ、外面からの「撫で付け」により接合。<br>接合部より緩く開き、脚部に至って大きく開く。 | 「撫で」。 | 不詳。 |
| 備考 | 脚部内面に著しい吸炭がある。内外面ともに磨滅が著しい。 | | | | | | |
| 76-9 | 壺<br>土師 | | 口径15.0<br>残高9.6<br><br>口縁部（一部欠）胴部上位一部残。 | 胎：1.0～1.5大の砂粒、赤色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5YR8/3（浅黄橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸みを持つ胴部より、緩く外傾し、上位において急に反り返る口縁部に至る。 | 口縁部は、横方向の「撫で」後、「磨き」が施される。<br>胴部は不明。 | 口縁部は、横方向の「撫で」。<br>胴部は「撫で」。 |
| 備考 | 器体の内外面に吸炭や赤化があり、磨滅が著しい。 | | | | | | |
| 76-10 | 二重口縁壺<br>土師 | | 口径21.2<br>頸部10.3<br>残高7.9<br><br>口縁部のみほぼ完。 | 胎：1.0-2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>頸部より、上下段で著しく外反する二重口縁を呈する。口唇部は、先細りほぼ直立する。 | 口縁部は、上下段に横方向の「撫で」。口縁部上位に「横撫で」。<br>頸部に強い「筮撫で」が施される。 | 上下段に横方向の「撫で」。下段においては、「筮撫で」が施される。 |
| 備考 | 口縁部上段の極一部に吸炭がある。 | | | | | | |
| 76-11 | 甕<br>土師 | | 口径19.0<br>残高8.0<br><br>口縁部ほぼ完。胴部上位の1/3残。 | 胎：1.0大の砂粒を多量、1.0大の赤色粒子、黒色雲母粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/6（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>緩い張りを持つ胴部より、緩やかに外反する口縁部に至る。 | 口縁部は、「横撫で」。<br>胴部は、上→下の「刷毛目」が、交差するように施された後、頸部直下に横方向の「撫で」が施される。 | 口縁部は「横撫で」後、横方向の「撫で」が施される。<br>胴部は「撫で」。 |
| 備考 | 器体のない外面の磨滅が著しい。 | | | | | | |

| 番号 | 器種<br>種別 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 76-12 | S字甕<br>土師 | | 口径(12.5)<br>残高3.9<br><br>口縁部～胴部上位1/3残。 | 胎：0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外酸化のため不詳。 | 粘土帯積み上げ。<br>胴部より、下段、上段ともに外反するS字状の口縁部に至る。口唇部は、ほぼ平坦である。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は口縁部下段より上→下への「刷毛目」後、頸部の直下に「刷毛目」の「撫り消し」が、一巡り施される。 | 口縁部は「横撫で」。<br>頸部は横方向の「撫で」。<br>胴部は、横方向の「笹撫で」。 |
| 備考 | 器体の内外面の全面が吸炭している。(外面の吸炭は著しい。) | | | | | | |
| 76-13 | S字甕<br>土師 | | 口径17.2<br>残高5.9<br><br>口縁部～胴部上位1/2残。 | 胎：1.0大の砂粒を極めて多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/6（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>胴部より、上下段で外反するS字状の口縁部に至る。下段は、僅かに残存する。上段に微かな段を持つ。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は口縁部下段より上→下への「刷毛目」後、頸部の直下に「刷毛目」の「撫り消し」が、一巡り施される。 | 口縁部は「横撫で」。<br>頸部は横方向の「撫で」。<br>胴部は、「笹撫で」。 |
| 備考 | 口縁部外面に著しい吸炭がある。 | | | | | | |
| 76-14 | 二重口縁壺<br>土師 | | 口径(21.0)<br>残高3.1<br><br>口縁部上段のみ1/4残。 | 胎：微細な砂粒、1.0大の黒色雲母粒を含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5YR8/4（浅黄橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>口縁部上段は、著しく外反する。口唇部は、矩形を呈する。 | 口縁部は何段かに分けての横方向の「撫で」。<br>口唇部は「横撫で」。 | ほぼ横方向の「磨き」。 |
| 備考 | 外面の一部に吸炭がある。 | | | | | | |
| 76-15 | 甕<br>土師 | | 口径(17.8)<br>残高4.9<br><br>口縁部～胴部の一部1/4残。 | 胎：0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR7/6（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>胴部より緩やかに外反する口縁部に至る。口唇部において特に外反する。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は「陸削り」。 | 口縁部は「横撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 76-16 | 甕<br>土師 | | 口径(17.0)<br>残高8.0<br><br>口縁部～胴部上位1/4残。 | 胎：1.0～4.0大の砂粒、1.0大の赤色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>張りを持つ胴部より、外反する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」後、胴部上位より下→上への「磨き」が施される。<br>胴部は、不明。 | 口縁部は「横撫で」後、下→上への「磨き」。<br>胴部は、不明。 |
| 備考 | 器体外面のほぼ全域に吸炭がある。 | | | | | | |
| 76-17 | 壺<br>土師 | | 口径(18.5)<br>残高5.2<br><br>口縁部1/4残。 | 胎：0.5～1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>口縁部上位に粘土帯を張り、折返し口縁を作る。 | 口縁部の折り返し部は、横方向の「撫で」。下半～頸部にかけては、右上→左下への「刷毛目」。 | 横方向の「撫で」後、右→左への横方向の「刷毛目」が巡る。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 76-18 | 甕<br>土師 | | 口径17.2<br>残高9.7<br><br>口縁部2/3、胴部上位の一部残。 | 胎：0.5～1.0大の砂粒を少量に含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR8/3（浅黄橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>丸みを持つ胴部より、外反する口縁部に至る。外反は、上位で著しくなる。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は、頸部より「刷毛目」が施される。 | 口縁部は「横撫で」。<br>胴部は「撫で」。 |
| 備考 | 器体の内外面ともに磨滅が著しい。 | | | | | | |
| 77-19 | 甕<br>土師 | | 口径15.5<br>残高19.8<br><br>胴部1/3欠。 | 胎：1.0～3.0大の砂粒を多量、1.0大の赤色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内2.5Y8/2（灰白色）<br>外吸炭・赤化のため不詳。 | 粘土帯積み上げ。<br>上位に最大径を持ち内彎気味に立ち上がる胴部より、外反する口縁部に至る。 | 口縁部は横方向の「撫で」。<br>胴部は、ほぼ斜方向の「刷毛目」が、一応に施される。(部分的に不明瞭である)。 | 口縁部は斜方向の「刷毛目」後、下位に横方向の「刷毛目」が巡る。<br>胴部はほぼ横方向の「笹撫で」。 |
| 備考 | 胴部外面の約1/3、内面の下位に著しい吸炭がある。 | | | | | | |




第76図　集中区出土土師器(1)

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 77-20 | 甕<br>土師 | | 口径16.9<br>残高19.8<br><br>口縁部3/4胴部上半1/2残。 | 胎：1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5YR（浅黄橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>中位に張りを持つ胴部より、外反する口縁部に至る。 | 口縁部は横方向の「撫で」後、ほぼ縦方向の「筒撫で」が、施される。<br>胴部はほぼ左上→右下への「刷毛目」。 | 口縁部は横方向の「刷毛目」。<br>胴部は「撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 77-21 | 甕<br>土師 | | 底径4.0<br>残径3.7<br><br>底部、胴部下位1/2 残。 | 胎：1.0～2.0大の大粒の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5Y8/1（灰白色） | 粘土盤に粘土帯を積み上げる。<br>平底より緩く立ち上がる。 | 底部は「筒削り」。<br>胴部は「筒撫で」。 | 「撫で」。 |
| 備考 | 器体内・外面のほぼ全面に吸炭がある。 | | | | | | |
| 77-22 | 甕<br>土師 | | 底径3.5<br>残高4.6<br><br>底部～胴部下位 残。 | 胎：0.5～2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内2.5YR6/6（橙色）外7.5YR8/3（浅黄橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>透し孔は、内面より回転穿孔。 | 胴部は「筒削り」後、底部において、余った粘土を撫で付ける。 | 「撫で」。 |
| 備考 | 外面の一部に吸炭がある。 | | | | | | |
| 77-23 | 壺<br>土師 | | 底径5.2<br>残高2.7<br><br>底部～胴部下位 残。 | 胎：1.0～1.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内2.5YR7/6（橙色）外吸炭のため不詳。 | 粘土盤に粘土帯を積み上げる。<br>平底より立ち上がる。 | 底部、胴部に「筒削り」。 | 「筒撫で」。 |
| 備考 | 器体外面に吸炭がある。 | | | | | | |
| 77-24 | 台付甕<br>土師 | | 接合部径（5.7）<br>残高3.5<br><br>接合部、脚部極一部残。 | 胎：0.5～1.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR 7/6（橙色） | 不明。 | 斜方向の「刷毛目」。 | 不定方向の「撫で」。<br>横方向の「刷毛目」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 77-25 | 台付甕<br>土師 | | 接合部径6.0<br>残高2.6<br><br>接合部のみ残。 | 胎：1.0～2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内10YR 8/2（灰白色）外2.5YR6/6（橙色） | 脚部に甕部を嵌込んで接合。 | 縦方向の「刷毛目」。 | 「撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 77-26 | 台付甕<br>土師 | | 裾径（10.7）<br>残高7.1<br><br>接合部～脚部 残（脚 部1/3のみ欠）。 | 胎：1.0大の砂粒を多量、1.0～1.5大の赤色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外10YR 8/2（灰白色） | 粘土帯積み上げ。脚部に甕部を嵌込んで接合。脚部は、緩く開き、裾部において僅かに反り返える。端部は平坦である。 | 縦方向の「筒撫で」後、裾部に横方向の「撫で」。 | 上位において横方向の「撫で付け」。中位においてほぼ横方向の「筒撫で」後、裾部に横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 脚部内面の接合部にのみ吸炭がある。 | | | | | | |
| 77-27 | 台付甕<br>土師 | | 接合部径（5.7）<br>裾径（9.8）<br>残高6.5<br><br>接合部、脚部1/4残。 | 胎：1.0～3.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR6/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。脚部に甕部を嵌込んで接合。接合部外面に粘土帯による補強がされる。接合部より緩く広がる。端部は、ほぼ平坦である。 | 「撫で」。 | 「撫で」。 |
| 備考 | 内外面ともに、器体の磨滅が著しい。 | | | | | | |




第77図　集中区出土土師器(2)

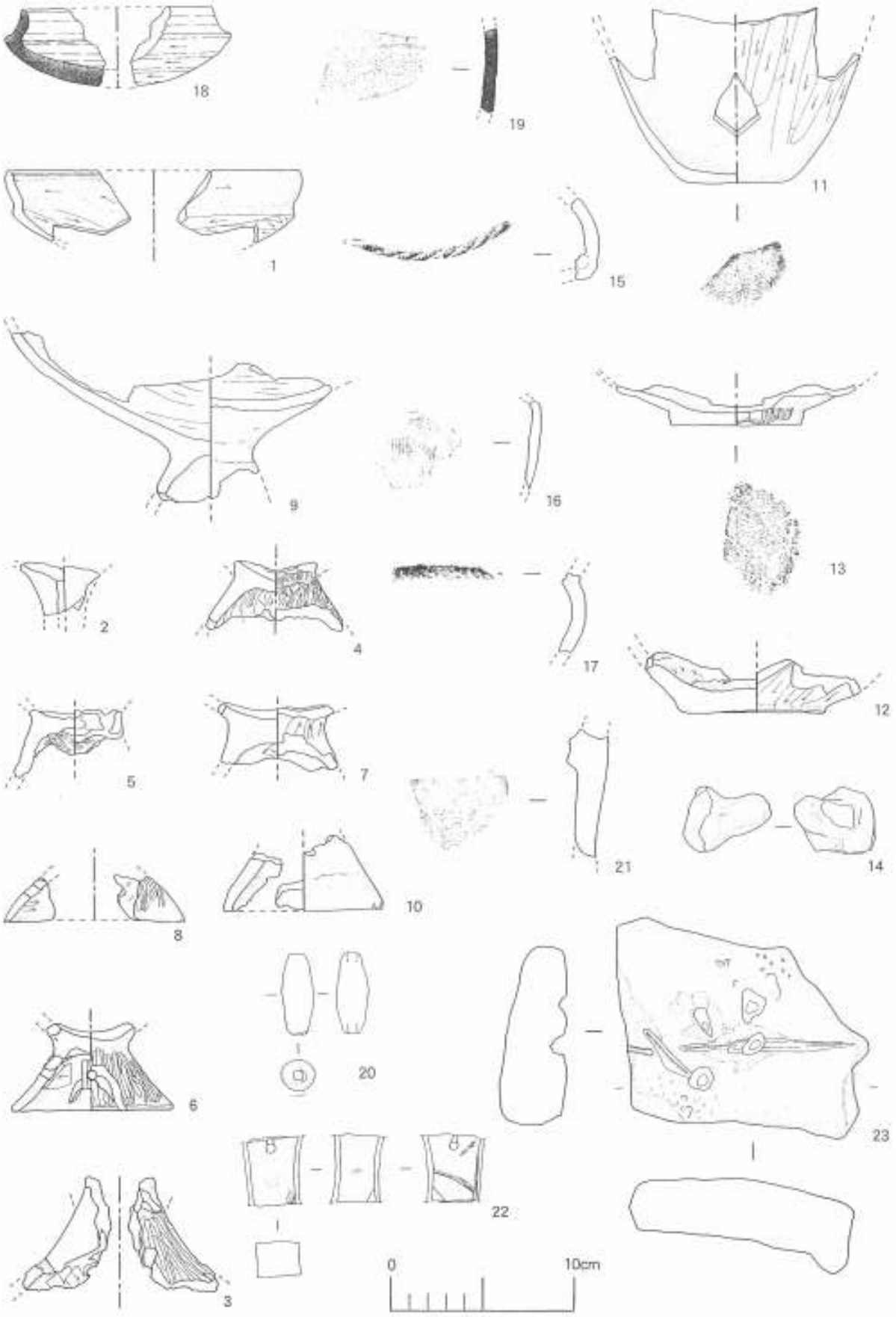
| 番号 | 器種種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 77-28 | 台付甕土師 | | 接合部径(5.2)<br>脚径9.5<br>残高7.2<br><br>接合部～脚部残。(脚部下位1/4のみ欠) | 胎：1.0～2.0大の砂粒を含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5YR8/4（浅黄橙色） | 粘土帯積み上げ。脚部に甕部を嵌込んで接合。端部は、平坦に作られる。接合部より緩く開く。 | 接合部より、縦方向の「剥毛目」。(中位以下は、器体の磨滅のため不詳。) | 縦方向の「箆撫で」。 |
| 備考 | 甕部底部内面のみに煤炭がある。 | | | | | | |

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 胎土 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 77-29 | 台付甕<br>土師 | | 接合部径5.6<br>胴径10.2<br>残高6.8<br><br>脚部のみ残<br>(下位1/4欠) | 胎：1.0～2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR8/4（淡黄色） | 粘土帯積み上げ。甕部と脚部の接合方法は不明。接合部より、内彎気味に開く。 | 不詳。 | ほぼ縦方向の「撫で」後、端部を平坦に作り、余剰粘土を内面に「撫で付け」。 |
| 備考 | 内外面とも器体の磨滅が著しい。 | | | | | | |
| 77-30 | 台付甕<br>土師 | | 接合部径6.1<br>胴径(11.3)<br>残高7.1<br><br>接合部、脚部1/4残。 | 胎：1.5大の砂粒、1.0大の赤色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内煤炭のため不詳。外5YR 7/4（にぶい橙色） | 粘土帯積み上げ。脚部に甕部を嵌め込み、外面に粘土により補強し、接合。接合部より緩く開き、胴部において急激に内彎する。 | 胴部に「刷毛目」が巡る。 | 焼底部は「刷毛目」。<br>脚部は、ほぼ横方向の「刷毛目」後、端部を平坦に作り、余剰粘土を内面に「撫で付け」。 |
| 備考 | 脚部内面、外面の一部に煤炭がある。 | | | | | | |
| 77-31 | 甕<br>土師 | | 器厚0.25～0.4<br><br>肩部破片。 | 胎：0.1大の砂粒を含有。<br>焼：良<br>色：内煤炭のため不詳。外7.5YR8/3（浅黄橙色） | | 縦方向・横方向の「刷毛目」。 | |
| 備考 | 内面に煤炭がある。 | | | | | | |
| 77-32 | 甕<br>土師 | | 器厚0.2～0.5<br><br>肩部破片。 | 胎：0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外煤炭のため不詳。 | | 縦方向の「刷毛目」。 | |
| 備考 | 内外面に煤炭がある。 | | | | | | |
| 77-33 | 高杯<br>土師 | | 器厚0.55～0.7<br><br>脚部破片。 | 胎：1.0大の砂粒、0.1大の黒色雲母粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR8/2（灰白色） | | 「刷毛目」。 | |
| 備考 | 脚部内外面の一部に煤炭がある。 | | | | | | |

## ロ. 土師器・その他の遺物（第78図）

入川遺跡から出土した遺構外出土師器片は、１万点以上を数える。本稿では報告にたえうる17点をあげた。この土師器片は、調査区ほぼ全域から出土しており、特に調査区の北側・北西側に密な分布がみられる。出土層位は、基本土層第Ⅰ層から第Ⅲ－１層までである。

その他の遺物としては、須恵器・埴輪・土錘・砥石・凹石が出土している。須恵器は、基本土層Ⅱ－３層より出土している。埴輪は、円筒埴輪の一部と考えられ、基本土層Ⅰ層より出土している。土錘は、基本土層Ⅰ層より出土している。砥石は、基本土層Ⅰ層より出土している。凹石は、偏平な礫の両面に小穴が認められる。基本土層Ⅱ－３層より出土している。




第78図　遺構外出土遺物

## 表10　遺構外出土遺物観察表

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 78-1 | 杯<br>土師 | | 口径(16.0)<br>残高3.9<br><br>口縁部1/4残。 | 胎：0.5～1.0大の砂粒、黒色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内2.5YR6/8（橙色）外10YR8/4（浅黄色） | 体部より、明確な稜を経て、屈曲して立ち上がる口縁部に至る。口縁部内面上位に段を持つ。 | 口縁部は「横撫で」後、下位に「筆撫で」。<br>体部は「笠閉り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「笠撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 78-2 | 器台<br>土師 | | 口径(7.5)<br>残高2.3<br><br>器受部1/4残。 | 胎：1.0～2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5YR7/6（橙色） | 接合部の孔は上→下へ穿孔。<br>接合部より直線的に立ち上がる。 | 不明。 | 不明。 |
| 備考 | 内外面とも著しく磨耗。 | | | | | | |
| 78-3 | 高杯<br>土師 | | 残高6.3<br><br>脚部1/4残。 | 胎：0.3~1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内10YR8/4（浅黄橙色）外炭のため不詳。 | 脚部中位の孔は外面より回転穿孔。<br>接合部より緩く開く。 | 縦方向の「磨き」。 | 「笠撫で」。 |
| 備考 | 外面が淡く炭。 | | | | | | |
| 78-4 | 台付甕<br>土師 | | 接合部径(4.6)<br>残高3.8<br><br>接合部～脚部上半1/2残。 | 胎：0.5～2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5Y7/8（橙色） | 脚部に甕部をはめ込み、下→上への「撫で付け」により接合。<br>脚部上半は、接合部より緩く広がる。 | 「刷毛目」 | 「笠撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 78-5 | 台付甕<br>土師 | | 接合部径4.9<br>残高3.6<br><br>接合部、脚部上半1/4残。 | 胎：5.0大の白色礫、0.1～0.5大の黒色母雲粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5Y8/3（浅黄橙色） | 甕部と脚部を上→下への「撫で付け」により接合。<br>脚部上半は、接合部より緩く広がる。 | 不詳。 | 「刷毛目」。 |
| 備考 | 外面が磨耗する。 | | | | | | |
| 78-6 | 高杯<br>土師 | | 接合部径4.0<br>脚径(8.8)<br>残高4.8<br><br>接合部、脚部1/4残。 | 胎：0.5～1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR7/6（橙色） | 脚部に杯部をはめ込んで接合。透し孔は、外面から穿孔。<br>脚部は、接合部より僅かに外反気味に開く。 | 脚部は、縦方向の「筆磨き」。 | 脚部は、「筆撫で」後、下位に「撫で」が巡る。 |
| 備考 | 脚部外面の一部が淡く炭。透し孔は、脚部中位に4孔ある。 | | | | | | |
| 78-7 | 台付甕<br>土師 | | 接合部径5.3<br>残高3.6<br><br>接合部のみ残。 | 胎：1.0～2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR7/6（橙色） | 不明。 | 縦方向の「撫で」。 | 「撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 78-8 | 器台<br>土師 | | 脚径(9.8)<br>残高2.7<br><br>脚部下位1/4残。 | 胎：0.5大の砂粒、赤色粒子を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR7/8（橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>透し孔は、外面より穿孔。<br>内彎気味に立ち上がる。 | 脚部は、縦方向の「筆磨き」。<br>裾部は、横方向の「撫で」。 | 横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 透し穴は、現存2孔ある。 | | | | | | |

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 78-9 | 高杯<br>土師 | | 接合部径4.6<br>残高9.4<br><br>杯部下半～脚部上半1/2残。 | 胎：0.1-0.5大の黒色雲母粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内煤炭のため不詳。外10YR8/4（浅黄橙色） | 粘土帯積み上げ。<br>杯部は、接合部より、内彎気味に立ち上がる。<br>脚部は、緩く開く。 | 杯部から脚部にかけて、不定方向の「撫で」。 | 杯部は、ほぼ横方向の「篦撫で」。<br>脚部は「撫で」。 |
| 備考 | 杯部内面の全域、杯部外面の一部が淡く煤炭。 | | | | | | |
| 78-10 | 台付甕<br>土師 | | 脚径8.7<br>残高4.1<br><br>脚部下半のみ残存。 | 胎：1.0-3.0大の赤色粒子を少量含有。<br>焼：普<br>色：内外2.5Y7/8（橙色） | 粘土帯巻き上げ。<br>内彎気味に立ち上がる。<br>脚部端部は、平坦であり、成形により、粘土が、内面にはみ出す。 | 横方向の「撫で」。 | 横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 内外面とも煤炭による変色が著しい。 | | | | | | |
| 78-11 | 甕<br>土師 | | 底径(5.0)<br>残高9.5<br><br>底部1/2、胴部下半1/4残。 | 胎：2.0-3.0大の砂粒を含有。<br>焼：良<br>色：内10YR8/2（灰白色）外煤炭のため不詳。 | 粘土帯積み上げ。<br>平底より、緩く立ち上がる胴部に至る。 | 胴部は、縦方向の「篦撫で」。 | 不詳。 |
| 備考 | 底部に木葉痕がある。器体外面は煤炭。 | | | | | | |
| 78-12 | 壺<br>土師 | | 底径7.8<br>残高3.8<br><br>底部、胴部下位一部残。 | 胎：1.0大の赤色粒子、黒色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内10YR8/1（灰白色）外10YR8/3（浅黄橙色） | 底部に、粘土帯を積み上げて成形。<br>平底より立ち上がる。 | 胴部は、縦方向の「刷毛目」が施される。 | 「撫で」。 |
| 備考 | 内外面とも著しく摩耗。 | | | | | | |
| 78-13 | 壺<br>土師 | | 底径(6.9)<br>残高2.3<br><br>底部1/2、胴部下位一部残。 | 胎：1.0-2.5大の赤色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内 外10YR8/3（浅黄橙色） | 平底より立ち上がる。 | 胴部には、「刷毛目」が施される。<br>底部は不明。 | 不明。 |
| 備考 | 底部に木葉痕がある。 | | | | | | |
| 78-14 | 把手<br>土師 | | 現高3.6<br><br>把手破片(一部欠)。 | 胎：1.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：2.5YR7/8（橙色） | 手捏ね。<br>上方へ向けて、緩く内彎する。 | | |
| 備考 | 全面が磨耗する。 | | | | | | |
| 78-15 | 壺<br>土師 | | 器厚0.7～1.1<br><br>口縁部下半～頸部破片 | 胎：1.0大の黒色雲母粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外2.5Y8/3（浅黄橙色） | 頸部の突帯は、粘土紐を圧着して作る。 | 口縁部下半には、縦方向の「篦磨き」。<br>頸部突帯には、櫛状工具による「刺突」が巡る。 | 縦方向の「篦磨き」 |
| 備考 | | | | | | | |
| 78-16 | 甕<br>土師 | | 器厚0.4～0.5<br><br>胴部上位破片。 | 胎：0.1大の砂粒、赤色粒子を含有<br>焼：良<br>色：内 外10YR8/3（浅黄橙色） | | 縦方向の「刷毛目」の下に、平行線文。 | |
| 備考 | | | | | | | |

| 番号 | 器種<br>種類 | 位置 | 法量(cm) | 器質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 78-17 | 壺<br>土師 | | 器厚0.7～0.8<br>口縁部下半～頸部破片。 | 胎：0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内 外10YR8/2（灰白色） | | 口縁部下半には、縦方向の「荒磨き」。<br>頸部突帯には、櫛状工具による「刺突」が巡る。 | 縦方向の「荒磨き」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 78-18 | 杯<br>須恵 | | 口径(10.2)<br>残高4.2<br>1/4残 | 胎：0.1大の白色粒子を多量、0.5大の砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内外7.5Y7/1（灰色） | 轆轤回転成形。<br>丸みを持つ体部より突出した後を経て、内傾する口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「回転箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は「撫で」。 |
| 備考 | | | | | | | |
| 78-19 | 須恵 | | 器厚0.55～0.7 | 胎：0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外5Y6/1（灰色） | | 「波状文」。 | |
| 備考 | | | | | | | |
| 78-20 | 土錘<br>土製品 | | 最大長4.5<br>最大幅1.9<br>孔径0.5<br>重量12.7g<br>ほぼ完（孔の縁一部欠） | 胎：0.5～1.0大の砂粒を少量含有。<br>焼：良<br>色：内5YR7/6（橙色） | 中位で膨らむ管状。 | 不詳。 | |
| 備考 | 表面の剥落が著しい。 | | | | | | |
| 78-21 | 埴輪 | | 器厚1.2～2.1<br>円筒埴輪破片。 | 胎：0.2大の砂粒、1.0大の赤色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR7/6(橙色)<br><赤彩>10YR6/6（赤橙色） | 不明。<br>凸帯を持つ。 | 凸帯部、凸帯部上下位は、横方向の「撫で」。<br>基部は「刷毛目」。 | 不明。 |
| 備考 | 外面の一部に赤彩が残存。 | | | | | | |
| 78-22 | 砥石<br>石製品 | | 最大長2.8<br>最大幅3.8<br>最大厚2.4<br>孔径0.4～0.5<br>重量45.6g | 軽石<br>完（孔部一部欠） | 孔を１つ穿つ。 | | |
| 備考 | 使用痕は４面にある。 | | | | | | |
| 78-23 | 凹石 | | 最大長11.1<br>最大幅13.3<br>最大厚4.0<br>重量660g | 完 | | | |
| 備考 | | | | | | | |

## 第３節　時期不明の遺構

### １．溝

**１号溝**（第80図）

１号溝は、C－７・D－５・D－６・E－４・E－５区に位置する。調査区のほぼ中央部を、北西から南東方向に斜めに構築されている。本遺構の南側は、調査区外へ延びている。本遺構の約0.5m東に２号溝が平行して存在する。確認面は、基本土層第Ⅱ－１層である。遺構上面は、耕作により削平されている。遺存状況は、良好である。

規模は、現存長11.0m、幅0.50m～1.10m、深さ0.05mを測る。長軸はN－30°－Wを測り、標高は底部で28.20mである。平面形態は長方形で断面は浅い皿状を呈する。遺構南側は、幅が狭く、深さも浅くなる。

覆土は、白色粒子を多量に含有する暗灰黄色土の１層である。

遺物は検出されなかった。

**２号溝**（第80図）

２号溝は、C－５・C－６・C－７・D－３・D－４・D－５・E－２・E－３・F－１・F－２区に位置する。調査区のほぼ中央部を、北西から南東方向に斜めに構築されている。遺構は両端とも調査区外へ延びている。遺構の北東壁で３号溝と、北端で５号溝と切り合っている。重複関係は、５号溝→３号溝→２号溝である。本遺構の0.5m西に１号溝が、2.0m東に４号溝が平行して存在する。本遺構は、１号住居跡・６号住居跡の上部を削平している。確認面は、基本土層第Ⅱ－１層であり、基本土層第Ⅱ－２層を僅かに掘り込んで構築している。遺構上面は、耕作により削平されている。遺存状況は、良好である。

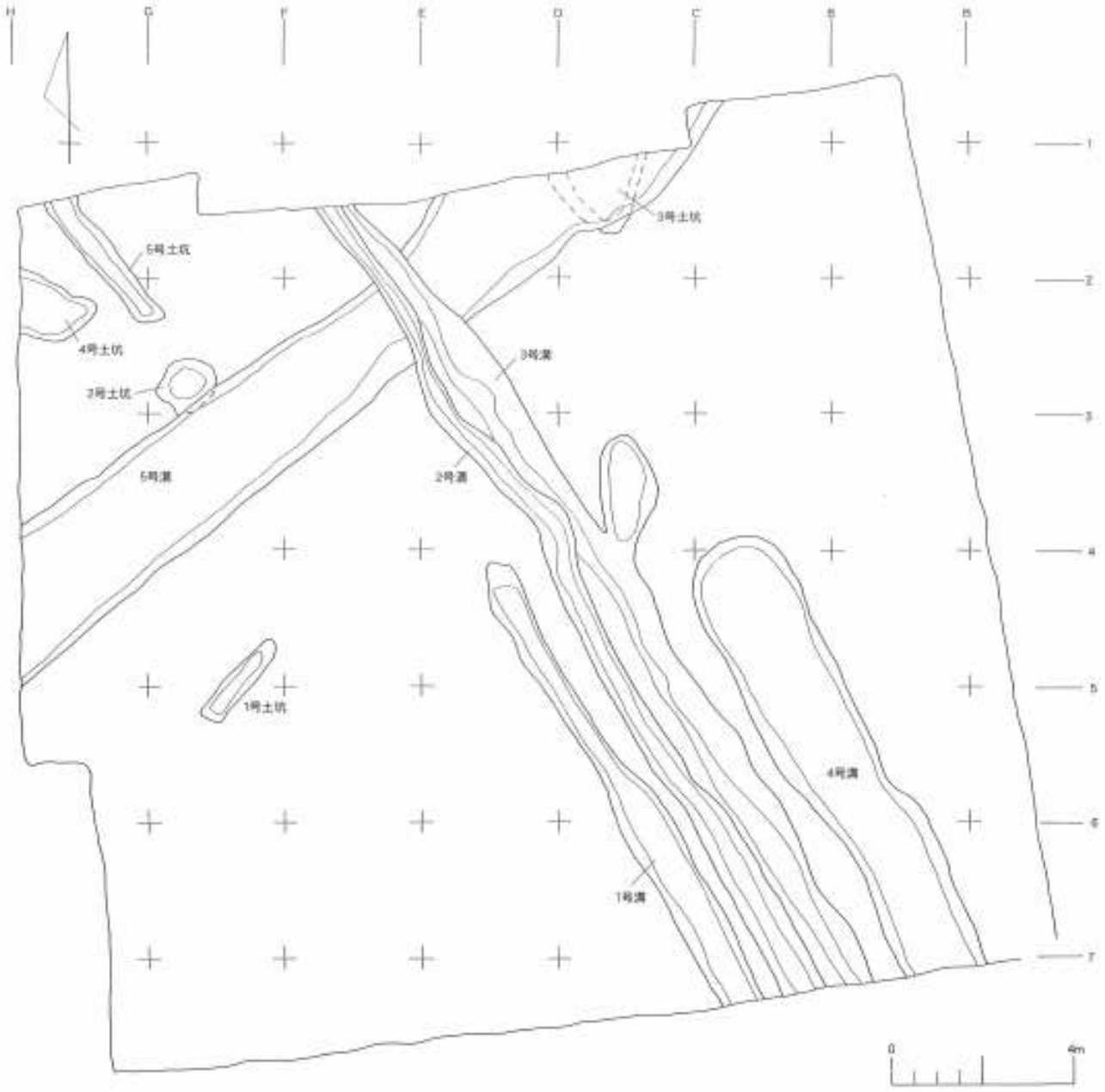
規模は、現存長20.5m、幅0.28m～0.85m、深さ0.05mを測る。長軸はN－30°－Wを測り、標高は、底部で27.94m～28.10mである。断面形態は、浅い皿状を呈する。遺構南側は、幅が狭く、深さも浅くなる。

覆土は、白色粒子を含有する砂層の１層である。

遺物は、土師器細片16点が検出された。報告遺物はない。

**３号溝**（第80・81図）

３号溝は、B－６・B－７・C－５・C－６・C－７・D－３・D－４・D－５・E－２・E－３・F－１・F－２区に位置する。調査区のほぼ中央部を、北西から南東方向に斜めに構築されている。遺構は両端とも調査区外へ延びている。遺構の南西壁で２号壁と、北端で５号溝と切り合っている。重複関係は、５号溝→３号溝→２号溝である。本遺構の0.5m東に４号溝が平行に存在する。本遺構は、



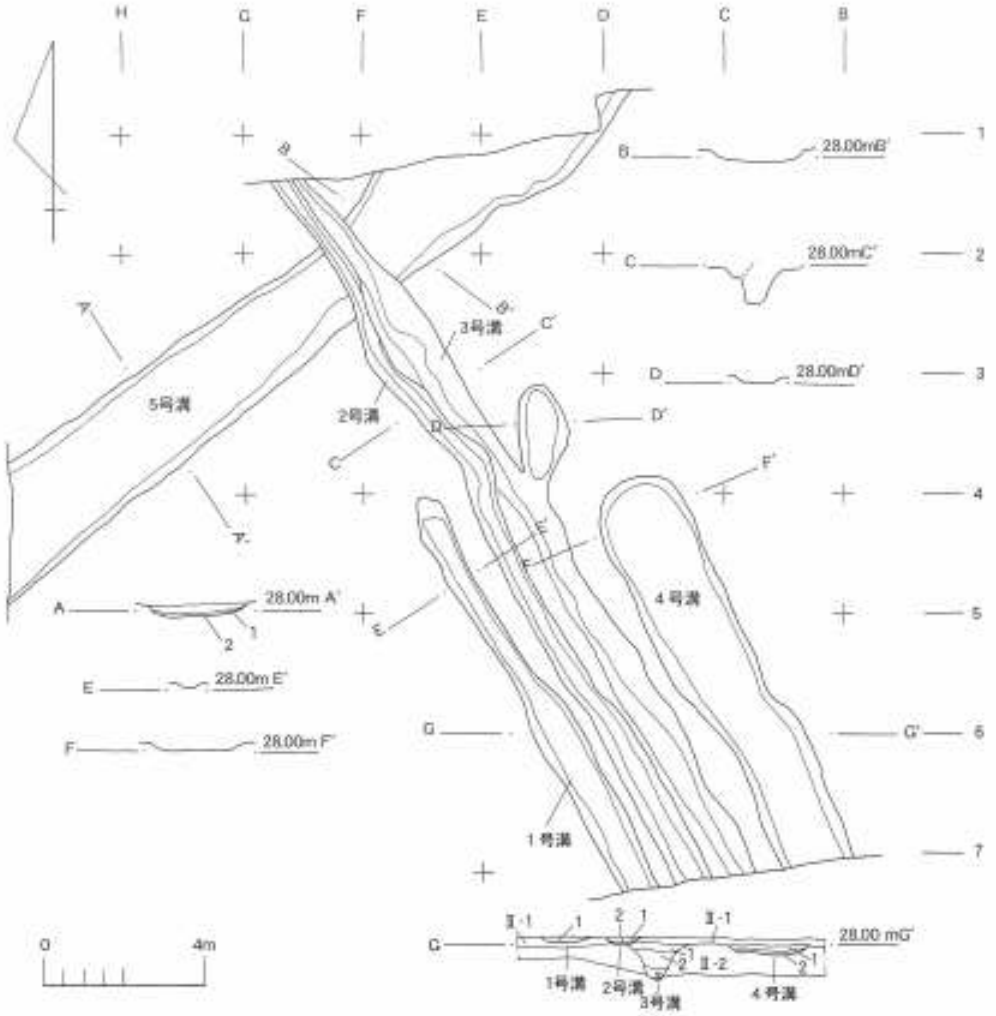

第79図　時期不明の遺構全体図

1号住居跡・6号住居跡の上部を削平している。確認面は、基本土層第Ⅱ－2層であり、基本土層第Ⅱ－3層を僅かに掘り込んで構築している。遺構上面は、耕作により削平されている。遺存状況は、良好である。

規模は、現存長20.8m、推定幅1.0m～1.40m、深さ0.35m～0.85mを測る。長軸はN－30°－Wを測り、標高は底部で27.30m～27.70mである。溝は底部より、約60°の角度で、中位に緩やかな段を持って立ち上がる。断面形態は、緩やかなV字型を呈する。遺構南側は、幅が狭く、深さも浅くなる。

覆土は、暗灰黄色土を主体として3層に分かれる。1層・3層は、砂粒を多量に含有する砂質暗灰黄色土、2層は白色粒子を多量に含有する暗灰黄色土である。

遺物は、覆土中より1（甕）・2（把手）が出土している。




**1号溝土層**
1 暗灰黄色土(0.5～1cm大の黒色粒子・白色粒子を少量含有。)

**2号溝土層**
1 灰黄褐色土(0.5cm大の白色粒子を少量含有。)
2 暗灰黄色土(0.5cm大の白色粒子を多量に含有。)
3 暗灰黄色土(0.5cm大の白色粒子を多量に含有。砂質である。)

**3号溝土層**
1 暗灰黄色土(0.3cm大の白色粒子を多量に含有。)
2 暗灰黄色土(0.5cm大の白色粒子を多量に含有。)
3 暗灰黄色土(0.5cm大の白色粒子を多量に含有。砂質である。)

**4号溝土層**
1 暗灰黄色土(0.5～1cm大の白色粒子・黒色粒子を少量含有。砂質である。)
2 黄灰色土(0.5cm大の白色粒子・黒色粒子をごく少量含有。)

**5号溝土層**
1 黒褐色土(0.1～0.2cm大の黄色土粒・灰色粒子を少量含有。)
2 黄灰色土(炭粒を多量に含有。)

第80図　1～5号溝

**4号溝**（第80図）

4号溝は、A－6・A－7・B－5・B－6・C－－3・C－4・C－5区に位置する。調査区の東側を北西から南東方向に斜めに構築されている。本遺構の南側は、調査区外へ延びている。本遺構の約0.5m西に3号溝が平行して存在する。確認面は、基本土層第Ⅱ－2層であり、基本土層第Ⅱ－3層上面を僅かに掘り込んで構築している。遺構上面は、耕作により削平されている。遺存状況は、良好である。

規模は、現存長10.7m、幅1.50m～1.75m、深さ0.42mを測る。長軸はN－30°－Wを測り、標高は底部で27.77m～27.95mである。溝は底部より約45°の角度で立ち上がる。断面形態は、浅い皿状を呈する。

覆土は、白色粒子と砂粒を多量に含有する暗灰黄色土の1層である。

遺物は、自然石1点が検出された。報告遺物はない。

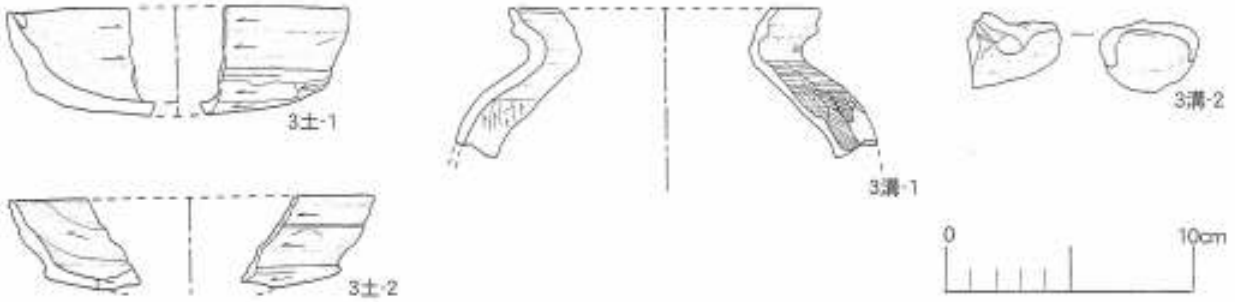
**5号溝**（第80図）

5号溝は、D－1・E－1・E－2・F－1・F－2・F－3・G－2・G－3・H－3・H－4区に位置する。調査区の北側を、北東から南西方向に斜めに構築されている。本遺構は両端とも調査区外へ延びている。本遺構は、3号土坑・2号溝・3号溝と切り合っている。重複関係は、3号土坑→5号溝→3号溝→2号溝である。本遺構は、1号～4号溝とは、規模・方向とも大きく異なっている。確認面は、基本土層第Ⅱ－2層である。遺構上面は、耕作により削平されている。遺存状況は、良好である。

規模は、現存長20.2m、幅2.0m～3.0m、深さ0.30mを測る。幅は、北東部で急に広くなっている。長軸はN－52°－Eを測り、標高は底部で27.90mを測る。断面形態は、底部の広い皿状を呈する

覆土は、3層に分かれる。第1層・第2層は、黒褐色土を主体とした砂質土である。第3層は、炭化物を多量に含有する粘土質の黄灰色土である。

遺物は、土師器細片2点が検出された。報告遺物はない。

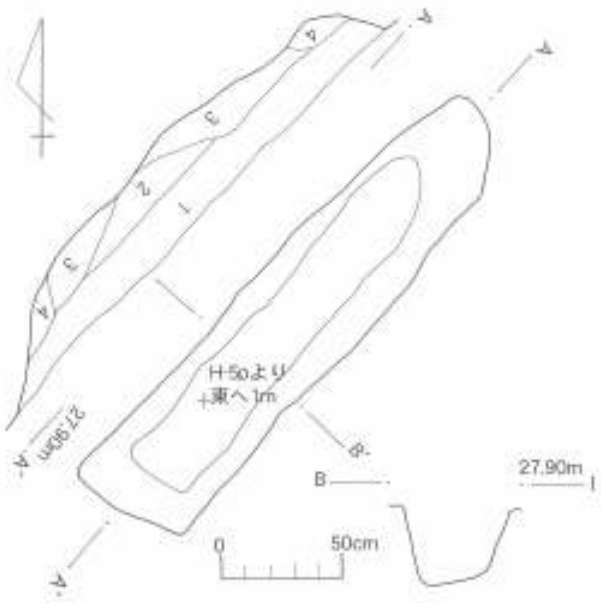



第81図　3号土坑・3号溝出土遺物

## 2．土坑

### 1号土坑（第82図）

土　田　智恵子




1号土坑土層
1 黒褐色土（0.1～0.3cm大の黒色粒子・炭粒・黄色土塊を少量含有。）
2 黒褐色土（0.2cm大の炭粒を上方に多量に含有する。砂質土である。）
3 暗褐色土（0.1cm大の黒色粒子を少量含有。）
4 黄灰色土（0.1cm大の黒色粒子を少量含有。）

第82図　1号土坑

1号土坑は、調査区の南側mG－4・G－5区にまたがって位置する。本土坑の約6.5cm北に2号土坑がある。他の遺構との重複関係はない。確認面は、基本土層第Ⅲ－2層上面であり、基本土層第Ⅲ－3層を約0.10m掘り込んで構築している。遺存状態は、良好である。

規模は、上端長軸2.17m、短軸0.44m、下端長軸1.70m、短軸0.25m、深さは0.35mを測る。平面形態は、不整長方形を呈し、断面形態は、ほぼ箱型を呈する。底部は、標高27.45m～27.58mを測り、ほぼ平坦であり、僅かに北東側が低くなる。壁は約68°の角度で立ち上がり、北東側のみが、滑らかに立ち上がる。主軸方位は、N－45°－Eである。

覆土は、黒褐色土を主体として、3層に分けられる。第1層は、黒色粒子・黄色土塊を含有する。第2層は、砂質土である。第3層は、黒色粒子を含有する。

出土遺物は、覆土上層部より土師器片1点である。報告遺物はない。

### 2号土坑（第83図）

稲　葉　昭　智

2号土坑は、調査区の北西側G-2区に位置する。本土坑は、2号住居跡覆土上層部を僅かに掘り込んで構築している。本土坑の0.5m北に5号土坑がある。確認面は、基本土層第Ⅲ－2層である。遺存状態は、良好である。

規模は、上端長軸1.26m、短軸1.08m、下端長軸0.80m、短軸0.70m、深さ0.11mを測る。平面形態は、不整楕円形を呈し、断面形態は、浅い皿状を呈する。底部は、標高27.76mを測り、ほぼ平坦である。壁は、滑らかに立ち上がる。主軸方位は、N－35°－Eである。

覆土は、3層に分けられる。全層にわたり、炭化物を極めて多量に含有する。第1層は、黒褐色土を主体とする。第2層は、灰を主体とする層であり、特に、炭化物を多量に含有する。下位に焼土も含有される。第3層は、暗褐色土を主体とする。

出土遺物は、土師器片82点である。報告遺物はない。

**3号土坑**（第81・84図）　　森　原　明　廣

3号土坑は、調査区の北側、D－1・D－2区にまたがって位置する。本土坑の北側は、調査区外へ延びている。本土坑は4号住居跡・7号住居跡を掘り込んで構築しており、上面を5号溝に切られている。本土坑の8.5m西南に2号土坑が、10m西に4号土坑がある。確認面は、基本土層第Ⅱ－3層である。遺存状態は、悪い。

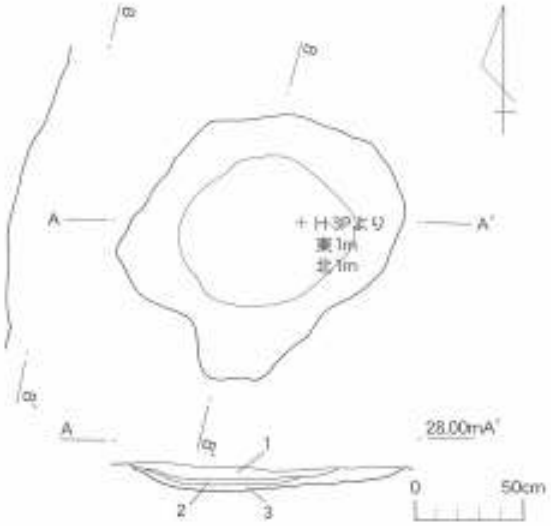
調査区内での規模は、上端長軸2.18m、短軸1.62m、下端長軸0.77m、短軸0.73m、深さ0.21mを測る。平面形態は、不整半円形を呈し、断面形態は、浅い皿状を呈する。底部は、標高27.67～27.75mを測り、ほぼ平坦であるが、著しい凸凹が存在する。壁は、約30°の角度で、緩く立ち上がる。主軸方位は、不明である。

覆土は、黒褐色土を主体として、2層に分けられる。両層は、ともに、炭化物を焼土粒を多量に含有し、特に、下層部には、4~5cm大の炭化材が残存する。また、下層部付近からは、焼土が全く認められなかった。

出土遺物は、広範囲より土師器片17点である。報告遺物は3・4（杯）である。

**表11　時期不明の遺構（3号溝、3号土坑）出土遺物観察表**

| 番号 | 器種種類 | 位置 | 法量(cm) | 胎質 | 成形・形態 | 整形技法 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外 | 内 |
| 81-1 | S字甕土師 | 覆土 | 口径(12.4)<br>残高6.0<br>口縁部～胴部上位1/4残。 | 胎：0.5~2.0大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内7.5YR8/1（灰白色）外吸炭のため不詳。 | 粘土紐積み上げ。<br>丸みを持つ胴部より、下位で外反、上位で僅かに外傾するS字状の口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」。頸部は、横方向の「箆撫で」。胴部は、上位と下位で交錯する「刷毛目」後、頸部～肩部へかけて横方向の「刷毛目」が巡る。 | 口縁部は「横撫で」。頸部は、横方向の「撫で」。胴部は、「箆撫で」。 |
| 備考 | 器体外面のほぼ全域が、淡く吸炭。外面の一部が剥落する。<br>3号溝出土。 | | | | | | |
| 81-2 | 把手土師 | 覆土 | 現高3.0<br>把手破片。 | 胎：0.3~0.5大の砂粒、赤色粒子を多量に含有。<br>焼：良<br>色：7.5YR7/6（橙色） | 手捏ね。<br>上方へ僅かに内彎する。 | | |
| 備考 | 極一部に吸炭がある。<br>3号溝出土。 | | | | | | |
| 81-3 | 杯土師 | 覆土 | 口径(13.8)<br>残高4.3<br>1/4残 | 胎：0.4~0.5大の砂粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内外5YR7/8（橙色） | 粘土紐巻き上げ。<br>浅い丸底の体部から、僅かに凹む稜を経て、中位より内彎気味に立ち上がる口縁部に至る。 | 口縁部は「横撫で」後、下位に工具による「撫で」により稜を作る。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」。<br>体部は、横方向の「撫で」。 |
| 備考 | 体部内面の極一部に吸炭がある。<br>3号土坑出土。 | | | | | | |
| 81-4 | 杯土師 | 覆土 | 口径(14.8)<br>残高3.6<br>口縁部1/4残 | 胎：0.2~1.0大の黒色雲母粒を多量に含有。<br>焼：良<br>色：内吸炭のため不詳。外10YR8/2（灰白色） | 粘土紐の巻き上げ。<br>体部より、明確な稜を経て、屈曲しながら立ち上がり、中位の沈線を経て外傾する口縁部に至る。 | 口縁部は工具による横方向の「撫で」により、中位の段と稜を作る。<br>体部は「箆削り」。 | 口縁部は「横撫で」<br>体部は、「撫で」。 |
| 備考 | 器体内面の全域に吸炭がある。3号土坑出土。<br>3号土坑出土。 | | | | | | |




2号土坑土層
1 黒褐色土(炭粒・焼土粒を多量に含有。)
2 炭化物層(炭化物の下方に焼土塊を多量に含有。)
3 暗褐色土(炭化物・焼土粒を多量に含有。底面は火熱を受けて焼土化している。)

第83図　2号土坑

3号土坑土層
1 黒褐色土(0.1cm大の炭粒・焼土粒を少量含有。)
2 黒褐色土(炭化物・0.5cm大の焼土粒を多量に含有。)

第84図　3号土坑

**4号土坑**（第85図）　　森　原　明　廣

4号土坑は、調査区の北西側、H－1区に位置する。本土坑の西側は、調査区外へ延びている。本土坑は、8号住居跡覆土を僅かに掘り込んで構築している。本土坑の約0.7m西南に5号土坑がある。確認面は、基本土層第Ⅱ－2層である。遺存状態は、良好である。

調査区内での規模は、上端長軸2.10m、短軸1.25m、下端長軸1.52m、短軸1.12m、深さ0.15mを測る。平面形態は、長円形を呈し、断面形態は、浅い皿状を呈する。底部は、標高27.9m～27.99mを測り、ほぼ平坦であり、僅かに北側が低くなる。壁は、約30°の角度で緩く立ち上がる。主軸方位は、N－115°－Eである。

覆土は、黒褐色土を主体として3層に分けられる。全層にわたり、炭化物と焼土粒を多量に含有する。第1層と第2層の間には、炭化物が、薄い層を成して堆積している。

出土遺物は、土師器片7点である。報告遺物はない。

**5号土坑**（第86図）　　稲　葉　昭　智

5号土坑は、調査区の北西側、H－1・H－2・G－2区にまたがって位置する。本土坑の北側は、調査区外へ延びている。本土坑は、南側で2号住居跡、北側で号住居跡をそれぞれ切って構築している。本土坑の約0.5m南に2号土坑がある。確認面は、基本土層第Ⅲ－2層上面である。遺存状態は、良好である。

調査区内での規模は、上端長軸3.90m、短軸0.54m、下端長軸3.52m、短軸0.45m、深さ0.25mを

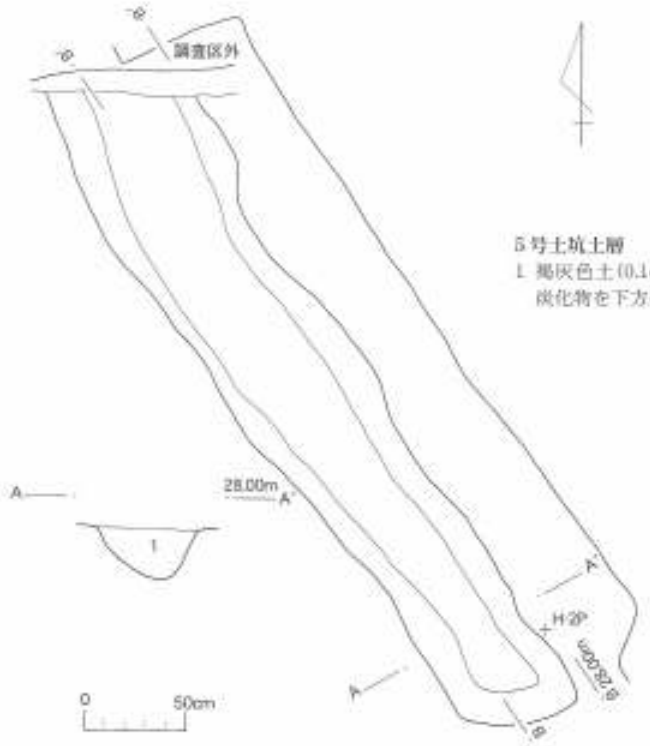
測る。平面形態は、不整長方形を呈し、断面形態は、皿状を呈する。底部は、標高27.60mを測り、ほぼ平坦である。壁は、約45°の角度で、緩く立ち上がる。主軸方位は、N－145°－Eである。

覆土は、１層であり、褐灰色土を主体とし、下層部に炭化物と焼土を集中的に含有する。

出土遺物は、ない。

4号土坑土層
1 黒褐色土(0.2cm大の黒色粒子・黄色土粒を少量含有。下方に炭化物を少量含有。)
2 黒褐色土(0.2cm大の黒色粒子・炭粒を少量含有。)
3 黒褐色土(1cm大の焼土塊、0.1cm大の炭粒を多量に含有。)

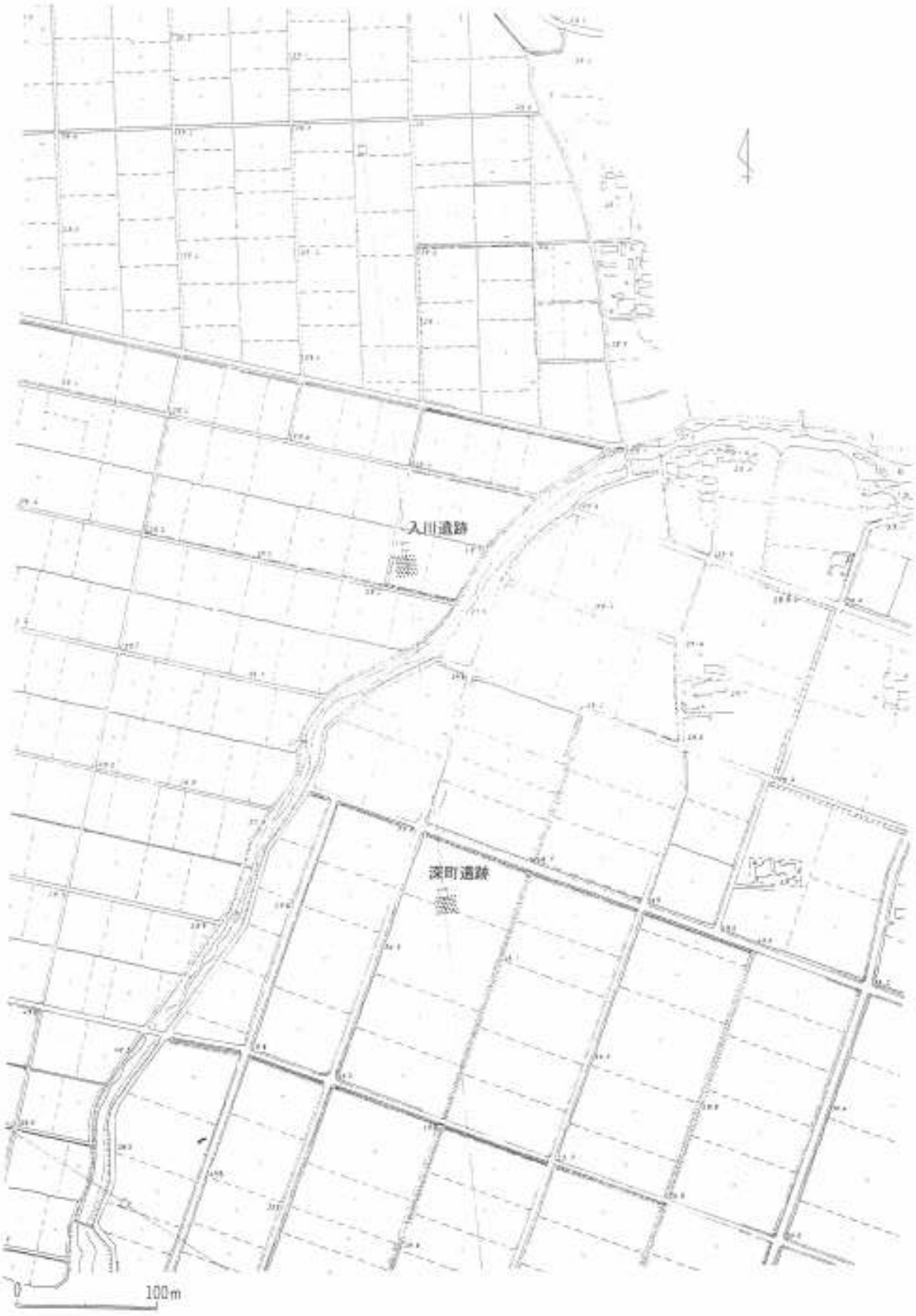
第85図　4号土坑




5号土坑土層
1 褐灰色土(0.1cm大の黄色土粒を少量含有。炭化物を下方に少量含有。)

第86図　5号土坑

# Ⅷ　深町遺跡

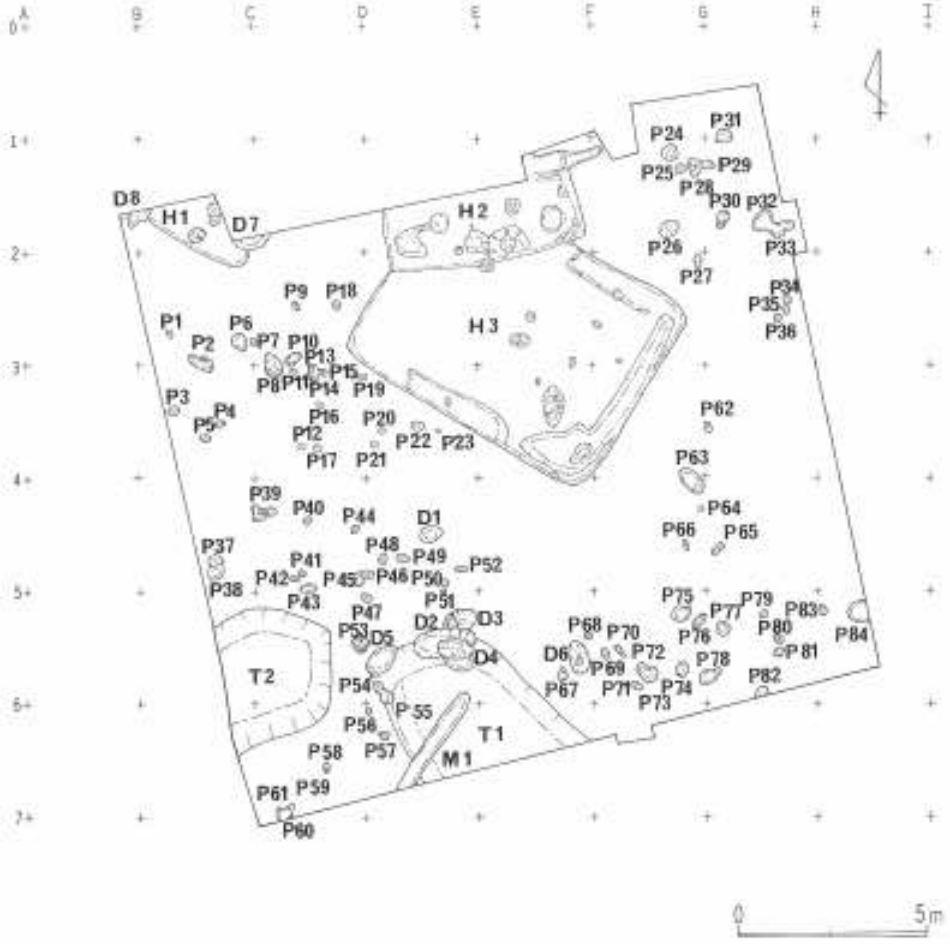



第87図　深町遺跡位置図

## 1　遺跡の概観

深町遺跡は、入川遺跡の南側約230mに位置している。

発見された遺構は、古墳時代五領期の住居跡２軒、鬼高期の住居跡１軒、竪穴状遺構２軒、溝跡１条、ピット84個、土坑８基が検出された。住居跡は、調査区の北側に検出され、竪穴状遺構は南側で検出された。遺物は、住居跡出土の古墳時代の土器・土錘以外に、縄文時代中期・後期の土器片・石鏃等が出土した。また、鬼高期の包含層を切る形で、北から西へ約30度の方向に噴砂が確認された。



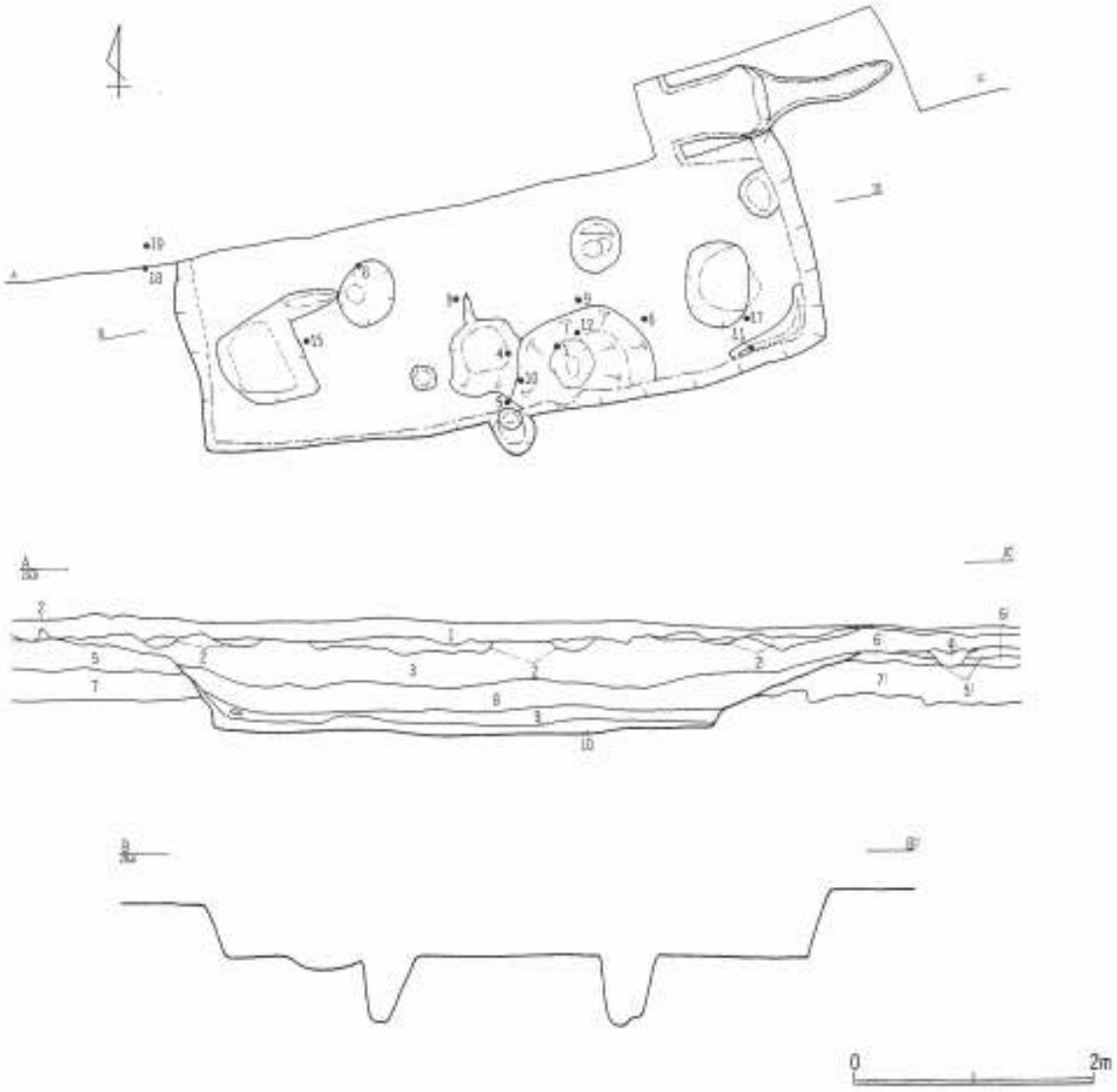

第88図　深町遺跡全側図

## 2　遺構と遺物

### (1)住居跡

**1号住居跡**（第90図）

**2号住居跡**（第89・91・92図）




**2号住居跡土層**

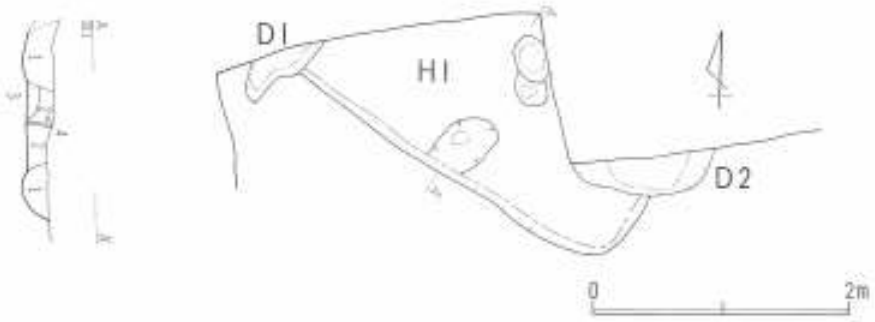
1 黒色土(炭化物を含む)　2 灰色土　3 黒色土(若干炭化物を含む)

4 灰色土(若干炭化物を含む)　5 灰色土　6 灰オリーブ色土

7 黒褐色土　8 暗灰色褐色土(若干炭化物を含む)

9 暗オリーブ灰色土(若干炭化物を含む)　10 青黒色土(若干炭化物を含む)

**第89図　2号住居跡**




1号住居跡土層

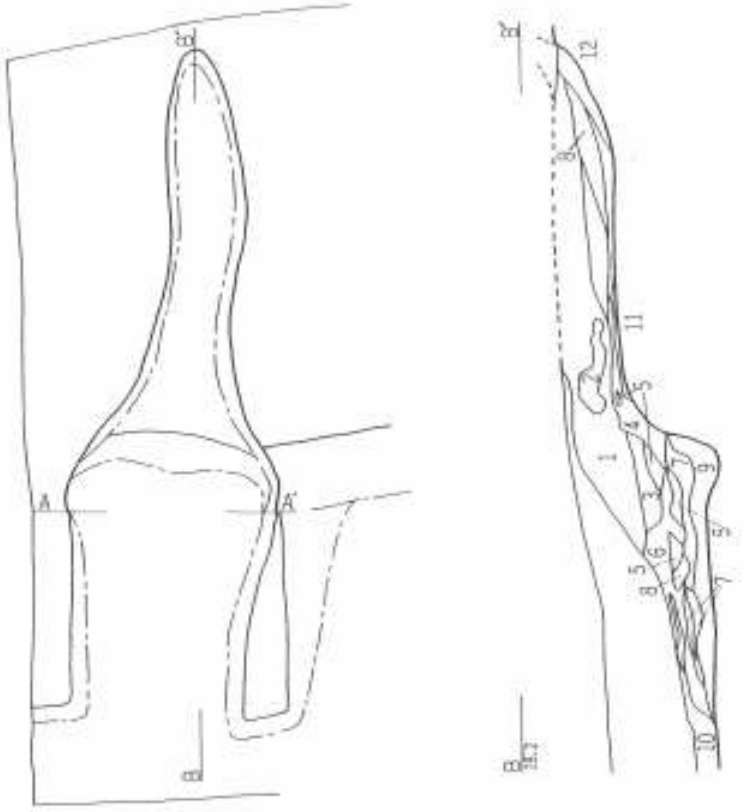
1 黒褐色粘質土

2 黄灰色粘質土

3 明黄褐色粘質土

4 埴砂

第90図　1号住居跡




2号住居跡カマド土層

1 灰色土(炭化物・焼土を若干含む)

2 焼土(淡い橙色)

3 黒灰色土(炭化物・焼土を含む)

4 黒灰色土(炭化物を多量に含み、わずかに焼土を含む)

5 黄灰色砂

6 黄灰色土(焼土・炭化物をわずかに含む)

7 焼土(淡い褐色)

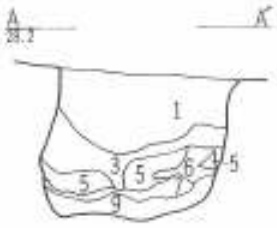
8 焼土(橙色)

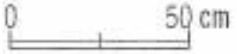
9 炭化物

10 黒灰色土(焼土・炭化物を含む)

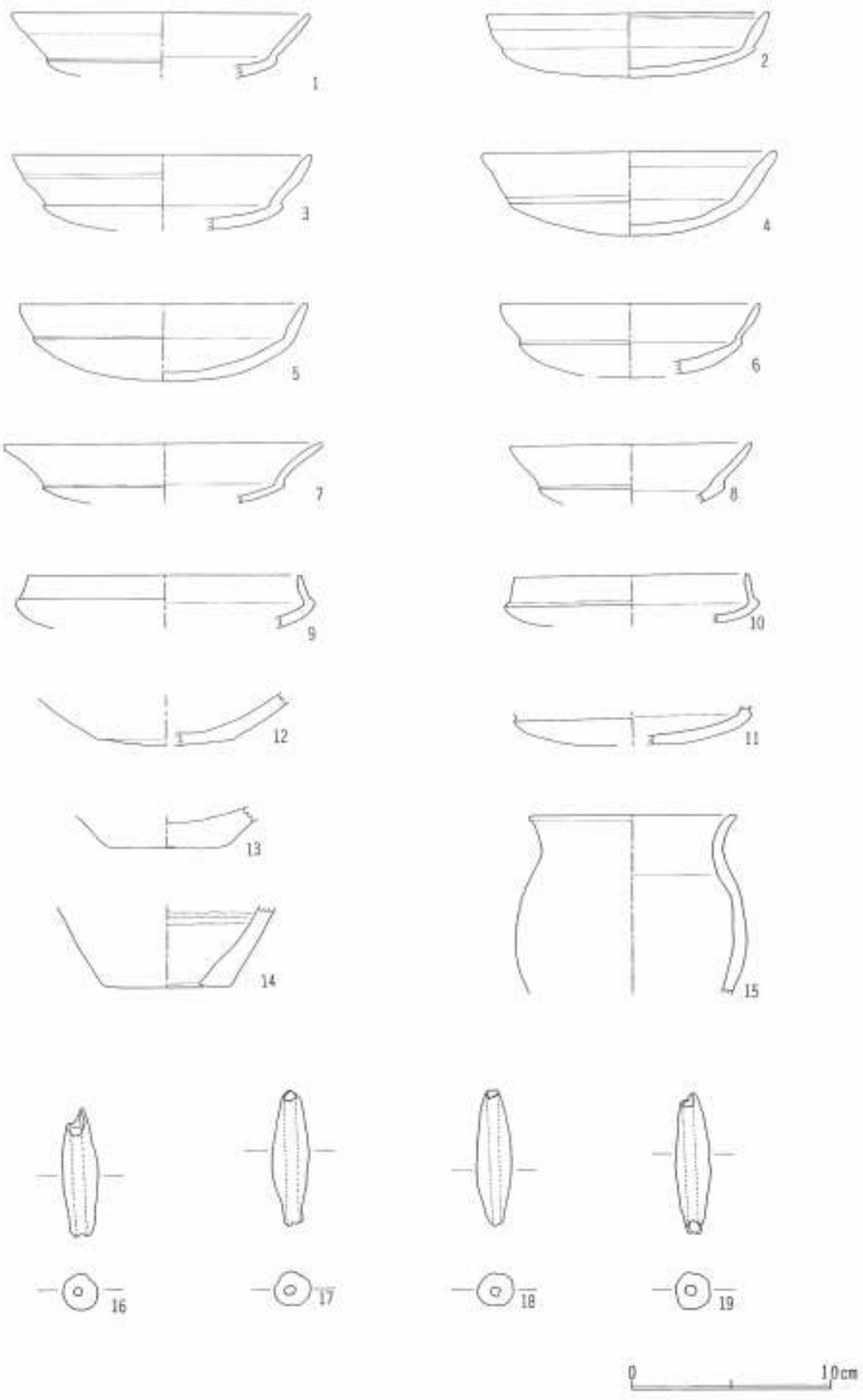
11 黒灰色土(炭化物を含む)

12 黒灰色土(炭化物・焼土を含む)



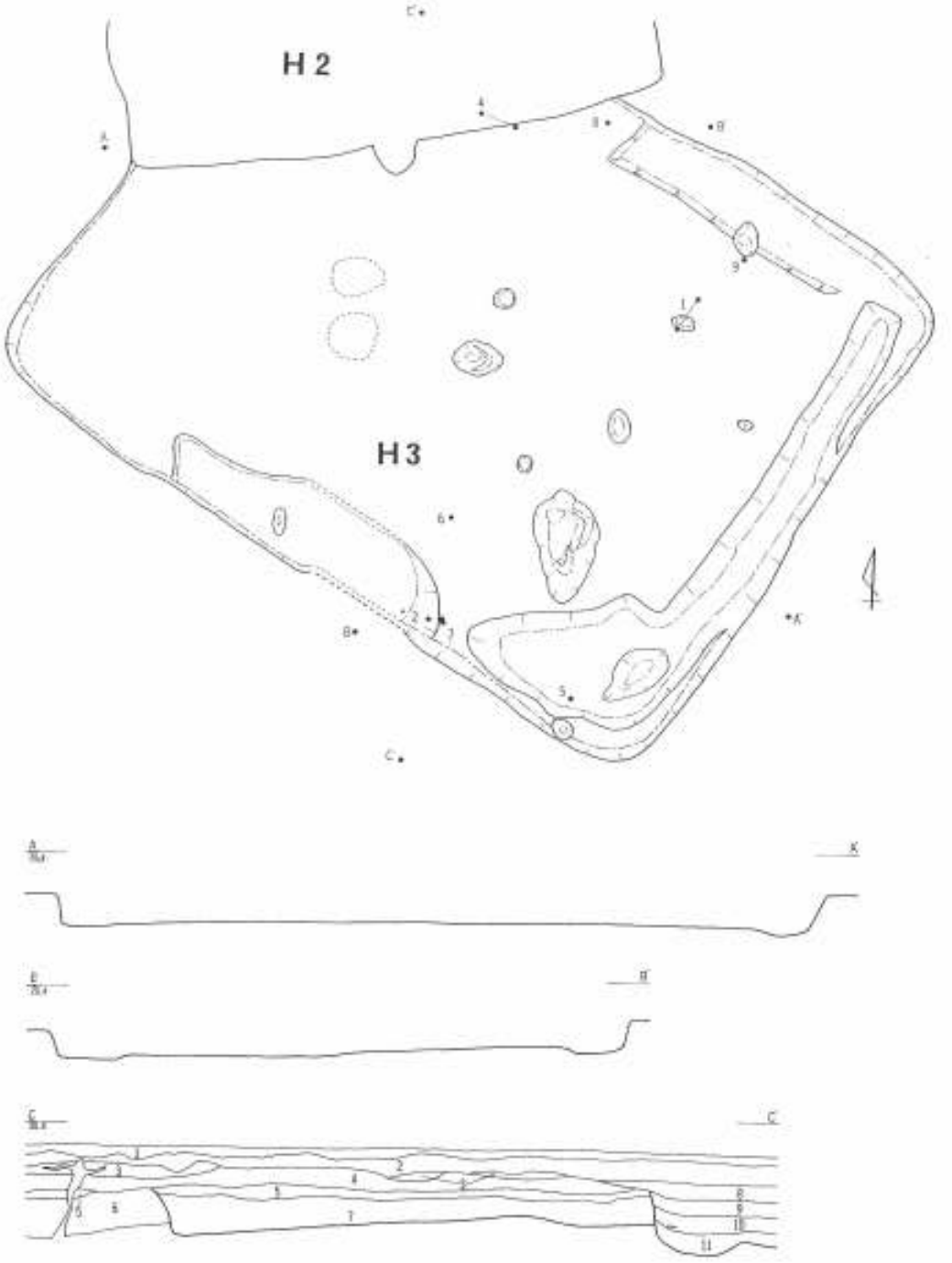




第91図　2号住居跡竈




第92図　2号住居跡出土遺物

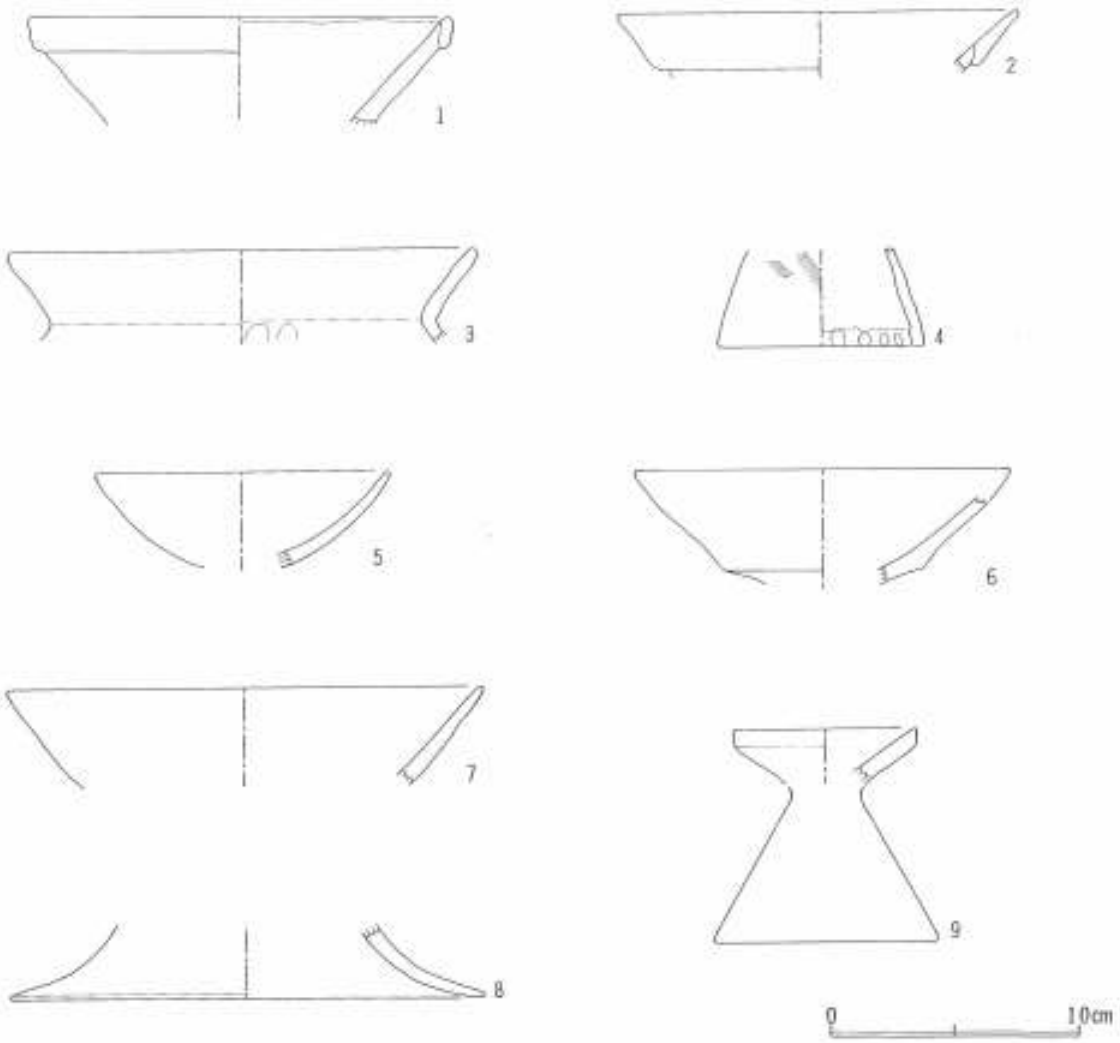
3号住居跡（第93・94図）




**3号住居跡土層**

1 灰白色土　2 黒色土(炭化物を含む)　3 灰色土　4 灰色土　5 灰オリーブ色土　6 黒褐色土　7 灰色土　8 黒色土(わずかに炭化物を含む)　9 暗灰色土(わずかに炭化物を含む)　10 暗オリーブ灰色土(わずかに炭化物を含む)　11 青黒色土(わずかに炭化物を含む)

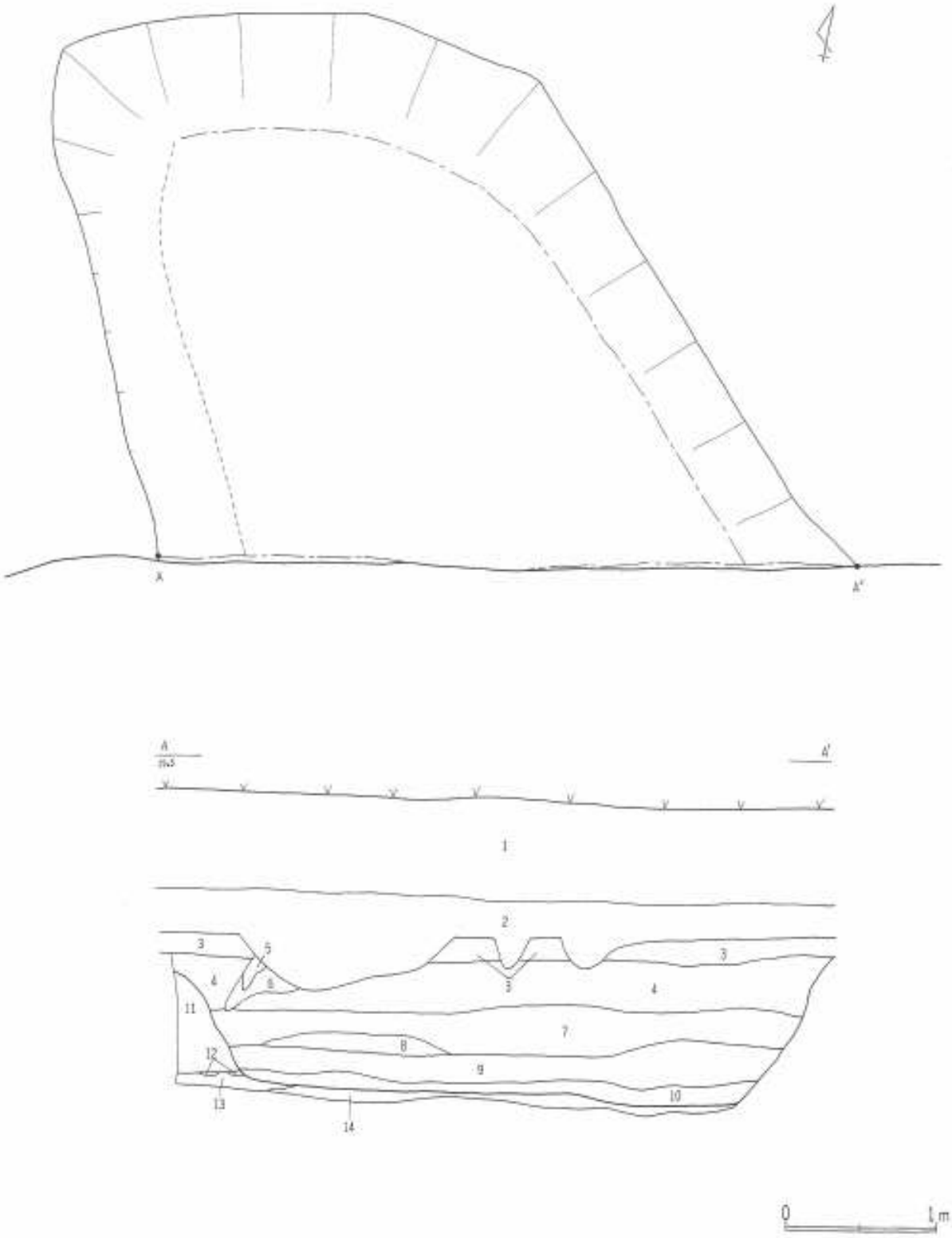
**第93図　3号住居跡**




第94図　3号住居跡出土遺物

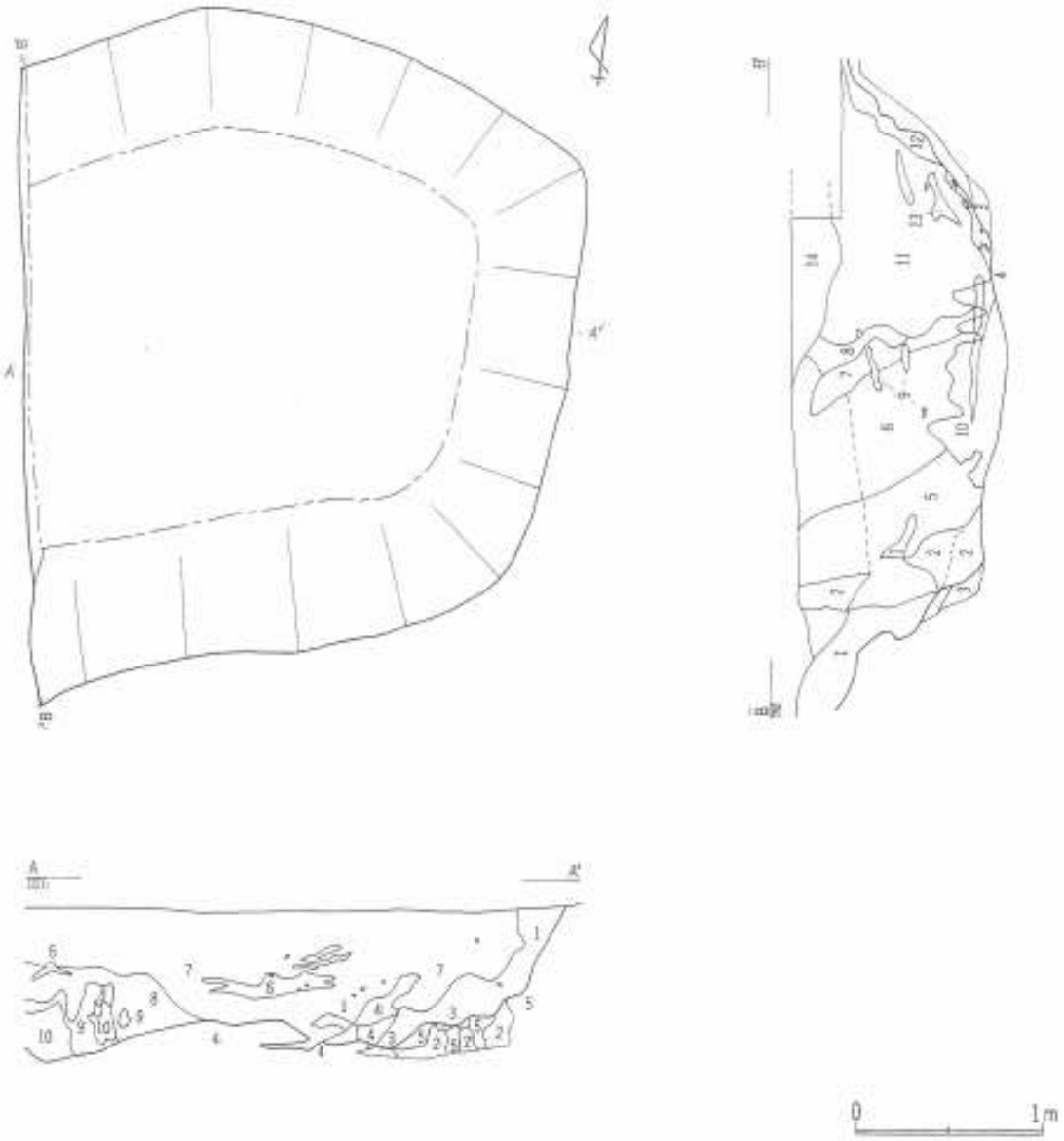
## （2）竪穴状遺構

### 1号竪穴状遺構（第95図）




第95図　1号竪穴状遺構

## 2号竪穴状遺構（第96図）




**2号竪穴状遺構土層**

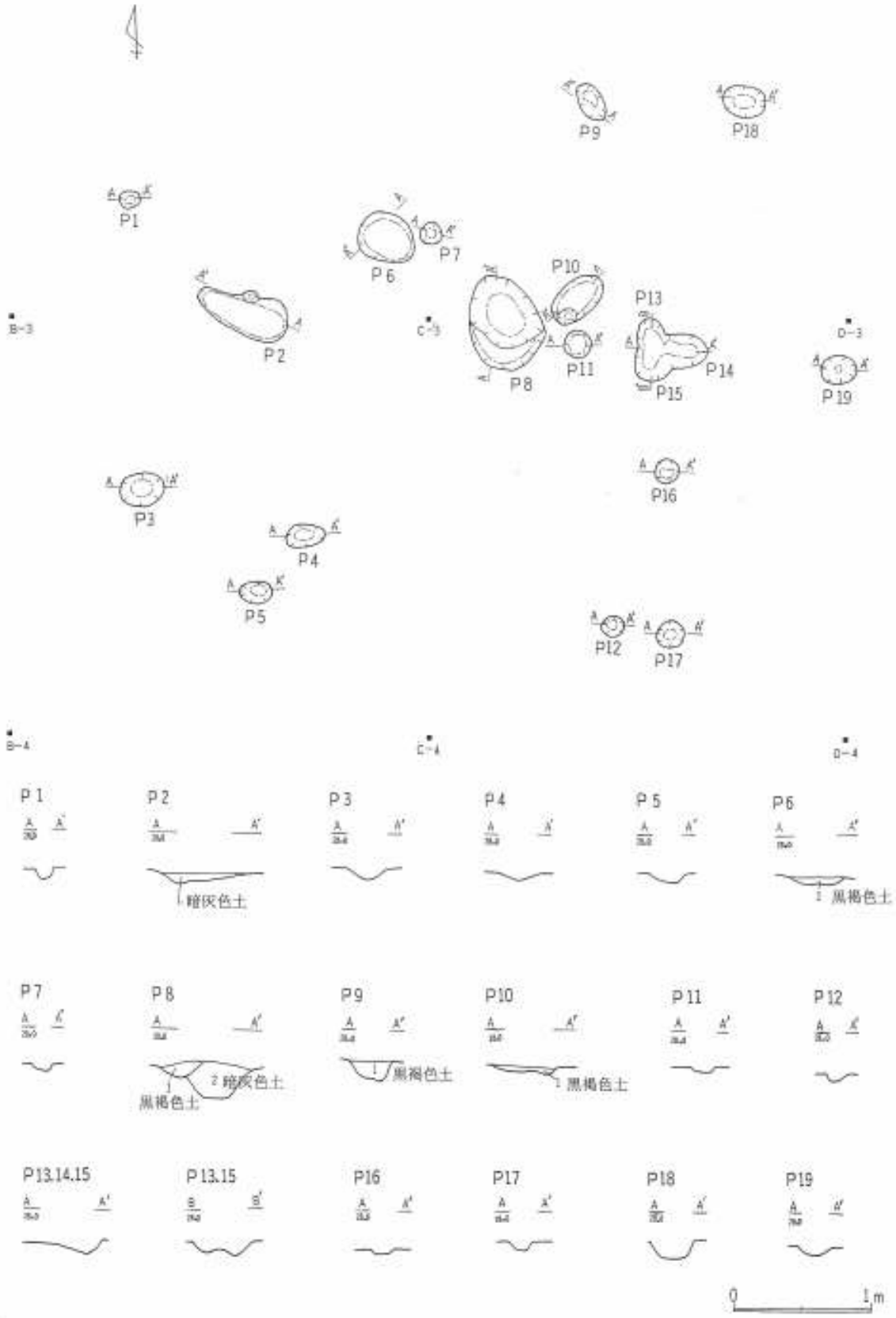
A－A' 1 黒褐色土　2 淡青色粘質土　3 1層と2層が混合している　4 礫層　5 淡黄色粘質土(基盤層)　6 灰色粘質土　7 淡黄色粘質土　8 黄色粘質土　9 淡青色粘質土　10 青色粘質土

B－B' 1 黒褐色土　2 礫層　3 黄灰色砂　4 礫層　5 淡灰色砂質土　6 黄灰色粘質土　7 暗黄灰色粘質土　8 明灰色粘質土　9 灰色土ブロック　10 青灰色粘土　11 黒色粘質土　12 淡黄色粘質土　13 暗灰色土ブロック

**第96図　2号竪穴状遺構**

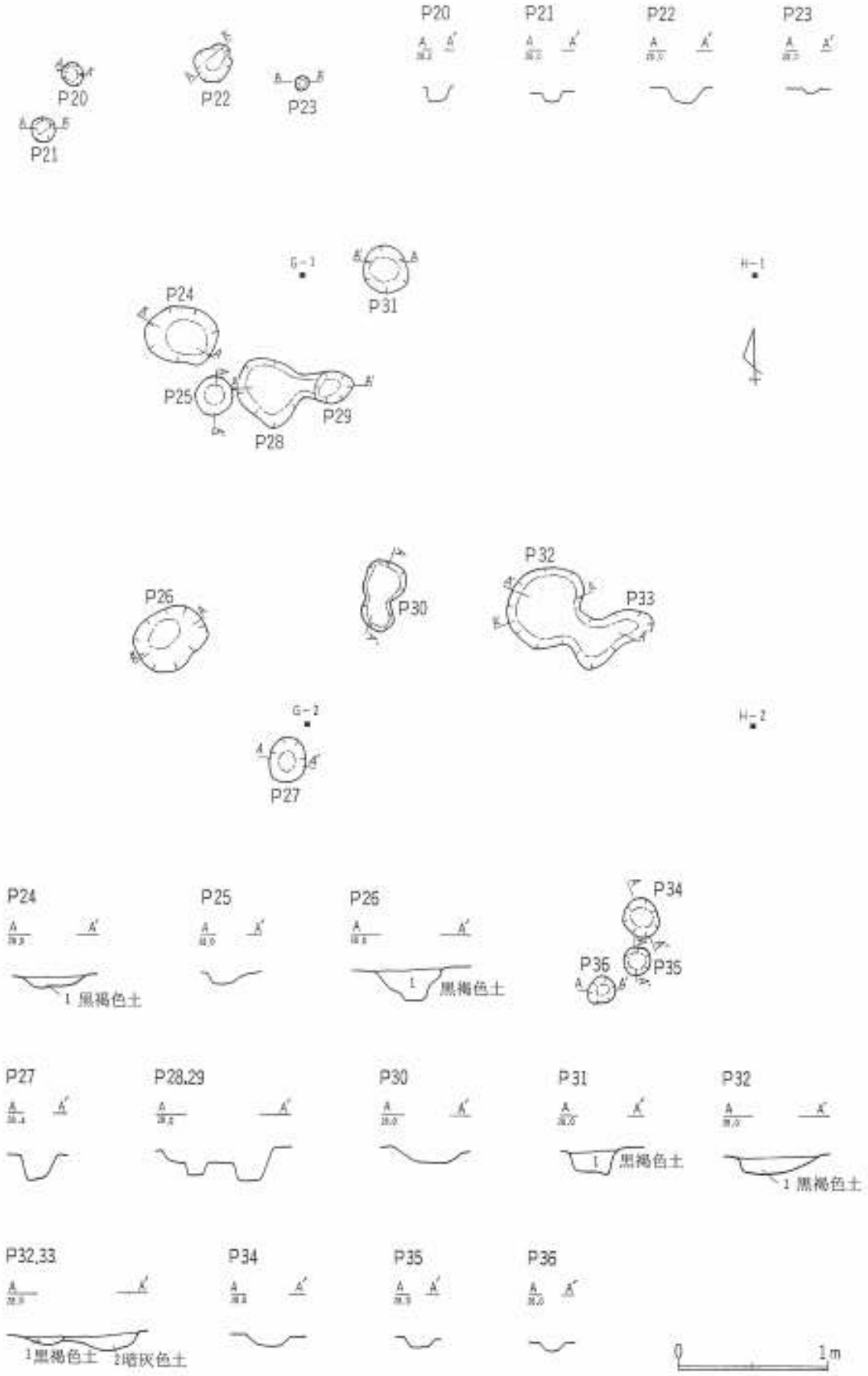
## (3)ピット

### 1号～19号ピット（第97図）



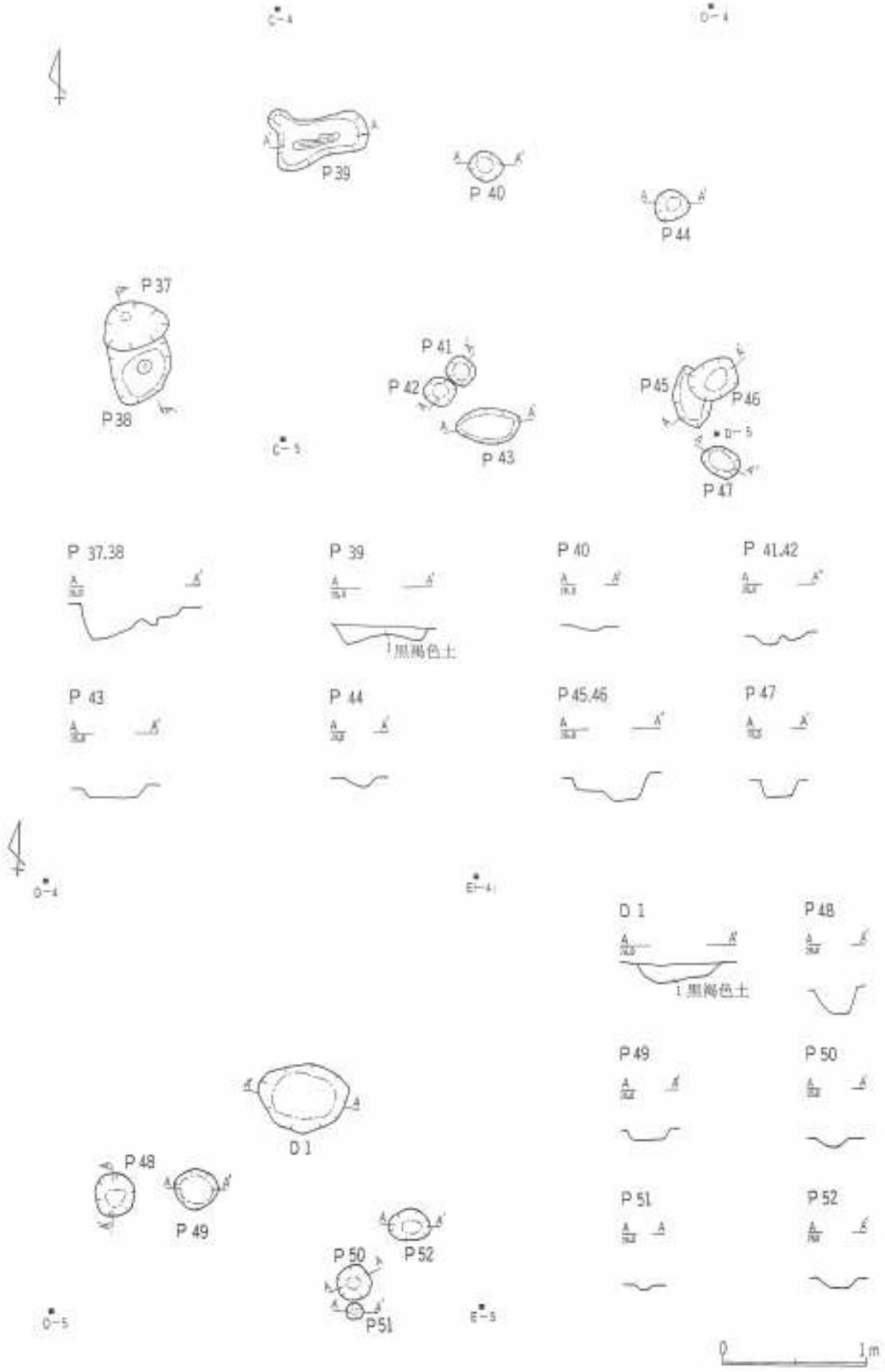

第97図　1～19号ピット

20号～36号ピット（第98図）



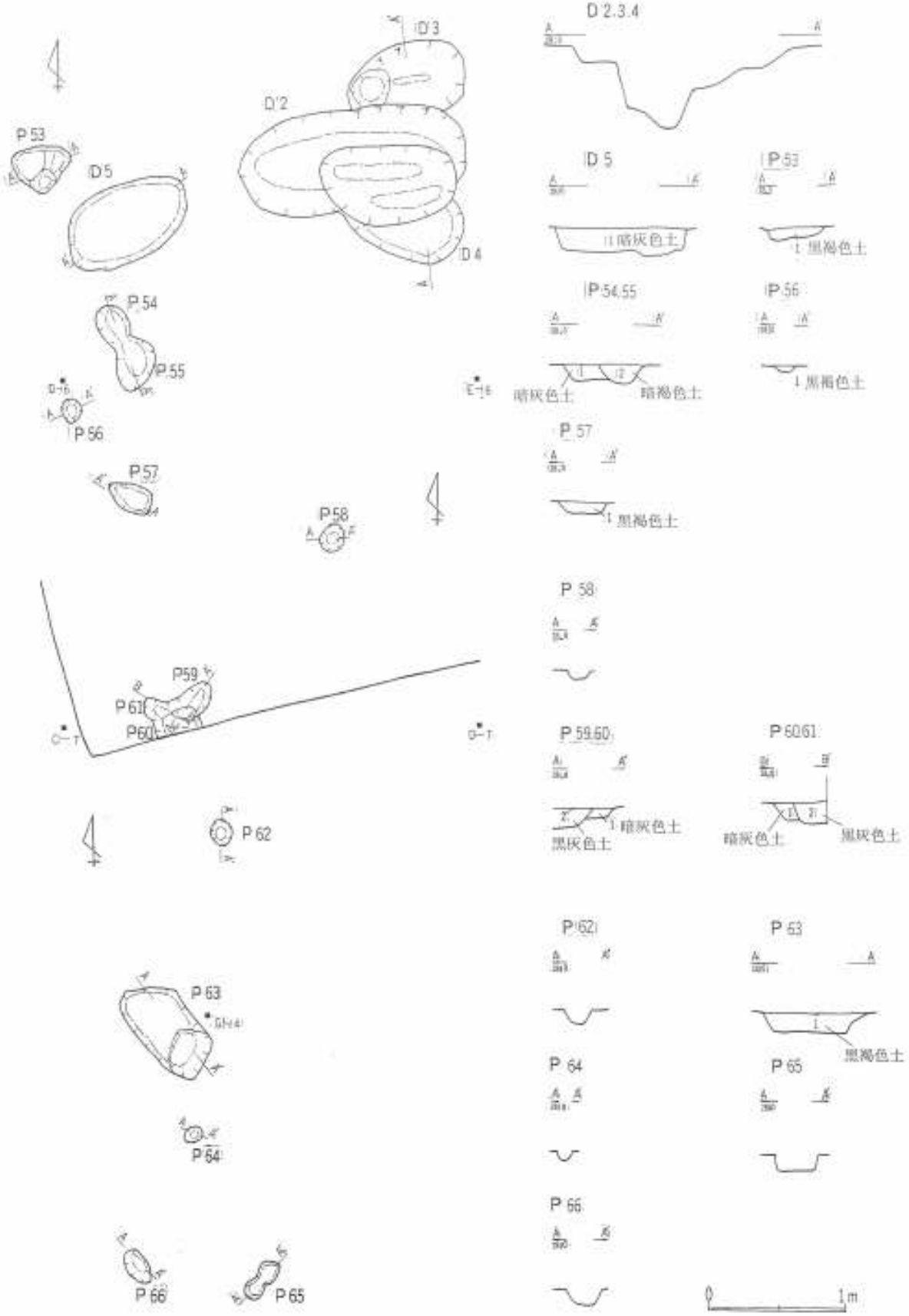

第98図　20～36号ピット

37号～52号ピット（第99図）



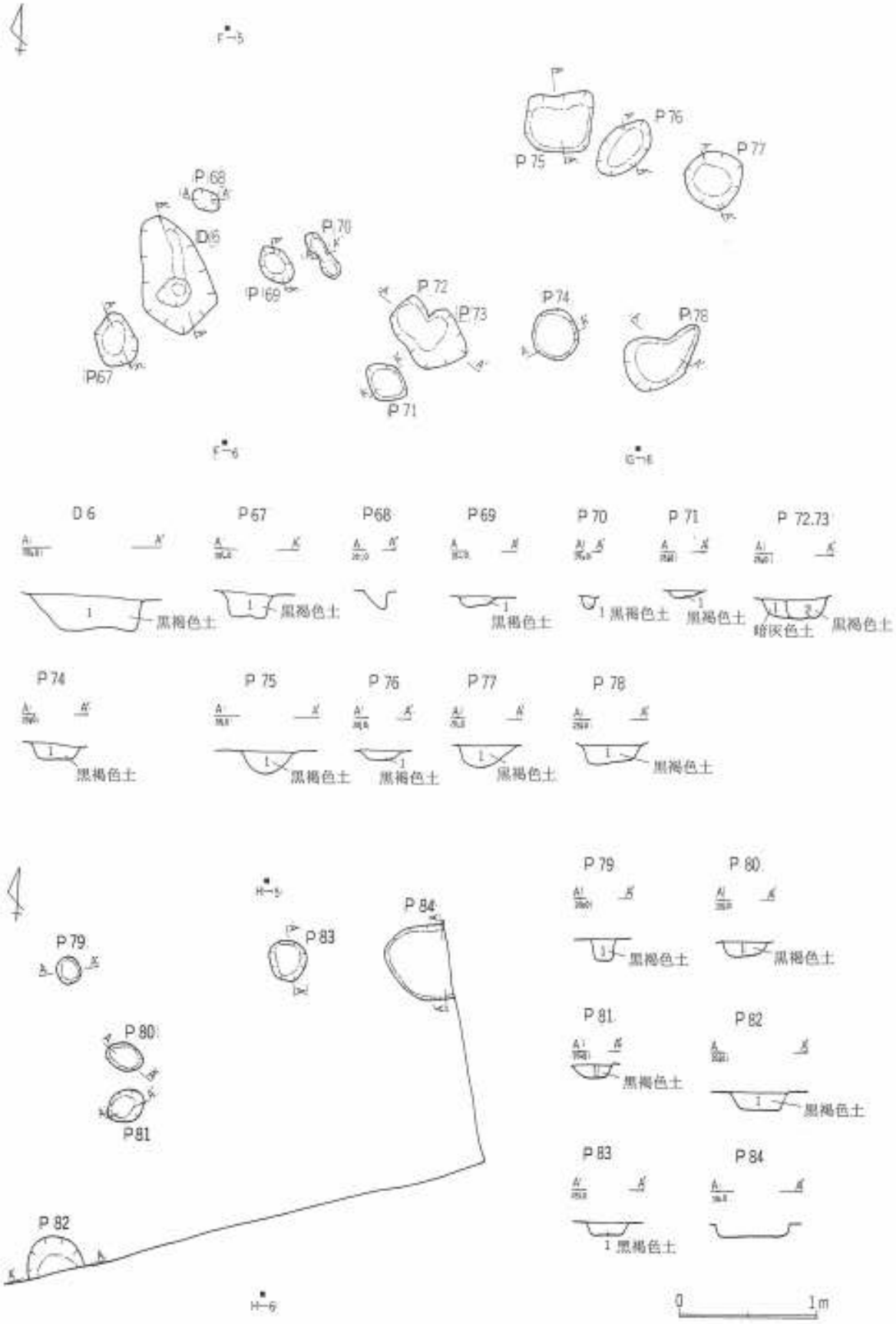

第99図　37～52号ピット、1号土坑

53号～66号ピット（第100図）




第100図　53～66号ピット、2～5号土坑

67号～84号ピット（第101図）




第101図　67～84号ピット、6号土坑

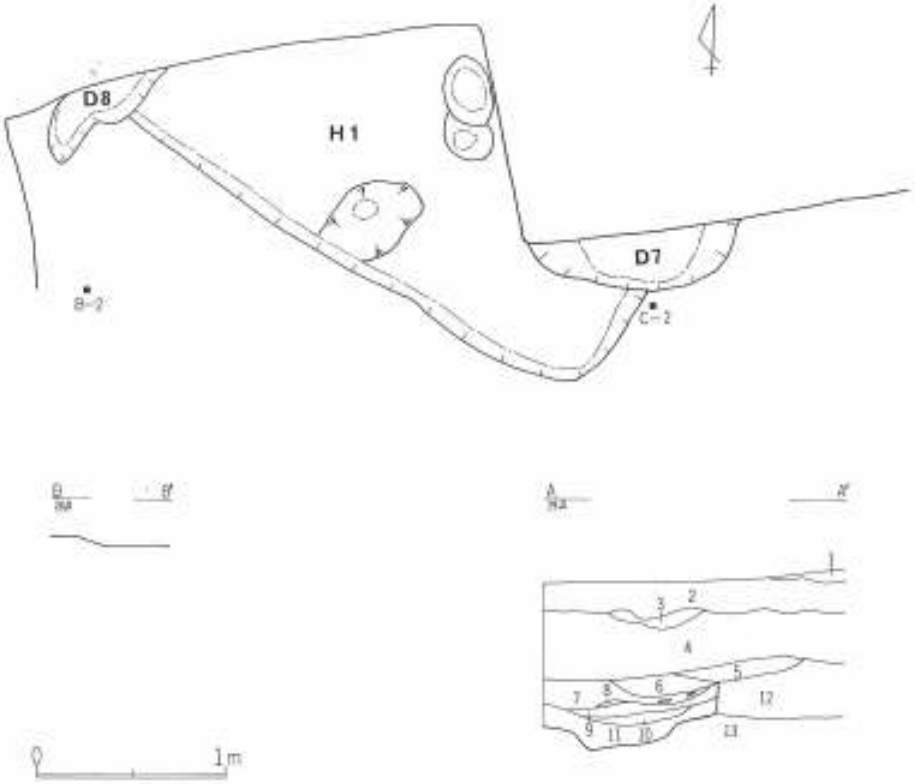
## (4)土坑

**1号土坑**（第99図）

**2～5号土坑**（第100図）

**6号土坑**（第101図）

**7・8号土坑**（第102図）



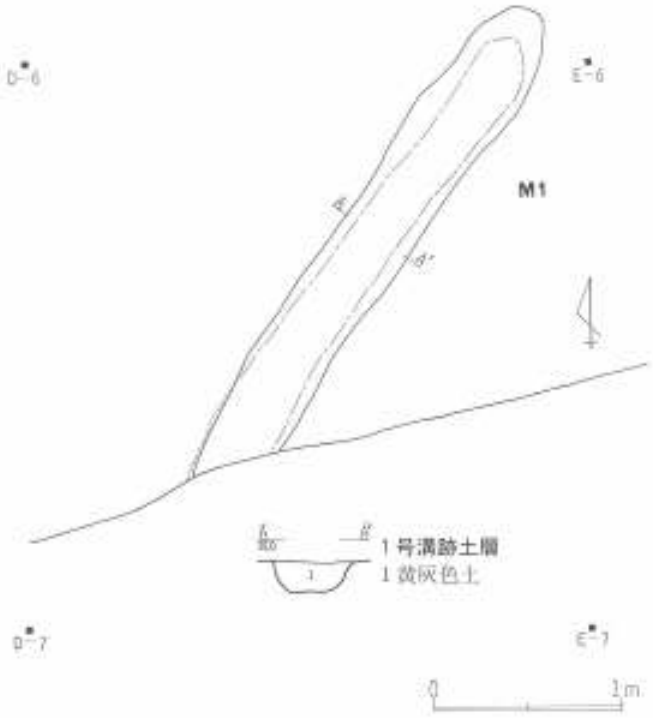

**7・8号土坑土層**

1 黒色土　2 黒色土(炭化物を含む)　3 灰色土　4 灰色土　5 灰色土(わずかに炭化物を含む)　6 灰色土(炭化物を含み，黒味をおびる)　7 暗オリーブ灰色土(炭化物・焼土を多量に含む)　8 焼土　9 暗緑灰色土(わずかに炭化物を含む)　10 暗緑灰色土(わずかに炭化物と砂を含む)　11 暗緑灰色土(黄色味をおびる)　12 黒褐色土

**第102図　7・8号土坑**

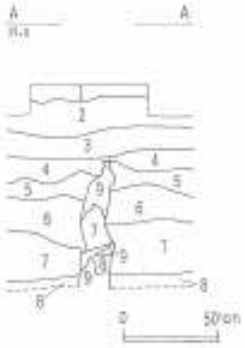
## (5)溝跡

### 1号溝跡（第103図）




第103図　1号溝跡

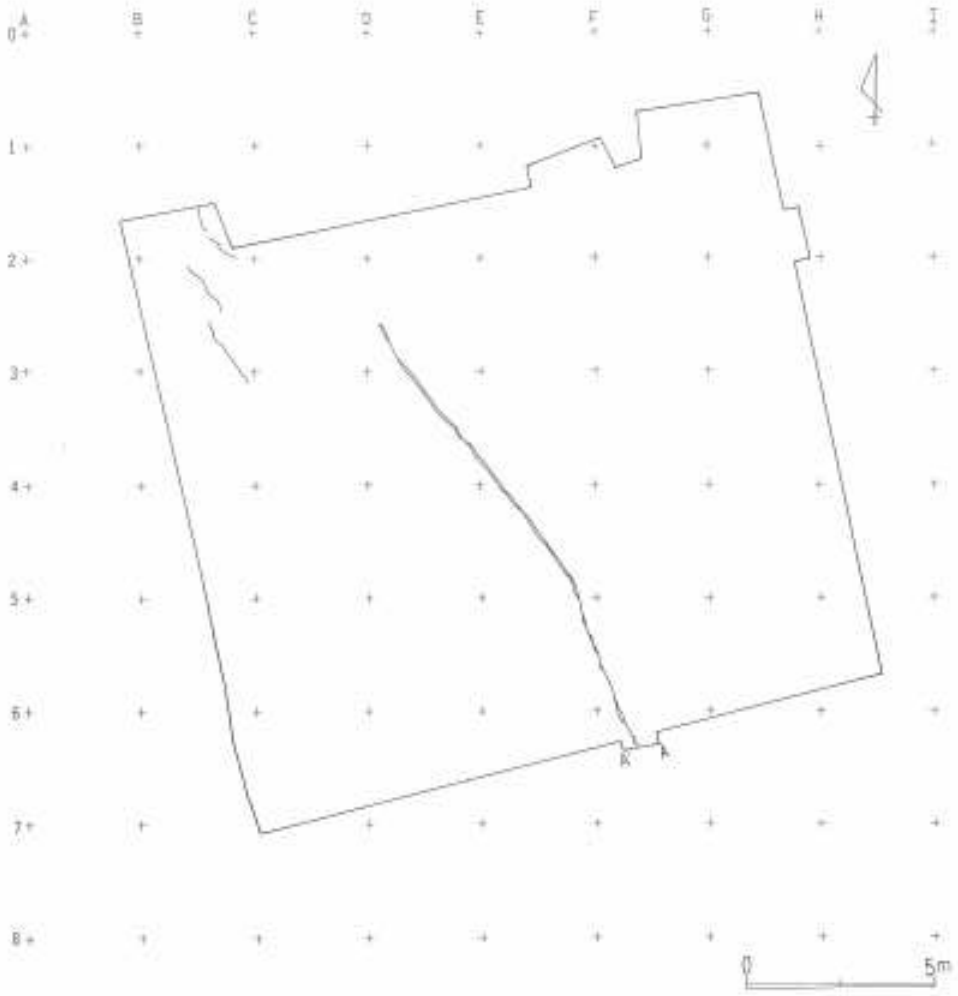
## (6)噴砂




噴砂土層

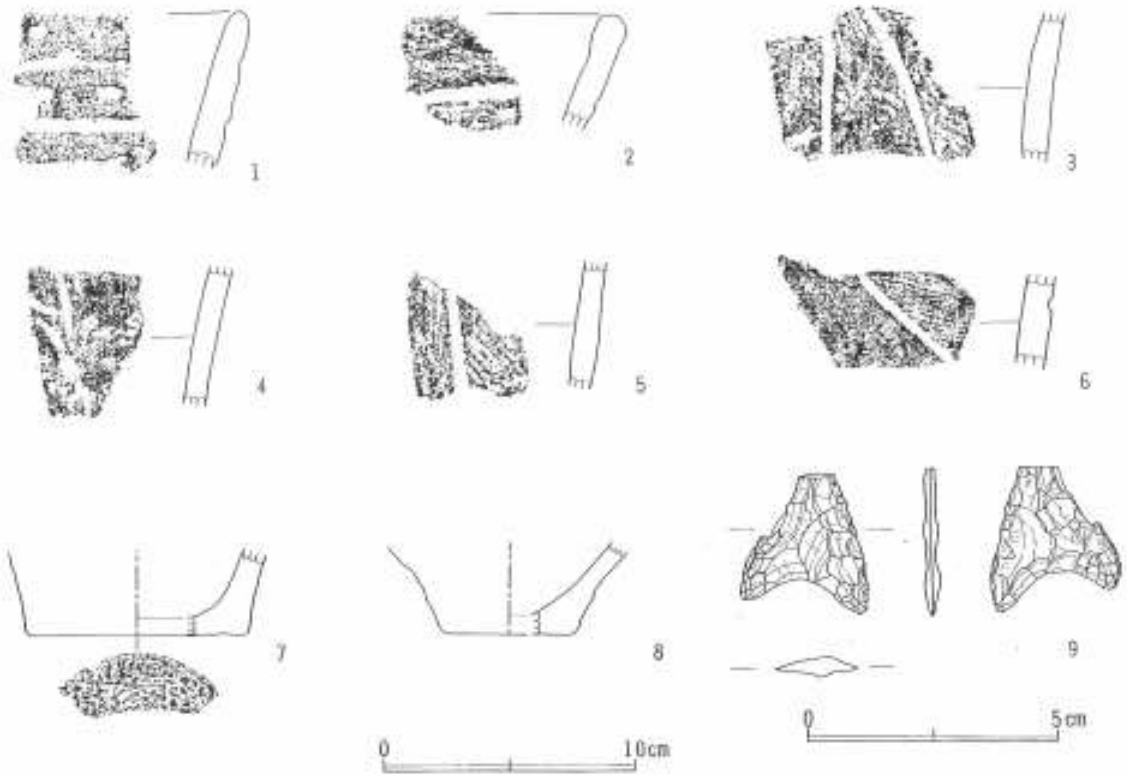
1 灰白色土
2 黒色土
3 灰色土
4 灰色土
5 黒褐色土
6 明黄褐色土
7 灰色土
8 黒色土

第104図　噴砂断面図

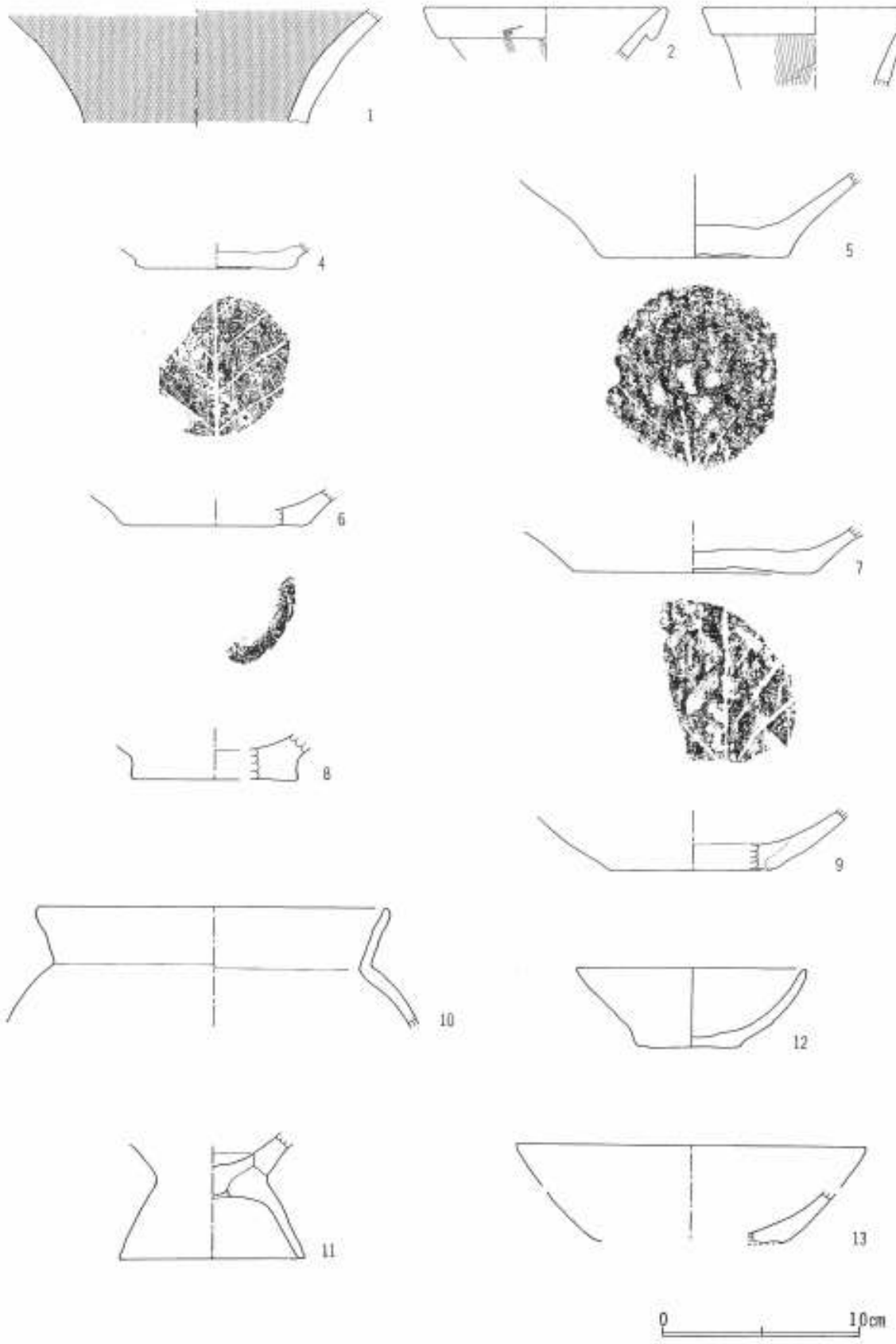



第105図　噴砂位置図

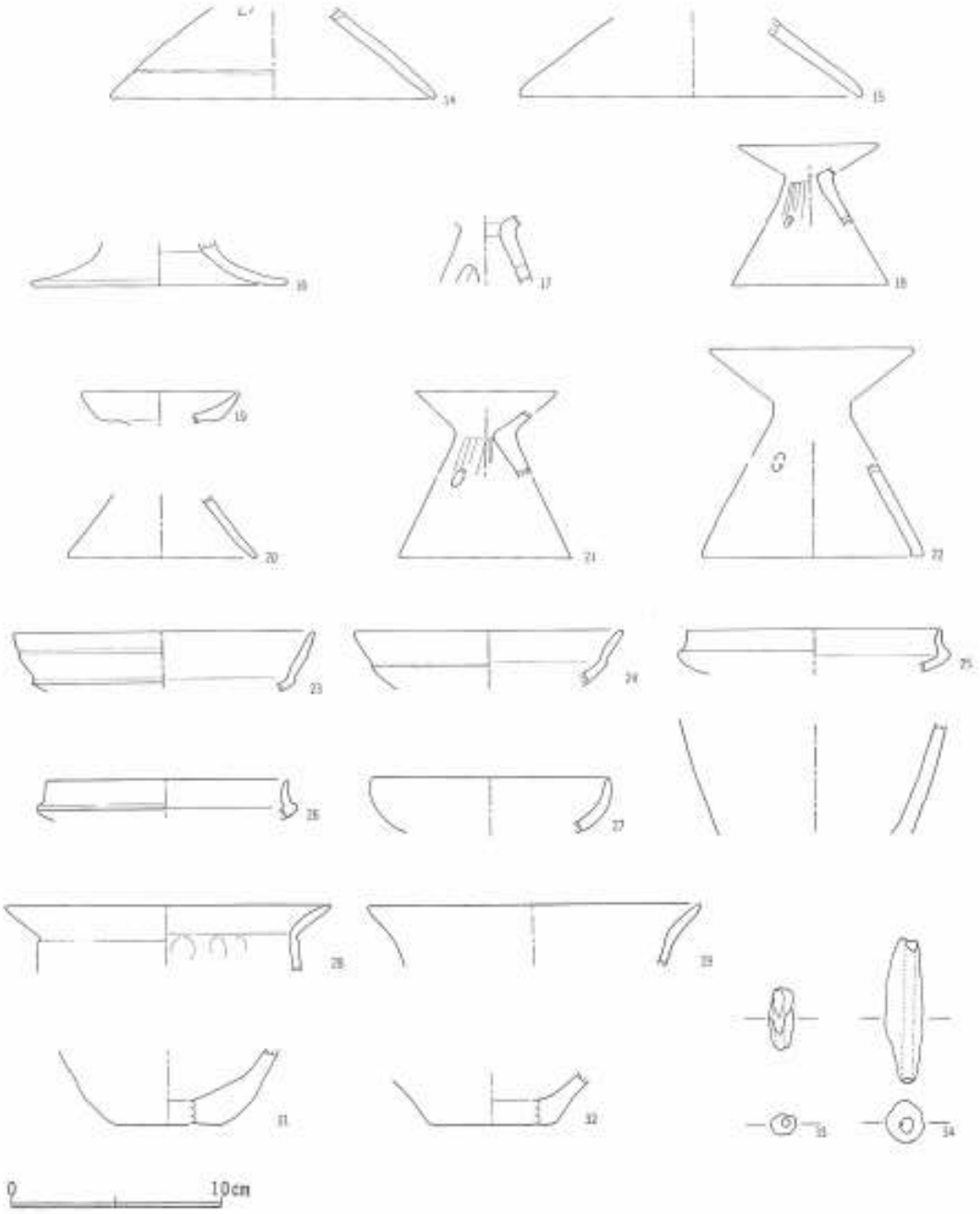
## (7)遺構外出土遺物(第106～108図)




第106図　遺構外出土遺物(1)




第107図　遺構外出土遺物(2)




第108図　遺構外出土遺物（３）

# Ⅸ　入川遺跡土壌の植物珪酸体分析

## 1　試料および分析方法

入川遺跡の３ピットから５cm間隔で採取した試料42点を分析試料とした。

土壌試料の植物珪酸分析法の概要を以下に示す。

### （1）　有機物の除去

2㎜ のふるいを通過した風乾細土10ｇを500mlのトールビーカーにとり、６％の過酸化水素（$H_2O_2$）を50ml加える。時計皿で蓋をした後、ホットプレート上で加熱する。この操作は土の黒味が取れるまで続ける。黒味が残っている場合は、さらに30％過酸化水素の少量をスポイトで適宜添加する。

### （2）　超音波処理

（1）の処理後、ビーカー内の試料を遠心分離管に移し、水で数回遠心分離する（遠心分離機がない場合は、ビーカー内の水分をホットプレートで蒸発させる。この操作は水面が土と接する程度で止める）。遠心分離した土を超音波処理機に入れ、10キロヘルツ、出力150Wの条件で５分間程度音波処理し、土粒子をほぐす。終了後、再びビーカーに土をもどす（最終的にビーカー内の液面を50～60mlとする）。

### （3）　脱鉄処理

ビーカー内の液面と同容積の濃塩酸を加え（この時、塩酸溶液の濃度は６Ｎである）、ホットプレート上で30分～１時間加熱する。土の色から褐色味がとれ、ほぼ灰白色になった時点でこの処理を中止する。褐色味がとれない場合、さらに時間を加算するか、濃塩酸をスポイトで滴下し、ふたたびこの処理を繰り返す。

### （4）　沈定法

脱鉄処理後、ビーカー内に水を加え攪拌する。約30分後（水温20度）、液面から10㎝ までをサイホンで除去する。この操作は、液面から10㎝ までが透明になるまで続ける。ビーカーの底に沈んだ粒子は、ほぼ10μ以上の粒径である。

サイホンで水を除去する際に、底の土を舞い上げないように注意すること、水温の変化を15～20℃の範囲に保つことなどが、この操作で重要なことである。

水道水中に珪酸体が混入している場合があるので、可能な限り純水を用いる。なお、10μ以下の粒子の10㎝ の沈降時間は、10℃ で30分50秒、15℃ で26分50秒、および20℃ で23分45秒である。

### （5）　水中篩別

0.2（または、0.1mm）のふるいを、水にはったポリバットに入れ、ビーカー内の粒子を流しこむ。水中でゆっくり篩分けする。ふるいを上げ、バットの上澄みの濁りが沈んだら上澄みを捨て、沈澱部（10～200μ）を大型蒸発皿に移す。しばらく静置後、上澄み液を捨て小型蒸発皿に10～200μ粒子を移し、乾燥（110℃）させる。

### （6）　重液分離

乾燥した10～200μ（または、100μ）粒子の約１グラムをガラス遠心管(または、マルトー遠心分離管を用いると便利)にとり、比重2.3のツーレ重液とよく混合した後、150～2000回転で約５分間遠心分離する。浮上した植物珪酸体を前もって用意した乾燥ろ紙上に移す（スポイトを用いる）。この操作

は浮上物が肉眼で認められなくなるまで繰り返す（ほぼ４回）。ろ紙上の珪酸体は、熱水で十分洗浄したのち、小型蒸発皿に移す。上澄み液を捨てた後，乾燥させる。

以上の重液分離によって得られた浮上物の大部分は珪酸体であるが，時には火山ガラスや正体不明のきょう雑物がかなり含有している場合もある。

ツーレ重液の洗浄液は捨てないで褐色瓶に保存する。ある程度たまったら大型蒸発皿に移し、湯せん器上で濃縮する。少量の水でうすめた後、ろ紙を用いてろ過する。比重計あるいはピクノメーターで比重(2.3)を測定し、褐色瓶に保存する。

### （７） プレパラートの作製

少量の10～200μ粒径の珪酸体をスライドグラス上にとり、カナダバルサムで固定する。このスライドグラス上の植物珪酸体を偏光顕微鏡で500粒以上観察する。

## 2　植物珪酸体の形態的特徴

供試試料から分離した植物珪酸体は、その形態的特徴に基づいて、Ⅰ）イネ科草本起源珪酸体、Ⅱ）樹木起源珪酸体、Ⅲ）未記載（未分類）珪酸体に区別した（表－12）。

イネ科草本起源珪酸体は、葉身表皮細胞中の単細胞に由来する小型珪酸体と、機動細胞ブリッケルヘアー、長細胞などに由来する大型珪酸体に二大別した。さらに、小型珪酸体はタケ型、キビ型、ヒゲシバ型、ウシノケグサ型、ダンチク型およびその他珪酸体に細別した。

樹木起源珪酸体は、その形態的特徴から広葉樹型と針葉樹型に二大別されるが、ここでは一括して樹木起源として表示した。

未記載珪酸体の中には、植物珪酸体の破片、風化物、前述のⅠ）に属するが未だ分類されていない珪酸体、カヤツリグサ科起源珪酸体および起源不明の珪酸体などが含まれている。

つぎに、図版を用いて各珪酸体の特徴を解説する。

a）タケ型（図版71：１A～１L）

タケ型亜科（タケ類、ササ類）および一部のダンチク亜科の葉身表皮細胞に特徴的に観察される長座鞍形珪酸体である。試料中で検出されるタケ型珪酸体の多くはネザサなどのメダケ属およびアズマザサ属に由来する。しかし、１Eのように粒径の大きいササ属（あるいは、ヤダケ属）由来するものも検出される。

b）キビ型（図版71：２A～２O）、図版72：２P～２Z）

暖地系イネ科草本であるキビ亜科および一部のダンチク亜科の葉身表皮細胞に特徴的に観察される亜鈴形（２A～２R、２Z）、複合亜鈴形（２S～２U）および十字形（２V～２Y）珪酸体である。

試料中で検出されるキビ型珪酸体の給源植物は、エノコログサ属（２A、２B、２C、２F）ススキ属などのヒメアブラススキ族（２H、２I、２Q、２R、２T）、メヒシバ属（２D,２E）、イヌビエ属（２J,２K）、トウモロコシ属（２L,２W）、コブナグサ属などである。２Z（イネ型）はイネ属に由来するものであるが、表層（水田耕作土）で多数検出される。

C）ウシノケグサ型（図版72：４A～４H）

ノガリヤス、ヌカボ、オオムギ属などの寒地型イネ科草本であるイチゴツナギ亜科の葉身表皮細胞に

観察されるボート状（4A，4C～4H）および帽子状（4B）形態の珪酸体である。試料中で検出されるそれらはノガリヤス属（4D，4E，4H）、コムギ族のオオムギ属，コムギ属（4C，4G，4H）などに由来する珪酸体である。

d）ヒゲシバ型（図版72：3A～3E）

シバ、ニワホコリなどのスズメガヤ亜科，タケ亜科およびヨシ属の葉身表皮細胞に観察される両刃の戦斧形（または短座鞍形）珪酸体である。

試料中で検出されるヒゲシバ型珪酸体は，大多数がヨシ属（3A，3B）、タケ亜科（3E）に由来されるものであるが、シバ属（3C）やニワホコリ属（3D）由来のものも検出される。

e）ダンチク型およびその他（図版72：3F）

ダンチク亜科およびタケ亜科の葉身表皮細胞に観察される鞍形（またはテーブル状）珪酸体である。ダンチク型珪酸体は、タケ型およびヒゲシバ型に類似し、それらの珪酸体よりやや小型である。他方、その他はa）～d）のいずれにも属さない短細胞由来の珪酸体で、ダンチク型に類似したものも一部含まれている。

f）ファン型（図版73：5A～5V）

イネ科草本葉身表皮細胞にのみ特徴的に観察される機動細胞（または、泡状細胞）由来の扇状（または食パン状）形態の珪酸体である。ファン型珪酸体は、科、属あるいは種の間で形態的相違が認められる。

試料中で検出されるファン型珪酸体の給源植物は、アズマネザサ、ネザサなどのメダケ属（5L～5P）、ササ属（5I～5K）、ヨシ属（5A～5C）、ススキ、オギ、チガヤなどのヒメアブラススキ属（5Q，5S，5T，5V）、イヌビエ属（5U）およびトウモロコシ属（5R？）などである。しかし水田表層および一部の層でイネ属（5D～5G）に明らかに由来する珪酸体がごく稀に検出された。

g）棒状型（図版74：6A～6M）

イネ科草本の表層細胞（長細胞）に由来する棒状形態の珪酸体である。棒状型珪酸体はa）～e）の小型珪酸体と異なり、イネ科植物分類グループとさほど関係が認められないが、一部固有な珪酸体もあるので注意する必要がある。6H，6Kはイネ属に由来するものと思われる。また，6F，6Gは特徴的形態を示しており、コムギ属の長細胞に由来する珪酸体に似ている。6Mはイネ科でなく、カヤツリグサ科の長細胞珪酸体かも知れない。

h）ポイント型（図版74：7A～7E）

イネ科草本葉身表皮細胞のprickle hairに由来する矢尻状またはかぎ形態の珪酸体である。ポイント型珪酸体は、棒状型と同様にイネ科植物分類グループとさほど関係が認められないが、その粒径および形態の違いなどで区別可能である。イチゴツナギ亜科およびタケ亜科に多く検出される。

i）樹木起源珪酸体（図版75：9A～9L）

樹木起源珪酸体の大部分は、葉部の表皮細胞基部、および維管束細胞に由来する。試料中には、広葉樹葉部の表皮細胞に由来する『はめ絵パズル』状珪酸体（9A～9E）常緑ガシなどの維管束に由来する『へ』の字状、Y字状珪酸体（9E～9H）が観察される。

j）未記載（または未分類）珪酸体（図版74：8A～8K、図版75：8L～8P、10A～10D、図版

76：10E～10T）

この種の珪酸体は、①給源が全く不明な珪酸体（10A～10H、10I、10L～10T）、②カヤツリグサ科由来の珪酸体（10J、10K）、③a）～h）に分類されないイネ科草本起源珪酸体（8A～8P）、④①～③の珪酸体の破片および風化物が包含される。

なお、8A、8Bはコムギ類に特徴的な毛に由来する珪酸体に似ている。8C、8Dはミクロヘアー、8Eはマクロヘアー、8F～8Iは柵状細胞、8J、8Kは導管に由来する珪酸体である。

以上の他に、淡水性の海綿骨針および骨片（11C～11E）、ミドリムシ科（カラヒゲムシ属）の殻（11A、11B）に由来する動物珪酸体、および珪酸類がごく普通に観察される。

## 3　植物珪酸体の形態別組成

植物珪酸体の形態別組成（表－12参照）についてその結果の概要を以下に述べる。

同定できる植物珪酸体の大部分はイネ科草本起源珪酸体で、樹木起源珪酸体は2～3％以下と極めて少ない。

イネ科草本目起源珪酸体の中では、大型珪酸体は50～80％と圧倒的に多く、小型珪酸体は20～50％であった。

大型珪酸体は、一般にポイント型が少なく、棒状型、ファン型が多い傾向にある。ファン型珪酸体が20～30％以上を占める試料は№25～28、№39～41である。棒状珪酸体は大多数15％以上と高い試料（№5、6、11、12、29、30）も若干認められる。

短細胞に由来する小型珪酸体はどの試料でも検出されるが、大多数の試料が3％以下と低い。ヒゲシバ型珪酸体もウシノケグサ型珪酸体と同様に大多数の試料で2％以下と少ないが、8％以上の試料（№1、2、3、37、38）も認められる。タケ型珪酸体は№22～№28、№39および№41試料において10％以上を占めているが、大多数5％以下である。キビ型珪酸体は一般に№8～№19試料にかけて高く、とくに、古墳時代文化層直上の№12、13試料で顕著である。

図－1は、同定できる珪酸体に占めるイネ科草本起源珪酸体の割合を示したものである。

イネ科植物分類グループと密接な関係がある小型珪酸体の断面内での変化を見ると、タケ型は下層試料（№19～28）で高く、キビ型はタケ型の少ない№12～14試料で19～23％と多い。タケ型の多い試料は縄文後期前葉以前の層位に相当し、古墳時代から中世（？）の文化層に向かって漸減する。他方、キビ型は縄文後期前葉以前の試料ではほとんど検出されないが、縄文後期以降漸増し、№12試料でピークに達する。そして、表層に向かってふたたび漸減する。このようにタケ型の減少に対してキビ型が増加するのは、何らかの環境変化があったことを予測させる。その最も大きい要因として河川の氾濫による植生破壊が考えられるが、生活の場としての人為作用も無視出来ない。それらの試料を詳細に観察すると、ヒエ、アワ、コムギ、トウモロコシなどの栽培植物、あるいは畑の雑草であるエノコログサ、イヌビエ、メヒシバなどが多数検出される。とくに、№11、№12試料にはイネ、コムギ、ヒエに由来すると推測される植物珪酸体が検出された。

ウシノケグサ型はすべて5％以下で、その分布パターンはキビ型と類似している。

ヒゲシバ型は全般的に数％以下と低いが、表層試料（№1～4）で高い。これらの試料のヒゲシバ型

はヨシに由来するものである。また、それらの試料にはヨシに由来するファン型珪酸体（図版73：５Ａ～５Ｃ参照）が大多数検出される。

ダンチク型およびその他小型の珪酸体は、20％前後の試料が表層付近で見られるが、大部分の試料が10％以下である。

大型珪酸体のなかでは、ファン型と棒状型が対照的分布パターンを示している。すなわち、ファン型が多い試料（№26～28）は棒状型が少なく、棒状型が多い試料（№12～18）はファン型が少ない傾向にある。他方、ポイント型は表層試料および若干の試料で５％以下と低いものもあるが、大多数の試料が10％前後でさほど変化がない。なお、タケ型の多い縄文後期前葉以前の№25～28試料にはファン型も多く、その大多数はネザサなどのメダケ属に由来するタイプである。

水田耕作試料（№１，２）には、明らかにイネに由来するキビ型（イネ型）およびファン型が検出された。№30試料において前者はキビ型、後者はファン型のそれぞれ26％を占めていた。また、№33～35にはごく僅かであるが、イネ由来のキビ型およびファン型珪酸体が検出された。

試料（№39～41）はタケ型とファン型によって特徴づけられ、試料（№25～28）に対比される。

植物珪酸体の形態別組成および走査型電子顕微鏡観察から、Ｂピットにおける珪酸体の給源植生は以下のように三つに大別されよう。

Ⅰａ：最下層の試料（№25 ～28）の層準。ネザサなどのメダケ属、あるいはアズマザサ属が優占する植生。

Ⅰｂ：縄文晩期前葉の黒土層（№20～24）の層準。Ⅰａと類似の植生であるが、笹類がやや衰退し、キビ亜科およびイチゴツナギ亜科が出現する植生。

Ⅱａ：古墳時代およびその上層の試料（№11～19）の層準。キビ亜科が最も隆盛し、栽培植物の痕跡が見られる。

Ⅱｂ：Ⅱaと表層の間にまたがる試料（№５～10）の層準。Ⅱａと類似の植生であるが、キビ型亜科がやや衰退し、ネザサなどキビ亜科以外の植生が出現。

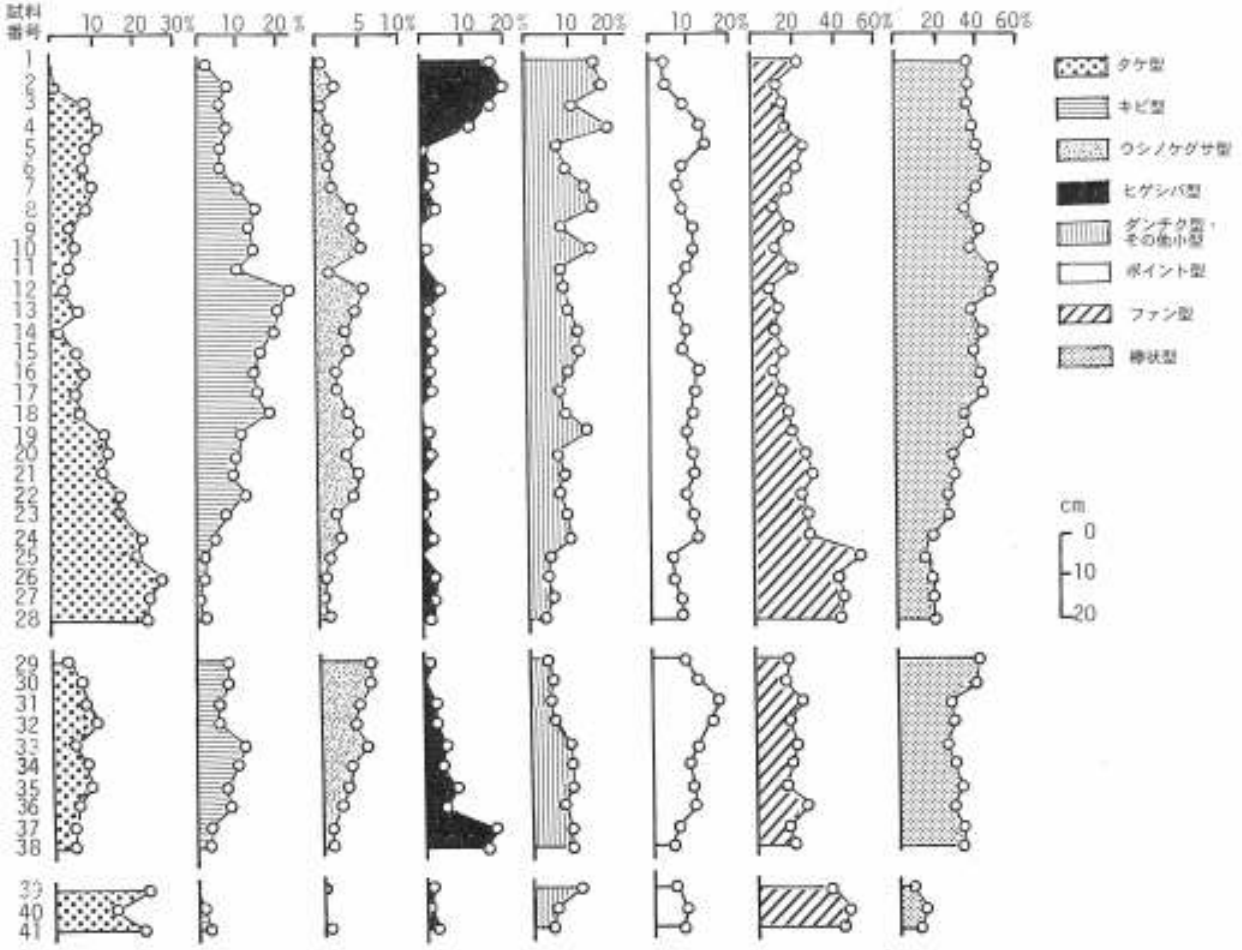
Ⅲ ：表層試料（№１～４）の層準。ヨシの優勢植生。

表12　入川遺跡土壌の植物珪酸体組成（%）*

| 試料 | イネ科草本起源珪酸体（%） | | | | | | | | | 樹木起源珪酸体（%） | 未記載珪酸体（%） | 検鏡粒数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 小型珪酸体 | | | | | | 大型珪酸体 | | | | | |
| | タケ型 | キビ型 | ウシノケグサ型 | ヒゲシバ型 | ダンチク型 | その他 | ファン型 | ポイント型 | 棒状型 | | | |
| 1 | − | 1.9 | 0.4 | 8.9 | 1.6 | 7.7 | 13.4 | 2.2 | 20.1 | 0.9 | 42.9 | 572 |
| 2 | 0.7 | 4.5 | − | 10.4 | 1.1 | 8.8 | 7.0 | 2.3 | 18.9 | 0.6 | 45.7 | 557 |
| 3 | 3.8 | 2.7 | 1.0 | 7.9 | 0.5 | 5.1 | 7.1 | 3.8 | 16.7 | − | 51.4 | 630 |
| 4 | 5.2 | 3.5 | 0.5 | 5.1 | 0.4 | 8.8 | 7.2 | 5.9 | 17.3 | 0.4 | 45.7 | 683 |
| 5 | 5.0 | 4.0 | 1.2 | 0.5 | 0.1 | 5.1 | 15.5 | 10.0 | 28.2 | 0.6 | 29.8 | 801 |
| 6 | 4.5 | 3.9 | 1.2 | 2.1 | 0.3 | 6.2 | 14.1 | 5.7 | 29.5 | 0.6 | 31.9 | 664 |
| 7 | 6.1 | 6.4 | 1.0 | 0.8 | 0.3 | 8.2 | 10.4 | 4.6 | 24.0 | − | 38.2 | 595 |
| 8 | 5.2 | 10.0 | 2.9 | 2.4 | 0.4 | 10.8 | 6.6 | 5.2 | 22.2 | 0.8 | 33.5 | 618 |
| 9 | 2.8 | 9.0 | 2.6 | - | 0.3 | 5.1 | 11.6 | 7.2 | 26.9 | 0.8 | 33.7 | 612 |
| 10 | 3.5 | 9.4 | 3.3 | 0.8 | 0.6 | 10.0 | 7.9 | 7.4 | 24.9 | 1.2 | 31.0 | 662 |
| 11 | 2.4 | 6.2 | 0.9 | 0.4 | 0.2 | 4.8 | 12.5 | 5.7 | 29.2 | 0.4 | 37.3 | 544 |
| 12 | 2.2 | 15.4 | 3.5 | 0.3 | 0.2 | 5.7 | 5.0 | 4.0 | 30.1 | 0.3 | 33.3 | 578 |
| 13 | 4.1 | 13.4 | 2.8 | 1.1 | 0.6 | 6.2 | 8.6 | 5.1 | 27.1 | − | 31.0 | 567 |
| 14 | 0.7 | 10.7 | 1.6 | 1.1 | 0.2 | 7.2 | 6.4 | 5.7 | 24.2 | 0.5 | 41.8 | 558 |
| 15 | 3.5 | 10.6 | 2.5 | 1.7 | 0.1 | 8.6 | 10.0 | 5.1 | 26.0 | 0.8 | 31.1 | 650 |
| 16 | 4.5 | 8.7 | 1.1 | 0.9 | 0.1 | 5.8 | 6.2 | 7.5 | 24.6 | 1.7 | 38.9 | 758 |
| 17 | 3.3 | 9.2 | 1.1 | 1.1 | − | 4.9 | 9.9 | 6.6 | 24.5 | 0.8 | 37.8 | 759 |
| 18 | 3.7 | 10.4 | 2.1 | 0.1 | 0.5 | 4.9 | 10.2 | 6.2 | 19.8 | 0.7 | 41.4 | 615 |
| 19 | 8.4 | 7.0 | 3.2 | 0.8 | 0.1 | 5.4 | 13.0 | 5.9 | 24.2 | 0.4 | 31.6 | 724 |
| 20 | 9.5 | 6.6 | 2.3 | 1.4 | 0.3 | 4.8 | 17.7 | 7.6 | 20.4 | 0.4 | 29.0 | 723 |
| 21 | 8.3 | 6.4 | 3.3 | 0.2 | 0.2 | 6.4 | 19.2 | 8.0 | 21.0 | 0.3 | 26.7 | 661 |
| 22 | 12.1 | 9.1 | 2.8 | 1.6 | 0.6 | 5.1 | 17.7 | 6.7 | 19.3 | 1.1 | 24.2 | 898 |
| 23 | 11.3 | 4.9 | 1.2 | 0.6 | 0.4 | 6.3 | 20.2 | 8.4 | 18.7 | 0.9 | 27.3 | 680 |
| 24 | 15.1 | 4.0 | 1.8 | 1.4 | − | 7.4 | 19.6 | 8.3 | 12.8 | − | 29.6 | 623 |
| 25 | 14.2 | 1.4 | 0.9 | − | − | 4.1 | 37.6 | 3.9 | 9.9 | 0.7 | 27.3 | 558 |
| 26 | 19.2 | 1.0 | 0.6 | 1.8 | − | 3.6 | 30.5 | 4.1 | 12.2 | − | 26.9 | 613 |
| 27 | 17.2 | 0.7 | 0.6 | 1.5 | − | 4.3 | 33.1 | 5.6 | 12.6 | 0.3 | 24.1 | 714 |
| 28 | 17.2 | 1.6 | 0.9 | 0.3 | 0.3 | 3.1 | 33.2 | 5.9 | 14.7 | 0.3 | 22.5 | 680 |
| 29 | 2.2 | 3.8 | 4.2 | 0.7 | 0.1 | 3.8 | 12.1 | 5.6 | 33.5 | 0.9 | 33.1 | 925 |
| 30 | 4.1 | 5.1 | 4.5 | − | 0.4 | 3.5 | 10.1 | 7.8 | 33.6 | 0.2 | 30.7 | 514 |
| 31 | 4.2 | 2.9 | 2.9 | 1.4 | − | 3.4 | 15.3 | 10.2 | 33.6 | − | 37.2 | 621 |
| 32 | 5.1 | 2.5 | 2.5 | 1.1 | 0.2 | 5.2 | 10.0 | 8.2 | 19.0 | 0.8 | 45.4 | 649 |
| 33 | 2.9 | 7.3 | 3.6 | 3.3 | 0.7 | 6.2 | 13.2 | 7.2 | 22.8 | 0.2 | 32.6 | 584 |
| 34 | 4.9 | 6.0 | 2.0 | 2.7 | − | 6.4 | 11.8 | 6.0 | 24.7 | 0.4 | 35.1 | 738 |
| 35 | 5.0 | 3.5 | 1.9 | 4.6 | 0.1 | 5.1 | 10.0 | 6.3 | 25.8 | 0.3 | 37.4 | 741 |
| 36 | 3.2 | 4.5 | 1.5 | 2.9 | 0.3 | 4.0 | 15.3 | 6.3 | 23.4 | 0.9 | 37.7 | 759 |
| 37 | 2.0 | 1.6 | 0.7 | 8.2 | 0.5 | 4.2 | 7.8 | 3.1 | 20.2 | 0.9 | 50.8 | 548 |
| 38 | 2.4 | 1.4 | 0.8 | 8.3 | 0.4 | 5.3 | 10.7 | 2.8 | 23.6 | 1.3 | 43.0 | 713 |
| 39 | 14.7 | − | 0.2 | 0.9 | 0.5 | 7.3 | 24.1 | 3.4 | 10.7 | 0.3 | 37.9 | 551 |
| 40 | 8.9 | 0.7 | − | 0.9 | − | 3.3 | 28.3 | 5.1 | 14.8 | 0.4 | 37.6 | 548 |
| 41 | 12.0 | 1.1 | 0.4 | 1.3 | − | 3.0 | 24.8 | 4.3 | 12.0 | 0.2 | 40.9 | 512 |

*検鏡粒数に占める割合

図1　入川遺跡土壌のイネ科草本起源珪酸体組成　(%)※
※同定珪酸体に占める割合として表示



# X　別府沖積地試料自然科学分析報告

## 1　鉱物分析及び屈折率測定

### （1）試料

分析試料は、別府沖積地のK－19溝及びZ－13遺構で採取された試料No.1、2、3、4の計4点（土壌と軽石）である。屈折率測定は試料No.4の1点について実施した。各試料の試料番号等を表13に示す。

### （2）分析の目的と方法

分析の目的は、示標テフラの検出と同定及び重鉱物組成の傾向からみた起源の推定である。

分析処理過程は以下の通りである。土壌試料は、適量を小型長音波洗浄装置により分散、分析篩を用いて水洗し、径1/16mm以下の泥分を除去する。得られた砂分を、双眼実体鏡下で観察する。軽石は鉄乳鉢で粉砕、超音波洗浄装置により分散、分析篩を用いて水洗し径1/16mm以下の粒を除去、乾燥の後篩別し、径1/4～1/8mmの粒をテトラブロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱物を実体鏡および偏光顕微鏡下で観察する。屈折率の測定は、新井（1972）の方法に従った。

### （3）分析結果

分析処理後の砂分の特徴と、そこから推定できる事項を以下各試料ごとに記す。

**○試料No.1（灰色シルト質砂）**

砂分は、細粒の岩片・長石・石英粒と無色透明の雲母片よりなる。雲母は、光学的性質により金雲母に同定される。重鉱物斑晶は認められなかった。白色の軽石が微量認められたが、年代指標とするには信頼性に欠ける。

**○試料No.2・3（灰色シルト質砂・黄褐色シルト質砂）**

砂分の特徴は、上記試料No.1と全く同じである。

**○試料No.4（灰白色軽石）**

発砲は非常に良く、斑晶は少ない。分析処理後得られた重鉱物は、斜方輝石が最も多く、次に単斜輝石・磁鉄鉱の順に多い。斜方輝石の屈折率は、γ1.705～1.711（mode 1.708～1.710）であった。これらの特徴より、この軽石は浅間火山起源のものと考えられる。また、粒径と風化程度から、この軽石は河川により運ばれて二次堆積したものであると考えられる。

### 引　用　文　献

新井房夫（1972）　斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定―テフロクロノロジーの基礎的研究―　第四紀研究11　p.254～269

## 2　花粉分析

### （1）分析目的及び試料

試料は、別府沖積地のK－19溝の覆土及び基盤の堆積層から採取された試料No.1～3の計3点である（表13）。今回の分析目的は、各試料が堆積した当時の植生を花粉分析から推定することにある。

### （2）分析方法

花粉・胞子化石の抽出方法は、次に述べる通りである。試料を15g（湿重）秤量し、フッ化水素（HF）処理により試料中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行なう。次に重液（$ZnBr_2$　比重2.2）を用いて鉱物質と有機物を分離させ、有機物を濃集する。その有機物残渣についてアセトリシス処理を行ない、植物遺体中のセルロースを加水分解し、最後にKOH処理により腐植酸の溶解を行なう。処理後の残渣は、よく撹拌しマイクロピペットで適量をとり、グリセリンゼリーで封入する。検鏡においては、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類（Taxa）について同定・計数した。

### （3）分析結果

分析結果は、表14に示した。花粉・胞子化石の産状は、全試料で化石の種類数・出現個数が少なかった。特に基盤の試料であるNo.3は、No.1・2に比較して種類数、出現個体数ともに少なかった。また、検出された花粉・胞子化石は全て保存状態が不良で、外膜が壊れていた。

このような結果は、花粉・胞子化石が堆積時あるいは堆積後の経年経過により分解消失したことを意味していると考えられる。一般に花粉・胞子は、その堆積場所が還元状態であれば化石として良好に保存されるが、逆に酸化状態であれば紫外線と酸素や土壌微生物などによって分解することが知られている。したがって、本遺構の基盤及び覆土は酸化状態のもとで堆積した、あるいは堆積後酸化状態であったことが予想される。

検出された花粉化石の種類は、各試料の堆積時に周辺に育成していた植物から搬入されたと考えられるが、上記したように分解消失している花粉化石も多いと判断され、堆積当時の植生を推定することは困難である。

表13　別府沖積地鉱物分析および花粉分析試料表

| 試料番号 | 試料名 | 分析項目※ | | | 色調・岩質 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | HM | 屈 | P | |
| 1 | 別府　K－19溝　9層上位 | ○ | | ○ | 灰色シルト質砂 |
| 2 | 〃　〃　9層下位 | ○ | | ○ | 〃 |
| 3 | 〃　〃　基盤No.1 | ○ | | ○ | 黄褐色シルト質砂 |
| 4 | Z－13　遺構　No.32 | ○ | ○ | | 灰色色軽石 |

※：ＨＭ＝重鉱物分析，屈＝屈折率測定、Ｐ＝花粉分析

表14　別府沖積地試料花粉分析結果

| 試料番号 | 1 | 2 | 3 |
|---|---|---|---|
| ツガ属 | — | — | 1 |
| スギ属 | — | 1 | — |
| ブナ属 | 1 | — | — |
| コナラ亜属 | — | — | 1 |
| イネ科 | 3 | 2 | 1 |
| カヤツリグサ科 | 1 | 1 | — |
| サナエタデ節—ウナギツカミ節 | 1 | 1 | — |
| アカザ科 | — | 1 | — |
| ヨモギ属 | 3 | 2 | — |
| キク亜科 | — | 1 | — |
| 不明花粉 | 2 | — | — |
| シダ類胞子 | — | 1 | — |
| 樹木花粉 | 1 | 1 | 2 |
| 草本花粉 | 8 | 8 | 1 |
| 不明花粉 | 2 | 0 | 0 |
| シダ類胞子 | 0 | 1 | 0 |
| 総花粉・胞子 | 11 | 10 | 3 |

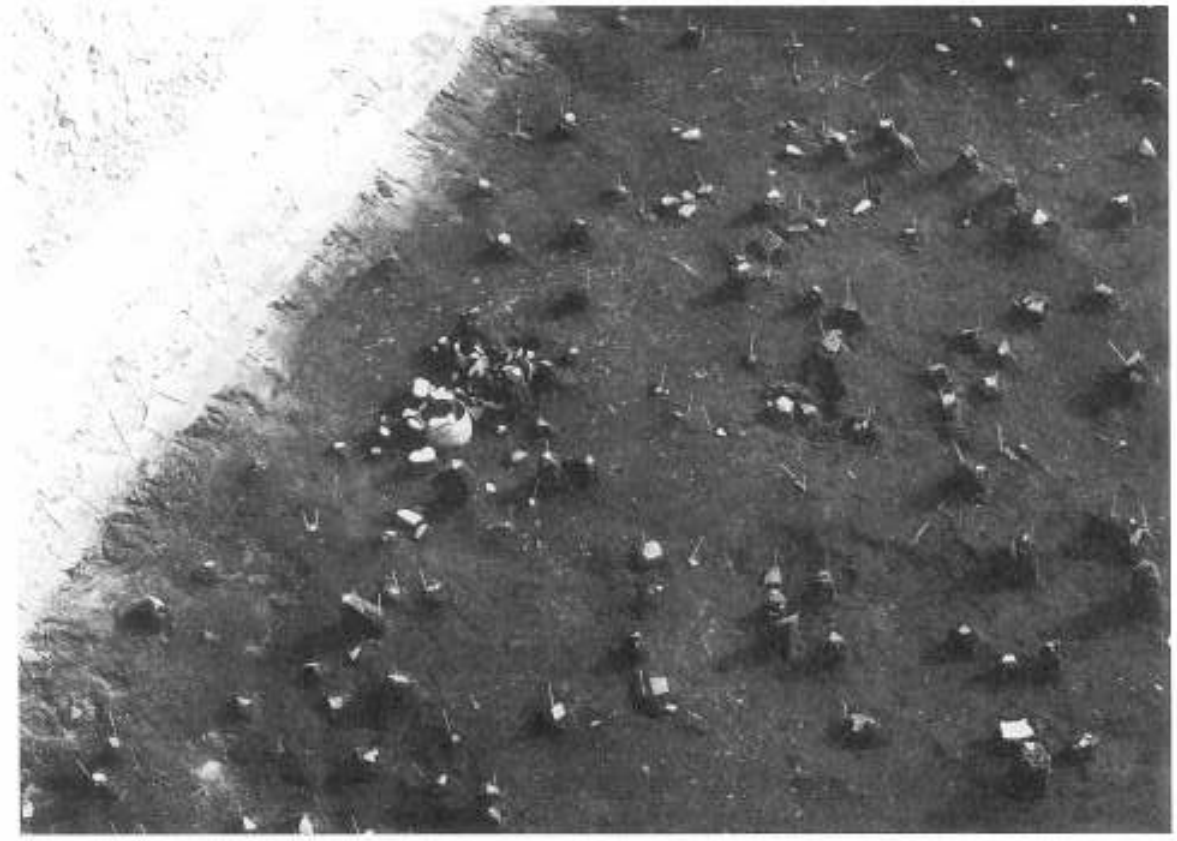
# 寺東・八反田・東耕地・入川・深町遺跡

## 写　真　図　版

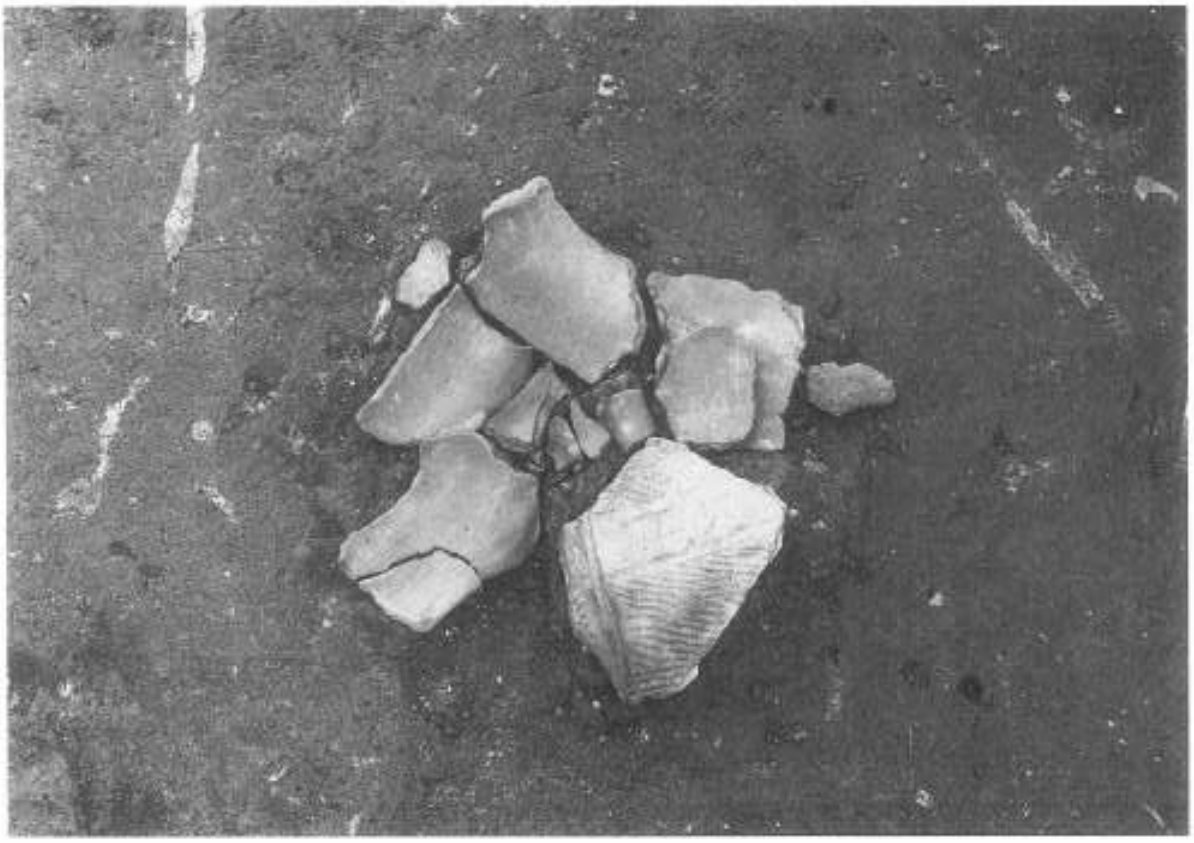
1　集石遺構

2　調査区南側遺物出土状況（1）

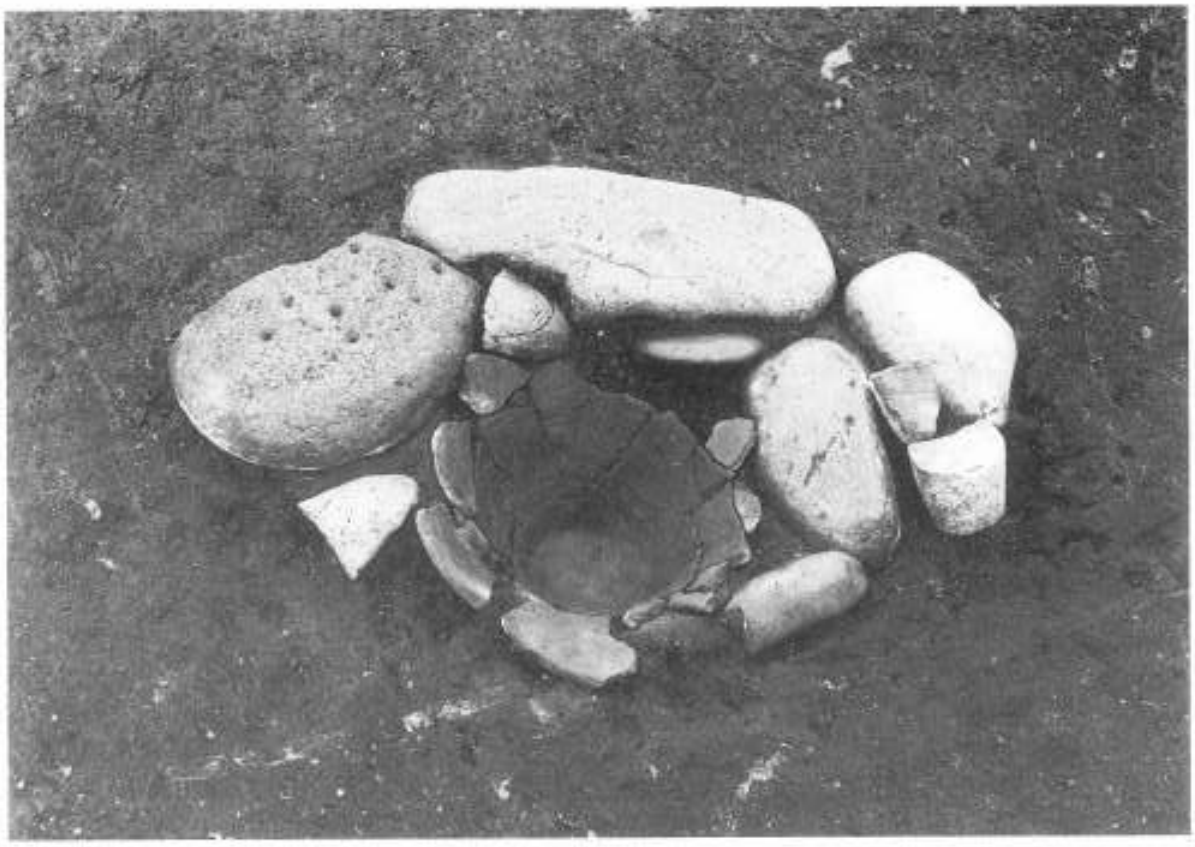
図版 2



1　調査区南側遺物出土状況（2）



2　1号埋甕



1　2号埋甕

2　3号埋甕

図版 4

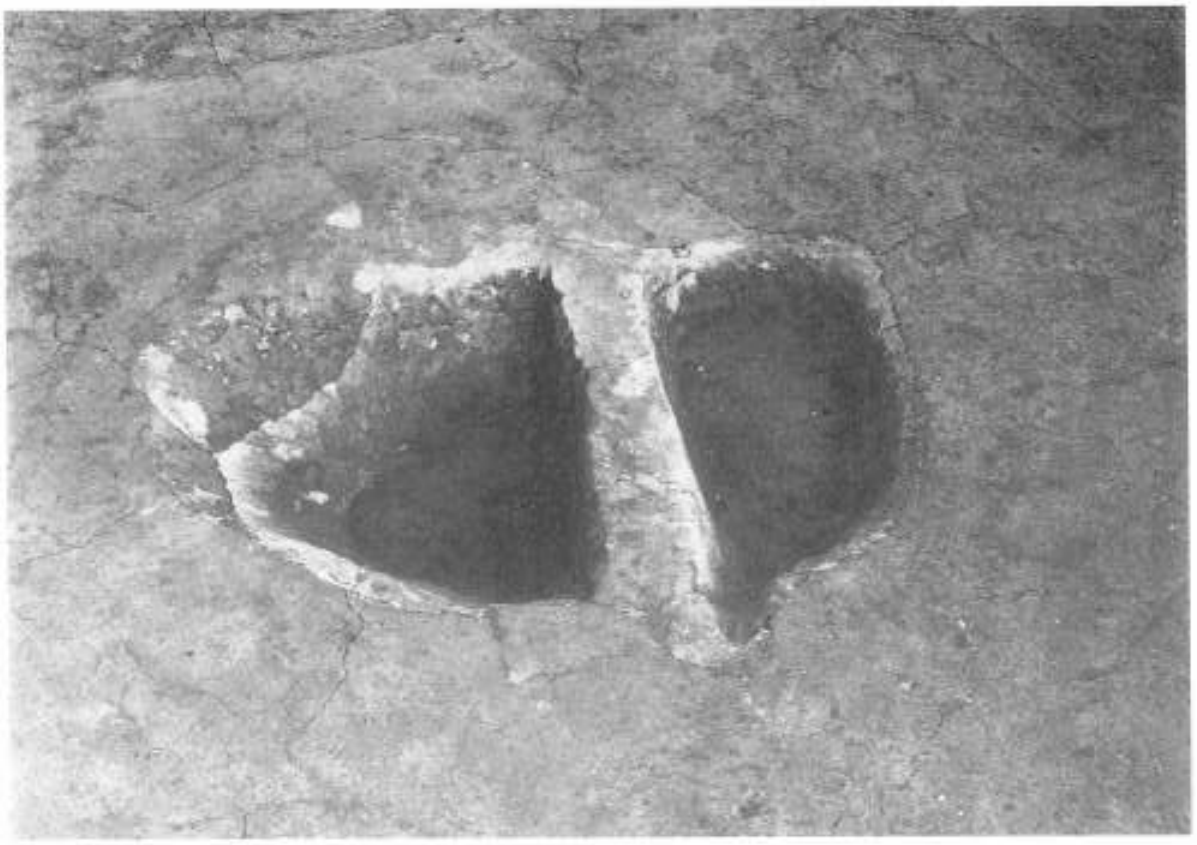
1　4号埋甕

2　5号埋甕

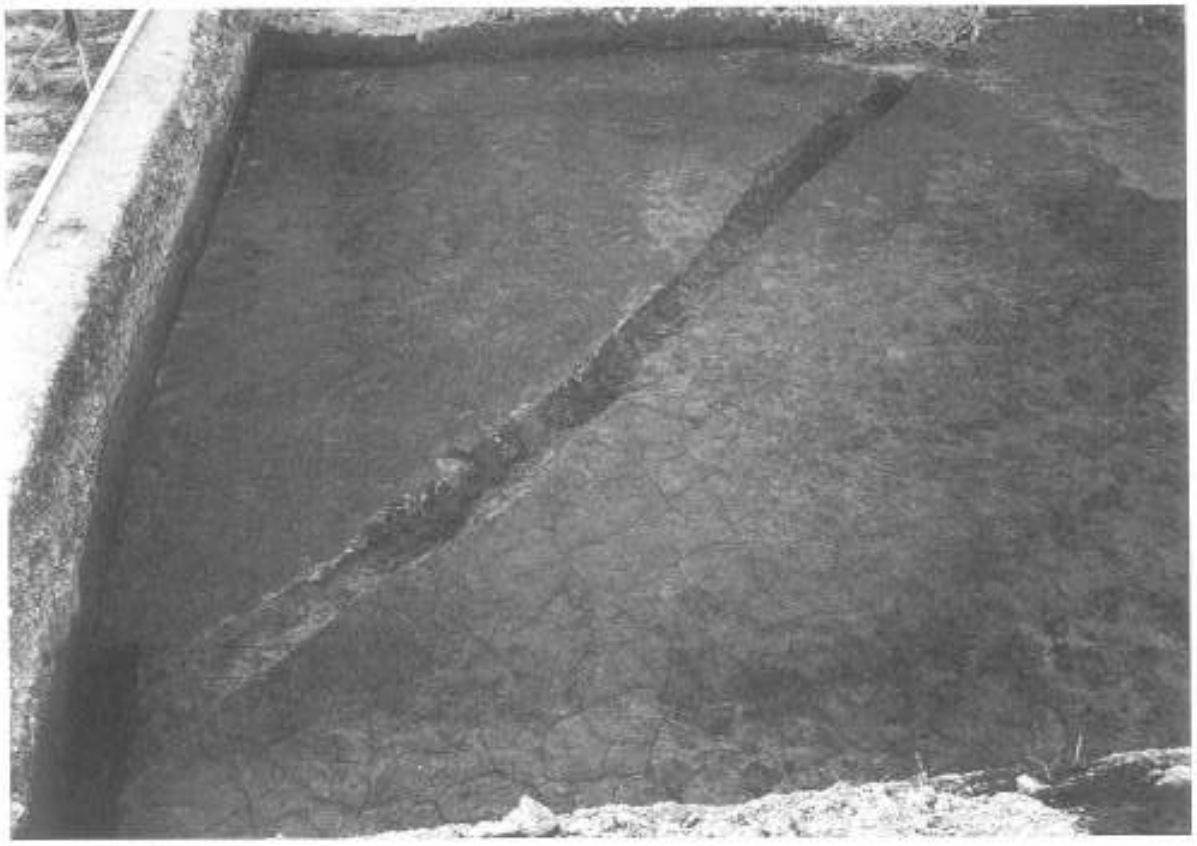
1　1号土坑遺物（18－2）出土状況

2　1号土坑遺物（18－1・2）出土状況

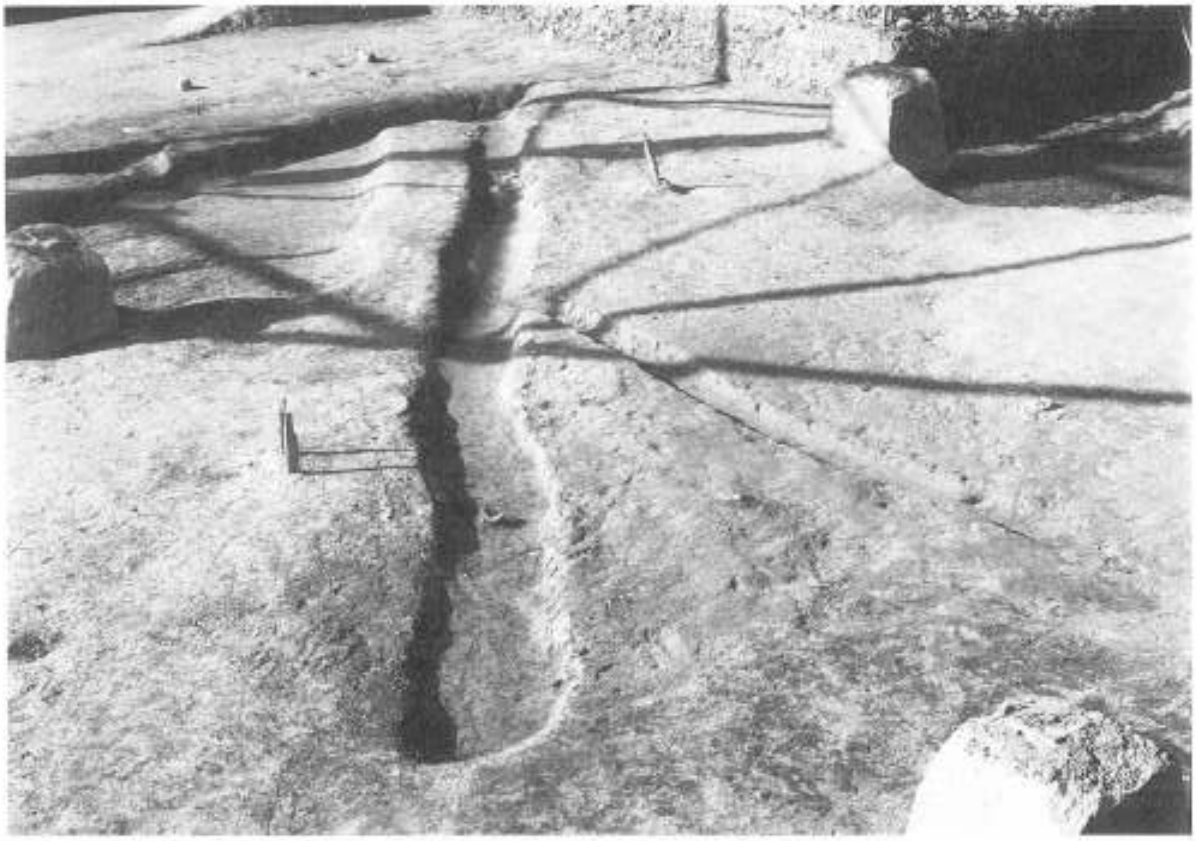
図版 6



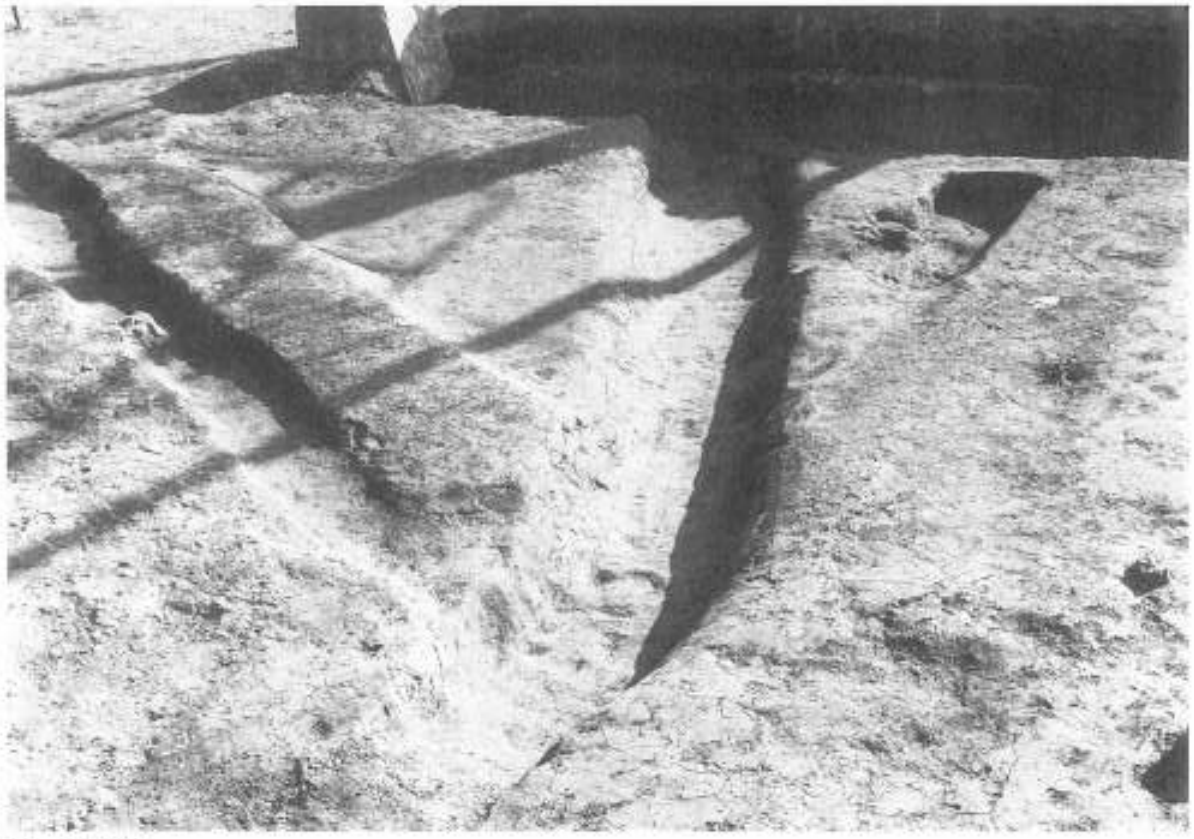
1　2号土坑



2　1号溝跡



1　2号溝跡



2　3号溝跡

図版８

１　４号溝跡

２　６号溝跡

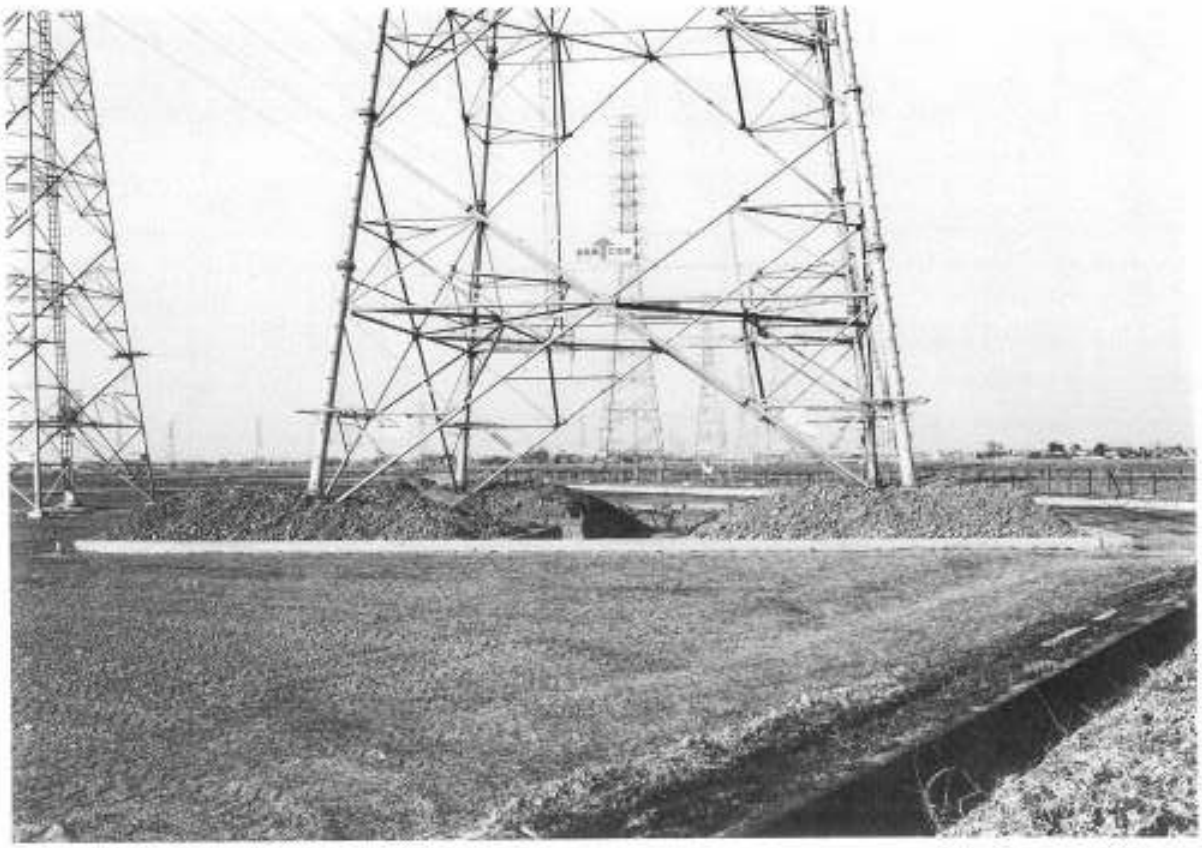
1　7・8号溝跡

2　遺構外遺物出土状況（1）

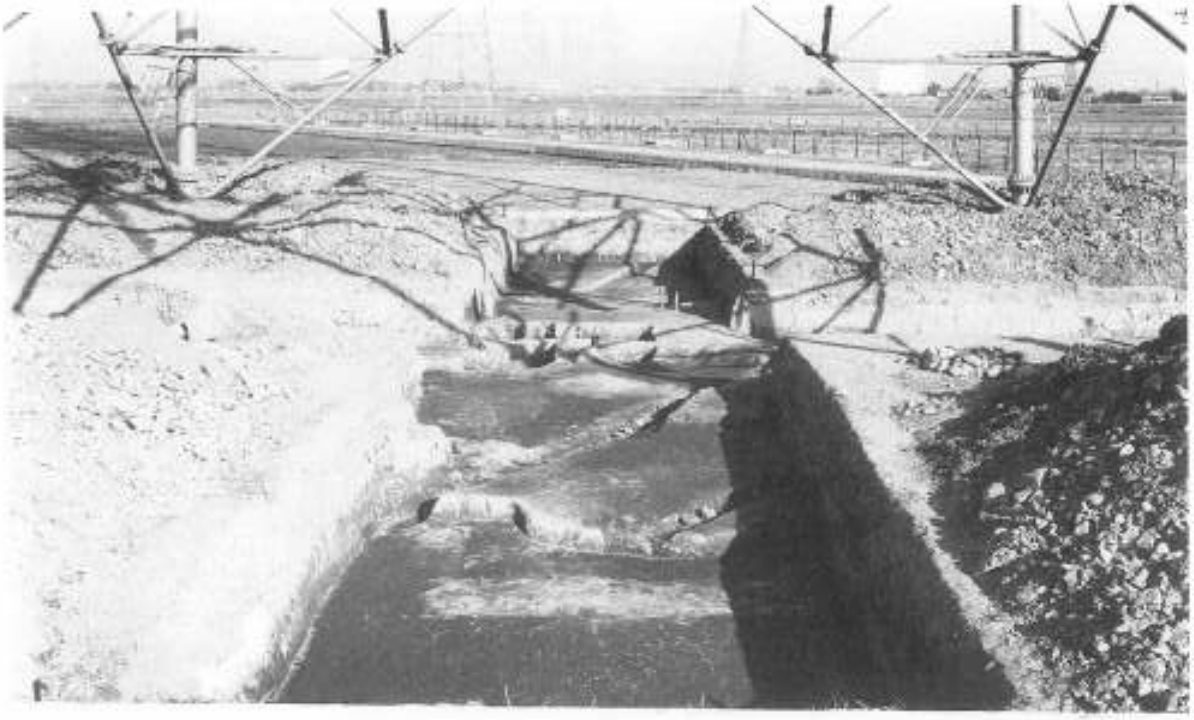
図版10

1　遺構外遺物（30－1）出土状況（2）

2　遺構外遺物（30－8）出土状況（3）

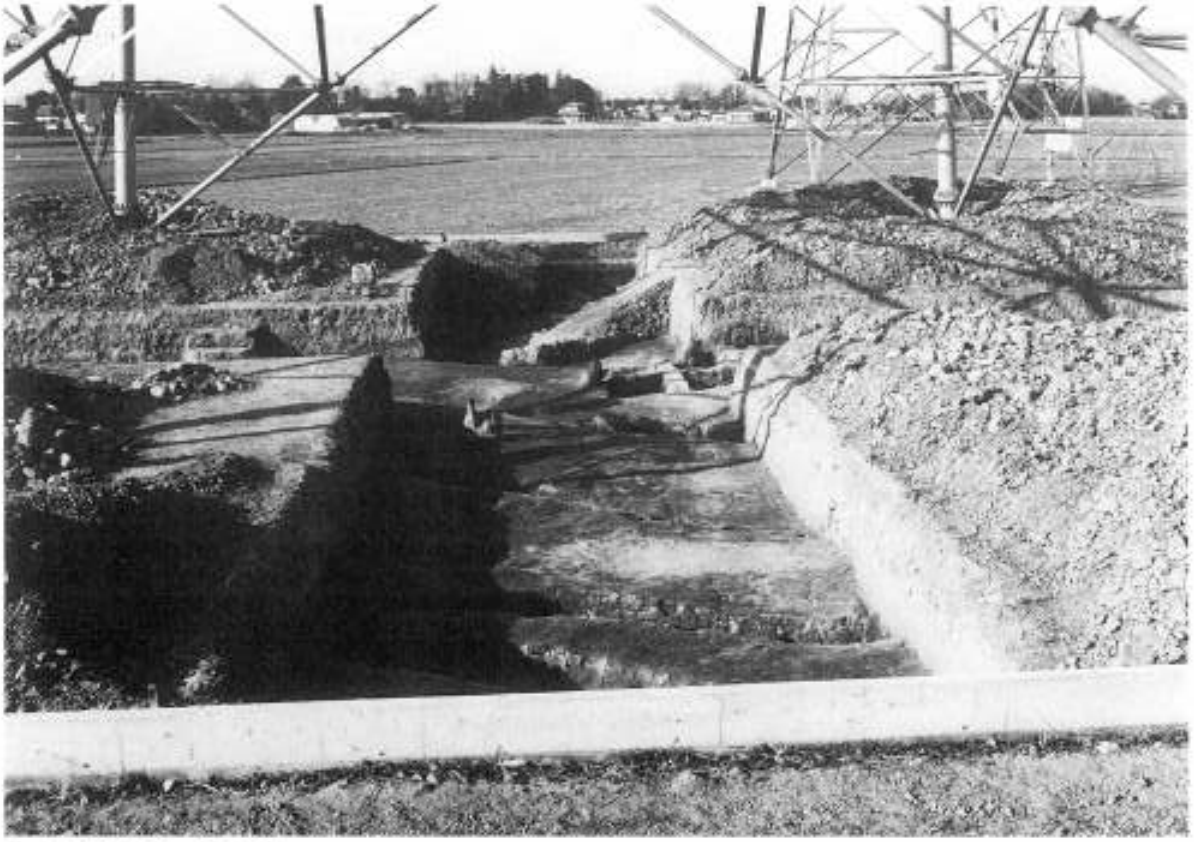


1　遺跡遠景（南から）



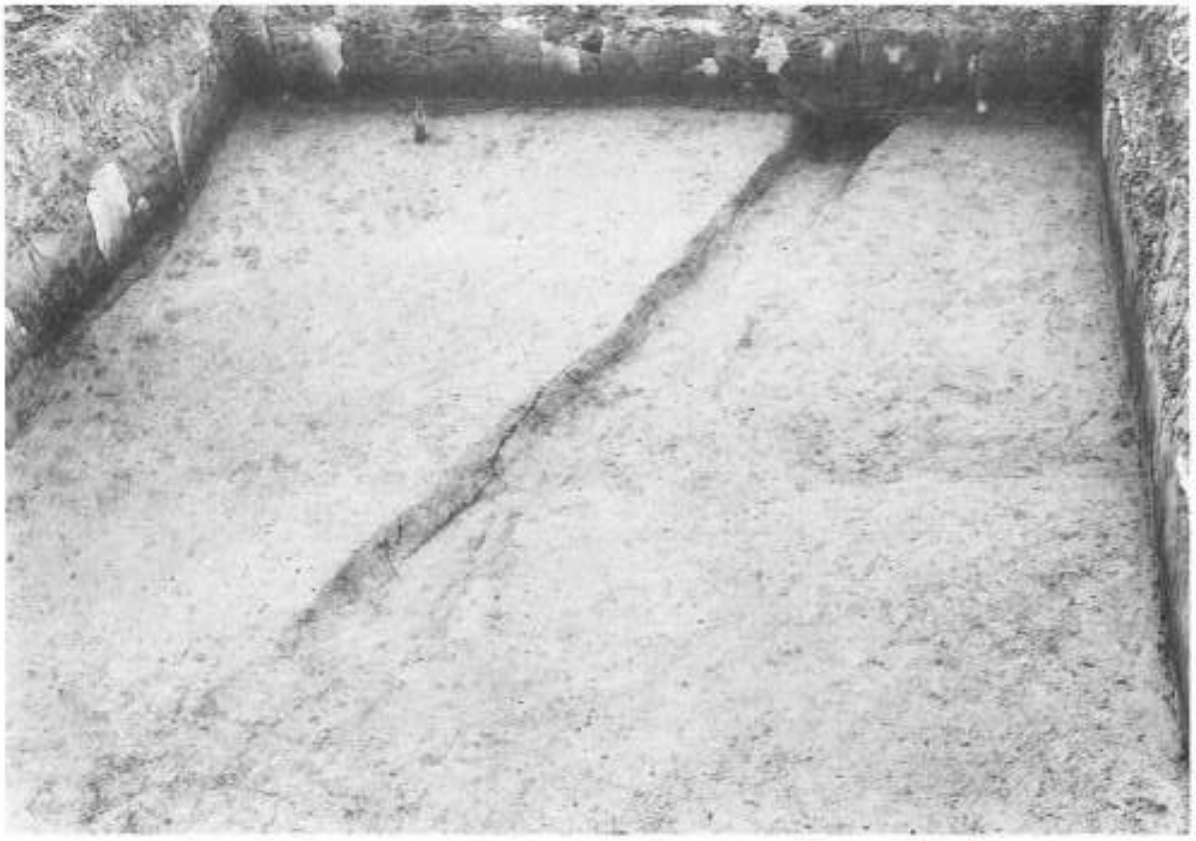
2　調査区近景（南から）

図版12



1　調査区近景（東から）

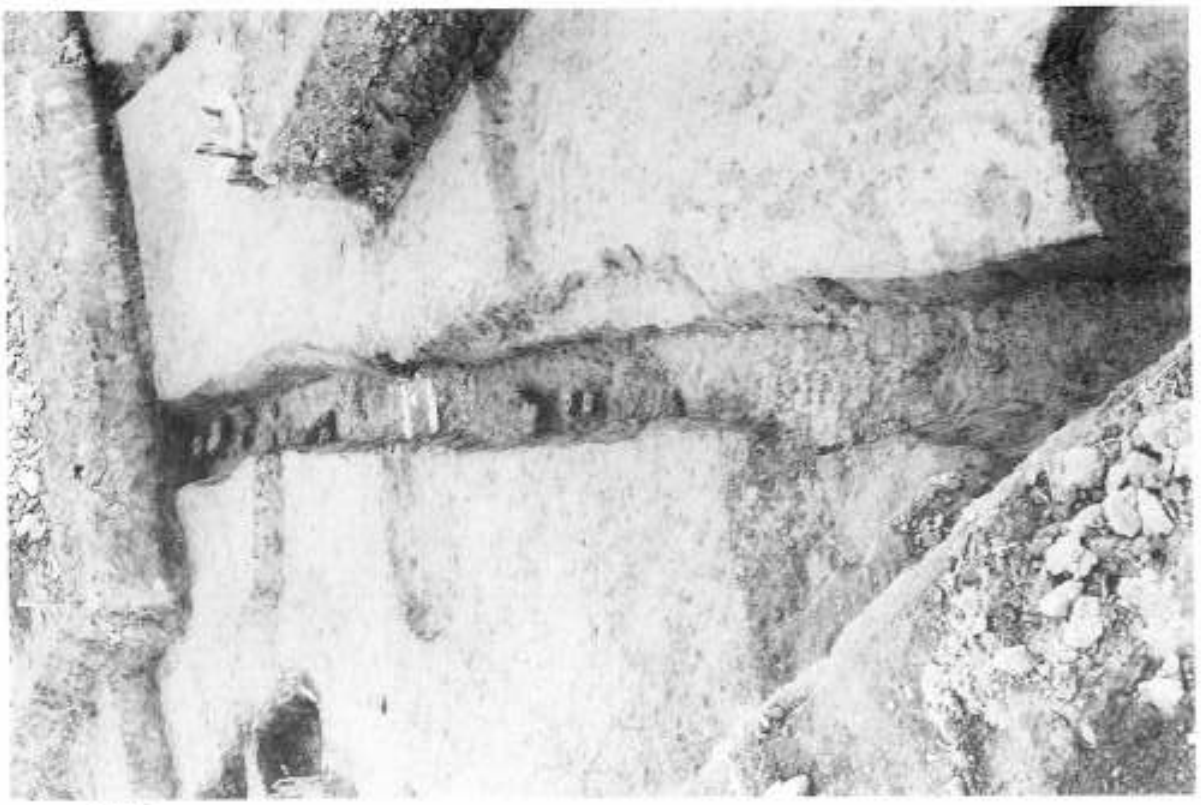
2　1号溝跡



1　2号溝跡

2　3～6号溝跡

図版14

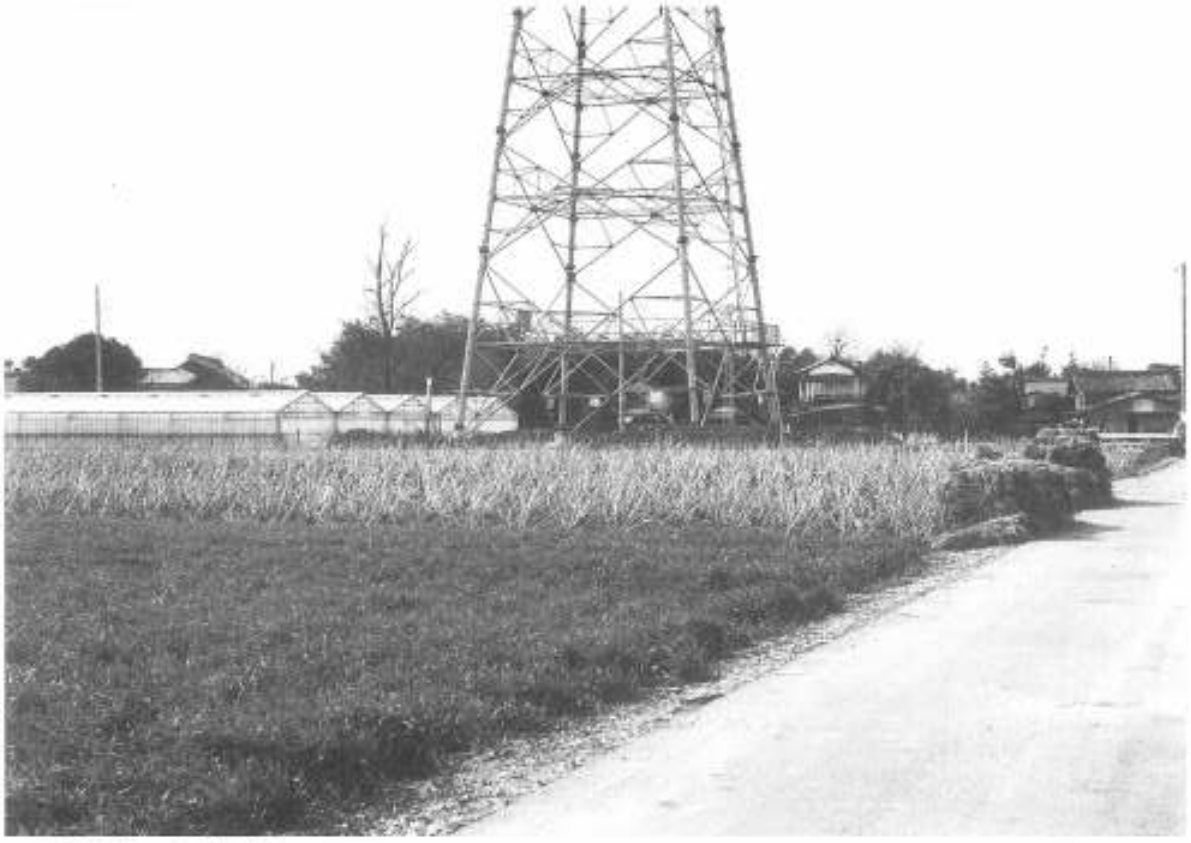


1　3面焼塩

2　4面焼塩

1　5・6号溝跡

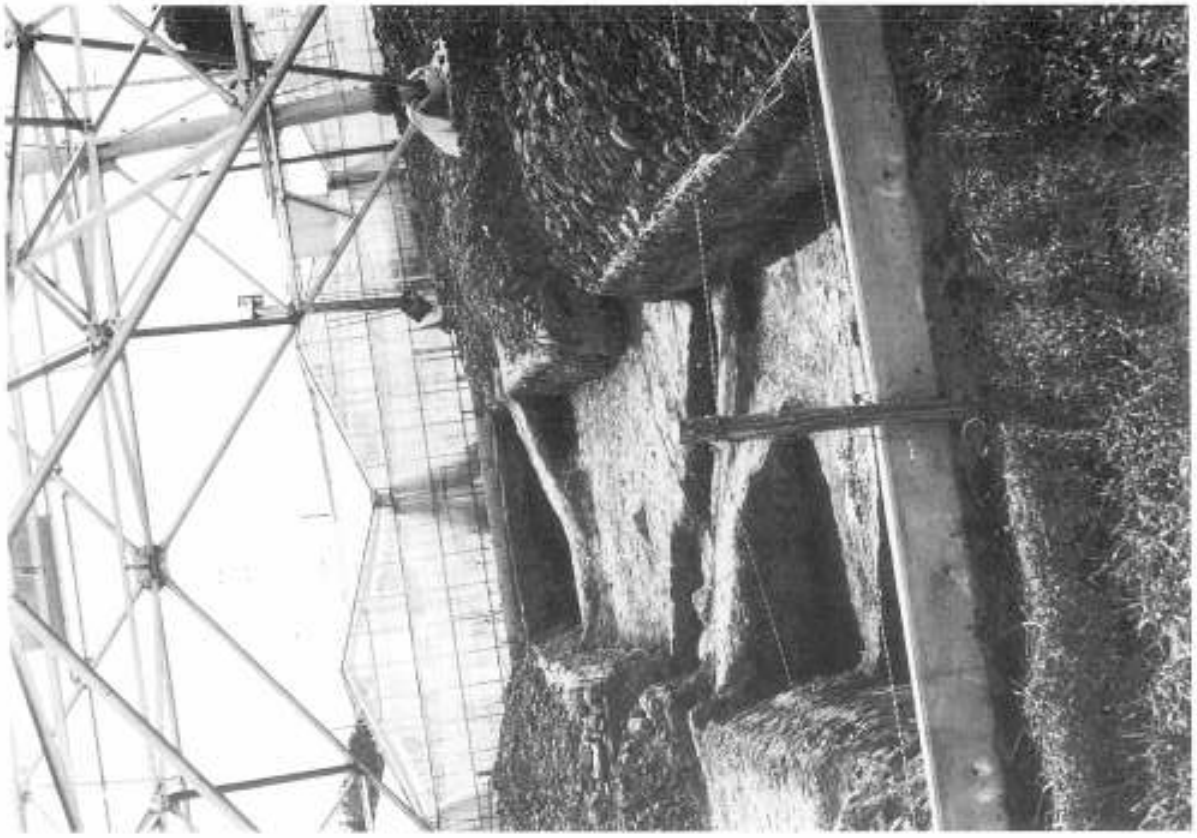
八反田遺跡



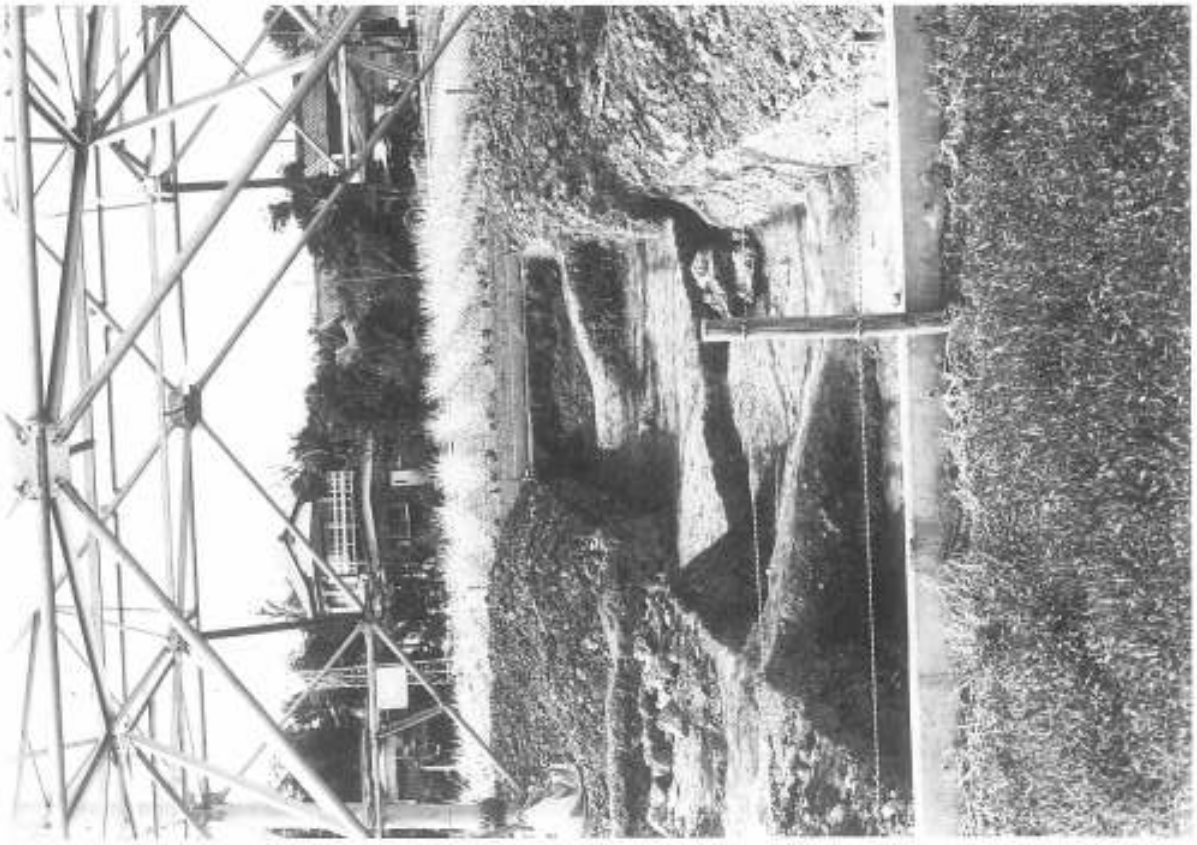
2　遺跡遠景（北東から）

東耕地遺跡

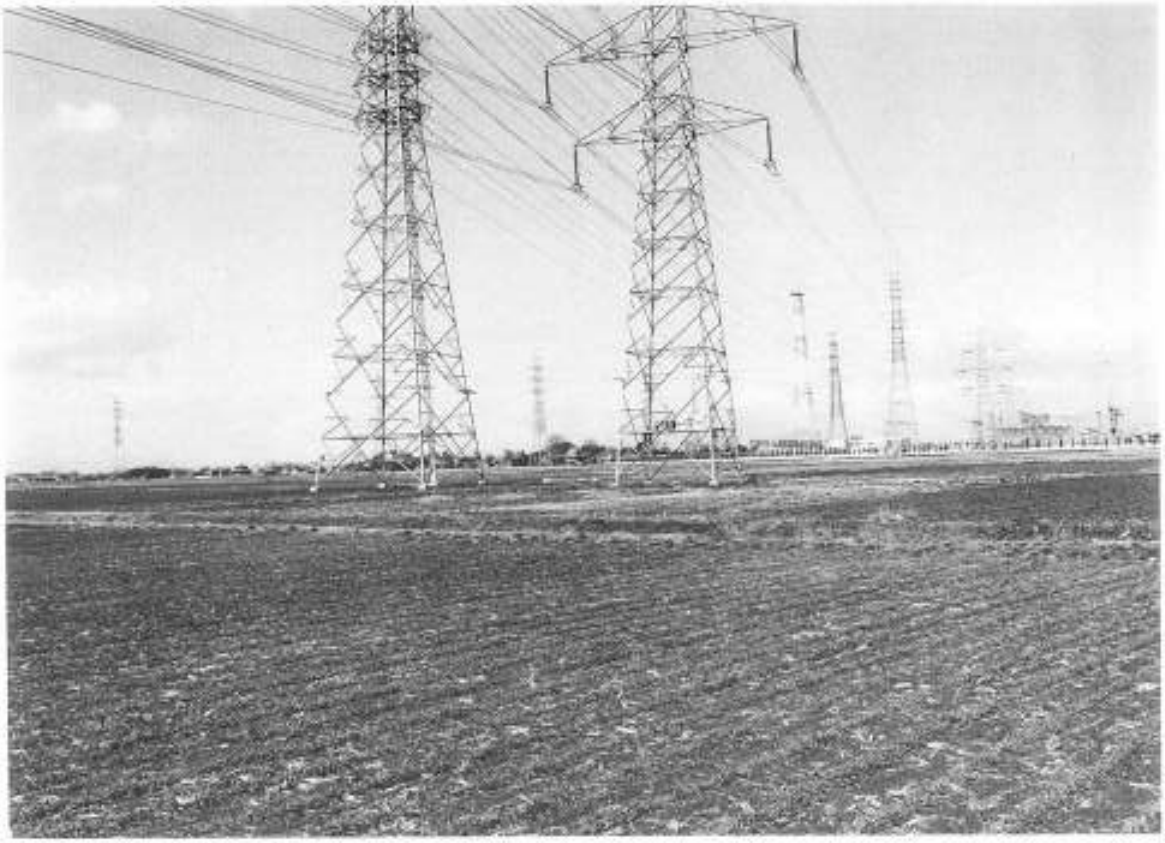
図版16



1　露柵図均衡（ささら）



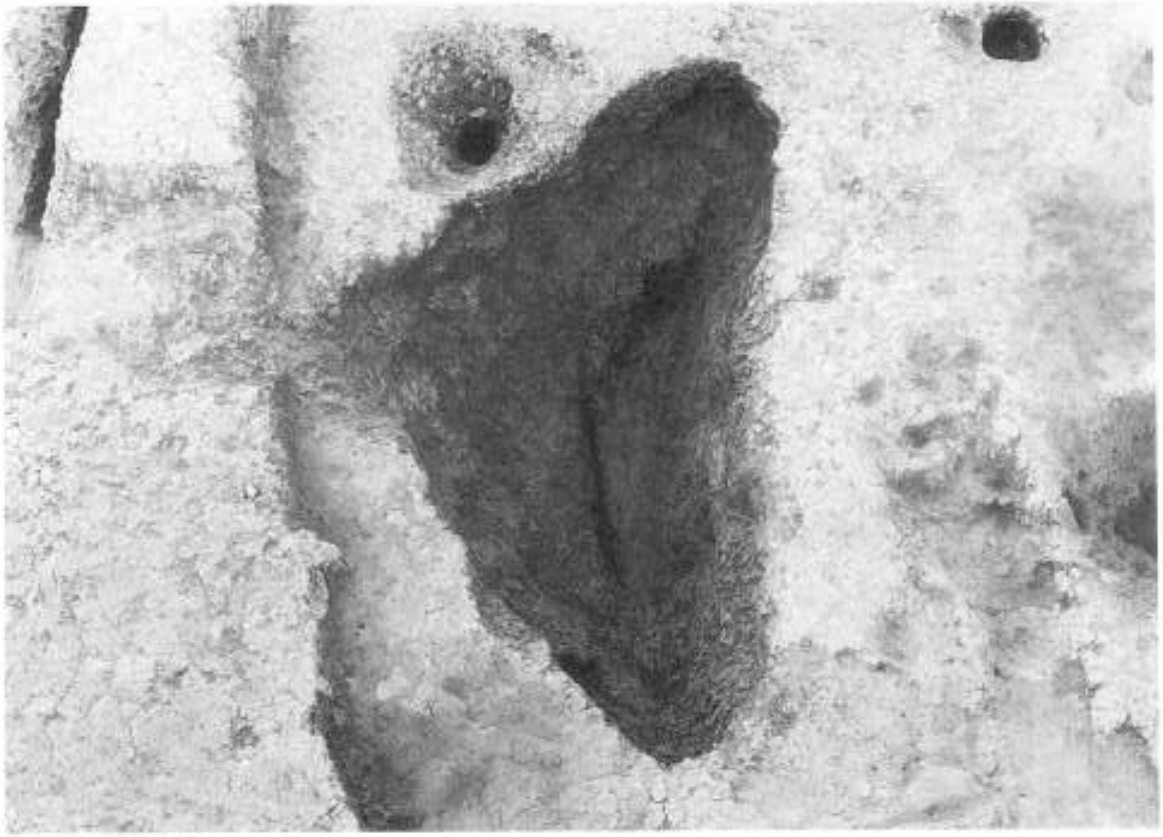
2　露柵図均衡（長ささら）



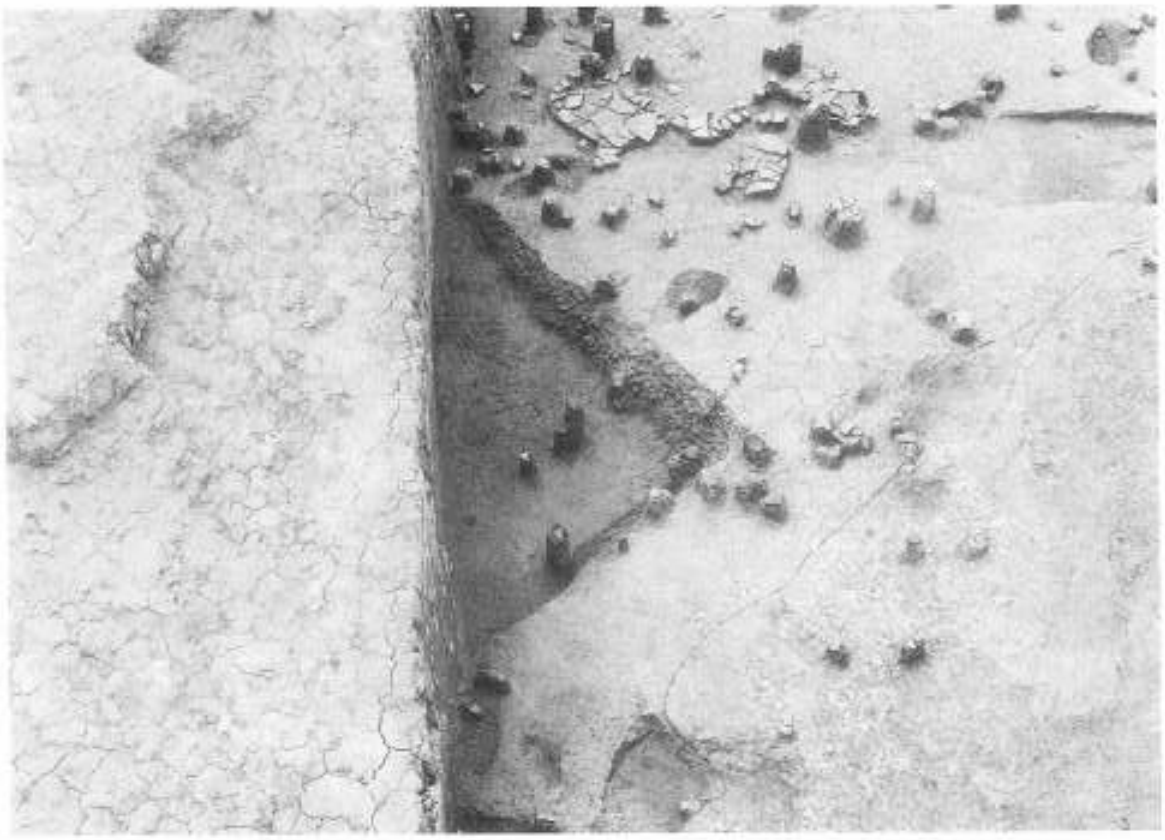
1　遺跡遠景（南東より）
右側の鉄塔の手前が調査区である。遠方には赤城山の山並が見える。

2　遺跡近景（南東より）
旧地形は北西より南東へ傾斜しており、北西隅に住居跡が密集している。

図版18



1　E－２土坑（南より）
本遺構は、１号住居跡床面の下から検出された。



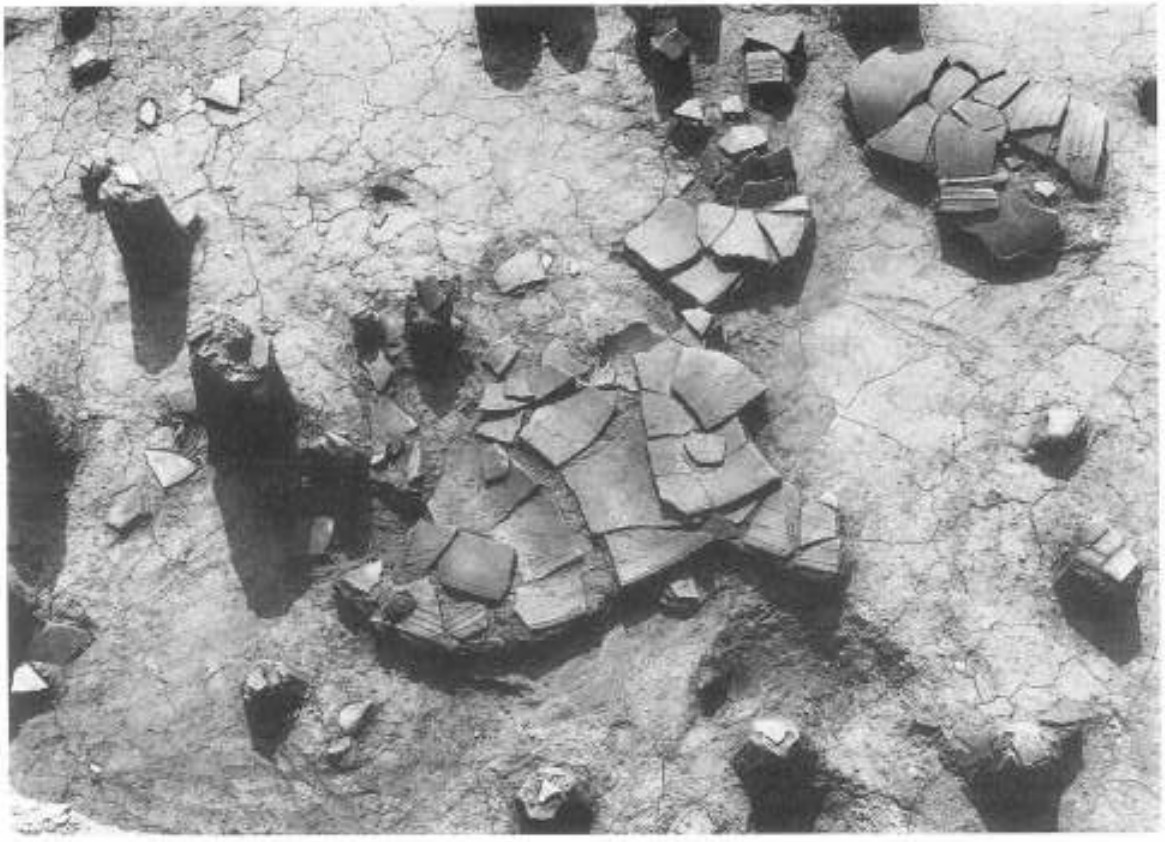
2　B－１竪穴状遺構（北より）
本遺構の南側は、縄文土器の分布が特に密である。

1　縄文時代遺物出土状況全景（1）（北東より）
遺構を伴わない遺物が、旧地形に貼り付くような状態で多数出土した。

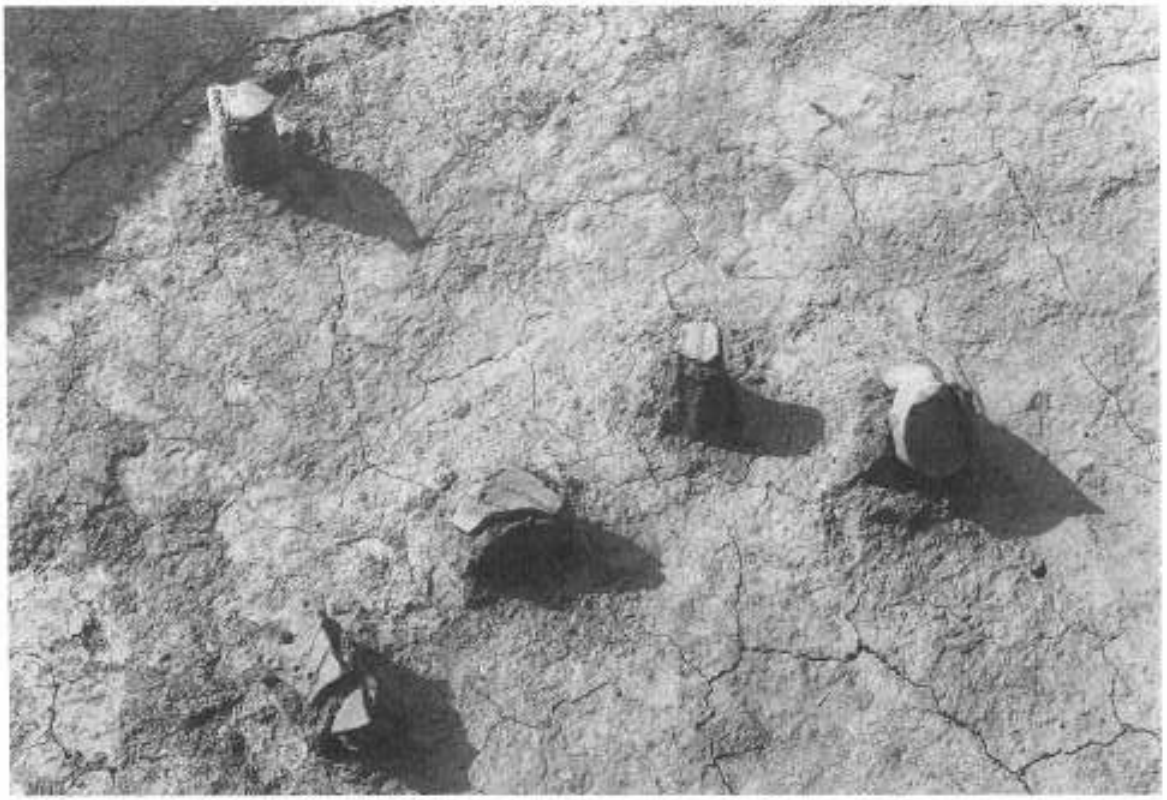
2　縄文時代遺物出土状況全景（2）（南西より）
遺物は、調査区内の東側に特に集中して出土している。

図版20

1　縄文時代遺物出土状況（1）（東より）
右手前がE－２竪穴状遺構であるが、周辺の遺物との関係は不明である。



2　縄文時代遺物出土状況（2）（東より）
B－３区の縄文土器出土状況である。大形の土器が潰れて出土している。

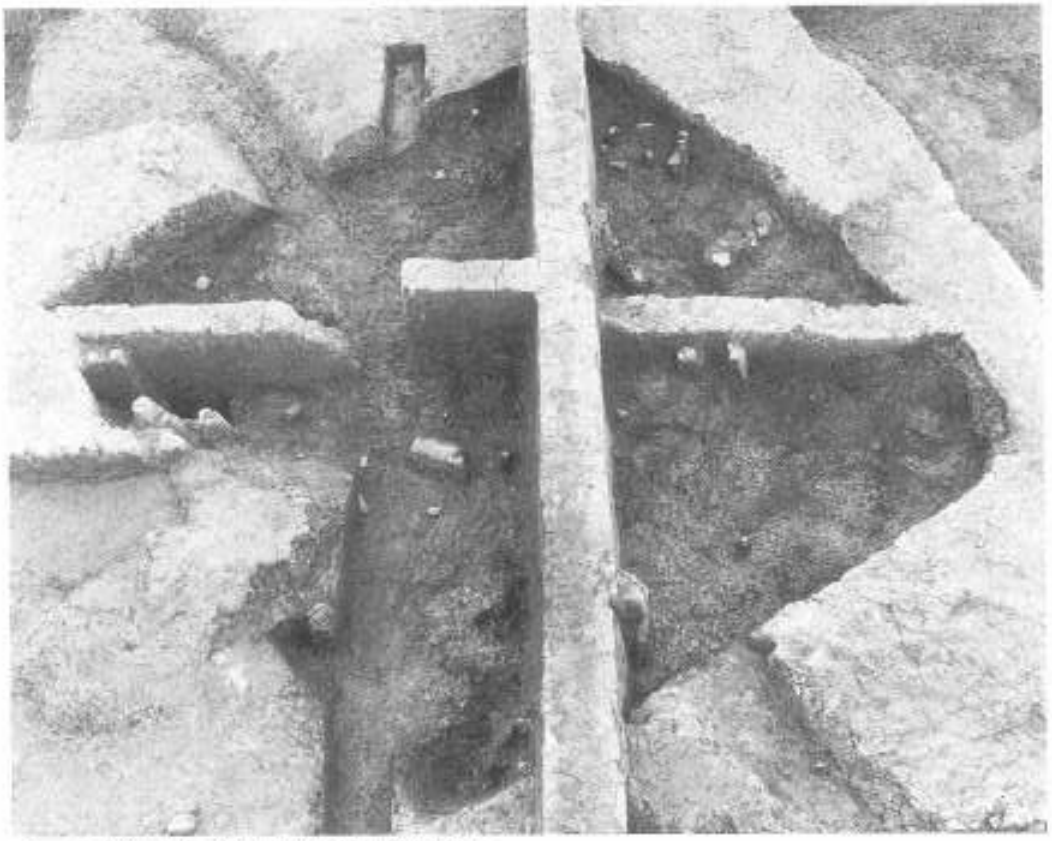


1　縄文時代遺物出土状況（3）（南より）
F－7区の縄文土器の出土状況である。調査区南西側でも縄文時代の遺物が出土している。

2　縄文時代遺物出土状況（4）（西より）
B－0区の縄文土器の出土状況である。後期の所産と考えられる。

図版22

1　1号住居跡（北より）
6号住居跡（写真手前）、7号住居跡（写真左）をそれぞれ切っている。主柱穴が4個、貯蔵穴が1個、竈北側には、浅い皿状の$P_y$がある。



2　1号住居跡遺物出土状況全景（北より）
住居跡全面から 芋 状炭化材が検出された。遺物は住居跡南西側の炭化物上から多く検出され、細片が多い。

1　1号住居跡竈（西より）

天井部が良好に遺存している。燃焼部に直立する支脚に、杯片が覆いかぶさり検出された。灰が、燃焼部から竈前面に広がっていた。

2　2号住居跡（南東より）

西壁にK₁、東壁にK₂、南壁にK₃と3基の竈が検出されている。2号住居跡はほぼ正方形を呈し、周溝がほぼ全周する。

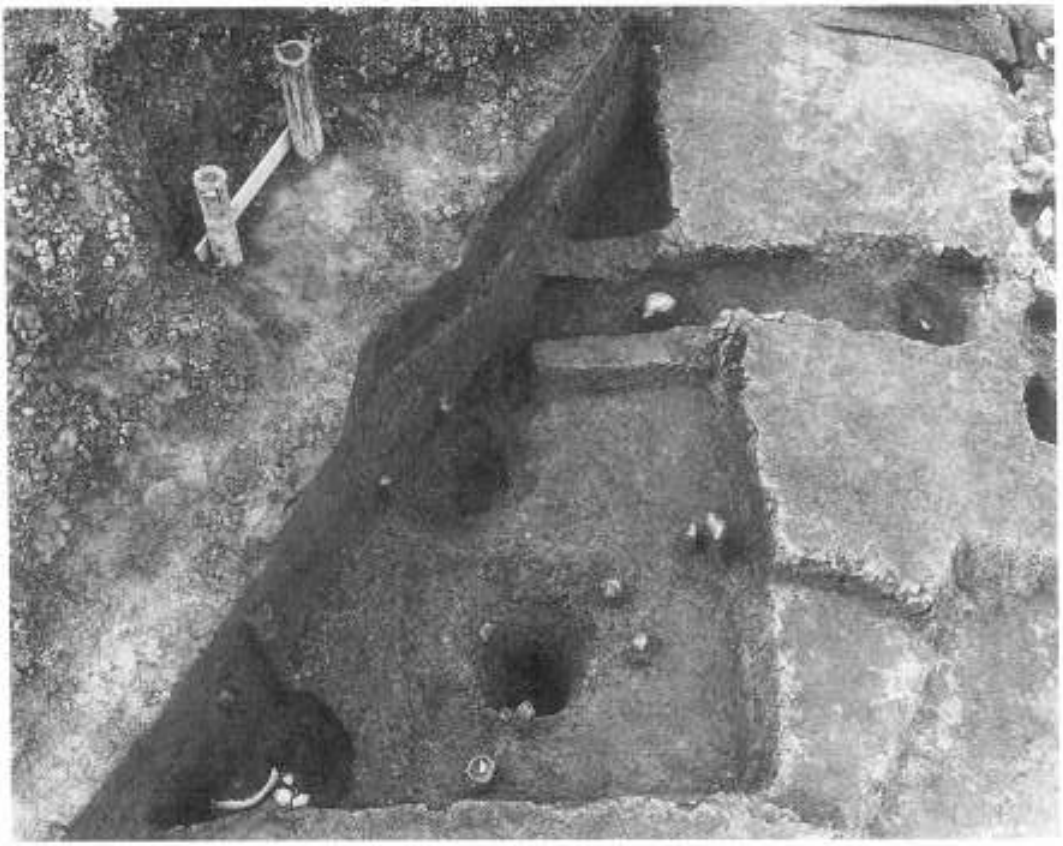
図版24

1　2号住居跡遺物出土状況全景（東南より）
遺物は全域から出土したが、特に$K_1$周囲に集中する傾向がある。遺物は杯形土器が非常に多く出土した。

2　2号住居跡遺物出土状況（1）（東より）
$K_1$の南側から出土した遺物である。甕形土器（11）は床直で、壺形土器（7）は周溝の覆土の壁際から出土している。左側が$K_2$である

1　2号住居跡遺物出土状況（2）（南より）
南東の柱穴$P_4$に落ちこむように甕形土器（12）が出土している。

2　2号住居跡遺物出土状況（3）（東より）
住居跡中央よりやや北東寄りの覆土中から須恵器杯（15）が出土している。右側は高杯形土器（40）である。

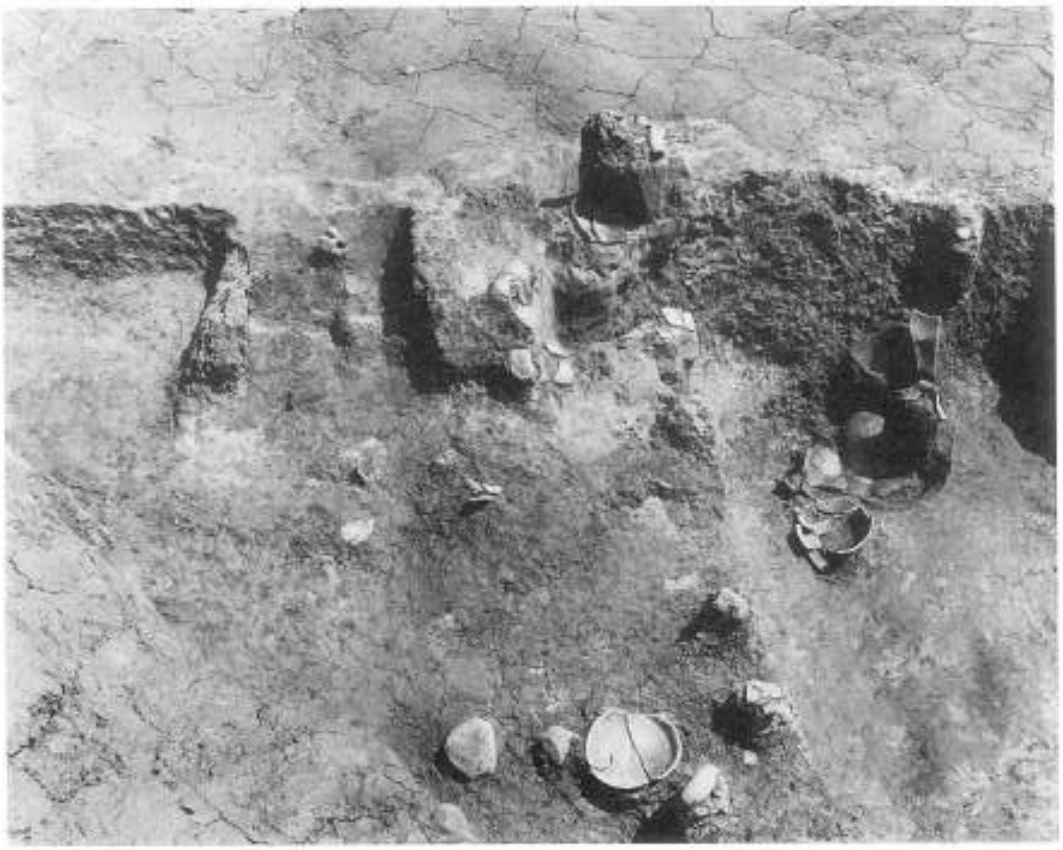


1　3号住居跡（南東より）
西側は調査区外へさらに延びる。北東には、2号住居跡が隣接する。竈の煙道部先端に小さな落ち込みが見える。

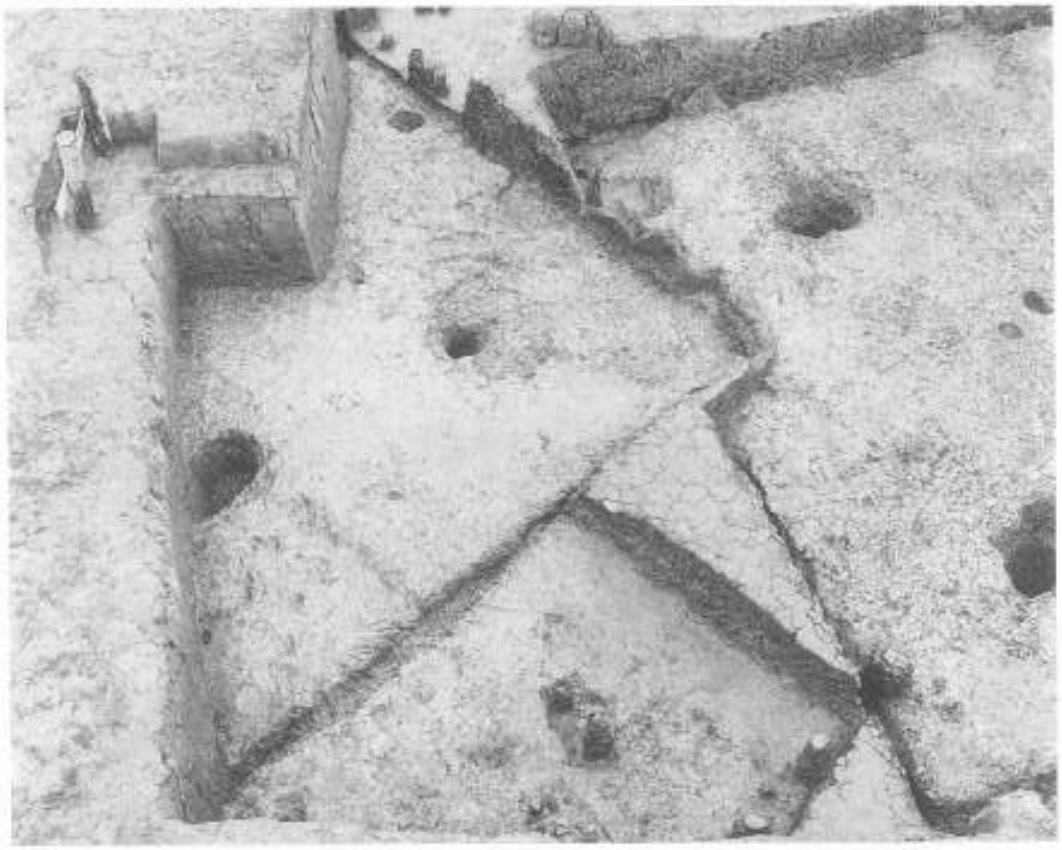
2　3号住居跡遺物出土状況（北東より）
$P_2$の上部から杯形土器（2）が、$P_3$内からは高杯形土器（3）が出土している。
また、（2）の脇からは甕形土器が出土した。

1　４号住居跡（南東より）
床面の確認は、墳砂による著しい撹乱のため困難であった。また、北側の床面は南側に比べ20cm高くなっていた。

2　４号住居跡竈（北西より）
墳砂による撹乱のため、遺存状況は悪い。燃焼部中央より土製支脚が直立して出土した。

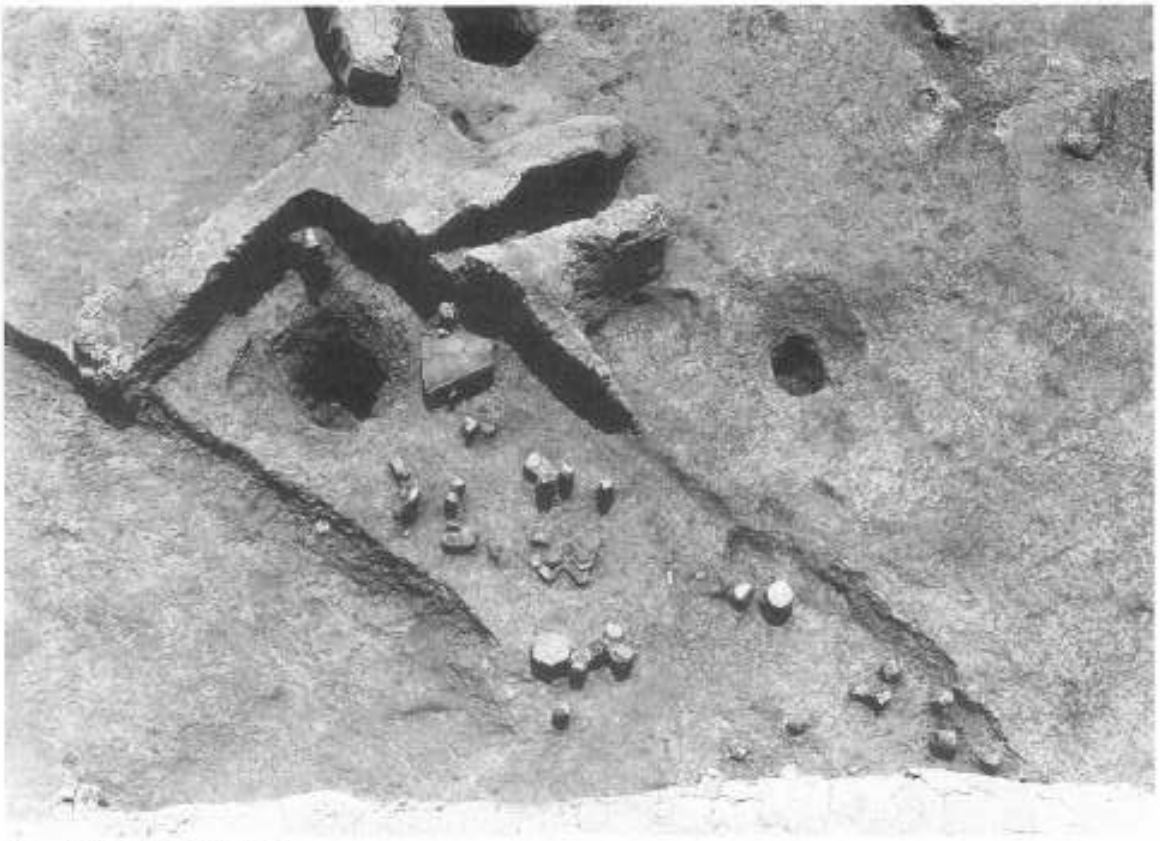


1　4号住居跡遺物出土状況（北西より）
竈周囲の床面直上から土師器の細片がまばらに出土している。貯蔵穴の覆土上層から、甕が横転してつぶれた状態で出土している。



2　5号住居跡・8号住居跡（西より）
南側は2号住居跡、東側は6号住居跡である。重複関係は6号・2号→8号→5号であり、5号住居跡が新しい。

1　6号住居跡遺物出土状況全景（北西より）
古墳時代の古い時期の所産と考えられる土師器が集中して出土した。



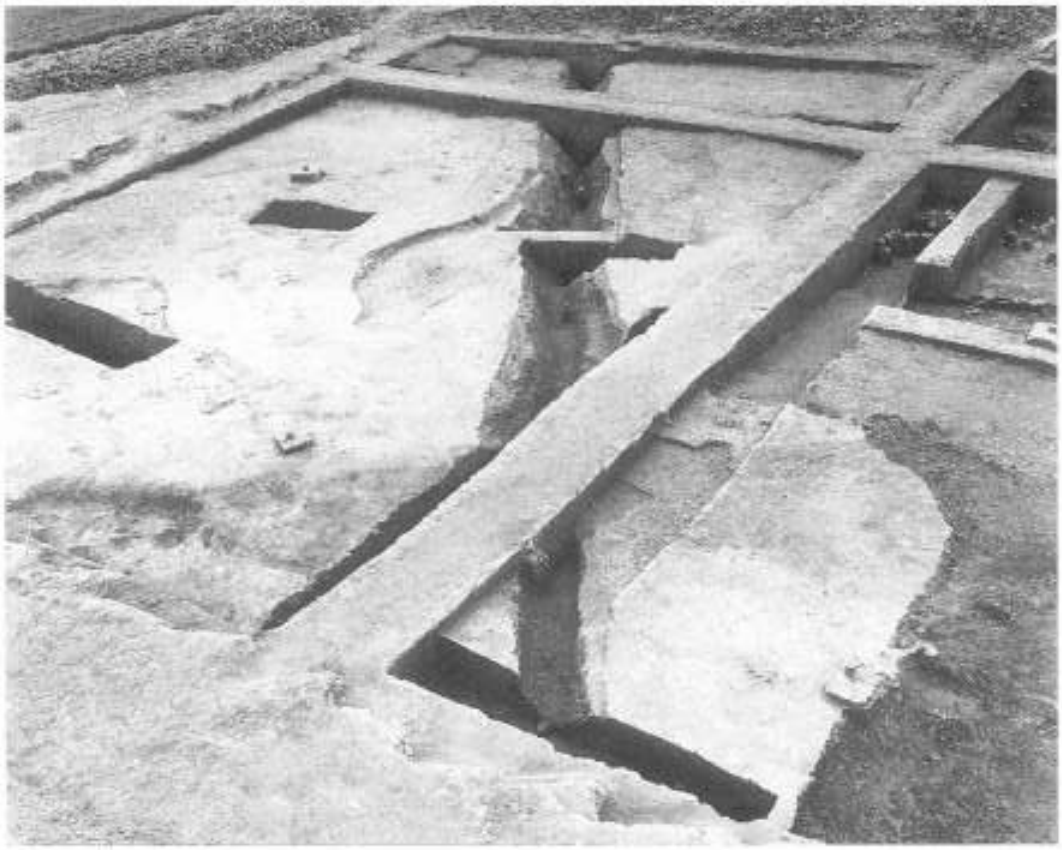
2　7号住居跡（北より）
土層断面の観察より本住居跡が4号住居跡より新しい。

図版30

1　7号住居跡遺物出土状況（1）（北より）
甑が、P₁西側の床面上で横転してつぶれた状態で出土した。

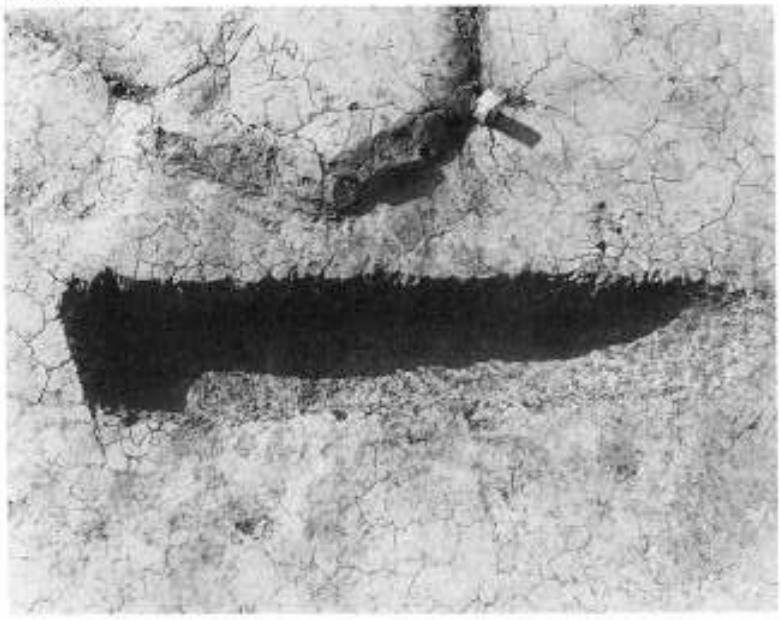
2　7号住居跡遺物出土状況（2）（南より）
小型壺が床面上でつぶれた状態で出土している他は、ほとんど覆土中からの出土である。写真の杯は完形である。

1　溝全景（1）（南東より）
　1号～4号溝が平行して検出され、2号溝と3号溝は所々重複している。

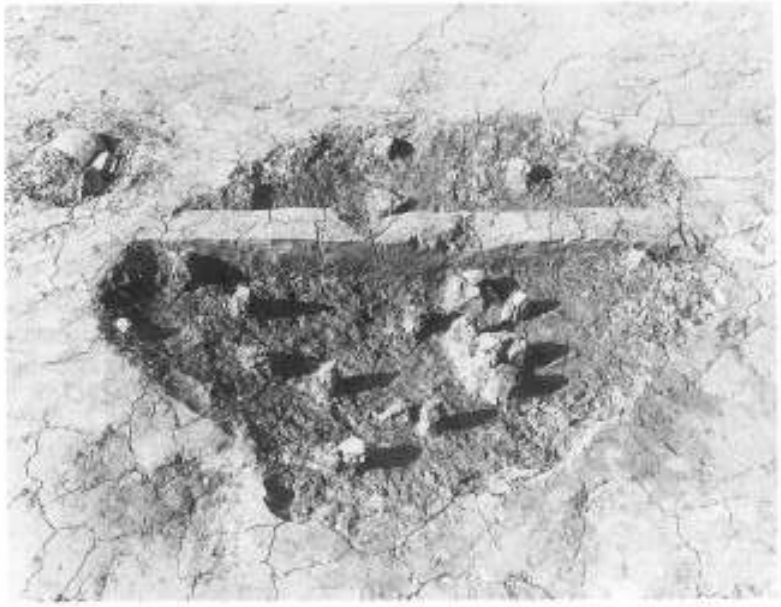


2　溝全景（2）（北西より）
　5号溝が、2号・3号溝に直交するように検出された。

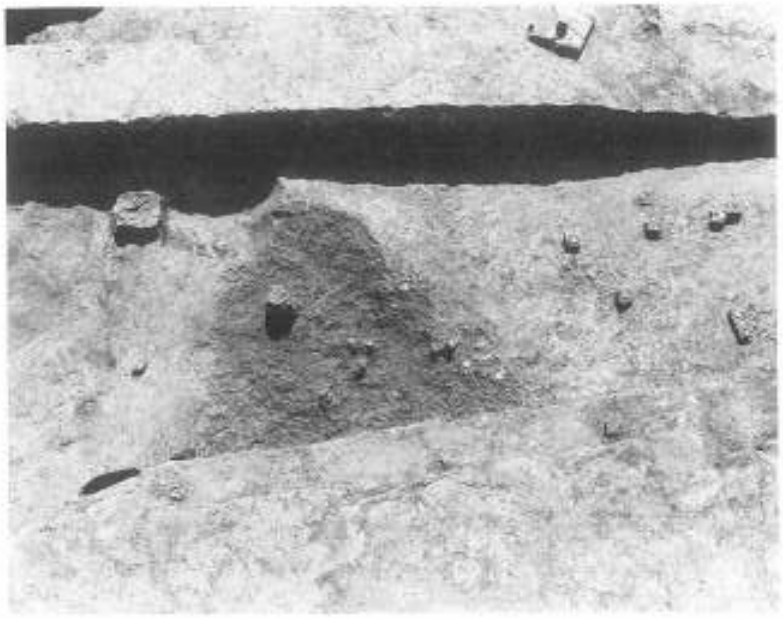
図版32



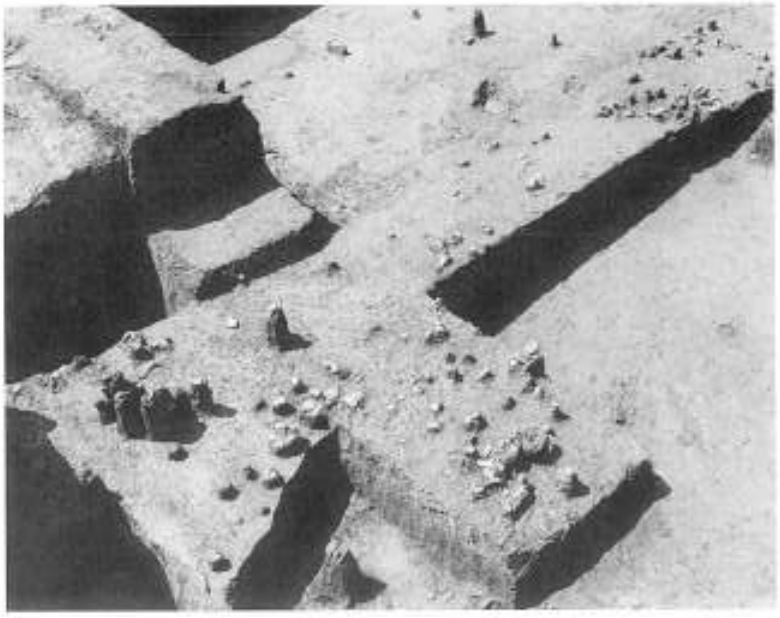
1　1号土坑（東南より）
G－4・G－5区に位置する。底面は平坦である。



2　2号土坑（南より）
G－2区に位置する。炭化物が層状に含まれる。



3　3号土坑（南より）
D－1・D－2区に位置する。炭化物が出土し、遺物も多く検出された。



1　土師器集中区遺物出土状況（1）
（北東より）
E－5・F－5・F－6区である。
写真左へ旧地形は傾斜する。

2　土師器集中区遺物出土状況（2）
（東より）
調査区西端である。写真手前へ旧地形は傾斜する。右端は6ライントレンチである。

3　土師器集中区遺物出土状況（3）
（北西より）
E－5区より出土した壺形土器(10)が手前に見える。

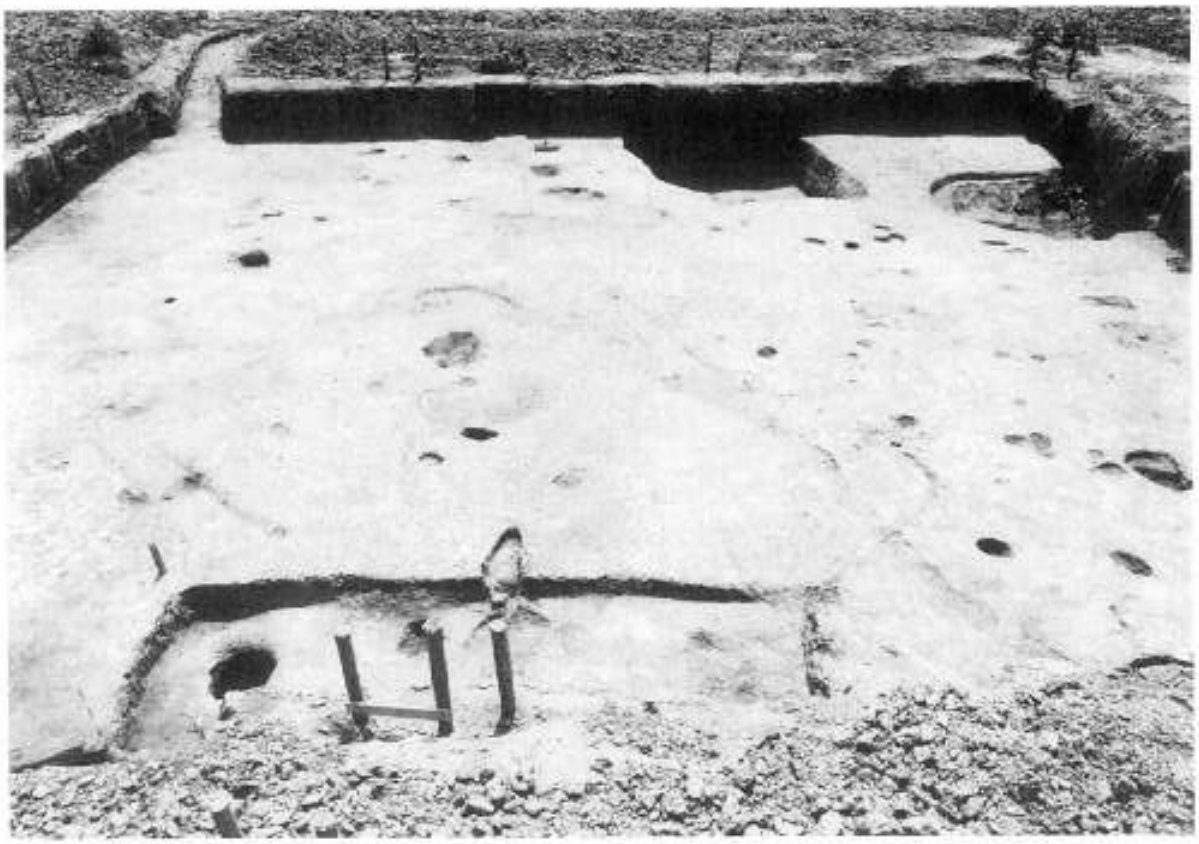
図版34

1　土師器集中区遺物出土状況（4）
（南東より）
S字口縁甕（13）が見える。

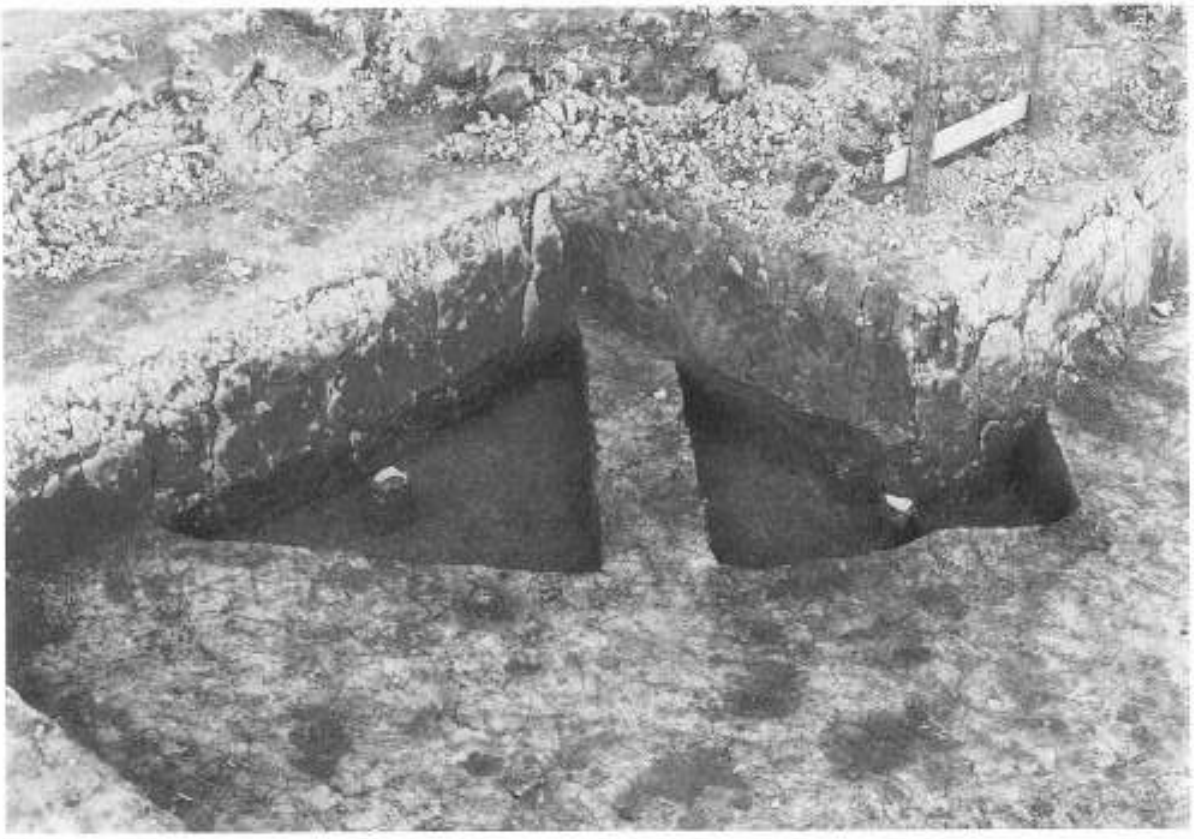
2　土師器集中区遺物出土状況（5）
（南東より）
甕形土器（18）、台付甕形土器（19）が見える。

3　土師器集中区遺物出土状況（6）
（北西より）
甕形土器（11）、甑形土器（3）がF-5区から出土している。

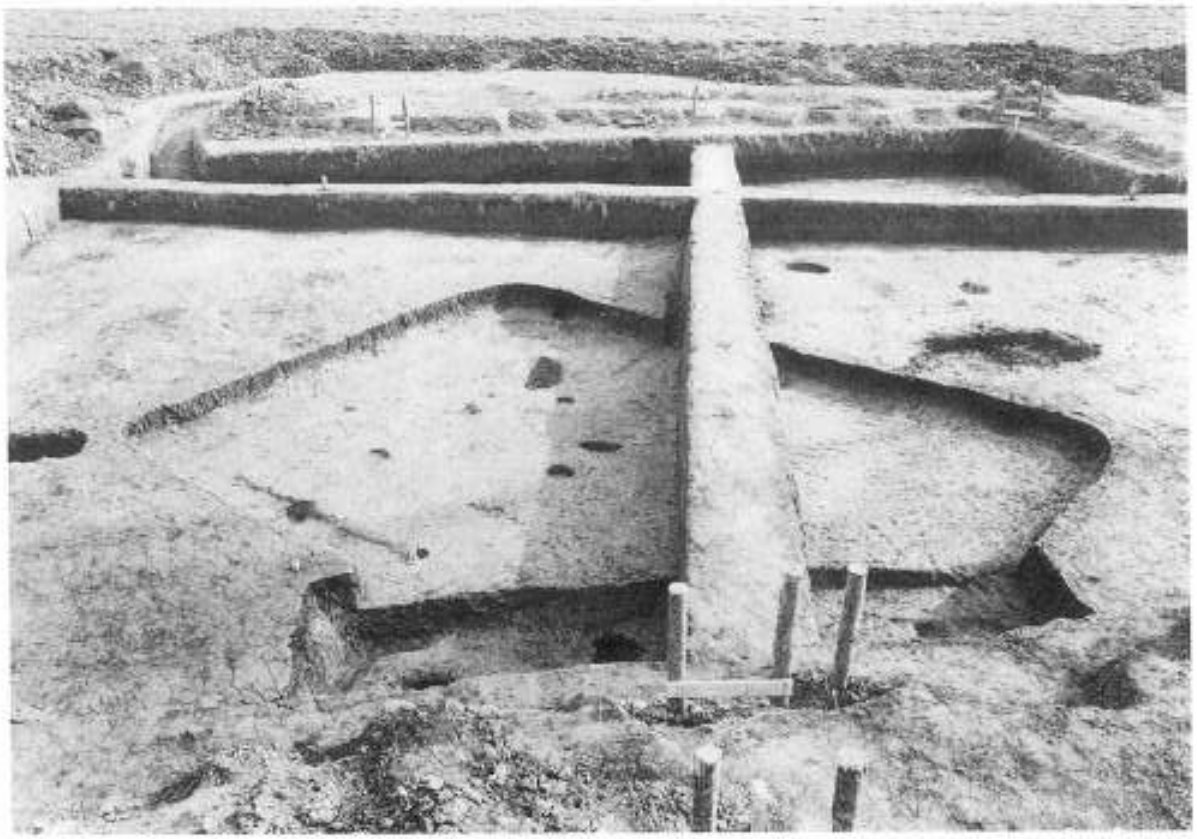
入川遺跡



1　調査区全景



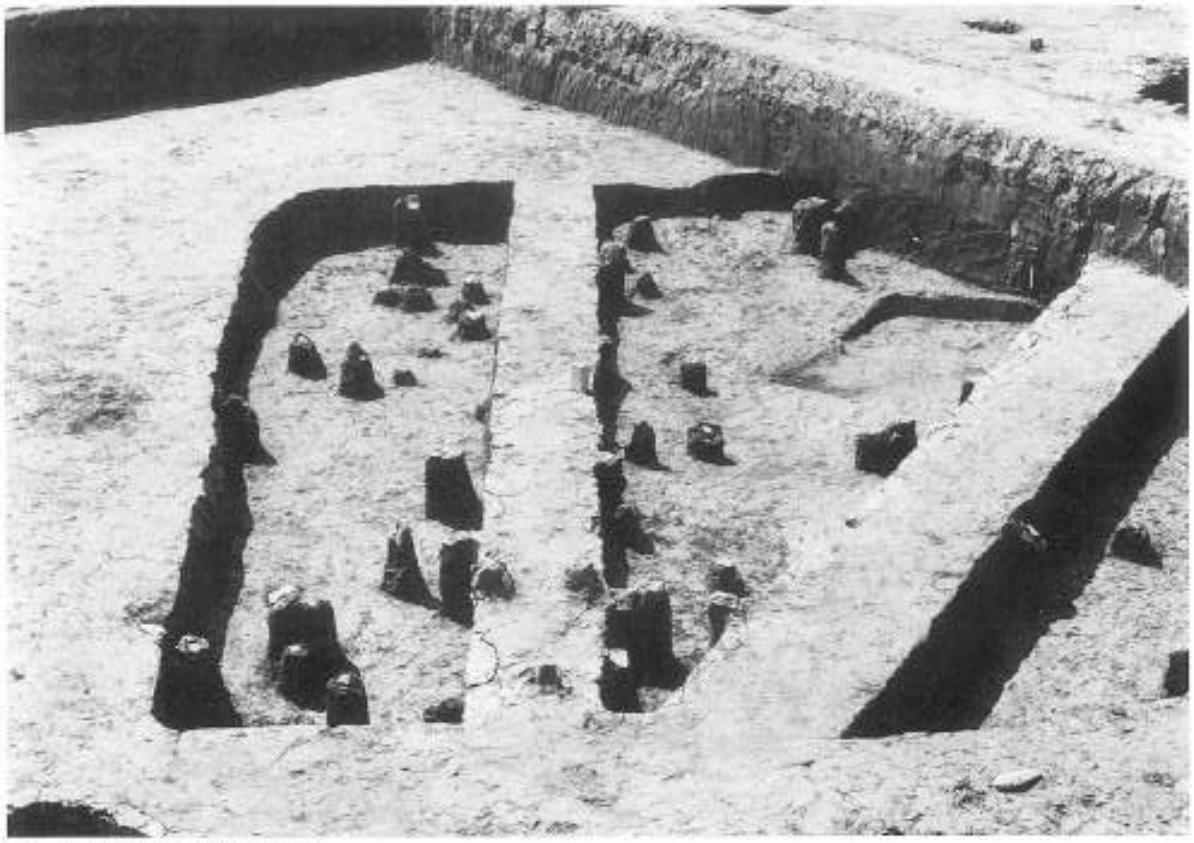
2　1号住居跡



1　2・3号住居跡

2　2号住居跡遺物出土状況

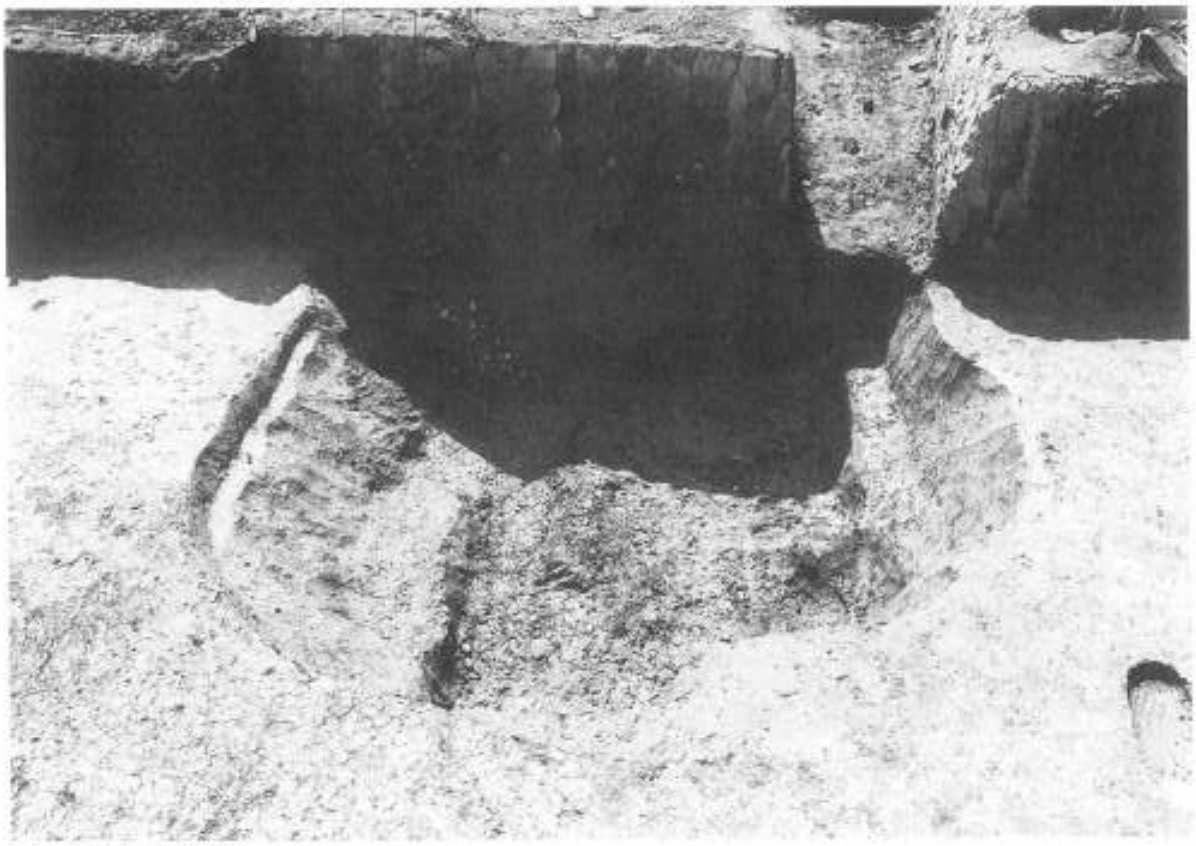
1　2号住居跡竈



2　3号住居跡遺物出土状況

図版38

1　1号竪穴状遺構



2　2号竪穴状遺構

7－1

7－2

7－3

7－8

7－11

8－12

7－9

7－11

8－13

8－15

8－14

集石遺構出土遺物

図版40

10－2

12－2

16－1

16－9

16－2

16－10

18－1

1～3・5号墳墓・1号土坑出土遺物

25－1

25－2

25－5

25－6

25－7

25－8

25－9

25－10

25－12

25－13

25－11

25－15

25－14

遺構外出土遺物（1）

図版42

25－16・17

25－18

26－3

26－1

26－2

26－4

26－5

26－7

遺構外出土遺物（2）

26－8

26－9

26－11

26－13

26－12

26－14

26－15

27－1

27－3

27－2

遺構外出土遺物（3）

図版44

27－4

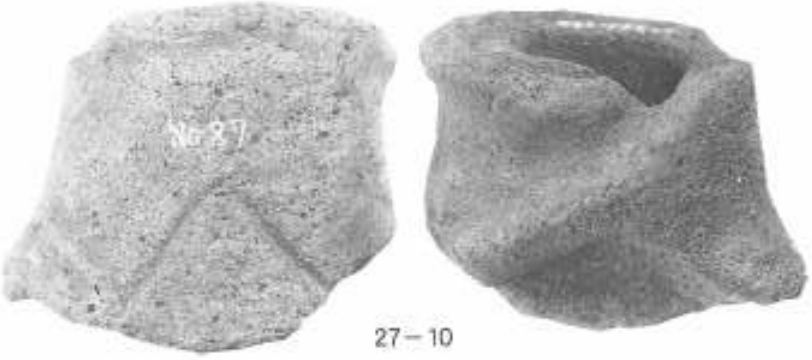
27－5

27－6

27－8

27－9

27－12



27－10

27－11

遺構外出土遺物（4）

27－13

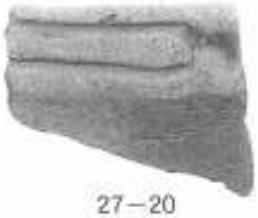
27－14

27－15

27－17

27－18

27－19



27－20

27－22

27－23

28－2

28－3

遺構外出土遺物（5）

図版46

28－4

28－6

28－5

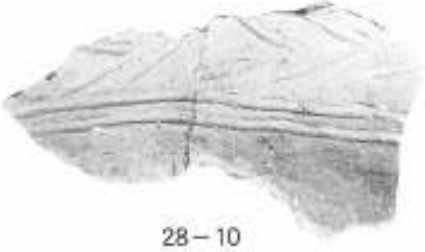
28－7

28－8

28－9

28－11

28－12



28－10

遺構外出土遺物（6）

29－8

29－9

29－10

29－11

29－13

29－14

29－15

29－16

30－1

30－2

30－12

30－3

30－5

31－1

30－11

30－8

遺構外出土遺物（7）

図版48

47－1

45－2

49－2

49－4

50－5

51－1

51－2

51－3

51－5

51－6

49－8

E－2土坑・遺構外出土遺物

1

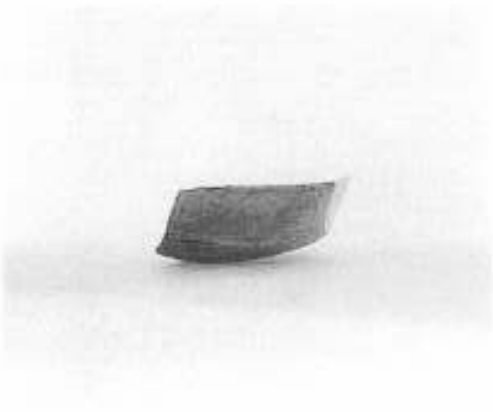
2

3

4

5

6



7

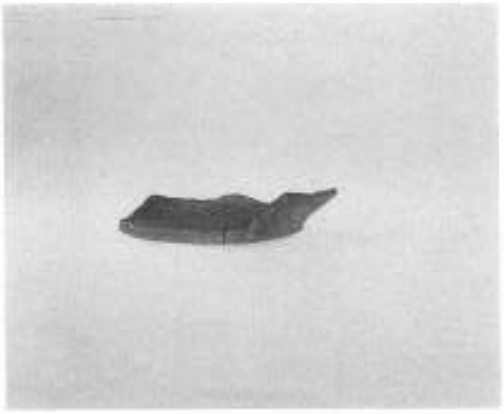
8

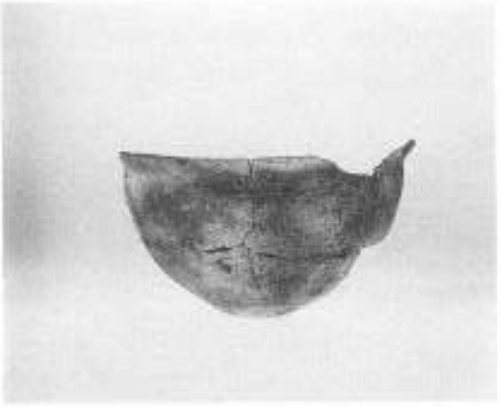
1号住居跡出土遺物（1）

図版50

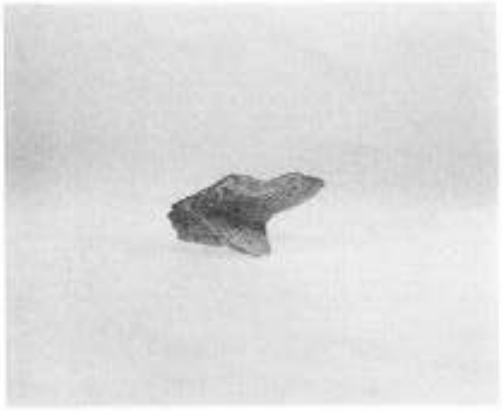
9

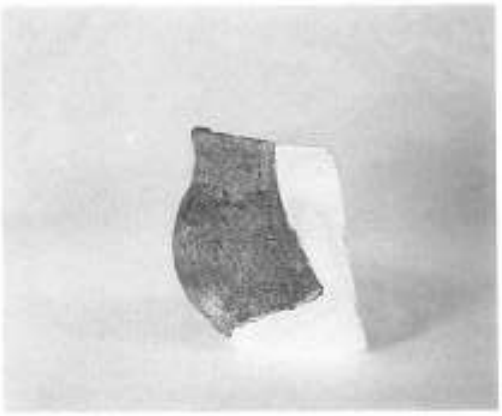
10


11


12

13


14

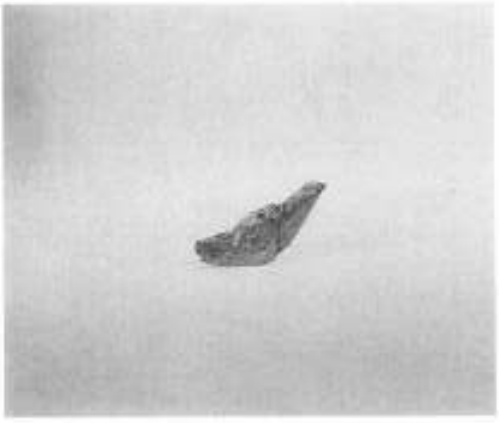

15

16

1号住居跡出土遺物（2）

17

18

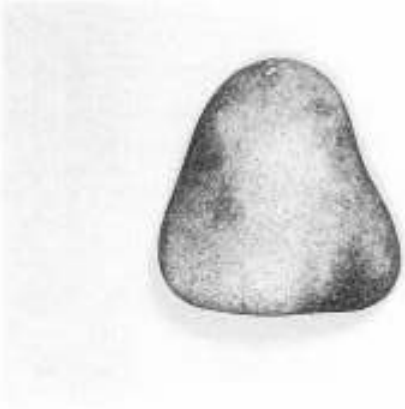


19

20

21

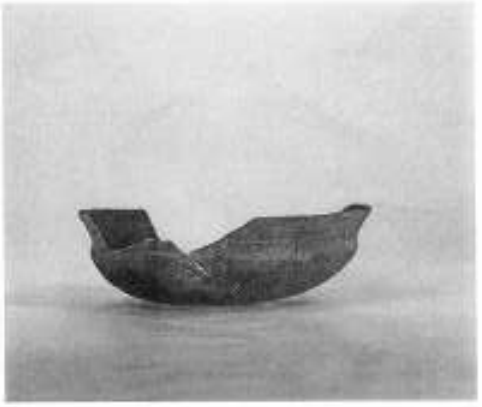
22



23

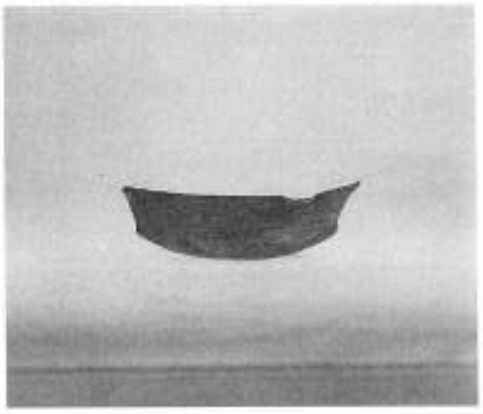
1号住居跡出土遺物（3）

図版52



1

2



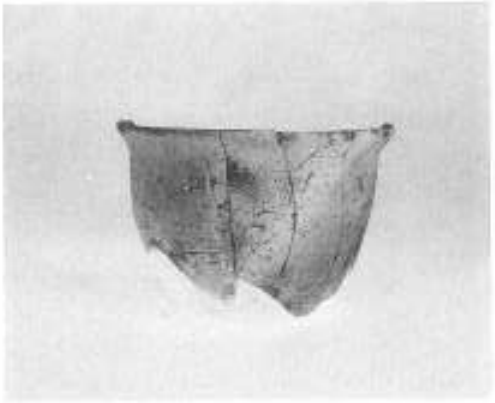
3

4

5

6

7



8

2号住居跡出土遺物（1）

9

10

11

12

13

14

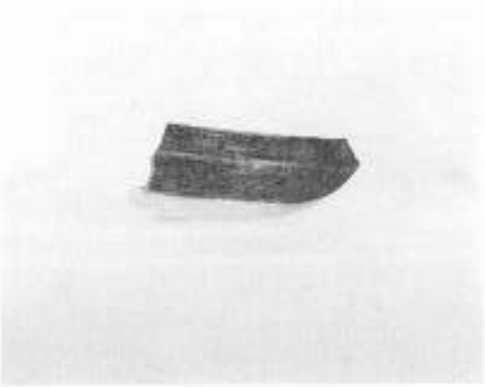
15

16

2号住居跡出土遺物（2）

図版54

17



18

19

20

21

22

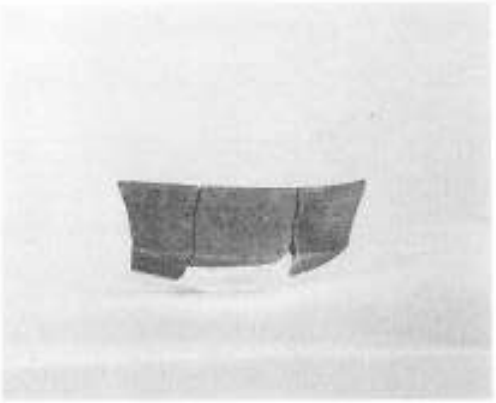
23

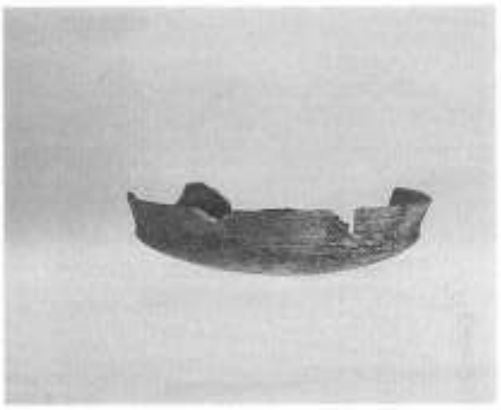
24

2号住居跡出土遺物（3）

25

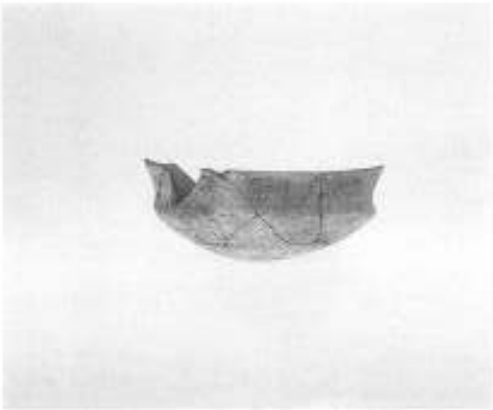
26


27


29

30

31


32

33

2号住居跡出土遺物（4）

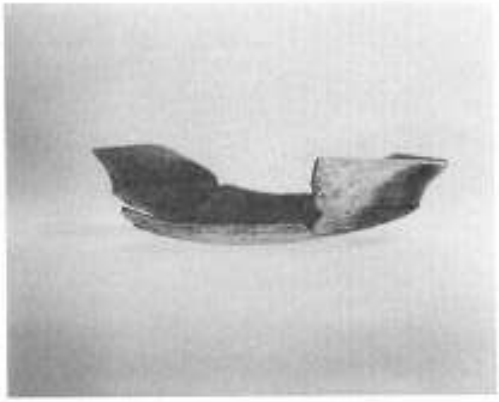
図版56

34

35

36

37

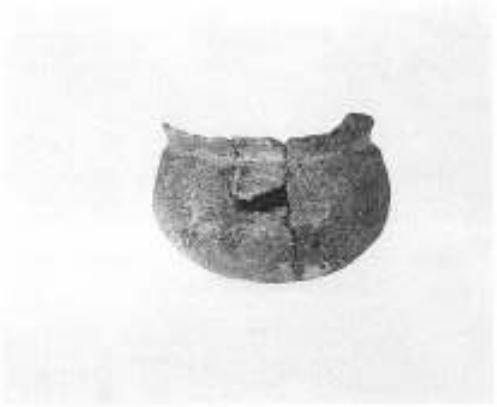

38

39

40

41

2号住居跡出土遺物（5）



42

43

44

51

2号住居跡出土遺物（6）

1

2

3

4

3号住居跡出土遺物（1）

図版58

5

1

3号住居跡出土遺物（2）

2

3

4

5

6

7

4号住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

5号住居跡出土遺物

1

2

6号住居跡出土遺物（1）

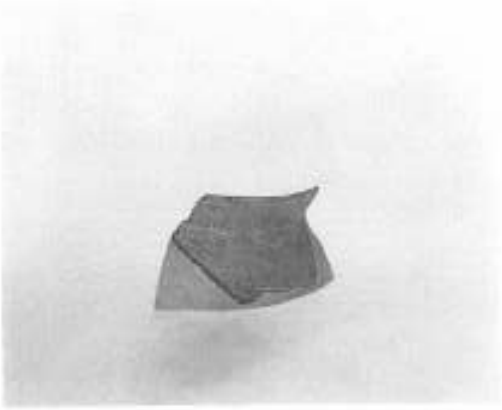
図版60

3

4

5

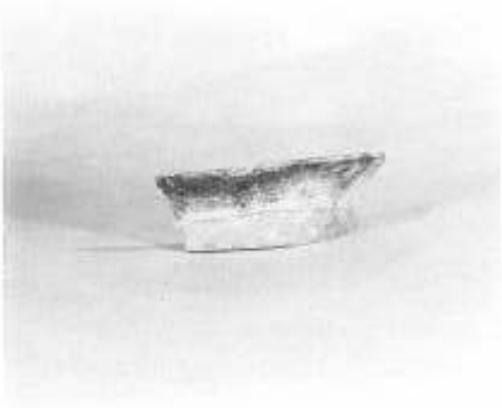
6



7

8

9



10

6号住居跡出土遺物（2）

11

12

13

14

15

16

17

18

6号住居跡出土遺物（3）

19

20

21

6号住居跡出土遺物（4）

1

2

3

4

7号住居跡出土遺物（1）

5

6

7

7号住居跡出土遺物（2）

1

8号住居跡出土遺物

1

3号溝跡出土遺物

1

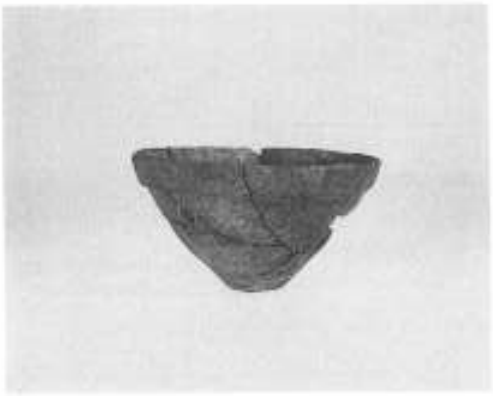
3号土坑出土遺物

2

図版64

1

2



3

4

5

6

7

8

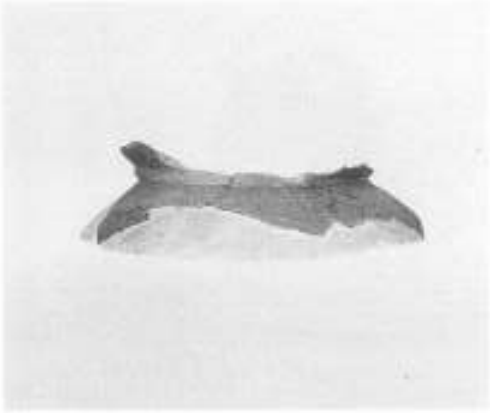
集中区出土土師器（1）

9

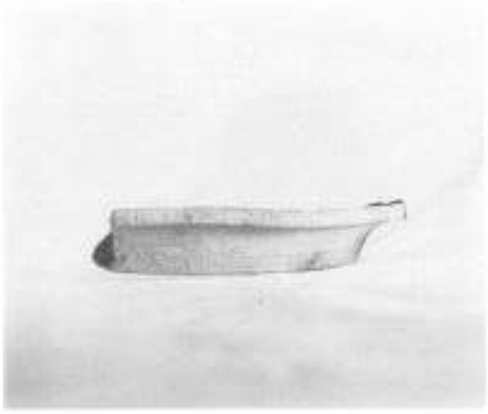
10

11

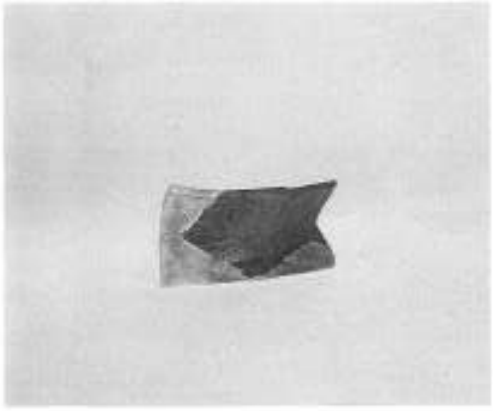
12



13



14



15

16

集中区出土土師器（2）

図版66

17

18

19

20

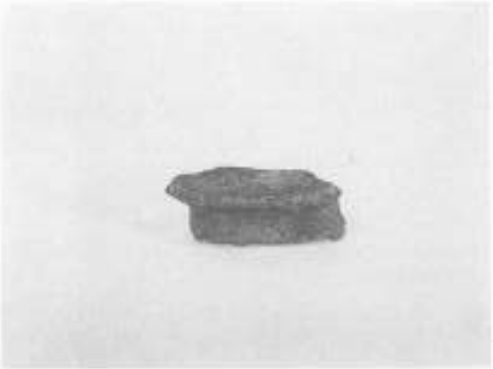
21

22

23

24

集中区出土土師器（3）



25

26

27

28

20、31、30
（左から）

32

33

集中区出土土師器（4）

図版68

1

2

3

4

5

6

7

8

遺構外出土遺物（1）

9

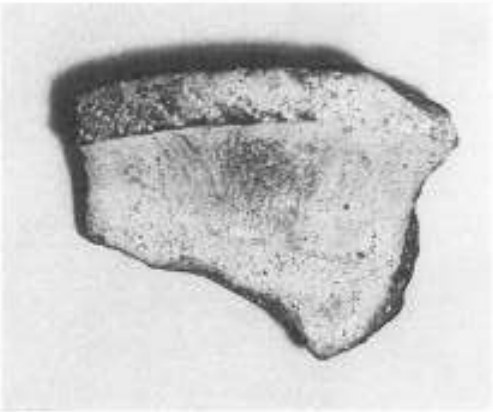
10

11

12

13

15



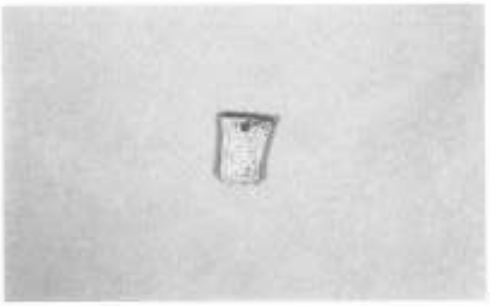
17

18

遺構外出土遺物（2）

図版70

20



22

遺構外出土遺物（3）

入川遺跡

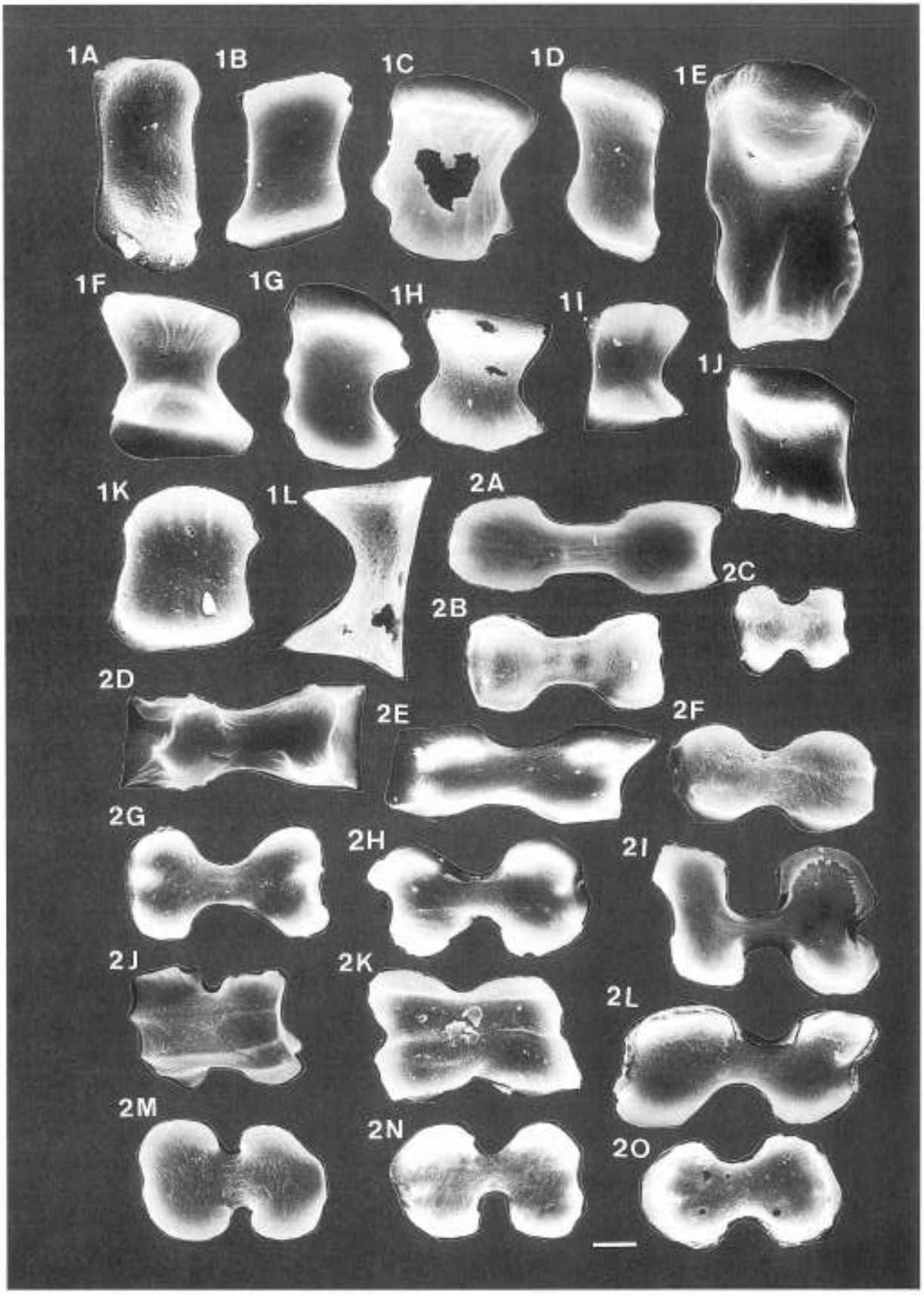
106－5

106－11

106－12

遺構外出土遺物

深町遺跡



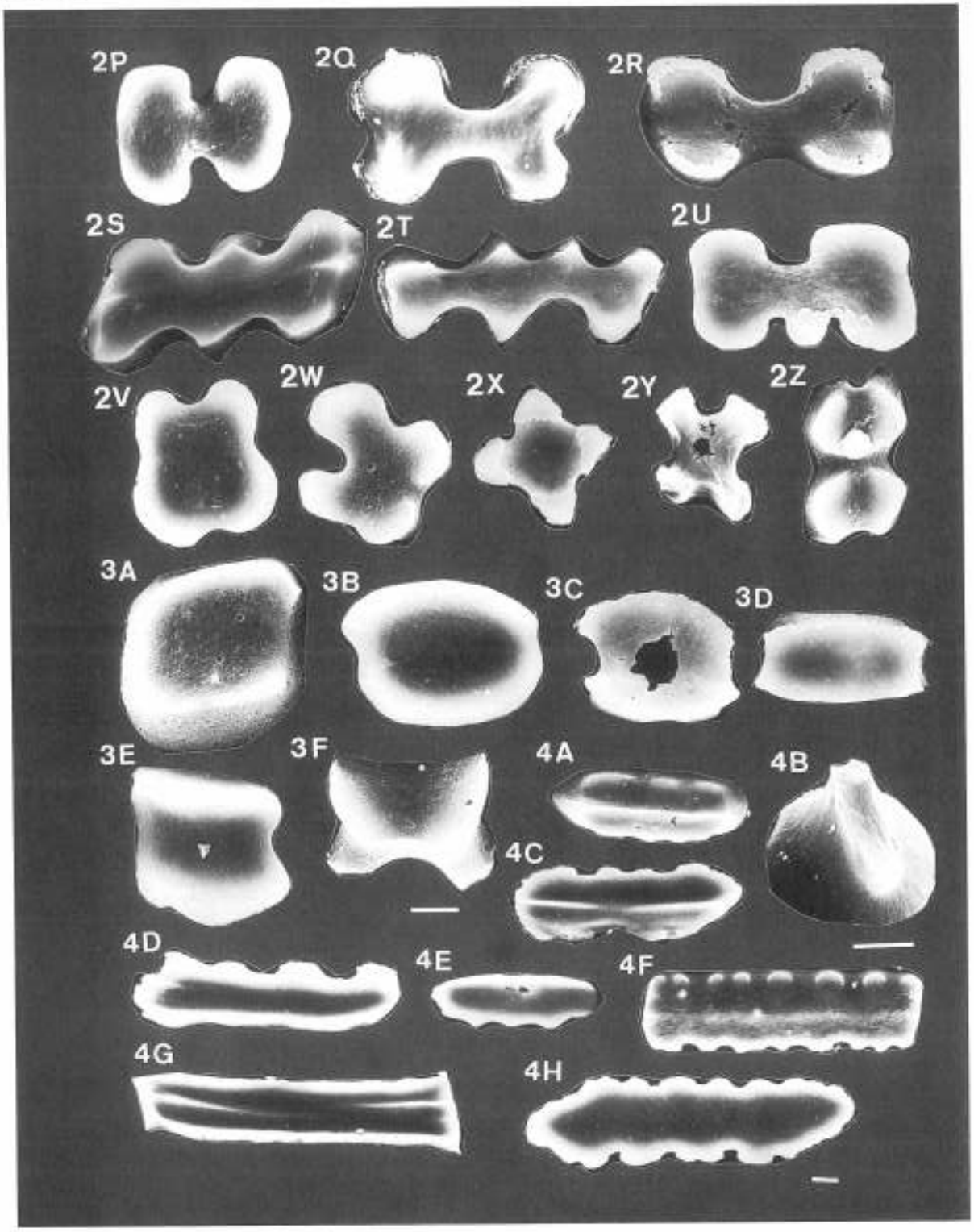

**植物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真（1）**

**イネ科草本起源珪酸体（小型）　タケ型：1A～1L，キビ型：2A～2O**

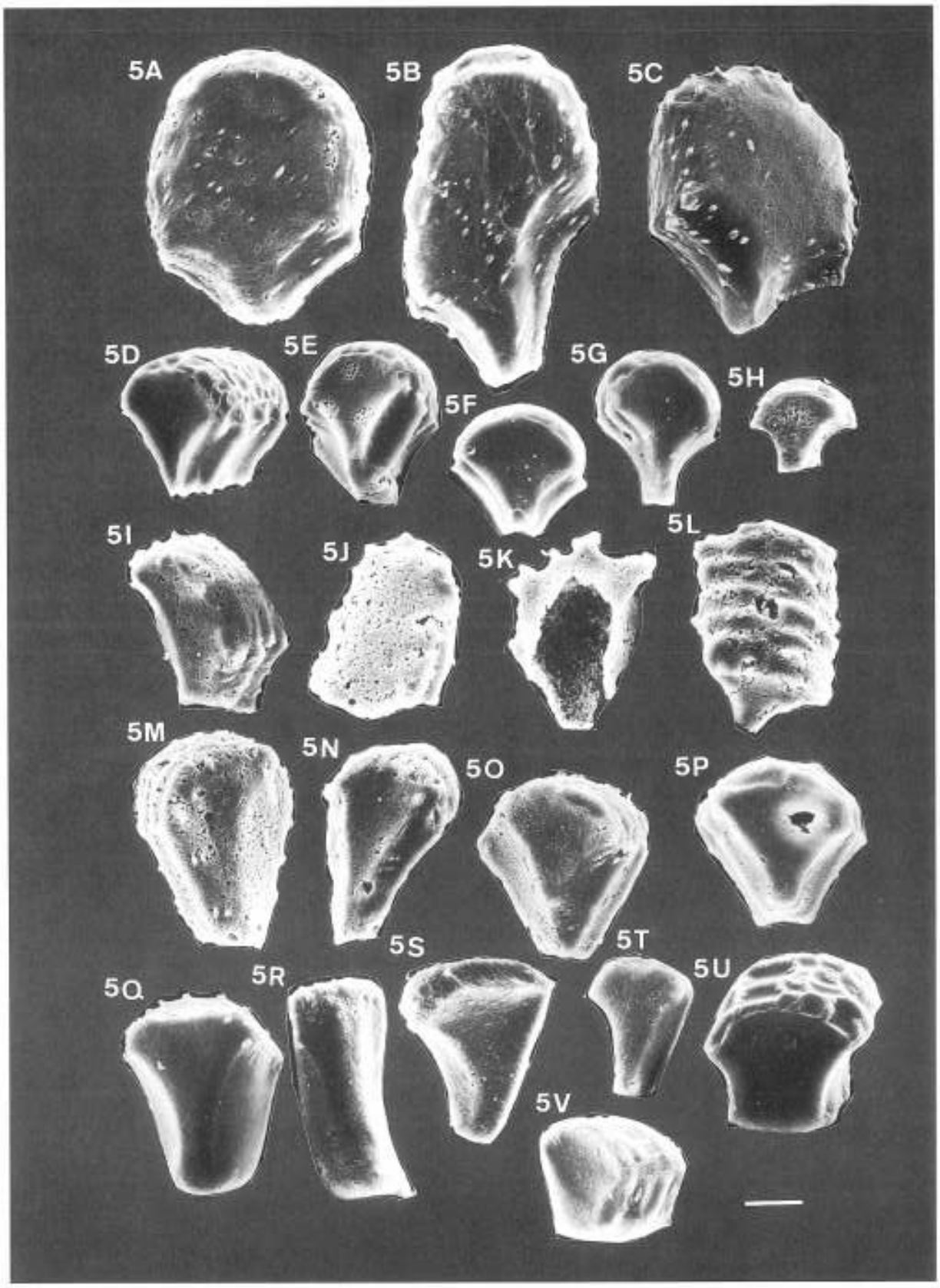
No.2:2G, No.8:2A,2B, No.9:1A, No.10:2D,2E, No.11:2J, No.12:2C,2H,
No.17:2F, No.18:2I, No.21:2M, No.22:2L, No.23:1B,2M,2N, No.25:1C,1D,1E, No.26:1F,
No.28:1G,1H, No.29:1I, No.30:1J, No.31:1L, No.32:2K, No.39:2O,1K
スケールは5μ。

入川遺跡

図版72




植物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真（2）
イネ科草本起源珪酸体（小型）　キビ型：2P～2Z，ヒゲシバ型：3A～3E，ダンチク型：3F，
ウシノケグサ型：4A～4H
No.1:3A，No.4:2W，3B，No.8:2X，No.10:2T，No.11:4C，No.12:4A,4D，No.13:2U，
No.20:4B,2S，No.22:3E,4F,4G，No.23:3C,3F,4E，No.24:2P,2Q，No.25:3D，No.29:2Z,4H，
No.31:2V,2W，No.32:2Y，No.34:2R
スケールはすべて5μ。ただし、2P~3F；4A, 4C～4H；4B,

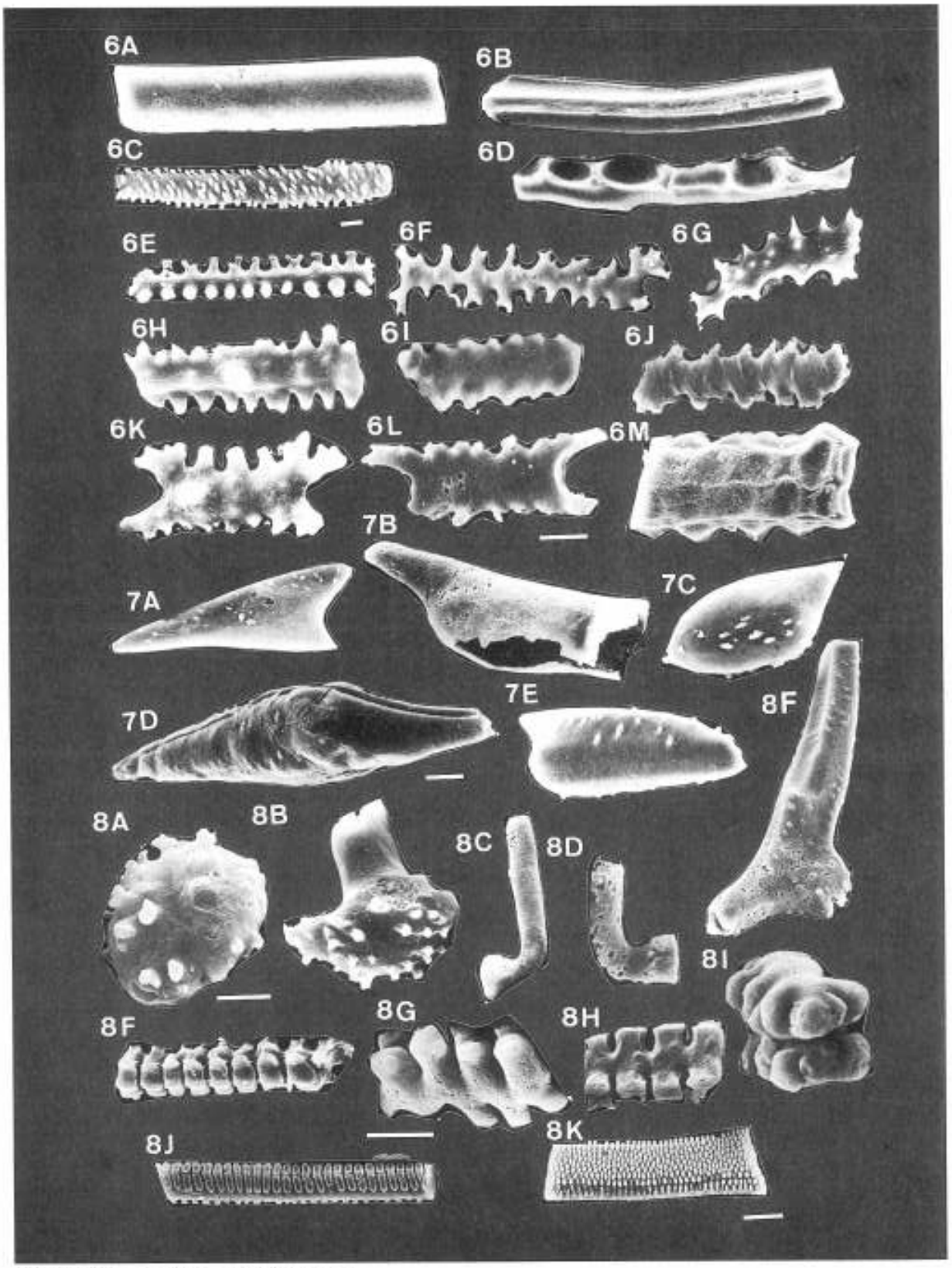



植物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真（3）

イネ科草本起源珪酸体（大型）　ファン型：5A～5V

No.2:5A, No.4:5L, No.6:5E, No.12:5N,5V, No.14:5R,5U, No.18:5T, No.19:5S,
No.23:5J, No.25:5K,5P, No.26:5I,5M,5W, No.28:5O, No.29:5F, No.30:5D,5G, No.34:5H,
No.37:5B, No.38:5C,5Q

スケールは10μ。




植物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真（4）

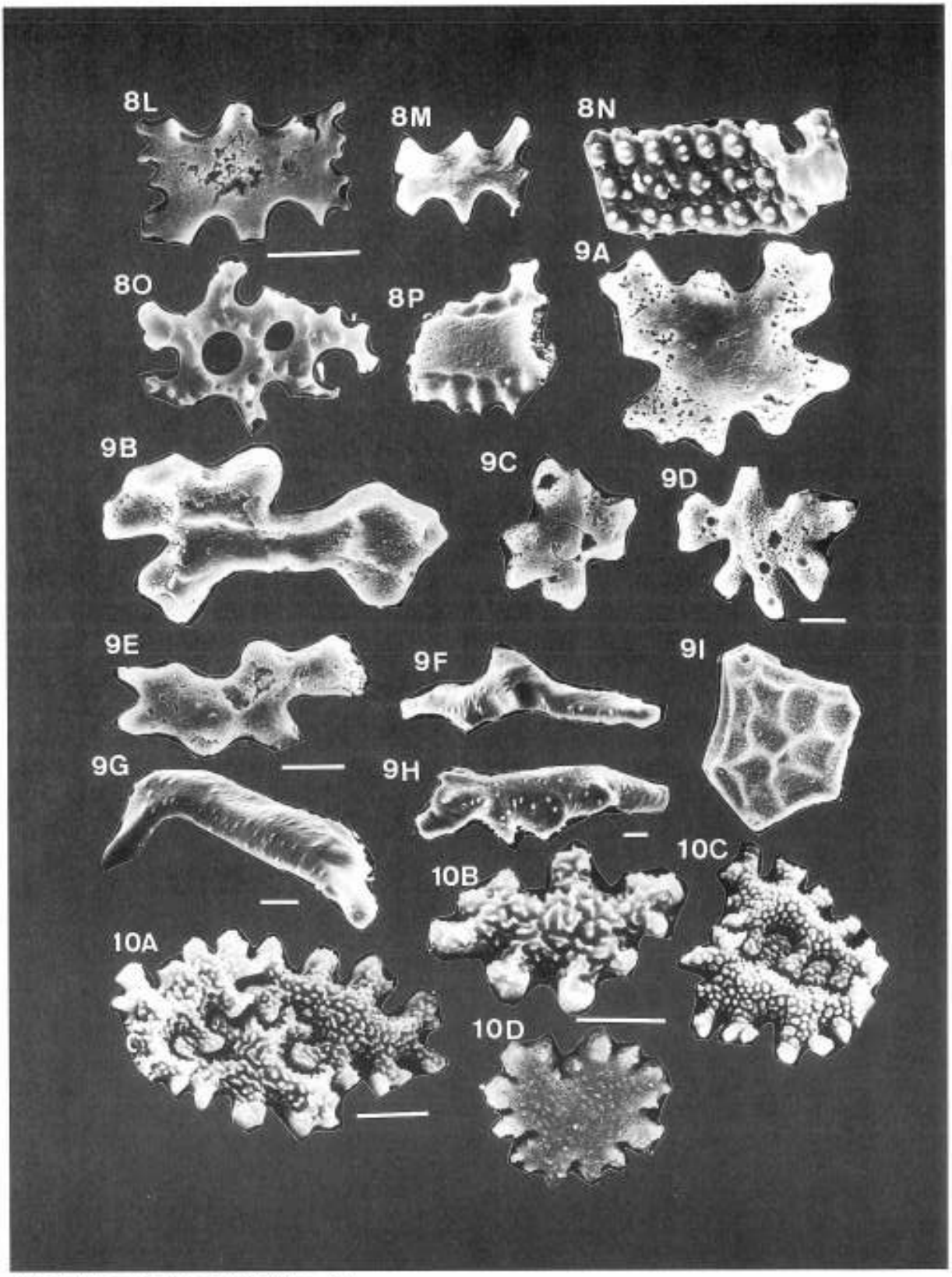
イネ科草本起源珪酸体　棒状型：6A～6M，ポイント型：7A～7E，

未記載（又は分類）珪酸体：8Q～8K

No.1:6E, No.2:6J, No.3:8F, No.4:6D,8D, No.5:8I, No.6:8C, No.9:6M, No.11:7D, No.12:6F,8A, No.14:8I, No.15:7A,8H, No.17:6B, No.18:7C, No.21:8J, No.22:8G, No.24:8D, No.25:8K, No.29:6C,6H,6K, No.30:6A,6G,7E,8B, No.31:6L, No.32:7B, No.38:8F

スケールはすべて10μ。ただし、6A,6C,8E; 6B,6D~6G,6I,6J,6M,7A~7E,8J; 6K,6L, 8B,8F,8H; 8D,8G,8I; 8A,8B,8C; 8K

入川遺跡




植物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真（5）

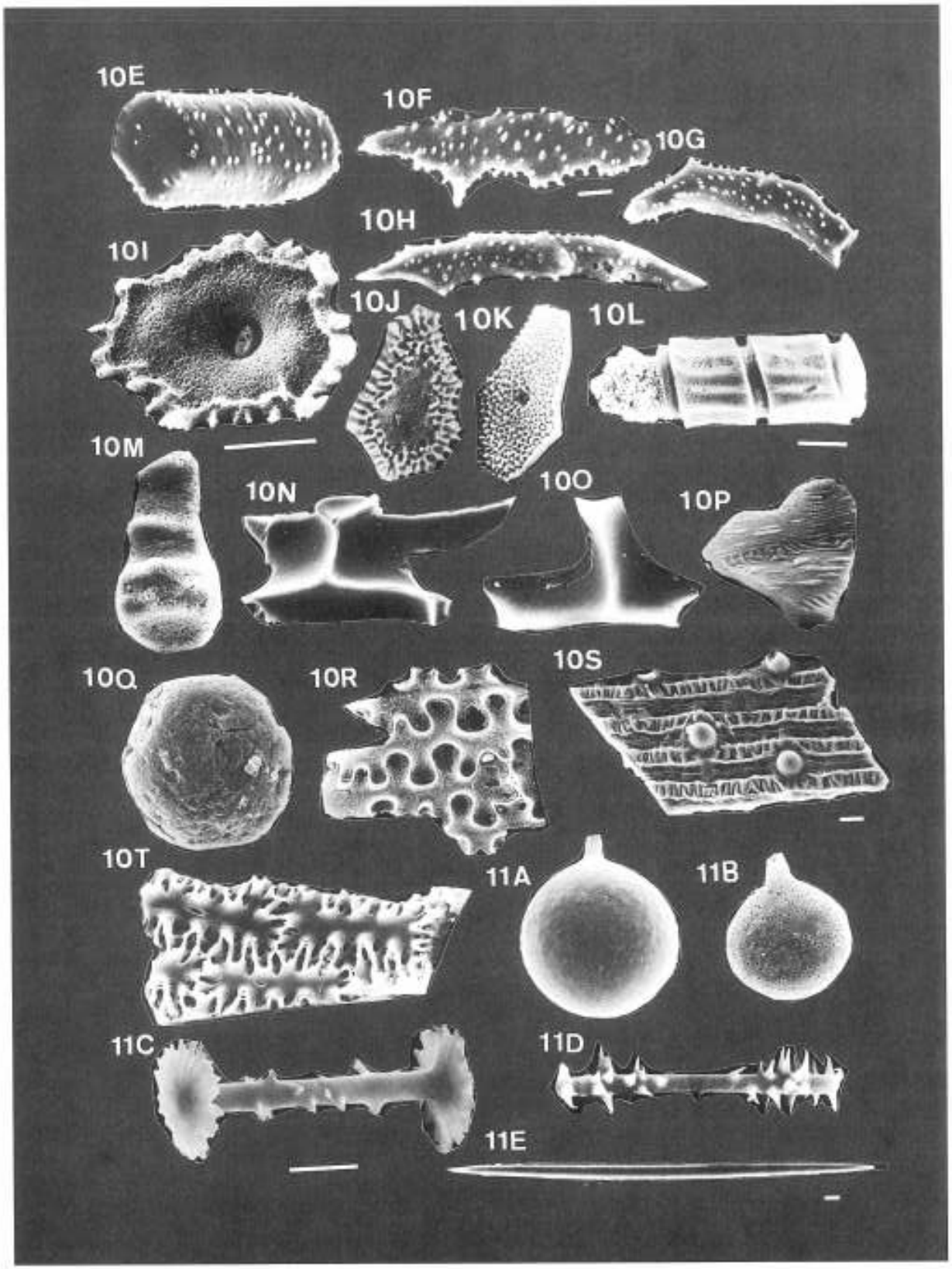
イネ科草本起源、樹木起源および未記載珪酸体　　イネ科草本起源：8L～8P,
樹木起源：9A～9I,　未記載：10A～10D

No.1:9F, No.2:9H, No.3:9I, No.4:8L, No.6:9D,10A, No.12:10C, No.15:8P, No.18:9B,10B,
No.20:9C, No.21:8O, No.22:9E, No.24:9A, No.25:10D, No.29:8N, No.33:8M,
No.37:9G

スケールはすべて10μ。ただし、8L,8M; 8N~8P,9A~9D,10D; 9E; 9F,9H,9I;
9G; 10A,10C; 10B

入川遺跡

図版76




植物珪酸体および動物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真

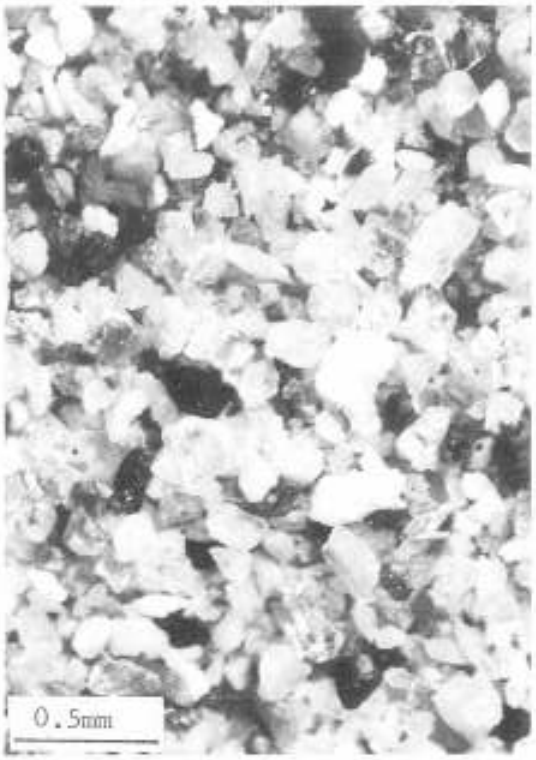
非イネ科草本起源珪酸体　　未記載：10E～10T

動物起源珪酸体　　海綿骨針および骨片：11C～11E，原生動物の殻：11A,11B

No.1:10O,10L，No.2:10G，No.3:10H，No.4:10M,11C,11D，No.10:10T,10S，No.17:10E,10K，No.19:10I，No.22:11A，No.31:10Q，No.33:11E，No.34:10J,10P，No.37:10R，No.38:10F,10N，No.39:11B

スケールはすべて10μ。ただし，10E,10F,10M,10P,10T; 10G,10H,10N,10O,10S; 10I; 10J~10L,10Q,10R,11A,11D; 11B,11C; 11E

入川遺跡

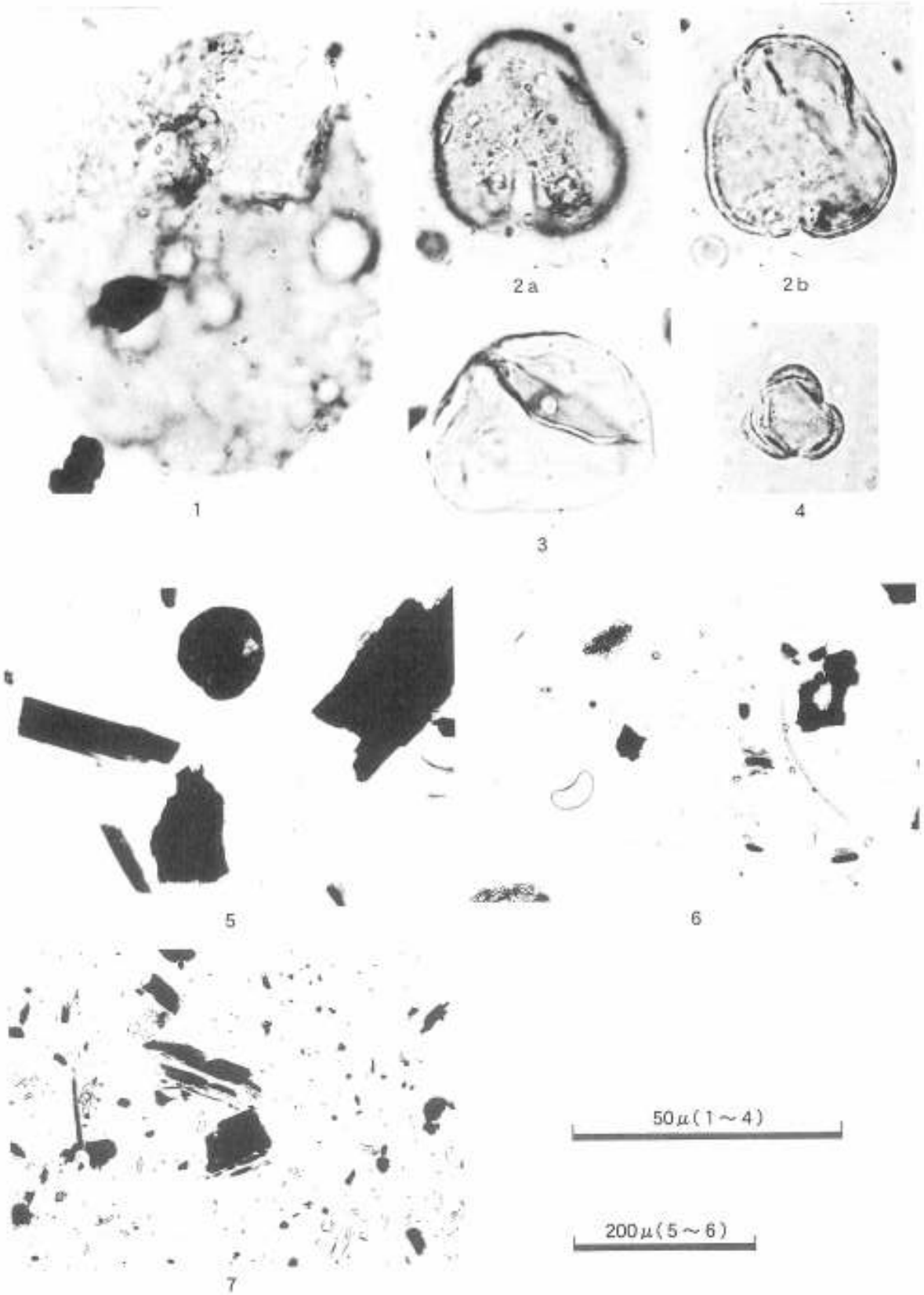



試料１
（実体鏡下）

試料４
（偏向顕微鏡下，下方ポーラーのみ）

鉱物分析および花粉分析試料１・４の写真

図版78




1　ツガ属　　試料3
2a、b　コナラ亜属　　試料3
3　イネ科　　試料1
4　ヨモギ属　　試料1
5　状況写真　　試料1
6　〃　　試料2
7　〃　　試料3

花粉化石および状況写真

昭和62年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

寺東・八反田・東耕地
入川・深町遺跡

昭和63年3月31日発行
発　行／埼玉県熊谷市教育委員会
印　刷／株式会社　博　文　社